

# 熊本城跡発掘調査報告書 3

－石垣修理工事と工事に伴う調査－

第1分冊

2016

熊本市熊本城調査研究センター

## 序 文

このたび、熊本城跡における石垣修理工事と工事に伴う発掘調査の報告書を刊行いたしました。熊本城調査研究センターは発掘調査報告書として、昨年『熊本城跡発掘調査報告書1－飯田丸の調査－』報告書をまとめましたが、今年度は本報告書とともに『熊本城跡発掘調査報告書2－本丸御殿の調査－』報告書も出版しました。

熊本城は、廃藩置県後の西南戦争では城跡内の建造物の多くが焼失するなどの憂き目にも遭いましたが、壮大な石垣群とともに宇土櫓をはじめとする櫓や門、塀などが残る歴史遺産です。学術上の価値が特に高く、わが国文化の象徴たるものとして評価され、特別史跡熊本城跡として指定を受けており、13の建造物も重要文化財となっています。

石垣・櫓群の保存修理は、西南戦争後も続けられてきました。昭和35年には市民の熱意があって大小天守外観が復元され、その後も熊本城跡をより一層理解し易いよう、失われていた歴史的建造物が復元されてきました。現在では、市民や県民に止まらず国内外を問わない多くの人々が訪れるところとなっております。

言うまでもなく、文化財は保存・整備・活用の三位一体が相まって国民の財産として認識され後世に継承されていくものです。修理や整備事業に際しては遺構の埋没状況確認のため発掘調査などの実施が必須であり、学術的な根拠を明らかにするとともに、保存活用のあるべき姿を求めて慎重に進めていく必要があります。

このため、熊本市では平成25年10月に「熊本城調査研究センター」を設置し、当該特別史跡の保存・整備・活用の前提に必要な基礎的な調査と研究を進めていくこととしております。今後も、縄張り、石垣、歴史的建造物、出土品、古文書、絵図、古写真など、多面にわたる資料を集めて総合的に解析します。熊本城跡の価値をより高めていく作業を積み重ねて後世に継承し、名実ともに日本を代表する歴史遺産として遍く周知ができるように努めていく所存です。

平成28年1月

熊本城調査研究センター

所長 渡 辺 勝 彦

## 例 言

1. 本書は、特別史跡熊本城跡石垣保存修理事業計画に基づき、城内各所で行った石垣保存修理工事と工事に伴う発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査（現場作業・整理作業）は熊本市教育委員会が行なった。報告書作成作業は、平成25年度は熊本市教育委員会の補助執行機関である熊本市観光文化交流局文化振興課が、平成26・27年度は同局熊本城調査研究センターが行なった。
3. 発掘調査期間（現場作業）は、平成15年12月4日～平成20年3月31日である。
4. 発掘調査（現場作業）は金田一精・國武（松村）真紀子（熊本市教育委員会文化財保護主事）が担当した。
5. 整理作業・報告書作成は、熊本城調査研究センター内の作業室において行なった。
6. 現場作業における実測図作成は、金田・國武と、金田・國武の指示のもと調査作業員が行なった。現場における写真撮影は金田・國武が、石垣保存修理工事における写真撮影は西川公夫（熊本城総合事務所技術主幹）が行なった。整理作業における出土遺物の1次分類は、國武の指示のもと整理作業員が行なった。
7. 現場作業における土層の色調表記は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著）に基づく。
8. 座標数値は、国土調査法第Ⅱ座標数値である。
9. 整理作業・報告書作成作業における遺構図面・遺物実測図作成は、熊本城調査研究センター職員・文化振興課埋蔵文化財調査室職員・熊本城調査研究センター嘱託職員（竹田知美・村田理恵）と作業員が担当し、一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム・株式会社九州文化財研究所に業務委託した。
10. 遺物写真は、熊本城調査研究センター職員が撮影し、一部を小多信幸（同センター嘱託職員）が編集した。
11. 図面・写真・出土品は熊本城調査研究センターに保管している。
12. 本書の執筆分担は下記の通りである。  
第1章、第3章1～8（1）（3）、第4章2：西川公夫（文化振興課主任技師）  
第1章2、第2章3、第3章1～8（1）：木下泰葉（熊本城調査研究センター文化財保護主事）  
第2章1・2、第3章2（2）遺構：金田一精（熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）  
第3章1～4・6～8（1）、第4章1（1）：鶴嶋俊彦（熊本城調査研究センター文化財保護主幹）  
第3章3・4・7・8（2）遺構：國武真紀子（熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）  
第3章2～4・7・8（2）遺物、第4章1（2）：美濃口雅朗（熊本城調査研究センター文化財保護主幹兼主査）  
第4章1（1）・2：渡辺勝彦（熊本城調査研究センター所長）
13. 本文中の槽等の名称については江戸中期に作成された「御城内御絵図」（熊本市蔵）の表現に従った。なお、名称が事業名と異なる場合があるが、事業名はそのまま表記した。
14. 本書の編集は熊本城調査研究センター職員が行なった。
15. 調査に際し、下記の方々・機関よりご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げる（50音順）。

### 現地調査指導

北野 隆、熊本県文化財担当者連絡協議会、五味盛重、澤田正昭、高瀬哲郎

### 絵図・古写真等の調査・掲載許可・資料提供

熊本県立図書館、熊本市総務厚生課歴史文書資料室、熊本市立熊本博物館、熊本大学附属図書館、熊本大学文学部附属永青文庫研究センター、公益財団法人永青文庫、国立科学博物館、国立国会図書館、長崎大学附属図書館、山口県文書館

### 報告書作成指導

熊本市観光文化交流局文化振興課、來本雅之、宮崎 拓

（以上敬称略）

# 目次

## 本文（第1分冊）

### 第1章 序説

1. 事業の概要……………1
2. これまでの石垣修理……………3
3. 事業の実施体制……………21

### 第2章 位置と環境

1. 地理的環境……………22
  - (1) 概要……………24
  - (2) 金峰山塊の岩質……………24
  - (3) 熊本城跡の地形……………27
2. 歴史的環境……………28
  - (1) 周辺遺跡の概要……………28
  - (2) 熊本城と城下町の変遷……………32
3. 文献資料にみる熊本城……………35
  - (1) 南北朝～戦国時代の隈本城……………35
  - (2) 加藤清正の入国と古城・新城……………36
  - (3) 細川家入国後の熊本城……………37
  - (4) 廃藩置県後の熊本城……………38

### 第3章 石垣の遺構調査と保存修理

1. 平成14年度（二の丸美術館西側石垣保存修理工事）の事業……………42
  - (1) 事業の目的と経過……………42
  - (2) 保存修理工事……………46
2. 平成15年度（元札櫓御門跡南側石垣）の事業……………78
  - (1) 事業の目的と経過……………78
  - (2) 発掘調査……………81
  - (3) 保存修理工事……………121
3. 平成16年度（要人御櫓跡）の事業……………152
  - (1) 事業の目的と経過……………152
  - (2) 発掘調査……………156
  - (3) 保存修理工事……………169

## 挿図（第1分冊）

- 第1図 保存修理及び計画個所位置図……………2
- 第2図 熊本市全図……………22
- 第3図 熊本市周辺の地質図……………23
- 第4図 金峰火山の地質と採石推定地……………25
- 第5図 熊本市域の山地分布図……………25
- 第6図 熊本城周辺図……………26
- 第7図 熊本城築城以前の景観推定図……………27
- 第8図 「茶白山ト隈本之絵図」……………28
- 第9図 周辺遺跡位置図……………30
- 第10図 「熊本屋舗割下絵図」……………44
- 第11図 「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」……………44
- 第12図 「二ノ丸御門ヨリ有吉清九郎屋敷迄」……………44
- 第13図 「熊本全図」……………44
- 第14図 工事位置図……………49
- 第15図 工事平面図……………50
- 第16図 石垣立面図（A面）……………51
- 第17図 石垣立面図（B面）……………52
- 第18図 石垣立面図（C面）……………53
- 第19図 標準断面図 No.1 付近……………54
- 第20図 築石番号管理図（A面）……………55
- 第21図 築石番号管理図（B面）……………56
- 第22図 築石番号管理図（C面）……………57
- 第23図 「御城内御絵図」元札櫓御門上……………79
- 第24図 「御城内御絵図」元札櫓御門……………79
- 第25図 調査区位置図……………82
- 第26図 グリッド配置図……………82
- 第27図 遺構実測図 元札櫓全体図……………83
- 第28図 遺構実測図 元札櫓平面図……………84
- 第29図 遺構実測図 元札櫓断面図1……………84
- 第30図 遺構実測図 元札櫓断面図2……………85
- 第31図 遺構実測図 土層堆積状況……………85
- 第32図 遺構実測図 元札櫓・茶御櫓間平面図……………86
- 第33図 遺構実測図 元札櫓・茶御櫓間断面図……………87
- 第34図 遺構実測図 茶御櫓平面図……………88
- 第35図 遺構実測図 茶御櫓断面図……………89
- 第36図 遺構実測図 茶御櫓北平面図……………90
- 第37図 遺構実測図 茶御櫓北断面図……………90

第38図	陶磁器・金属製品実測図	92	第79図	遺構実測図 平面・断面図3	161
第39図	九曜紋軒丸瓦断面模式図	93	第80図	陶磁器・金属製品実測図	163
第40図	瓦実測図1	96	第81図	瓦実測図	165
第41図	瓦実測図2	97	第82図	瓦刻印拓影	167
第42図	瓦実測図3	98	第83図	工事位置図	171
第43図	瓦実測図4	99	第84図	工事平面図	172
第44図	瓦実測図5	100	第85図	石垣立面図 (J面-1)	173
第45図	瓦実測図6	101	第86図	石垣立面図 (J面-2)	174
第46図	瓦実測図7	102	第87図	石垣立面図 (K面)	175
第47図	瓦刻印拓影1	103	第88図	石垣立面図 (L面-1)	176
第48図	瓦刻印拓影2	104	第89図	石垣立面図 (L面-2)	177
第49図	瓦刻印拓影3	105	第90図	築石管理図 (J面-1)	178
第50図	瓦刻印拓影4	106	第91図	築石管理図 (J面-2)	179
第51図	瓦刻印拓影5	107	第92図	築石管理図 (K面・L面-1)	180
第52図	瓦刻印拓影6	108	第93図	築石管理図 (L面-2)	181
第53図	瓦刻印拓影7	109			
第54図	瓦刻印拓影8	110	表 (第1分冊)		
第55図	瓦刻印拓影9	111	第1表	事業実施及び計画概要	1
第56図	工事位置図	124	第2表	熊本城の略年表と石垣ほかの修理及び災害等の記録	3
第57図	工事平面図	125	第3表	周辺遺跡一覧表	29
第58図	石垣立面図 (A面)	126	第4表	事業費	46
第59図	石垣立面図 (B面)	127	第5表	工事概要	47
第60図	石垣立面図 (C面)	128	第6表	築石管理表	58
第61図	石垣立面図 (D面)	129	第7表	事業費	80
第62図	石垣立面図 (E面)	130	第8表	陶磁器類観察表	92
第63図	標準断面図 No.2 付近	131	第9表	金属製品観察表	92
第64図	築石管理図 (A面)	132	第10表	瓦観察表	112
第65図	築石管理図 (B面)	133	第11表	瓦刻印観察表	114
第66図	築石管理図 (C面)	134	第12表	工事概要	121
第67図	築石管理図 (D面)	135	第13表	築石管理表	137
第68図	築石管理図 (E面)	136	第14表	事業費	154
第69図	「熊本屋舗割下絵図」	153	第15表	陶磁器類観察表	163
第70図	「熊本城廻絵図」	153	第16表	金属製品観察表	163
第71図	「御城内御絵図」	153	第17表	瓦観察表	164
第72図	「熊本城郭及市街之図」	153	第18表	瓦刻印観察表	166
第73図	「熊本城の景色 (9)」	153	第19表	工事概要	169
第74図	調査区位置図	157	第20表	築石管理表	184
第75図	グリッド配置図	157			
第76図	遺構配置図	158			
第77図	遺構実測図 平面・断面図1	159			
第78図	遺構実測図 平面・断面図2	160			

## 写真図版（第1分冊）

1. 平成14年度（二の丸美術館西側石垣保存修理工事）の事業  
保存修理工事……………72
2. 平成15年度（元札櫓御門跡南側石垣）の事業  
遺構……………91  
遺物…………… 118  
保存修理工事…………… 142
3. 平成16年度（要人御櫓跡）の事業  
遺構…………… 162  
遺物…………… 168  
保存修理工事（築石管理状況）…………… 182  
保存修理工事…………… 195

## 第2分冊目次

### 第3章 石垣の遺構調査と保存修理

4. 平成17年度（松井山城預櫓跡）の事業
  - (1) 事業の目的と経過
  - (2) 発掘調査
  - (3) 保存修理工事
5. 平成17年度（長局御櫓跡）の事業
  - (1) 事業の目的と経過
  - (2) 保存修理工事
6. 平成18年度（百間石垣）の事業
  - (1) 事業の目的と経過
  - (2) 保存修理工事
7. 平成19年度（二の丸御門跡）の事業
  - (1) 事業の目的と経過
  - (2) 発掘調査
  - (3) 保存修理工事
8. 平成20年度（御裏五階御櫓跡東側石垣）の事業
  - (1) 事業の目的と経過
  - (2) 発掘調査
  - (3) 保存修理工事

### 第4章 総括

1. 遺構調査の成果と今後の課題
  - (1) 遺構
  - (2) 遺物
2. 修理工事における今後の課題

# 第1章 序説

## 1. 事業の概要

### (1) 特別史跡熊本城跡石垣保存修理事業計画

平成9年度に熊本城復元整備計画を策定し、平成10年度より西出丸一帯の建造物を中心とした復元整備を進めており、石垣保存修理（復元）等の史跡等保存整備についても復元計画の中に位置づけ、史料に基づいた復旧を行なうこととした。

本事業計画では、建造物等の復元整備と関連づけながら、城郭の成立と石垣他の修理及び整備記録及びまた昭和41年からの事業実績を整理し、平成27年度以降の事業計画をとりまとめた。

### (2) 石垣保存修理（復元）事業計画

石垣保存修理は特別史跡熊本城跡の石垣を良好な状態で保全していくことを目的として、石垣の編年や破損状況を基にし、保存修理工事の技法や手法について「熊本城建造物復元課題検討委員会、史跡部会」の指導、助言を受けながら平成14年度以降の石垣保存修理事業計画を策定し、文化庁及び熊本県の補助採択を受けて実施した。

事業は、過去の修理記録や写真等を基に石垣の現状調査を実施し、修理個所の破損状況（崩壊、変位等）、破損要因（人為、自然、構造）、石材（規格、形状、加工、石質、強度等）、石積工法（構築方式、技法等）歴史史料（絵図、古文書等）について、修理予定箇所毎に詳細な調査を行ない、史跡部会の指導助言を基に優先順位を決定した。

第1表 事業実施及び計画概要

番号	年 度	実 施 個 所	事 業 概 要	備 考
1	平成14年度	二の丸美術館 西側	保存修理	実施
2	平成14年度	闇御門跡、一ノ開御門跡	発掘調査・保存修理・保存処理	実施
3	平成15年度	大広間跡、西廊下跡他	発掘調査・保存修理・復元	実施
4	平成15年度	元札櫓御門跡	発掘調査・保存修理	実施
5	平成16年度	要人御櫓跡	発掘調査・復元	実施
6	平成17年度	松井山城預櫓跡	発掘調査・保存修理	実施
7	平成18年度	百間石垣	保存修理	実施
8	平成19年度	二の丸御門跡 南側	発掘調査・保存修理	実施
9	平成20年度	御裏五階御櫓跡東側	発掘調査・保存修理	実施
10	平成21年度	馬具櫓（跡）	保存修理	実施
11	平成22年度	平左衛門丸台所跡	発掘調査・保存修理・復元	継続中
12	平成27年度以降	数寄屋丸櫓門跡南側	発掘調査・保存修理・復元	
13		小笠原屋敷跡東側	発掘調査・保存修理	
14		北大手門跡 南側	発掘調査・保存修理	
15		北大手門跡から未申櫓台	発掘調査・保存修理	
16		数寄屋丸長御櫓跡	発掘調査・保存修理・復元	
17		須戸口門 西側	保存修理（樹木伐採）	
18		東竹の丸入り口 北側	発掘調査・保存修理	
19		石門、御裏五階御櫓台	発掘調査・保存修理	
20		御天守廊下跡	発掘調査・保存修理・復元	
21		本丸御殿小広間南側	発掘調査・保存修理・復元	
22		長局御櫓台 東側	発掘調査・保存修理	
23		五間櫓台 北側	保存修理	
24		埋 門 跡	発掘調査・保存修理・復元	



凡例	
①～⑪	保存修理実施箇所
⑫～⑳	保存修理計画箇所

第1図 保存修理及び計画箇所位置図



## 2. これまでの石垣修理

### (1) 史跡の概要

熊本城跡は、熊本市のほぼ中央、通称茶臼山と呼ばれる丘陵の南端に位置し、加藤清正によって慶長12(1607)年に構築された近世城郭である。

城域は周囲5.3km、面積約98haで、うち約52.3haが国の特別史跡に指定されている。現在も石垣、堀などの遺構も旧状をよく残しており、宇土櫓など12棟の建造物等が現存し国の重要文化財に指定されている。

### (2) 石垣保存修理(復元)事業の概要

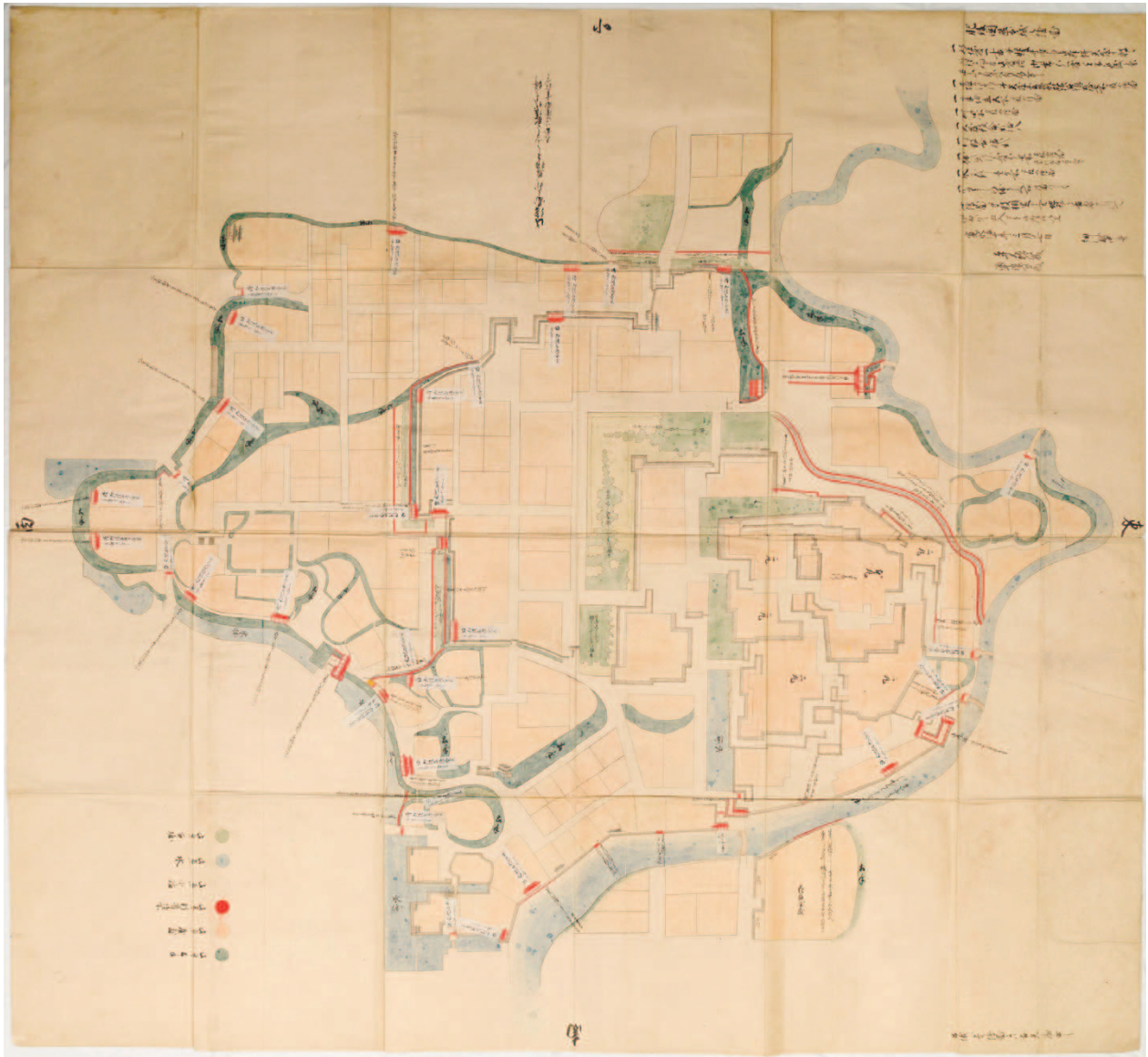
熊本城跡の石垣は、延長約8.7km、面積約69,000㎡におよび、明治初期に解体撤去・改変された箇所はあるが、そのほとんどは良好に保存され現在に至っている。

石垣の保存修理等事業は、文化庁及び熊本県の補助を受けて、昭和41年の午砲台及び平御櫓前の石垣修理に始まり、平成12年度までに19箇所の石垣保存修理及び復元整備を実施している。なお、昭和41年から平成4年度までを記念物一般修理、平成5年度から平成9年度までの5年間を中近世城郭緊急保存修理事業として、また平成10年度は地方拠点史跡等総合整備事業の一環として実施し、平成12年度は記念物一般修理事業として実施した。

### (3) 熊本城の略年表と石垣ほかの修理及び災害等の記録(第2表)

年	西暦	藩主等	事 項	備 考
天正16年	1588		6月 肥後を二分し、加藤清正(隈本城)と小西行長(宇土城)に分け与える	
天正18年	1590		2月26日 石垣・堀の普請について家臣団に指示 4月24日 清正、聚楽より御蔵米・材木の調達・城普請について家臣に指示	広島大学蔵猪熊文書(『新熊』) 中沢広勝氏所蔵文書(『新熊』)
天正19年	1591		5月11日 細工町の町人の入れ替えを行う 8月6日 城内に米蔵設置を指示 8月13日 隈本城作事のこと、肥前名護屋城作事のための材木準備を指示	下川文書(『県史中』) 渋沢栄一氏蔵文書(『新熊』)
文禄元年	1592		9月21日 侍町の惣構の塀の建築について指示 11月12日 本丸の「おうへ」の作事について指示	西村清氏蔵文書(『新熊』)
文禄3年	1594		3月12日 厩の建て方、櫓の建て直しなどについて指示	速見真曹氏所蔵文書(『新熊』)
文禄4年	1595	加藤清正	11月28日 清正、惣構の塀の修復、瓦の発注などを留守家老に指示	高林兵衛氏蔵文書(『新熊』)
慶長元年	1596		5月 清正帰国。11月、朝鮮再征の先陣として隈本を発す ・この頃清正、古府中の商家・寺院を隈本城下に移すという	『加藤清正伝』 『肥後国誌』
慶長3年	1598		10月16日 高麗より帰国後は年貢・人夫諸役2・3年免除との制札を出す(12月帰国) ・城普請始まる	下川文書(『県史中』) 御大工棟梁善蔵聞覚控
慶長4年	1599		・慶長4年八月吉日銘の滴水瓦製作(瓦師福田家の先祖附には初代福田五右衛門が慶長3年に瓦師棟梁を拜命とある)	出土瓦、『熊本市史』
慶長5年	1600		・関ヶ原の戦い。清正は黒田如水とともに九州で軍事行動を展開 10月26日 黒田如水を「新城」で歓待するため、天守の作事を急がせる	中沢広勝氏所蔵文書(『新熊』)
慶長6年	1601		8月 徳川家康の許可を得て、隈本新城(茶臼山)造築の鉄はじめ(諸説有)	続撰清正記
慶長7年	1602		・西出丸の大黒櫓(乾櫓)完成	肥後国年歴(肥後近世史年表)
慶長12年	1607		・新城完成、隈本城を熊本城と改める、町の名も熊本と改称する	新撰事蹟通考(『肥後文献叢書』)

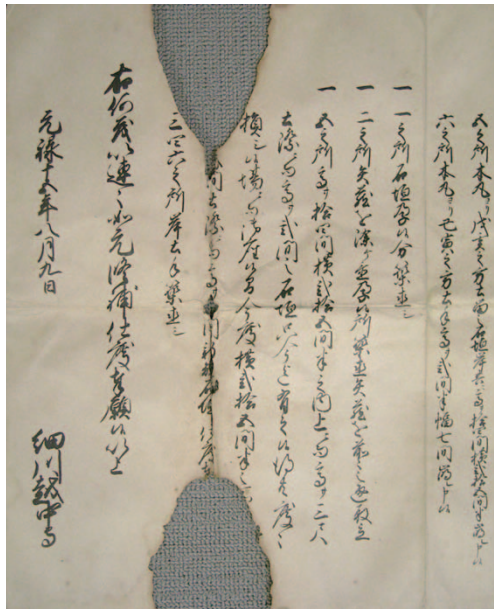
慶長15年	1610		4月15日 熊本城大広間及び花畑の作事について、油断なく終わらせることを指示 7月22日 本丸広間の絵、花畑作事について指示	加藤清正書状（『加藤清正伝』） 下川文書（『新熊』）	
慶長16年	1611		6月24日 清正没する 7月10日 萩藩の密偵、肥後国を探索	肥後国熊本様子聞書	
慶長17年	1612		6月 忠広、遺領相続を安堵される	下川文書（『新熊』）	
元和元年	1615	加藤忠広	一国一城令。支城の破却		
元和2年	1616		5月 中尾山に本妙寺が移される		
寛永2年	1625		6月 熊本地方大地震、城内被害甚だしく煙硝蔵爆発。天守ほか石垣も被害	『加藤清正伝』	
寛永9年	1632		7月22日 忠広改易につき、上使衆、熊本・八代両城を受け取り		
			10月4日 細川忠利、肥後拝領		
			12月9日 忠利、熊本城に入城	部分御旧記 国郡并人民部	
寛永10年	1633			2月19日 熊本城本丸修理のため忠利は花畑屋敷に移る	綿考輯録卷三十四
寛永11年	1634		3月17日 熊本城の石垣・堀・堀・門などの改修を幕府に願い出る	肥後国熊本城廻普請仕度所絵図（県立図書館蔵）	
			4月14日 幕府より熊本城の堀・櫓の修理、二の丸、三の丸の修理許可	御自分御普請（永青文庫蔵）	
			8月2日 熊本城の各所、絵図での申請通りに普請を行うことを許可される	御自分御普請	
		8月15日 忠利、本丸作事成就につき花畑より移る ・岡藩密偵、熊本城・城下の様子を探索	綿考輯録卷三十五 隣国様子聞合帳（中川家文書）		
寛永12年	1635	・武家諸法度の改正			
		7月25日 九州地方大風、肥後も損害多く、城堀・櫓・民家破損多し 11月 本丸天守の修理、花畑屋敷の作事おおかた成就	綿考輯録卷三十六 部分御旧記（『県史近』2-259）		
寛永13年	1636		7月15日 本丸に落雷	『大日本近世史料細川家史料』	
寛永14年	1637	閏3月 熊本城普請を中止する	部分御旧記（『県史近』3-776）		
		7月 飽田郡下立田村に泰勝寺建立 ・平左衛門丸の屋敷、西竹之丸の台所など計7軒を解体	『肥後国誌』 平左衛門元屋敷家材木覚帳（永青文庫蔵）ほか		
寛永16年	1639	10月 花畑作事小屋番所より火事	部分御旧記 災変部		
		12月 花畑屋敷前の橋、百間馬屋上角の櫓大方出来る。古城両所の橋の普請に着手	部分御旧記（『県史近』2-181）		
寛永17年	1640		6月1日 白川より川尻までの井手の拡張と三の丸の内坪井川、町人その他用のため砂取の許可を幕府に申請し、14日、許可される ・熊本城本丸東方石垣孕みのため、築直を幕府に申請	御自分御普請 『大日本近世史料 細川家史料』	
寛永18年	1641	3月17日 忠利死去			
		5月5日 光尚、遺領相続する			
寛永20年	1643		2月 妙解寺建立	『肥後国誌』	
寛永21年 (正保元年)	1644	細川光尚	6月25日 熊本町、農村ともに大雨洪水、熊本城石垣、土手、堀、櫓破損 7月10日 熊本洪水のため、石垣、土手、櫓、堀の破損修理、三の丸虎口櫓脇の川岸崩についての新規土塁、水抜き1カ所の修理を幕府に申請し、8月23日に許可される ・幕府、国絵図と城絵図の作成を命じる	『沢庵和尚書簡集』 御自分御普請（永青文庫蔵）	
			5月13日 太鼓櫓の門普請につき、門を開け普請者を通す 7月27日 九州・中国、大風で熊本城ほか各地の城郭が多く破損する	奉日（『熊本藩年表稿』） 『徳川実紀』	
正保2年	1645				



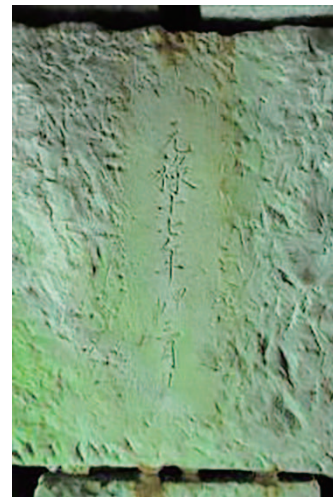
寛永11年（1634）「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」（熊本県立図書館蔵）

寛永9年（1632）、熊本城に入った細川忠利が、寛永11年に熊本城の改修計画を立て、幕府に普請の許可を求めた時の控え絵図

慶安2年	1649		8月14日、本丸良方石垣崩れにつき、修復が許可される 12月26日 光尚、死去	綿考輯録巻六十四
慶安3年	1650		4月 綱利、遺領相続	
承応2年	1653		8月 肥後大嵐にて大木倒れ、幅広き石を吹き割る、故に岩割風という	渡辺玄察日記（『肥後文献叢書』）
万治元年	1658		3月27日 熊本坪井町より失火にて400余軒焼失	渡辺玄察日記
寛文元年	1661		3月 坪井の火事	渡辺玄察日記
			3月 本丸御殿修繕の為、本丸内での大工の食事と竹の丸の出入許可を願う	奉日（『熊本藩年表稿』）
			7月 肥後大地震、翌日まで中小地震3回	渡辺玄察日記
寛文2年	1662		9月 夜、大地震あり	渡辺玄察日記
寛文3年	1663		2月 熊本坪井町屋より失火あり、500余軒焼失す	渡辺玄察日記
寛文5年	1665		4月 熊本手取より出火、焼死40余人。熊本地方大地震	渡辺玄察日記
寛文7年	1667		3月14日 千葉城の塩硝蔵が焼失	本藩年表（永青文庫蔵）
			・火の用心のため花畑館長屋並びに塀を瓦葺に改める	本藩年表
延宝4年	1676		・大雨洪水により城内石垣、塀、土居、水抜きなど破損のため修復願	御自分御普請（永青文庫蔵）
			12月11日 熊本城坤方石垣普請について幕府の許可	江戸幕府老中連署状写（永青文庫蔵）
元禄3年	1690	細川	・本丸より申酉（新一丁目御門付近）の堀の浚渫を申請	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵）
元禄4年	1691	綱利	2月 坪井、大火事	渡辺玄察日記
			8月 2月の大火の結果、道幅の拡張、町屋と侍屋敷を変更する事について、是月幕府の指令あり、着手し11月工事終わる。*坪井広町という ・本丸より子の方角の川岸、大雨のため崩落につき、修復申請	本藩年表、御家譜続編 肥後国熊本城下川岸崩候所之絵図（永青文庫蔵）
元禄8年	1695		4月 大地震あり	渡辺玄察日記
元禄10年	1697		・堀の浚渫と修築の申請	[熊本城修補願絵図]（永青文庫蔵）
元禄15年	1702		8月9日 小天下守（石門付近）の石垣孕み、その他4箇所修復申請	[熊本城修補願絵図]（永青文庫蔵）
元禄16年	1703		8月 小天下守石垣孕み、石垣普請につき槽2箇所取除	御奉行所覚帳（永青文庫蔵）
宝永元年 (元禄17年)	1704		3月 是頃、天守北側の石垣を大補修（石門内に「元禄十七年甲申三月吉日」と刻字あり）	石門跡と刻字写真
宝永3年	1706		4月 是月、大地震所々岩石抜け大地破裂、家屋倒れ圧死する者夥しい	『肥後近世史年表』
宝永4年	1707		10月 肥後大地震	南藤蔓綿録、『肥後近世史年表』
宝永6年	1709		10月7日 熊本城石垣破損のため、6箇所修補願	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵）
			・坪井竹屋町より出火、1200余軒焼失・手取の水道できる	官職制度考 肥後国誌
正徳2年	1712		7月6日 綱利隠居願、11日許可	
			・宣紀、熊本藩主となる	
正徳5年	1715		4月 熊本城石垣破損、5箇所修補を幕府に願、許可あり	本藩年表
享保元年	1716	細川	9月30日 千葉城長岡内膳家より出火し、竹の丸下の竹小屋焼失、下通から宝町筋、白川端まで焼失	『熊本藩町政史料一』、本藩年表、御家譜続編
享保4年	1719	宣紀	9月 熊本城本丸、子の方石垣1カ所、丑寅の方石垣1箇所孕み、外曲輪未申の方外川岸土留・石垣1箇所崩壊につき修補を8月に申請、許可される	御家譜続編
享保7年	1722		5月 新町1丁目御門外堀2箇所、坪井方面3箇所浚渫を申請、許可される	肥後国熊本城絵図、御家譜続編
享保13年	1728		9月 熊本城新堀御門の普請あり	本藩年表



[熊本城修補願絵図] (永青文庫蔵) 元禄15年 (1702)



小天守下、石門付近の現況



[肥後国熊本城絵図] (永青文庫蔵) 宝永6年 (1769)

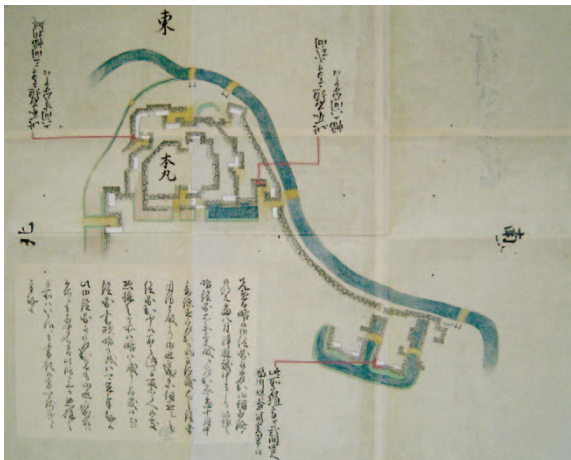


修理箇所現況

享保14年	1729	細川宗孝	4月28日 藪の内より出火し、京町1丁目・2丁目・今京町まで類焼	『熊本藩町政史料一』
享保17年	1732		6月26日 宣紀、江戸で没する	
			8月25日 宗孝、遺領相続	
享保20年	1735		5月 熊本城小天守に落雷	本藩年表
			5月 大風雨により埋門脇板櫓倒壊、以後再建なし	公私便覧後編
元文3年	1738		8月 東竹の丸塩蔵、大破につき壊す	本藩年表
元文5年	1740		閏7月9日 高麗門脇左右の堀、木下伊織屋敷脇の堀の浚渫、幕府より許可	本藩年表、御家譜続編
寛保3年	1743		5月 熊本城諸所修築について願出の通り完了	御家譜続編
			6月2日 竹の丸松木に落雷	肥後国年歴（『肥後近世史年表』）
延享元年	1744		11月 熊本城石垣修築並びに堀の浚渫について、願の通り終了	御家譜続編
延享4年	1747		4月12日 熊本城石垣崩れ孕み箇所3箇所修復、堀浚渫について幕府より許可される	本藩年表、御家譜続編
			8月15日 細川宗孝江戸城内において切られ、翌日死去	御家譜続編
			10月 重賢跡を継ぐ	
寛延2年	1749		4月 城内北御門脇の明地に櫓方役所を建てる	旧章略記（『熊本法学』第21号）、本藩年表ほか
宝暦4年	1754		5月 熊本御作事所雷火	旧章略記、本藩年表ほか
			12月15日 城内二の丸に藩校「時習館」を開設する	御家譜続編
宝暦6年	1756		12月 医学校再春館創設、翌年開講	旧章略記
宝暦8年	1758		3月 西大手門修繕につき往来差し止め	『藩法集7』
			4月 坪井立田口構際番所修繕	『藩法集7』
明和元年	1764		1月 作事所焼失	年々覚頭書、御城内御絵図
明和2年	1765		6月 熊本城大天守に落雷	本藩年表
明和4年	1767		9月 竹の丸入口の川手の櫓に地引合見図帳を格納	年々覚頭書
明和5年	1768		4月 小天守下平黒御門解体	公私便覧後編
明和6年	1769		7月28日 未の刻、熊本大地震	郷党歴代拾穂記（男成神社）
明和7年	1770		閏6月25日 坪井から出火、内坪井、京町、新堀、岩立ほか、森本櫓焼失	本藩年表ほか
安永6年	1777		7月25日 肥後大風で南御門を櫓中程より吹き破られる。	本藩年表
安永8年	1779		5月 熊本城乾櫓修復、棟札発見	肥後国年歴（『肥後近世史年表』）
			5月27日 熊本城外曲輪水堀3箇所の浚渫を申請、6月に幕府の許可あり	肥後国熊本城絵図、御家譜続編
天明元年	1781	・花畑屋敷大書院・中柱・歌仙の間などの屋根が銅瓦となる	本藩年表	
		・本丸より丑寅、午、未申の方の石垣三箇所孕みのため築直し申請	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵）	
天明2年	1782	・天明元年に申請したものを幕府に再提出	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵）	
		8月 熊本大風、倒家669軒、田畑損耗甚大	本藩年表	
天明4年	1784	・水堀（一丁目御門付近）の浚渫を申請	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵）	
天明5年	1785	9月 御花畑広間銅瓦となる	『熊本藩町政史料一』	
		10月 重賢死去		
		12月12日 治年、遺領相続		
天明6年	1786	6月 城内竹の丸往来差紙付のほか禁止	『藩法集7』	
天明7年	1787	9月 治年死去		
		細川治年		



「御城内御絵図」（熊本市蔵）明和6年頃



「肥後国熊本城絵図」（永青文庫蔵）天明元年（1781）



修理箇所現況



「肥後国熊本城絵図」（永青文庫蔵）天明2年（1782）



修理箇所現況

天明7年	1787		立礼(宇土支藩藩主)、遺領相続し齊茲と改める	
寛政2年	1790		1月 熊本城本丸から卯の方及び未の方石垣の修補について幕府に申請	肥後国熊本城絵図(永青文庫蔵)
寛政4年	1792	細川齊茲	2月 熊本城元竹小屋跡に犬追物稽古場出来る	学校方改帳
			4月1日 島原の眉山崩れ、大津波発生	
寛政5年	1793		2月 熊本城修理許可	本藩年表
寛政8年	1796	細川齊茲	11月 櫓方裏御櫓石垣普請幕府に届け出	〔肥後国熊本城絵図〕(永青文庫蔵)
			6月 熊本大洪水、古今未曾有の洪水、熊本府内京町山崎の外全域浸水	本藩年表
			7月 立田口子飼方面に堤防築(一夜塘とも豊年塘とも言う)	『肥後先哲偉蹟』
寛政10年	1798		12月 東竹之丸明地の犬追物稽古場、元通りに戻すため稽古停止(稽古場は田迎町に移転)	学校方改帳
文化7年	1810	細川齊茲	・熊本御蔵、7間に21間建添あり	本藩年表
			11月10日 齊茲隠居し、齊樹が家督相続	
文政3年	1820		12月 櫓方櫓下の石垣孕のため、修補願を幕府に提出	肥後国熊本城絵図(永青文庫蔵)
文政4年	1821	細川齊樹	1月 熊本城石垣手入願、許可される	本藩年表
文政5年	1822	細川齊樹	・櫓方裏御櫓石垣普請完成(石垣に「文政五年六月竣工」の刻字あり)	櫓方三階櫓台写真、刻字写真
			6月 作事所材木蔵雷火にあう	本藩年表
文政7年	1824		6月 古京町長岡内膳屋敷に二の丸御屋形完成。本山旧屋形は解体し、内膳宅は牧崎に引越	本藩年表ほか
文政9年	1826		2月 齊樹死去。齊護(宇土支藩藩主)本家相続	
文政12年	1829		・御天守方椽板、雨戸板は杉材をやめ、楠とする	年々覚頭書(永青文庫蔵)
天保10年	1839		3月 御城西大手御門作事につき、往来通行止め	壁書扣(『熊本藩年表稿』)
天保11年	1840		10月23日 賄物所桐油方御蔵2戸焼失	『肥後近世史年表』
弘化元年	1844		・十四間櫓修理	棟札
弘化3年	1846	細川齊護	・霊台橋架橋着工。二の丸屋敷落雷	『肥後近世史年表』
弘化4年	1847		12月 数十年来希な強震のため、熊本城の諸所の石垣も崩れ、または孕み、会所の囲い初蔵なども破壊される	『肥後近世史年表』
嘉永元年	1848		2月 竹の丸作事所火事	本藩年表
安政4年	1857	細川齊護	・七間櫓修理	柱墨書
			・安巳橋架設	『肥後先哲偉蹟』
安政5年	1858		6月 強風雨、熊本城一の天守の鯨吹き折られる	肥後国年歴(『肥後近世史年表』)
安政6年	1859		・源之進櫓修理	棟札
安政7年 (万延元年)	1860	細川齊護	・監物櫓修理	棟札
			・齊護死去、韶邦遺領相続	
文久元年	1861		・東十八間櫓、北十八間櫓、五間櫓修理	棟札ほか
慶応元年	1865	細川韶邦	・田子櫓修理	懸魚
慶応2年	1866		・四間櫓修理、不開門大修理	棟札
明治2年	1869		6月17日 韶邦、版籍奉還により熊本県知事となる	『肥後藩国事史料卷十』
明治3年	1870	細川韶邦	7月 時習館・郷学校・洋学所・再春館を廃止。藩庁を花畑邸に移す	『肥後藩国事史料卷十』
			9月 知事護久が熊本城廃棄を申し出る	『肥後藩国事史料卷十』

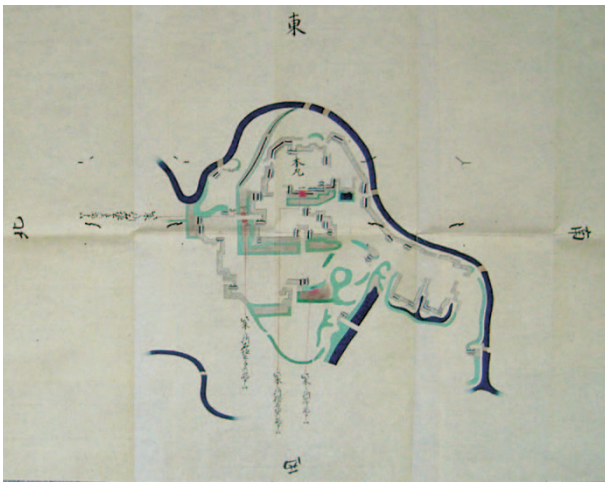




「肥後国熊本城絵図」(永青文庫蔵) 寛政2年(1790)



修理箇所現況

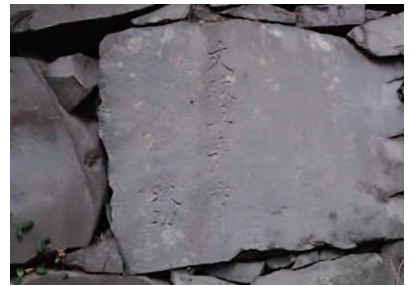


「肥後国熊本城絵図」(永青文庫蔵) 寛政8年(1796)



修理箇所現況

櫓台内側 「文政五年六月竣工」



肥後国熊本城絵図 (永青文庫蔵) 文政3年(1820)



櫓方三階櫓台、北東面

明治3年	1870	細川護久	10月 古城医学校開校 ・熊本城内を一般に公開する	
明治4年	1871		3月 時習館を解崩して兵式操練場とする 7月 城内に錦山神社創建（明治7年に京町へ移転） 7月14日 廃藩置県 8月20日 鎮西鎮台の設置。本営を熊本に置く 9月 洋学校開校	『肥後藩国事史料卷十』 法令全書
明治5年	1872		4月3日 鎮西鎮台に花畑旧藩邸引渡し 6月 明治天皇肥後巡幸。二の丸の熊本県庁、二本木に移転。白川県と改称 7月12日 新町3丁目に郵便役所開設（西南戦争で焼失） ・新牢（懲役場）を手取本町（現熊本市役所）に設置	『肥後藩国事史料卷十』
明治6年	1873		1月9日 鎮西鎮台から熊本鎮台に改称 6月 二の丸の操練場の兵営建設始まる 6月30日 鎮西兵团病院（鎮西鎮台病院）を熊本鎮台病院に改称 9月 月見櫓・取付堀以下大破により撤去 12月 熊本鎮台暴動発生	法令全書 熊本県公文類纂12-2 公文別録 大日記
明治7年	1874		5月12日 熊本師範学校開校 6月 熊本城、陸軍用地に編入される。本丸に鎮台本営が移転	
明治8年	1875		3月 古城医学校、廃校 4月15日 歩兵第十三連隊、二の丸に屯営 4月 砲兵第六大隊発足、熊本市民会館付近に仮営。 一新小学校開校 11月24日 県庁が二本木より古城病院跡に移転	
明治9年	1876		2月 白川県を熊本県に改称 4月17日 工兵第六小隊発足、花畑邸内兵舎失火、全焼。棒安坂下仮兵舎へ移転 9月 熊本地方裁判所設置。洋学校廃止、跡に臨時裁判所、県警本部を設置 10月24日 神風連の変 ・砲兵第六大隊の新兵舎が備前屋敷跡（現在の合同庁舎付近）に落成し、移転。 予備砲兵第三大隊も砲兵第六大隊の兵舎へ同居	
明治10年	1877		2月 西南戦争。19日、熊本城天守、本丸御殿その他焼失、広く城下も焼失 ・下馬橋撤去、架替え	
明治11年	1878		・藤崎宮、井川淵町に移転。裁判所、京町に移転	
明治17年	1884		7月1日 歩兵第十三連隊の一部を分離し、歩兵第二三連隊第一大隊を設置。 山砲兵第六大隊を砲兵第六連隊と改称し、元備前屋敷に設置。 ・宇土櫓及び監物櫓改修（陸軍）	
明治20年	1887		1月1日 熊本県庁、古城より南千反畑町に移転	
明治21年	1888		5月14日 熊本鎮台、第六師団と改称	
明治22年	1889		6月1日 熊本市役所開庁 6月13日 工兵隊第六大隊が千葉城から大江村渡鹿の兵営に移転 7月28日 大地震あり、頼当御門より数寄屋丸の石垣、暗がり門通りを経て師団司令部まで左右の石垣、竹の丸の中程（飯田丸五階櫓台）、下馬橋の石垣、百間石垣の上部が崩れる（金峰山地震）	熊本城石垣崩壊の景（国立科学博物館所蔵）



画像提供：国立科学博物館  
旧熊本城西出丸 第六師団火薬庫崩壊之景



画像提供：国立科学博物館  
旧熊本城飯田丸 第六師団火薬庫上石垣崩壊之景



画像提供：国立科学博物館  
旧熊本城闇ガリ 第六師団本部石垣崩壊之景



数奇屋丸櫓門東側（金峰山地震による崩壊後の復旧）



百間石垣西側（金峰山地震による崩壊後の復旧）



闇り通路



頼当御門突当石垣（金峰山地震による崩壊後の復旧）



五間櫓下石垣補強の施工現況（昭和34年施工）

明治23年	1890	4月1日 憲兵隊設置	
明治24年	1891	7月1日 城内梅屋敷に熊本電燈会社が開業	
明治27年	1894	4月20日 歩兵第二三連隊が花畑旧藩邸に兵営移転	
明治30年	1897	8月 野戦砲兵第六連第一大隊兵営が大江村に移転 9月 監物台に陸軍幼年学校設置（昭和2年廃止）	
明治32年	1899	・桜橋架橋、城外と古城の北側を結ぶ	
明治35年	1902	5月 熊本電燈会社解散 11月 陸軍特別大演習、本丸が大本営となる ・南坂を改修し行幸坂を新設、城内通路改修。下馬橋を下流に架替え、行幸橋と改称	
明治42年	1909	・清正公三百年祭。錦山神社を加藤神社と改称	
大正6年	1917	・第六師団司令部、天守台前に落成	
大正14年	1925	5月24日 歩兵第十三連隊、渡鹿の新兵舎に移る	
大正15年	1926	1月12日 熊本城跡保存会結成 6月15日 新町清爽園開場式	
昭和2年	1927	3月31日 陸軍幼年学校廃校 4月1日 熊本城のドン（午砲）復活 7月30日 熊本陸軍教導学校が城内に開校 ・宇土櫓解体修理、長堀改築、谷村計介銅像建立（書物櫓跡）	
昭和3年	1928	・電車敷設（辛島町－段山線）のため段山の基部を掘り割る	
昭和4年	1929	6月29日 熊本偕行社、千葉城跡に新築落成式	
昭和8年	1933	1月23日 宇土櫓、国宝に指定される。 2月4日 熊本城域が史跡に指定	
昭和11年	1936	3月28日 熊本貯金支局が花畑町に落成	
昭和14年	1939	4月1日 陸軍幼年学校が熊本陸軍教導学校内に開校（15年清水町に移転）	
昭和18年	1943	8月1日 熊本陸軍教導学校が熊本予備士官学校となる	
昭和20年	1945	10月 米軍進駐。旧幼年学校や工兵・騎兵・砲兵各隊兵舎に入る。宇土櫓一般公開 ・三の丸に化血研発足	
昭和24年	1949	・大蔵省が熊本城を熊本市に貸下げ	
昭和25年	1950	・新文化財保護法により熊本城跡を史跡、国宝建造物を重要文化財に指定	
昭和26年	1951	9月17日 熊本城の管理者に熊本市を指定	
昭和27年	1952	6月5日 本丸師団司令部跡に市立熊本博物館開館 11月8日 陸軍幼年学校跡に監物台樹木園開園 ・熊本城保存修理を国の直轄事業として、27年度から5ヵ年継続で実施	
昭和28年	1953	1月24日 熊本城改修工事起工式を平櫓前で行なう 5月10日 長堀が110mにわたって倒壊 6月26日 熊本大水害	
昭和29年	1954	・櫓方門崩壊（現加藤神社）、新堀橋下樹木園東北隅崖崩れ ・長堀解体修理、宇土櫓半解体修理工事着手 ・西出丸の石垣（軍の火薬庫跡）を取り除く	
昭和30年	1955	12月29日 史跡熊本城跡が特別史跡に指定される	



午砲台東側



小天守東側、石門



馬具櫓北側



西出丸<戌亥櫓～西大手門>



東竹の丸五階櫓



二の丸御門（通路整備）



不開門（坂道整備）



地図石

昭和30年	1955	・櫓方門を解体保存、新堀櫓（監物櫓）解体修理	
昭和31年	1956	・不開門・源之進櫓解体修理工事着手・西櫓門を改修	
昭和32年	1957	・宇土櫓の解体修理工事完了 ・櫓方門を竹の丸入り口に移築 ・田子櫓、七間櫓、十四間櫓、四間櫓の解体修理に着手	
昭和33年	1957	12月 熊本県立図書館が千葉城町に完成（昭和60年、出水町に移転開館）	
昭和34年	1958	4月1日 天守閣再建起工式 8月20日 熊本県営熊本城プール完工式 ・重文建造物（宇土櫓・不開門・平櫓・監物櫓・長堀）の管理団体に指定 ・竹の丸旧軍倉庫解体時に長堀52mが倒壊 ・五間櫓下石垣補強工事の実施	石垣補強写真
昭和35年	1960	5月14日 熊本県立第一高校（古城町）落成式 9月22日 天守閣再建完成、本丸20ha 有料化 10月15日 藤崎台県営野球場完工 ・十四間櫓、四間櫓、解体修理完了 ・五間櫓・北十八間櫓解体修理着工（36年完了）	
昭和36年	1961	1月16日 二の丸に合同庁舎完成 ・東十八間櫓解体修理工事着手（37年完成）・平御櫓再建完成	
昭和37年	1962	4月11日 熊本県立大に高校が二の丸に開校 ・源之進櫓、四間櫓、十四間櫓、七間櫓、田子櫓、東十八間櫓、北十八間櫓、五間櫓の管理団体に指定 ・加藤神社、現在の位置に移る	
昭和38年	1963	3月1日 NHK熊本放送開館が千葉城町の旧偕行社跡に完成	
昭和40年	1965	・特別史跡熊本城跡の管理団体に熊本市が指定される	
昭和41年	1966	・馬具櫓再建完成 ・月見櫓跡石垣修理 ・午砲台の石垣一部崩壊を復旧	午砲台東側石垣写真
昭和42年	1967	・石門の石垣修理工事に着手（昭和44年に完成） ・二の丸広場園路、駐車場造成工事に着手（都市公園整備）	石門写真
昭和43年	1968	・県立第二高校が健軍東町の新校舎に移転	
昭和44年	1969	・加藤神社裏、平御櫓前、馬具櫓前石垣復旧工事完了 ・宇土櫓部分修理工事	馬具櫓北側写真
昭和45年	1970	・西出丸、戌亥櫓跡から西大手門跡間の石垣復元工事に着手 ・長堀屋根保存修理工事完了	
昭和50年	1975	・西出丸戌亥櫓跡から西大手門跡間の石垣復元工事完成 ・集中豪雨により樹木園の崖、二の丸空堀の崖などが崩壊する ・城内一帯の樹木調査及び二の丸御門跡虎口の発掘調査を実施 ・西竹の丸五階櫓（独立櫓）石垣修理及び要人櫓跡復元工事着手 ・棒庵坂石垣工事の実施	西出丸石垣写真
昭和51年	1976	3月4日 二の丸に熊本県立美術館開館	



棒庵坂、南法面



棒庵坂、南法面



宇土櫓、西側



二の丸、美術館南側



奉行丸、東側



西出丸北（災害復旧）



東十八間櫓南（災害復旧）



奉行丸西側

昭和51年	1976	<ul style="list-style-type: none"> <li>・西竹の丸五階櫓（独立櫓）石垣修理完了</li> <li>・昭和50年の崖崩れ等の災害復旧工事完了</li> <li>・二の丸御門跡整備工事着手・平櫓部分修理工事着手</li> </ul>	東竹の丸五階櫓台写真
昭和52年	1977	<ul style="list-style-type: none"> <li>・西南の役百周年籠城記念祭が飯田丸で開催される</li> <li>・二の丸御門跡整備工事完成・長塀部分修理工事完了</li> </ul>	二の丸御門跡写真
昭和53年	1978	<p>4月1日 熊本城内古京町に熊本市立熊本博物館が完成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不開門坂道整備工事着手・監物櫓部分修理工事完了</li> </ul>	不開門坂道写真
昭和54年	1979	<ul style="list-style-type: none"> <li>・源之進櫓部分修理工事完了・不開門坂道整備工事完了</li> <li>・三の丸森本儀太夫預櫓跡周辺整備工事完成</li> </ul>	
昭和55年	1980	<ul style="list-style-type: none"> <li>・棒庵坂石垣修理第一期工事着手・数寄屋丸の地垣石補修工事完了</li> <li>・西大手門復元整備工事着手・不開門部分修理工事完了</li> </ul>	地垣石写真
昭和56年	1981	<p>3月15日 花畑町の勸業館跡地に産業文化会館開館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・田子櫓、七間櫓、十四間櫓、四間櫓保存修理工事</li> <li>・棒庵坂石垣修理第一期工事完了</li> <li>・西大手門復元整備工事完成</li> <li>・宇土櫓、櫓台石垣孕み状況調査の実施</li> </ul>	棒庵坂写真
昭和57年	1982	<p>8月10日 熊本県伝統工芸館開館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・宇土櫓西側石垣修理工事完了</li> <li>・千葉城跡（国税局所管）石垣修理工事完了</li> </ul>	宇土櫓西側写真
昭和58年	1983	<p>3月 特別史跡熊本城跡保存管理計画策定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平御櫓下石垣保護のため坪井川に擁壁石垣築造（59年完成）</li> <li>・棒庵坂石垣修理第二期工事着手</li> </ul>	
昭和59年	1984	<ul style="list-style-type: none"> <li>・棒庵坂石垣修理第二期工事完了・平御櫓屋根補修工事完了</li> </ul>	
昭和60年	1985	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宇土櫓保存修理（半解体）工事着手・美術館西側石垣修理工事着手</li> </ul>	
昭和61年	1986	<ul style="list-style-type: none"> <li>・美術館西側石垣修理工事完了・坪井川護岸及び護床工事完了</li> </ul>	美術館西側写真
昭和63年	1988	<ul style="list-style-type: none"> <li>・西出丸（奉行所跡）東側石垣保存修理工事着手</li> <li>・備前堀整備工事着手（平成元年3月完成）</li> <li>・数寄屋丸石垣復元整備工事完了</li> </ul>	
平成元年	1989	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宇土櫓保存修理工事完了・平櫓保存修理（部分修理）工事完了</li> <li>・数寄屋丸二階御広間復元整備工事完成</li> <li>・埋門（冠木門形式にて）再建整備工事完成</li> <li>・三の丸地区に県指定重文「旧細川刑部邸」の移築復元工事着手</li> <li>・古城堀復元のため発掘調査の実施及び一部浚渫工事の実施</li> </ul>	
平成3年	1991	<p>9月27日台風19号が日本列島を縦断し各地に甚大な被害をもたらす。熊本城においても重要文化財（長塀、十四間櫓、源之進櫓、田子櫓、東十八間櫓、宇土櫓）が被害を受け、特に長塀は最大瞬間風速56mの南風によって中央部が倒壊した。また、石垣も2箇所が崩壊し、城内全域にわたって樹木の倒木、枝折れ等の被害を受けた</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・豪雨により城内数カ所で崖崩れ等の被害を受ける</li> </ul>	
平成4年	1992	<ul style="list-style-type: none"> <li>・台風19号による災害復旧（長塀・源之進櫓他・石垣等）工事完了</li> <li>・西出丸（奉行所跡東側）石垣保存修理工事完了</li> </ul>	奉行丸、東側写真 西出丸北写真





二の丸御門北側



二の丸御門  
(通路整備)



奉行丸、西側



奉行丸、南側



南大手門石垣と南坂



未申櫓台



飯田丸五階櫓



西大手門

平成4年	1992	・二の丸御門周辺整備（第二期）工事完成 ・天守閣災害復旧（台風19号）工事着手	東十八間櫓南写真
平成5年	1993	・県指定重要文化財「旧細川刑部邸」移築復元工事完成 ・西出丸（奉行所跡西側）石垣保存修理工事着手 ・宇土櫓ほか5棟補修工事完了	
平成6年	1994	・三の丸（古京町）北側石垣修理工事	
平成7年	1995	・西出丸（奉行所跡西側）石垣保存修理工事完了 ・奉行所跡遺構調査の実施	奉行丸南西側写真
平成8年	1996	・二の丸御門跡石垣保存修理工事完成 ・西出丸（奉行所跡）南側石垣一部復元工事完了	二の丸御門北側 奉行丸南側写真
平成9年	1997	・南大手門跡石垣及び南坂一部復元整備工事着手（平成10年3月完成） ・熊本城復元整備計画策定	南大手門、南坂写真
平成10年	1998	・未申櫓台石垣保存修理工事	未申櫓台写真
平成11年	1999	・西出丸一帯復元整備工事着手（平成16年3月完了）	
平成12年	2000	・飯田丸五階櫓ほか石垣保存修理、復元工事着手	飯田丸五階櫓写真
平成13年	2001	・西大手門石垣保存修理工事 ・飯田丸五階櫓ほか石垣保存修理、復元工事完了	西大手門写真

〔参考文献・史料出典〕

熊本市『熊本市史』1932

辻善之助編註『沢庵和尚書簡集』株式会社岩波書店 1942

生田宏『肥後近世史年表』日本談義社 1958

熊本県『熊本県史料 近世篇第一』～『熊本県史料 近世篇第二』1965

熊本県『熊本県史料 中世篇第五』1966

藩法研究会『藩法集7 熊本藩』創文社 1966

武藤徹男・宇野東風・古城貞吉編『肥後文献叢書（三）』株式会社歴史図書社 1971

同『肥後文献叢書別巻（一） 肥後先哲偉蹟』株式会社歴史図書 1971

鎌田浩「旧章略記—熊本藩法制資料（五）—」『熊本法学』第21号 熊本大学法学会 1973

細川藩政史研究会『熊本藩年表稿』1974

細川家編纂所『改訂肥後藩国事史料 復刻版』國書刊行会 1974

中野嘉太郎『加藤清正傳』新潮社 1979

細川藩政史研究会『熊本藩町政史料一』 1985

神戸大学文学部『中川家文書』臨川書店 1987

土田將雄編『出水叢書4 綿考輯録 第四卷 忠利（上）』汲古書院 1989

東京大学史料編纂所『大日本近世史料 細川家史料十三』東京大学出版会 1992

新熊本市史編纂委員会『新熊本市史』史料編 第二巻～第四巻 熊本市 1993～1996

同『新熊本市史』通史編 第五巻近代Ⅰ～第八巻現代Ⅰ 熊本市 1997～2003

同『新熊本市史』別編 第三巻年表 熊本市 2003

熊本県立美術館編『熊本城築城400年記念 激動の三代展』熊本城築城400年記念展実行委員会 2007

### 3. 事業の実施体制

石垣保存修理事業は熊本城総合事務所が主管課として実施した。事業計画及び保存修理工事は熊本城総合事務所が担当し、修理工事に伴う発掘調査等については教育委員会事務局文化財課が実施した。

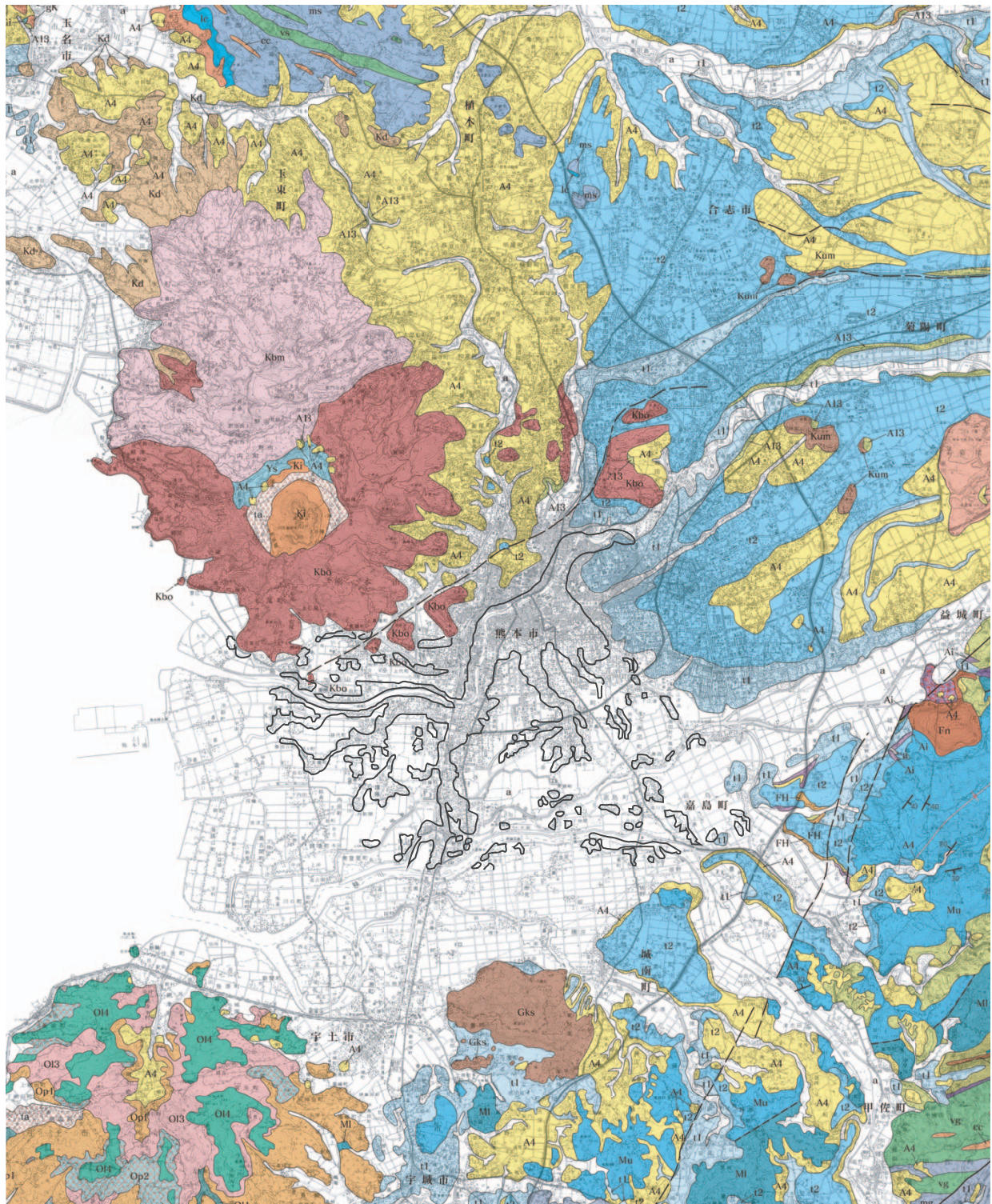
#### 事業の組織（平成14～27年度）

熊本市長	三角保之	幸山政史	大西一史		
経済振興局熊本城総合事務所（平成22年度まで）					
所長	重村和征	古川泰道	濱田裕介	中島博之	落合 健
整備振興課（平成14・15年度）					
課長	藤山正文	田代 裕			
復元整備班技術主幹・参事	西川公夫	坂哉隆史	宮川秀樹	下田誠至	
復元班（平成16年度）					
主査	下田誠至				
技師	大津仁哉				
整備振興室（平成17～19年度）					
室長	津曲俊博				
技術主幹	西川公夫				
主査	下田誠至				
技師	大津仁哉				
整備班（平成20・21年度）					
技術主幹・主査	下田誠至				
技術参事	古賀文晴				
庶務担当	吉村直敏	金子孝子	橋本 繁	松村智博	
教育長	田尻 紘	永山 博	小牧孝治		
教育委員会事務局文化財課（平成22年度まで）					
課長	富田紘一	今村康彦	河田日出男		
埋蔵文化財係長	米田 修	宮崎由之			
庶務担当	國武雅春	竹田理恵	鬼塚直子	辻千津子	山田紀枝
文化財保護主事	金田一精	松村真紀子			
観光文化交流局局长	坂本 純	西島徹郎			
次長	田上聖子	津曲俊博			
観光文化交流局熊本城調査研究センター（平成25年10月1日発足）					
所長	清田 稔	田上聖子	渡辺勝彦		
副所長	河田日出男				
文化財保護主幹	鶴嶋俊彦				
文化財保護主幹兼主査	美濃口雅朗				
主査	古賀文晴				
主任主事	益田知美				
主任技師	田代純一				
文化財保護主任主事	金田一精	國武真紀子	山下宗親		
文化財保護主事	木下泰葉				

## 第2章 位置と環境



第2図 熊本市全図 (1 / 15,000)



熊本市周辺の地質図 熊本県地質図(10万分の1)説明書(2008)より加筆引用

凡例

- A4 : 阿蘇-4火砕流堆積物 Kbo : 金峰火山古期噴出物 A13 : 阿蘇-1~3火砕流堆積物 t1 : 低位段丘堆積物 t2 : 中位段丘堆積物  
 Ki : 金峰火山新期堆積物 Ys : 芳野層 ta : 崖錐堆積物 Kbm : 金峰火山中期噴出物 Kum : 熊本層群 Ai : 赤井火山(砥川溶岩)  
 Mu : 御船層群上部層 FH : 布田層・花房層 MI : 御船層群下部層 vg : 苦鉄質火山岩類 cc : 結晶質チャート um : 超苦鉄質岩類  
 Gks : 雁回山層 O11 : 大岳古期輝石安山岩溶岩 O13 : 大岳新期角閃石安山岩溶岩 O14 : 大岳新期輝石安山岩溶岩  
 Op1 : 大岳新期角閃石安山岩火砕岩 Op2 : 大岳新期輝石安山岩火砕岩

○の範囲は調査地、○の範囲は自然堤防の範囲を示す。

第3図 熊本市周辺の地質図

## 1. 地理的環境

### (1) 概要

熊本市は、熊本県の県庁所在地として発展し、平成20年に富合町、平成22年に植木町・城南町と合併した結果、人口が73万人に達し政令指定都市となった。この合併により市域は格段に拡大し、面積は、熊本県の5.3%にあたる約390km<sup>2</sup>を占めている。以下に、熊本城跡周辺を中心に熊本市域の地勢について概観する。

市域は大きく分けて、有明海と、内陸部を隔てている中央西側の金峰山塊、市城南西側にあつて有明海に望み、台地と山地で縁どられた広大な熊本平野、北部・東部・南部にかけての台地（火砕流台地・河岸段丘）、で構成される。市域には、東西に貫流する白川、南東から東西に貫流する緑川の水系があり、熊本平野に望む台地は両水系によって開析され、活発な沖積作用により熊本平野は形成された。

東部の台地は、先端の熊本平野から東方へ向かって高度を増し、阿蘇外輪山西側斜面へと続く。北側の台地も熊本平野から北へ向かってやや高度を増しながら続き、国道208号線・県道30号線付近を境に高度を下げて、山鹿盆地・玉名平野に望む。先の道路付近が分水境界となり、境界から北側は木葉川や合志川などの菊池川水系の河川に開析されている。

熊本城跡遺跡群は、通称京町台地先端の茶臼山に立地する。この台地は、阿蘇火山起源の火砕流堆積物が基盤をなす。阿蘇火山からの大規模な火砕流は、数万年の間隔をおいて4回起こり、最大規模であった約9万年前といわれる最後の火砕流（Aso-4、以下 Aso-4）が熊本平野周辺を覆っている。京町台地より東側の台地は、さらに Aso-4 以後の砂礫層に覆われているが、この砂礫層は京町台地までは到達していない。このため、京町台地を含めて金峰山塊までの間は Aso-4 の端部の様相を呈し、火砕流が金峰山塊にのし上げた格好になるため、噴出源である阿蘇火山に対して逆傾斜になる。火砕流は花岡山にも到達し、その先は沖積平野の下に潜っている。この火砕流による堆積物は、深い部分では溶結し硬質の溶結凝灰岩となり、浅い部分は溶結が進まず軟質の非溶結凝灰岩となる。

Aso-4 の後は、地形に影響するような大きな火山活動は無く、熊本市域の洪積台地は主に阿蘇火山や雲仙火山起源の火山灰に覆われる。火山灰層の上部は腐食の集積した黒土層で、黒ボクと呼ばれ現在の表土となる。下部は粘性の強い褐色土で赤ボクと呼ばれる。黒ボクの下位には、約29000～26000年前とされる鹿児島湾の始良大噴火に起因する始良 T n 火山灰が混入し、肉眼でもガラス火山灰を観察できる。その上には、明るい色調が特徴の鬼界カルデラの噴火に起因するアカホヤ火山灰（約7300年前）もみられ、遠隔地の火山活動による火山灰が人類史を区分する鍵層となっている。

火砕流堆積物と火山灰によって形成された京町台地は、白川水系の坪井川・井芹川とその支流により開析され、河川の主な流下方向である南北方向に長く伸びる。河川の浸食は、非溶結凝灰岩だけでなく溶結凝灰岩も樹枝状に解析し、京町台地は急崖に縁どられる特徴的な地形を呈している。台地の表面の起伏は弱く、基盤である火砕流堆積物と同様に北東から南西へ緩やかに下がりながら熊本平野へ至る。

### (2) 金峰山塊の岩質（第4・5図）

熊本城跡の石垣の大半は輝石安山岩である。これは金峰山塊で産出される安山岩の一つで、立地も含めて考慮すれば金峰山塊が主産地であることは容易に想定される。実際に、矢穴の痕が残る転石も確認されている。以下に石垣石材の生成に絡む金峰山塊について記す。

金峰山塊は、一つの大きな成層火山ではなく、多くの火山の集合体である。火山の活動は2期に大別され、古期噴出物としては、80～120万年前の活動による松尾山火山岩類・古期金火山岩類・石神山火山岩類があり、新期噴出物としては、三ノ岳火山岩類・二ノ岳火山岩類・カルデラ形成後に成長した一ノ岳（中央火口丘）火山岩類がある。古期噴出物の岩質は、玄武岩・輝石安山岩・角閃石安山岩など多様であり、うち、角閃石を少量含む輝石安山岩が主体をなす。これは、粘性の強い溶岩噴出によって生成された

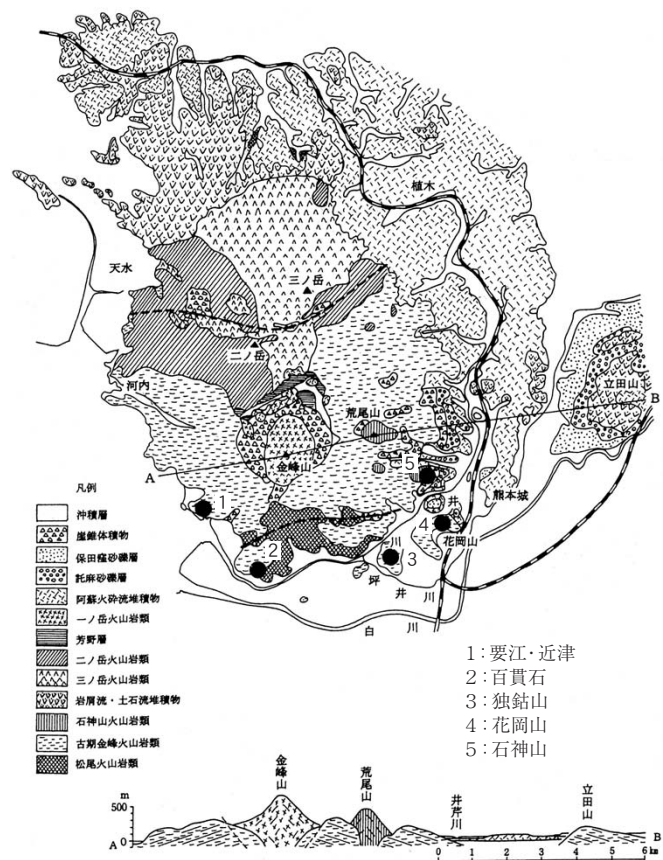
もので、肌理が細かく、また割るのにも適していることから、加工石材として現在も広く利用されている。

現在の安山岩類の採掘場は、古期噴出物から形成される地域、すなわち外輪部の南東-南-西側で数箇所が知られる。

外輪部とはやや離れるが、地質的に同質の火山噴出物で構成された丘陵がみられる（第5図）。岩倉山・立田山・花岡山・万日山・独鈷山・城山・御坊山で、北東-南西方向に並び、南西になるにつれて、順次、面積・高度が小さくなる。この丘陵群は、西側・北東側斜面が急であるのに対して、東側・南西側斜面が緩やかな非対称な断面形を呈する傾向を示す。これは丘陵群にそって立田山断層が存在することに起因しており、本来、外輪部であった丘陵群が断層活動によって金峰山塊から切り離されたためである。熊本城が立地する茶臼山もこの並び上に当たる。現状では安山岩の露頭はみられないが、昭和35年の天守閣復元工事に先立つボーリング調査で、天守東の地下約36mに安山岩層が存在することが確認されている。先述の丘陵群と同様に金峰山塊から切り離された後で火砕流に覆われ小高い地形になった可能性もある。

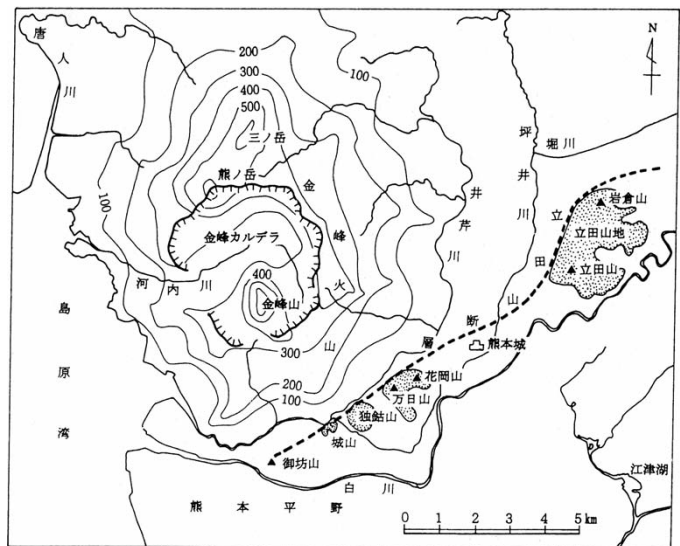
立田山断層は、熊本城の北側付近を走ると想定されている。城内と京町を分ける新堀も、立田山断層に起因する丘陵の狭隘部を利用したとされ、京町台地と茶臼山丘陵を分ける高低差もこの断層によるずれとも考えられている。なお、地質図（第3図）によれば津浦・高平・徳王付近にも同質の噴出物が表示されている。

熊本城石垣の石取場の推定については、富田紘一氏の研究がある。これによれば、石垣採石により地形が大きく変化している可能性が高いことから、大量の熊本城石垣の供給を賄い得た場所として、坪井川河口付近の要江・近津を主要採掘地の有力候補としている（富田2007）。この他、岩石学的成果の援用、『肥後国誌』等の伝承、矢穴の痕跡を認める転石などの存在から、石神山・花岡山・独鈷山・百貫石付近などを採石地として紹介している。



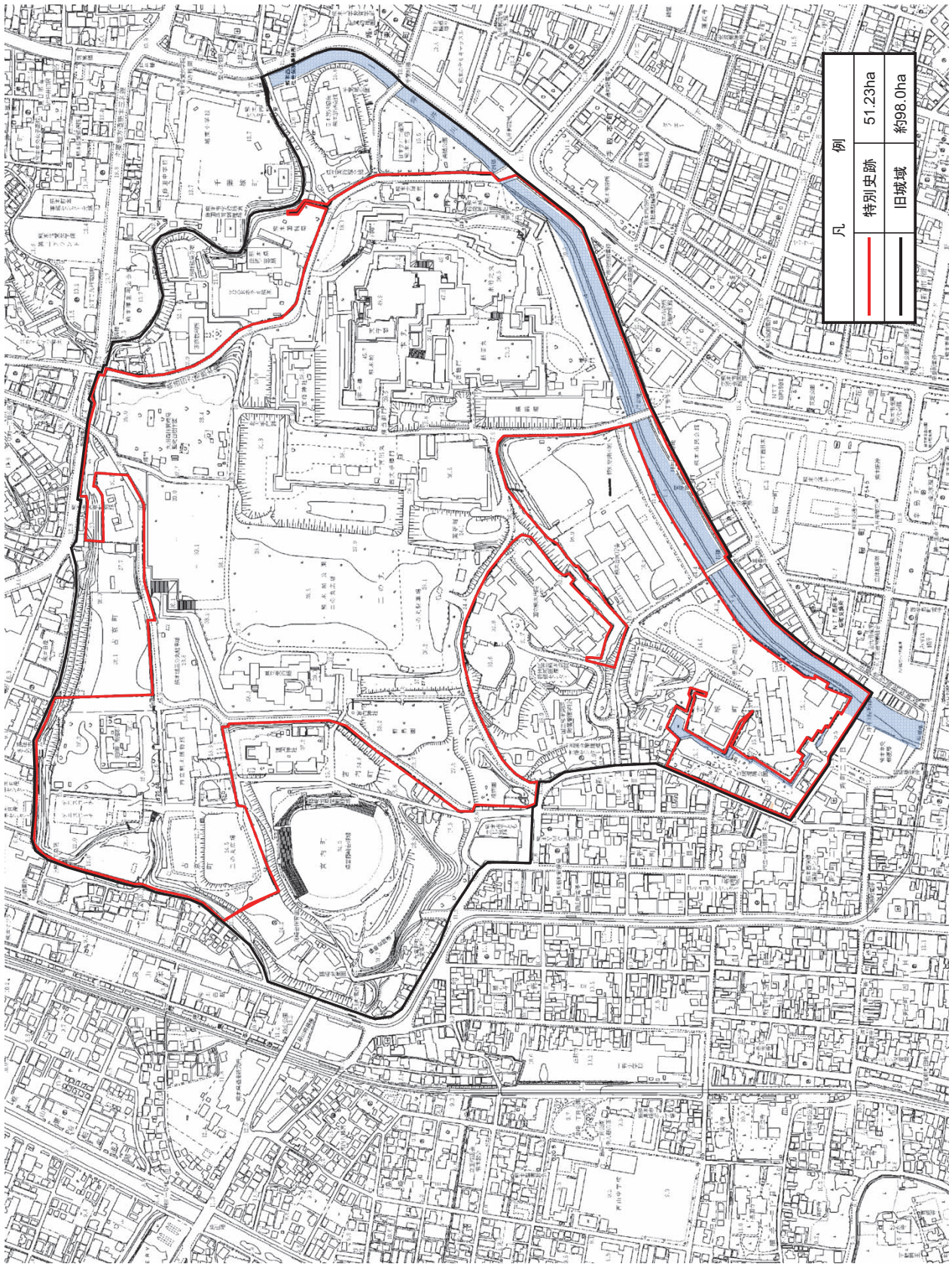
第4図 金峰火山の地質と採石推定地（縮尺任意）

※渡邊一徳（熊本市1998）より加筆転載



第5図 熊本市域の山地分布図（縮尺任意）

※渡邊一徳（熊本市1998）より転載



第6図 熊本城周辺図 (縮尺任意)

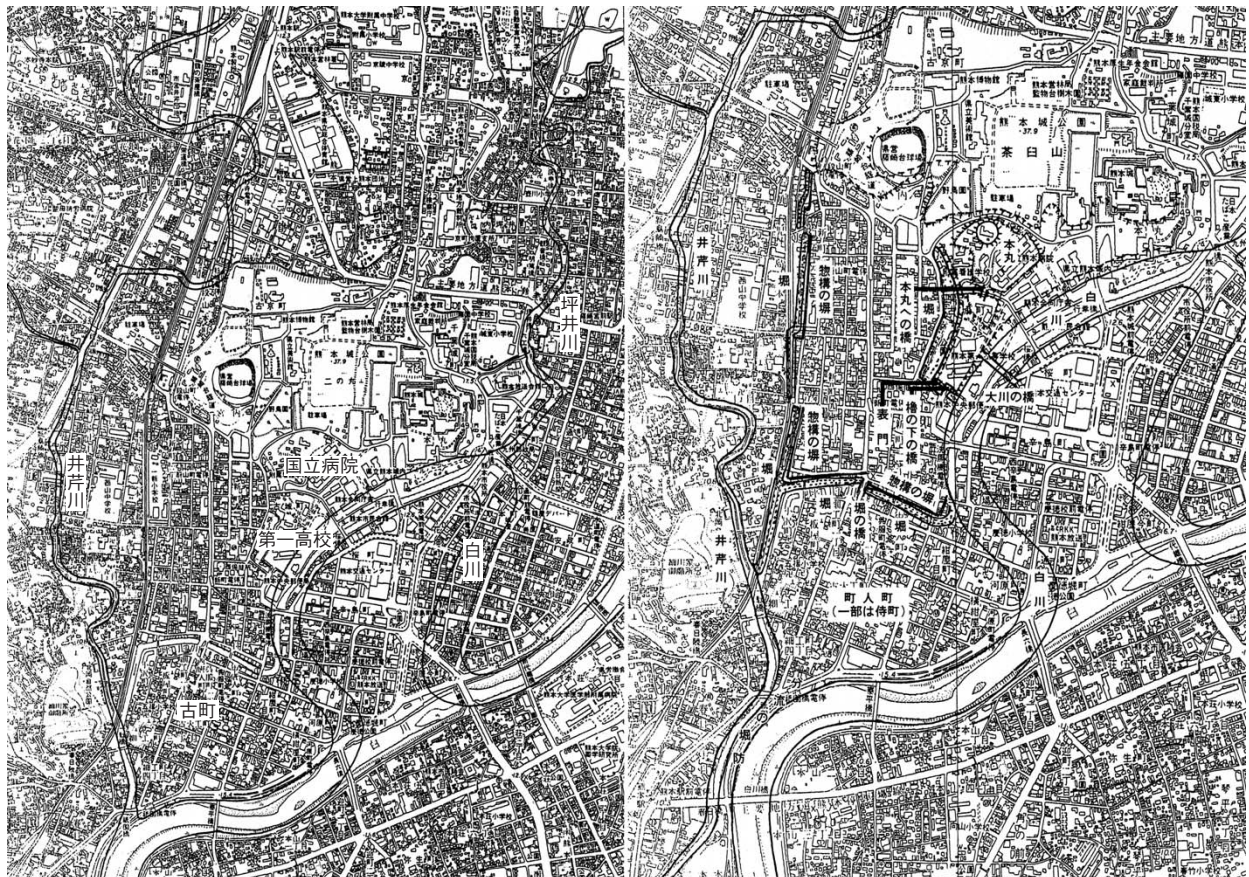


### (3) 熊本城跡の地形（第6・7図）

京町台地の先端は、現在の新堀橋付近で東西幅が狭くなり、古来から茶臼山とも呼ばれていたように独立丘陵状を呈する。平面形は、解析による大小の弧の連続で構成されており、全体としては現在の熊本県立第一高等学校（以下、第一高校）を要とし、東の千葉城、西の段山を両端とした扇形の地形を呈する。京町台地の特徴的な崖地形が随所にみられ、第一高校グラウンド、藤崎台球場南側、清爽園などの崖面にAso-4火砕流堆積土の非溶結凝灰岩露頭がみられる。

崖面の形成は、河川により削られたものだが、富田紘一氏の研究成果（富田1996）によれば、熊本城築城時、白川も京町台地に接して流れていたとされる（第6図）。氏は、慶長国絵図などをもとに、現在熊本城跡の南を流れる白川が、世継橋から北側へ大きく蛇行し、市役所付近で坪井川と合流して、これを17世紀初頭に加藤清正が白川を直線化し、現在の流路に付け替えたとする。氏の旧白川跡想定地には、現在でも窪地がみられる。この河川の流路変化と合わせて城内の南崖面を概観すると、第一高校のグラウンドに面した崖面、国立病院機構熊本医療センター（以下、国立病院）と熊本西税務署の間の段差、桜の馬場と奉行丸の間の段差、東竹之丸の高石垣と連続した高低差の大きい弧状の地形は、白川・坪井川の浸食面であった可能性を想定できる。実際、桜馬場の発掘調査や第一高校校長官舎建設に伴う発掘調査の際に、流路であった部分を2～5mほどの厚さで埋め立てていることが確認されている。本来は、白川に削られた崖面が連続していたのであろう。飯田丸は、浸食面の一部に当たると思われるが、郭はやや南へ突出した地形となっている。

築城前の旧地形を知る資料としては、「茶臼山ト隈本之絵図」（第8図）がある。築城前の地形が独立丘陵状に描かれ、「クワンノン堂」など築城前の土地利用状況を示している。しかし、先の白川の蛇行の表現も無く、いつ頃に描かれたものかわかっていない。ただ旧地形は、この絵図にあるように、現在の本丸付近を最高所として東は急に、西は緩やかに下がる地形であった。



河川原流路推定

隈本城と城下町の推定（慶長初年頃）

第7図 熊本城築城以前の景観推定図（縮尺任意）

※富田紘一（2000）より転載



第8図「茶臼山ト隈本之絵図」(熊本博物館蔵)

## 2. 歴史的環境

### (1) 周辺遺跡の概要 (第9図、第3表)

熊本城跡の土地利用の概略としては、古代から中世に国府所在地であった二本木遺跡群はじめ各所へ向かう官道などの交通の要所、中世の寺院、戦国期の城を経て、近世城郭の築城となり、近代の軍用地を経て現在に至る。城下町は、中世までの国府を核とした二本木遺跡群の町屋・寺院を、加藤清正が古町に移して隈本城時代の城下町と融合し、現在に至る。

以下に、熊本城跡遺跡群周辺の旧石器時代～中世について、時代ごとに記す。

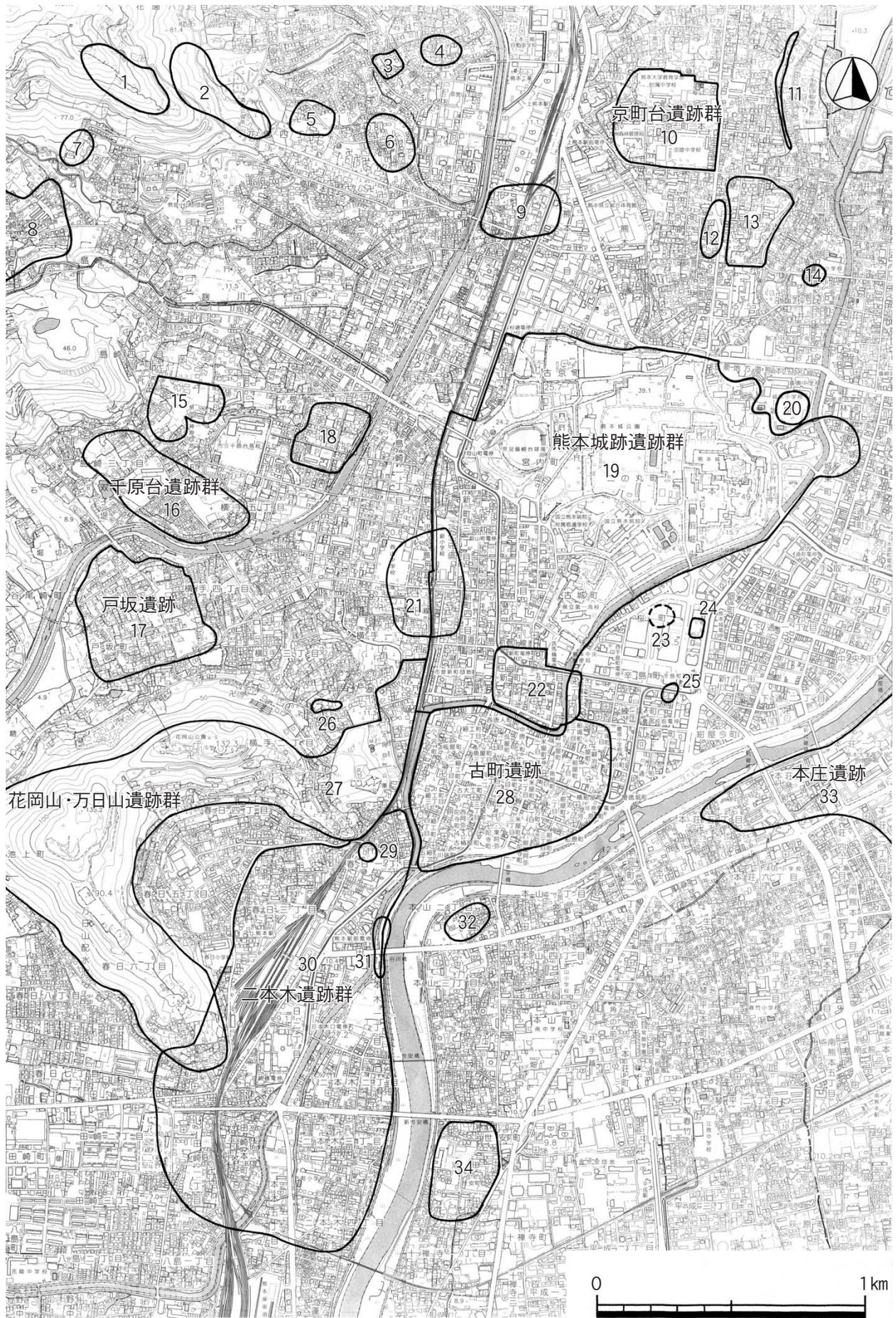
市域における旧石器時代の遺跡は、金峰山麓・立田山麓にみられ、山麓から派生する丘陵裾部でも近年出土例が増加している。第9図に示した熊本城周辺域ではまだ出土例がない。

縄文時代の遺跡は、金峰山丘陵裾部に濃密に分布する。特に後晩期の遺跡が多く、井芹川上流には太郎迫遺跡や四方寄遺跡など著名な遺跡もある。熊本城跡遺跡群周辺域では、二本木遺跡群で中期から晩期の土器・石器、京町台遺跡で晩期の遺物、熊本城跡遺跡群の西縁部に当たる段山遺跡で打製石斧や磨製石斧が採集されている。また、今回報告の調査で、熊本城天守閣南の地蔵門の脇から縄文時代後期の土器片がまとまって出土している。

弥生時代の遺跡は、市域全体で早・前期は少なく、中期から急増する傾向がある。早・前期の資料は、二本木遺跡群から出土している。縄文時代晩期で途切れて弥生時代に連続しない遺跡が多い中で、この二本木遺跡群は、縄文時代晩期から継続して弥生時代早・前期の資料がみられる希少な遺跡である。扇状地と低地の境界に立地している点など、縄文時代から弥生時代への過渡期を考える上で注目される。弥生時代中期の甕棺も出土し、後期には壕や多数の竪穴住居群が出土している。銅鏃の出土例もあり有力な集落が形成されていたようである。後に城下町が形成された白川右岸の京町台地の先端から南南西に伸びる緩扇状地・自然堤防上は、船場町遺跡の中期の甕棺、古町遺跡の中期の甕棺(唐人町遺跡)や、後期の竪穴住居群が出土しており、弥生時代中期頃から本格的な土地利用が始まったようである。後期には、古町遺跡・二本木遺跡群・八島町遺跡・南新宮遺跡など、数百mから1km程度の距離をおきながら集落が営まれており、各集落間の関係性が注目される。

第3表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	主要な時代	備考
1	本妙寺B箱式石棺群	古墳時代	
2	本妙寺A箱式石棺群	古墳時代	
3	井芹城跡	中世	
4	井芹遺跡（井芹甕棺遺跡）	弥生中期	
5	本妙寺北遺跡		
6	中尾丸城跡	中世	
7	小山田遺跡		
8	島崎遺跡	縄文	
9	牧崎遺跡（牧崎甕棺遺跡）	弥生中期	1966年、甕棺14基出土。
10	京町台遺跡群	縄文～近代	伝赤尾丸城跡
11	寺原横穴群	古墳	
12	京町2丁目遺跡	近世	
13	伝大道寺跡遺跡群	弥生～近世	
14	内坪井遺跡	弥生	
15	石神原遺跡	縄文	
16	千原台遺跡群	縄文	
17	戸坂遺跡	弥生・古代	
18	迎田遺跡		
19	熊本城跡遺跡群	縄文～近代	国指定特別史跡熊本城跡・段山遺跡・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群・古城横穴群・茶白山廃寺・藤崎宮跡
20	藤園中学校校庭遺跡	弥生中期	甕棺出土
21	新馬借遺跡	古代・中世	
22	船場町遺跡 （新町2丁目甕棺遺跡）	弥生中期	1977年、下水道工事中に甕棺出土。
23	山崎古墳	古墳	消失、位置不明瞭。
24	花畑邸跡	中世・近世	加藤・細川時代の藩主邸宅の一部、世継神社跡地
25	辛島町遺跡		
26	吉祥寺横穴群	古墳	
27	花岡山・万日山遺跡群	古墳・近世	花岡山箱式石棺群・万日古墳・万日山東古墳・万日山山頂古墳・妙解寺跡
28	古町遺跡	弥生～近世	
29	北岡神社境内古墳	古墳時代	
30	二本木遺跡群	縄文～近世	北岡神社古墳・北岡神社横穴群・春日町遺跡・古町小学校校庭遺跡・鮑田国府推定地
31	石塘遺跡（白川橋遺跡）		
32	本山城跡（本庄城跡）	中世	
33	本庄遺跡（熊大病院敷地遺跡）	縄文～近代	
34	平田町遺跡	弥生～中世	



第9図 周辺遺跡位置図

他にも井芹遺跡・牧崎遺跡・藤園中学校校庭遺跡で中期の甕棺が出土している。

古墳時代の熊本城跡遺跡群周辺については、前期・中期は不明瞭だが、後期には京町台地に特徴的な崖地形に多数の横穴墓が造られている。熊本城跡遺跡群内にも古城横穴群・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群がある。さらに北には、寺原横穴群や、津浦一の谷横穴群などがあり、熊本市域の横穴墓集中地の一つである。古城横穴群は、崖面に3段にわたって築かれ、数回の発掘調査で53基の横穴墓が確認されている。そのうち39号には「火守」あるいは「火安」と読める文字が刻まれた閉塞石があり、墓室からは鉄滓が出土している。被葬者の職制を反映したものと想定されている。千葉城横穴群は、昭和37年（1962）にNHK熊本放送局建設の際に発掘調査が行われ、10基の横穴墓が出土した。横穴墓の配置は、「コ」字状に前庭部を囲むようで、前庭部を共有した横穴群であった可能性もある。これらの横穴群の集中に対して、墳丘を持つ古墳の分布は少ない。緩扇状地上にあった船場山古墳・長迫古墳・山崎古墳は、開発によって消滅し位置も不明瞭である。その中で山崎古墳は、長瀬真幸の調査記録により、寛政8年（1796）に主体部が発見されたことが知られる。発見の経緯と人骨や遺物の良好な出土状況は、長瀬の知友であった伴信友の『信友筆箋』などに収録されて今日に伝えられている。

京町台地から離れたところでは、花岡山・万日山遺跡群や二本木遺跡群で墳墓がみられる。古墳についてはいずれも現存していないが、注目事例を記す。花岡山箱式石棺群（花岡山・万日山遺跡群）では、箱式石棺群の近くから中期の土師器壺が出土している。この壺には、中に碧玉製勾玉2個・碧玉製管玉1個・ガラス玉26個が納められており、地鎮行為に伴い埋納されたものと考えられている。万日山古墳（花岡山・万日山遺跡群）は、石室の構造、出土遺物から7世紀前半に比定される。全長12.3mの特異な構造の横穴式石室は、玄室の左右に石屋形を設け、奥壁には削り貫き敷きの家形石棺を設置している。家形石棺については畿内の要素がみられる。これらの点から、本古墳は当該地域における首長墳と捉えられ、安閑2年（535）に当該地域に設置されたとされる春日部屯倉との関連も考慮される。北岡横穴群（二本木遺跡群）は、火砕流堆積物の南端に立地する横穴群で、上下3段に展開しており、下段の横穴群においては、枝分かれ状に伸びる長い前庭部が設けられている。前庭部を派生させて新たな造墓を行ったもので、県下には例は少なく、北部九州、特に遠賀川流域に認められる要素である。

墳墓に対して、集落の様相は調査例が少なく不明瞭で、京町台遺跡群・古町遺跡・本庄遺跡で古墳時代の竪穴住居、二本木遺跡群で井戸などが出土している。

古代において最も注目されるのは二本木遺跡群で、7世紀後半～10世紀代の埋蔵文化財が認められる。特に8世紀後半～9世紀前半において充実している。これまでの発掘調査で、大規模な建物を含む規格的な配置の建物群や、陶硯・瓦の大量出土から官衙施設と想定される遺構が出土している。少なくとも郡衙以上の規模と内容を持った施設で、国府の可能性も指摘されている。官衙施設の周辺には、竪穴住居や掘立柱建物で構成される大規模な集落が広がっており、輸入陶磁器・国産陶器や腰帶具・文字土器などの希少遺物も大量に出土している。特に集落の端にある村落内寺院付近で出土した唐三彩は注目される。二本木遺跡群以外に、古代飽田郡の施設とみられるのが伝大道寺遺跡群である。京町一帯は近世に武家屋敷・町人町として開発され、そのまま現代の市街地になっているため、近世以前の様相はわかりにくい。本遺跡からは7世紀後半～9世紀の瓦が出土している。この期間の瓦が継続して出土する遺跡は、熊本市域では本遺跡だけである。伝大道寺遺跡群付近には、養蚕駅から西へ延びた官道が想定されており、飽田郡の重要地点に造られた施設であった可能性もある。なお、熊本城跡内でも二の丸・三の丸・監物台で古瓦や土師器・腰帶具が出土している。

中世においても遺物や遺構の集中は二本木遺跡群にあり、11～16世紀代にかけての資料が途切れなく認められる。10世紀代に当該域に国府が移転・設置され、これに連動して肥後国の中心として周辺域が発展したことによるとみられる。遺構・遺物ともに膨大・多様であり、溝による半町単位の矩形土地画

がみられるなど都市的な様相を呈する。資料数・範囲は、10世紀後半～11世紀代においては限られるが、12世紀代には急増・拡大してピークをみる。その後も多くの資料が認められ、都市として繁栄したことが窺われるが、17世紀前半頃には急減・衰退する。これは加藤清正入国により、熊本城下（古町遺跡）に町屋・寺院が移転したことによるものと想定されている。古町遺跡にも中世の資料があるが、これは二本木遺跡群における都市の拡大・伸張に伴うものと想定される。

中世城としては、国衆といわれる在地土豪の居城とされる隈本城跡（千葉城跡・古城跡－いずれも熊本城跡遺跡群内）、鎌倉御家人詫磨氏の居城とされる本山城があげられる。古城跡の現第一高校セミナーハウスについては、発掘調査により散兵線とされる溝や版築土塁を検出している。本山城跡は、字名から城域が想定されているが、現況の地形や試掘確認調査の成果からは城の存在は不明瞭である。中世の石造物資料は、熊本城内（熊本城跡遺跡群）や古町遺跡内の寺院に分布している。熊本城内のものとしては、地藏門脇の大永2年（1522）銘「釈迦立像線刻板碑」、本丸御殿南に大永4年（1524）銘「如意輪観音像線刻板碑」、天文5年（1536）銘「阿弥陀三尊種子板碑」など、銘があるだけで12基確認されている。五輪塔地輪も礎石や石垣の一部に転用され、石垣のぐり石内にも石造物が混入している。この状況から、熊本城築城以前の茶臼山に中世寺院（茶臼山廃寺）が存在したと想定されている。古町遺跡の寺院内には、善教寺境内の建長2年（1250）銘宝塔塔身が最古例としてあり、15世紀末から16世紀前半の板碑が多くみられる。

## （2）熊本城と城下町の変遷

熊本城や城下町について、発掘調査等で考古学的所見が得られた点について、時代を追いながら記述する。文献資料からの所見は次節で詳述する。

熊本城が文献に登場するのは、南北朝時代である。肥前国松浦の大嶋堅と大嶋政の永和三年（1377）の軍忠状にみえる「隈本城」が初出で、位置の特定はされていない。

熊本城跡遺跡群内での端緒は、応仁年間に山田重信が茶臼山の東側に迫り出した千葉城と呼ばれる一帯に城を築いたとされる。ことに始まるとされる。地名としての千葉城は熊本城跡遺跡群の東端台地にあるが、地形等の改変が大きく詳細は不明である。先述のNHK熊本放送局建設の際の発掘調査でも城跡としての確証は得られていない。その後、『肥後国誌』によれば、明応5年（1496）に鹿子木親員（寂心）が築き、城親冬が天文19年（1550）に入城したという隈本城の城域は、第一高校から国立熊本病院敷地内（以下、国立病院）一帯と想定されている。現在でも古城という地名が残り、第一高校周辺には城内最古の石垣が良好な状態で残存している。発掘調査としては、第一高校セミナーハウス建築に伴う調査で15世紀半ばから16世紀後半の陶磁器が出土し、国立病院の看護学校建設に伴う調査で16世紀前葉からの掘立柱建物群が出土している。この掘立柱建物群は堀・柵・櫓で構成された防御施設で、鹿子木氏・城氏の在城時期と合致することから、当時の城域を考える上で重要な調査成果となった。

隈本城には、天正15年（1582）に佐々成政が、翌天正16年には加藤清正が入城し、清正は中世の城を織豊城郭に改修を進めている。その後、加藤清正は隈本城を拡大して、京町台地南端の茶臼山一帯に熊本城を築城した。出土資料としては、「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦がしており、少なくとも慶長4年（1599）から何らかの工事が行われていたと考えられる。本城整備に伴って、白川・坪井川の改修、城下町の再編成も行われた。先述のように、大きく蛇行していた白川の流路を直線的に付け替え、それまでの白川流路と隈本城惣堀を利用して坪井川を開削したと考えられている。これにより、熊本城南側の防御線は、坪井川が内堀、白川が外堀に相当することで強化され、同時に城下の洪水解消、武家屋敷の面積拡大、船運路の整備につながった。

旧白川の流路にあると想定される桜馬場での発掘調査でも、17世紀初頭に埋め立てられた流路が確認されている。同じ旧流路の下流にあると想定される第一高校の校長官舎建築に伴う発掘調査でも、厚さ

5メートルにわたる版築層が検出され、その下位に河道を示す砂地が確認されている。いずれも旧白川の埋め立てを証明する調査成果である。国立病院の看護学校建設に伴う調査では、加藤期と想定される道路が出土しており、築城に際した資材運搬用の修羅道の可能性が指摘されている。

城下町は、加藤清正が古府中（二本木遺跡群）から、古町（古町遺跡）へと町屋や寺院の移転を行い、新町部分を当初は侍町（武家地）とした城下町をつくった。寛永6～8年（1629～1631）頃の作と推定される「熊本屋舗割下絵図」から読み取れる城下町の範囲は、東から南は白川、北は出京町、西は段山から新町の高麗門・古町西側の坪井川・井井川・石塘までである。北側の京町は、京町台地の東側・西側が急崖で囲まれており、北端に空堀と土塁を設けていた。

現在の新町は、隈本城時代の侍町として始まり、その後惣構として整備された。惣構は、西側には新町西側の水堀と、堀の東側に土塁を設け、南側は新たに掘削した坪井川で区切った。惣構と城内を区切るのは、「新一丁目御門」で、現在の法華坂の清爽園付近にあった。枳形を伴う櫓門であったが、枳形を含めて現存しない。門の前は広場となり、高札が掲げられ札ノ辻と呼ばれ、各方面に伸びる街道の基点となったとされる。惣構の西側は城の裏鬼門にあたるため寺町を整備し、惣構との連絡に「こうらい（高麗）門」が設けられた。鉄道高架化事業に伴う「高麗門」・「御成道」の調査がある。この調査で、高麗門跡からは「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦が出土している。高麗門は、いわゆる高麗門形式から絵図や古写真にみられる櫓門形式に変更したと指摘されている。御成道は、高麗門から細川家菩提寺である妙解寺への参道である。先の鉄道高架化事業に伴う発掘調査で、御成道の路面であった硬化面が確認されている。

妙解寺は寛永19年（1642）に細川光尚によって建立された寺院である。細川忠利以来の歴代藩主の墓や、殉死者の墓が良好な状態で保存されており、「熊本藩主細川家墓所」として国指定史跡になっている。この妙解寺の四塔頭の一つである智照院には細川尚房一族が葬られていたが、九州新幹線側道工事に伴い発掘調査が行われ移築された。大名一族の墓所をまとめて調査した稀有な事例である。上部構造にみられる当主との近縁性や、墓室構造の階層性、人骨にみられる形質など、得られた情報の影響は大きい。寺町として整備された現在の横手界隈は、加藤清正が母親の供養のために建立した妙永寺や、加藤清正側室の本覚院が葬られた本覚寺六角堂など日蓮宗の寺院が、地割を維持して今も建ち並ぶ。本覚院墓所は、改葬に伴う発掘調査で棺の装飾と思われる大量の金銅製の金具や副葬品が出土している。寛永期の加藤家の墓制を知る上で希少な調査事例で、出土品は市指定有形文化財になっている。

惣構の南側の古町には、古府中から移転した町屋が整備された。古町遺跡の発掘調査資料は、このことを反映しており、16世紀末～17世紀初頭から増加する。惣構内の新町が短冊形の町割で、「T」「L」字状の道が多いのに対して、古町は方一町の碁盤目状の区画の中央に寺院を配置するという特異な町割が形成された。町割形成当初の武家地と町屋の違いと考えられ、その間は坪井川で明確に区切られている。惣構と町屋の連絡には、惣構側に新三丁目門と坪井川に現明八橋が設けられた。新三丁目門は、絵図では枳形を伴う櫓門であることが分かっていたが、近年発見された長崎大学図書館所蔵の古写真で、城内の櫓門に匹敵する規模の櫓門であったことが分かった。古町の一角の阿弥陀寺周辺に土塁の残存がみられ、惣構のように戦略上の配慮や水害対策が施されていた可能性もある。

明治維新の後、明治4年（1871）に、城内に鎮西鎮台が設置され、その後熊本城は第2次世界大戦終了まで陸軍の管理下に置かれた。明治初期には、各地の城郭と同じように熊本城でも櫓・堀・石垣の解体や改修が行われ、明治10年（1877）には西南戦争の主戦場の一つとなり天守をはじめとする本丸中心部の大半の櫓が焼失した。本丸御殿の発掘調査では、焼失した御殿の建築材、金具などが焼損した状態で焼土とともに多量に出土している。西南戦争では城下町も戦場となり、「射界の清掃」戦略で意図的に火が放たれ、大半が焼失した。その痕跡は新馬借遺跡での確認調査や、古町遺跡での発掘調査で確認されている。古町遺跡の発掘調査では、江戸期の表土を広範に覆う焼土層が確認され、この焼土を含む遺構出土の陶磁器が

明治初期に限定できることから、西南戦争時の焼土層と判断された。

西南戦争の後、軍施設はさらに整備され、明治21年（1888）には第六師団となる。軍の組織が整備されるに伴い、城内各所に新たな施設が建てられ、現在の天守前広場には大正6年（1917）に師団司令部が置かれた。桜馬場地区は、西南戦争以前から砲兵隊が置かれ、その後兵器工場となった場所で、平成20・21年（2009・2010）に行われた同地区の確認調査で、大正年間に造られた工場のレンガ造り建物の基礎が確認されている。西南戦争で焼失した城下町にも、戦後、山崎練兵所など軍関係の施設が整備されていく。

明治22年に就任した第3代熊本市長辛島格は、熊本市を九州地方の中核管理都市にすべく尽力し、周辺町村との合併や三大事業と呼ばれる上水道・市電の整備、二十三連隊の移転を推進した。旧城下町にあたる山崎練兵所などの軍施設の移転は、当時の時代性もあり難航を極めたが、飽田郡大江村（現在の熊本市中央区大江）に移転することで同意がなされた。移転は明治33年（1900）に行われ、市街地を分断していた格好の練兵所跡地は新市街となり、現在につながる市街地形成が行われた。山崎練兵所が移転した先の大江遺跡群では、移転後、軍による大規模な造成が行われ、土地が平坦化されるとともに多くの遺跡が失われた。発掘調査では、三角兵舎の柱穴跡や塹壕跡がしばしば確認され、第2次世界大戦頃の軍用品が出土することも少なくない。

熊本城は、大正末期から城跡の保存・顕彰が叫ばれるようになり、熊本城陸保存会が発足した。この会が中心となって、昭和2年（1927）、宇土櫓を解体・修理、長塀を改築している。昭和8年（1933）には、熊本城全域が史跡となり、残存していた建造物が国宝に指定されている。昭和25年（1950）、文化財保護法により、国宝建造物が重要文化財に指定され、昭和30年（1955）には城内の主要部分が特別史跡に指定されている。昭和35年（1960）には、天守閣が小天守とともに鉄筋コンクリートで再建された。昭和50年（1975）には、西出丸戌亥櫓門跡から西大手櫓門跡の石垣を復元。昭和57年（1982）には、『保存管理計画書』がまとめられ、保存と整備の方針が決まる。昭和56年（1981）には西大手櫓門の再建が行われる。平成元（1989）年には、宇土櫓の修復と数奇屋丸二階御広間の復元を行う。平成3年（1991）、台風19号の襲来により、長塀中央部分が倒壊し、平成4年（1992）に復旧。平成5年（1993）には、熊本城三の丸一帯を熊本市が買収し、東子飼町にあった旧細川刑部邸を移築復元している。平成11年（1999）、台風18号により、西大手櫓門が倒壊する。平成14年（2002）に南大手櫓門の復元をはじめ、平成15年（2003）には戌亥櫓、未申櫓、元太鼓櫓、平成16年（2004）には西大手櫓門と西出丸一帯の復元が完了した。平成17年（2005）には、飯田丸五階櫓の復元が完成する。平成19年（2007）は、熊本城築城400年を記念して本丸御殿大広間を復元し、平成20（2008）年から公開している。



### 3. 文献資料にみる熊本城

#### (1) 南北朝～戦国時代の隈本城

貞治6年(1367)、足利義満が室町幕府三代将軍に就任すると、応安3年(1370)に幕府管領である細川頼之の推挙を受けて、今川貞世(了俊)を九州探題に任じた。応安4年(1371)、貞世は九州へと向かい、翌5年(1372)8月には大宰府の征西府攻略を果たす。この後、今川軍は肥後への侵攻を開始する。隈本城の存在を確認できる最も古い史料は、南北朝時代後期となる永和3年(1377)9月の「大島堅軍忠状」・「大島政軍忠状」<sup>1)</sup>とされる。大嶋堅と政の軍忠状は、この2名が肥後侵攻と「隈本城」攻撃にあたって忠節を尽くしたことを記し、貞世の息子である今川義範が証判を加えたものである。また、同年9月30日付の「宗金書状写」<sup>2)</sup>でも、今川氏が「肥後隈本城」に侵攻してきたが、数百人の負傷者を出しながらも防いだと記されている。隈本城は南朝側の城であった。しかし、この隈本城の具体的な場所については明らかでない。

従来、南北朝期の隈本城の場所については、藤崎台説と詫磨氏居城である本山城説があるが<sup>3)</sup>、永和4年(1378)の「安芸大朝莊一分地頭虎熊九代市原経頭軍忠状」<sup>4)</sup>に「隈元敵城」に対抗する城として「藤崎城」が存在していたことが記される。藤崎台に存在した城は藤崎城と呼ばれており、隈本城と同一のものとは考えられない。また、本山城=隈本城であれば今川軍の攻撃対象になっていることから、北朝方の詫磨氏の居城とするのは成り立たず、「隈本城」は藤崎城ならびに本山城とは別に存在した城である<sup>5)</sup>。

隈本城の位置について、17世紀後半の肥後の儒学者である辛島道珠が記した「肥後古城主考」には、「菊池四代藤原経宗の甥ニ出田経信アリ、十四代ノ孫、出田秀信始メテ隈本ノ城に居住スト菊池家譜ニ見エタリ」とある。次に、熊本藩士である森本一瑞の手によって明和9年(1769)に成立した『肥後国誌』<sup>6)</sup>には「出田筑前守秀信所領八十町ヲ領シ初メテ隈本在城云今千葉城ナリ」とある。隈本城が千葉城に存在したとする根拠は示されていないが、18世紀後半には出田氏の居城が千葉城に存在したとする認識が定着していたとみえる<sup>7)</sup>。

文明年間(1469～1489)とみられる「菊池重朝書状」<sup>8)</sup>では、出田山城守が藤崎宮の遷宮祝儀を宮内荘給人に催促することを守護である菊池氏が認めている。また、文明4年(1472)の「藤崎宮官番次第」<sup>9)</sup>の裏書には「惣政所出田山城守御代番帳御うつし」と記されており、文明頃に出田山城守は藤崎宮の惣政所職、つまり行政実務担当者である所司・政所・本司といった人々を統括する立場にあったことが判明する。以上の2点の史料は、出田山城守が実質的に藤崎宮領の宮内荘をはじめとする茶臼山周辺の土地を治めていたことを示す。隈本城は出田氏の拠点として機能していたと考えられる。

この時期の隈本城の様子を示すのが文亀2年(1502)4月23日付の「菊池武運(能運)書状」<sup>10)</sup>である。この頃、菊池能運は守護の座を追われ島原半島に亡命していたが、相良氏の協力を得ながら地位回復を狙って挙兵した。史料中には、能運と小山右京亮や立田伊賀守などの地域の武士団およそ730名が隈本城に在城し守りを固めていたが、11日に中条対馬守が裏切り隈本城を出奔し、続いて小山・立田氏も居所に帰ってしまったことが記されている。出田刑部少輔父子3名と親類20余名、そして能運の側近の者たちは城に残ったが、「城内拵所々之役所」などの持ち場を守りきれなくなり、出田氏と共に島原に退却することになった。その後、能運は守護職回復に成功したとみえるが、永正元年(1504)3月に死去したことにより、再び守護職の後継をめぐる阿蘇氏や大友氏らが介入し、混乱が起きた。

その後、守護として隈本城に入城したのは、大友義長の息子である菊池義武とされる。大友氏の初代は鎌倉幕府に仕えた貴族である中原氏であり、同じ中原氏の系譜をひく鹿子木氏も政治的立場を高めるために大友氏の肥後支配に協力したと考えられる。鹿子木氏は鎌倉時代より飽田郡北部の地頭であった。その後、鹿子木親員(寂心)が、永正17年(1520)の義武の肥後入国以前には飽田・詫磨両郡を治める国人領主となっていたようである。永正16年(1519)の「鹿子木親員書状」<sup>11)</sup>では藤崎宮の社役について百姓

役を定めていることから、社領だけでなく郡内の支配を行っていたと考えられる。

永正17年（1520）に肥後に入国し、隈本を拠点に肥後の支配を行った義武は、天文2年（1533）に大内氏と結び筑後国に出兵した。これにより、翌年大友氏は肥後に出兵し、義武は島原まで退去することとなった。この間、寂心は大友方に属していたため、天文18年（1549）に死去するまで隈本城に留まったと考えられる。その後、義武は相良氏の協力を仰ぎながら肥後奪還に臨むが、天文12年（1543）に義武の兄である大友義鑑が室町幕府より肥後国守護職を与えられる。しかし、天文19年（1550）に義鑑が家臣に殺害される事件が起きると、義武は鹿子木氏・田嶋氏を味方につけ、再び隈本城に入った。これに対し、義鑑のあとを継いだ義鎮は隈本城を攻め、義武は再び島原へ亡命した。これにより鹿子木・田嶋氏は没落し、隈本城には城親冬が入ることとなった。

城氏は菊池氏の一族で、赤星・隈府氏と並ぶ老者（家老）の地位にあった。親冬が隈本に入ったのはおそらく天文19年の義武と義鎮の合戦の論功行賞によるものであろう。鹿子木氏に替わって飽田・詫磨の二郡を領することとなったと考えられる。親冬のを親賢が継ぐが、その年代は明らかでない。

天正6年（1578）、大友氏が日向耳川の戦いで島津氏に敗れると、大友氏の領国の国人たちは独自の動向を見せるようになった。城氏もその一人で、大友氏から自立する動きを示す。これに対し、大友方の御船城主甲斐宗運が出兵し、天正8年（1580）に旦過瀬の地で城・名和氏らと合戦した。城親賢は島津氏に救援を要請し、島津の軍勢が隈本城に入城している。

その後、天正9年（1581）12月に親賢が死去すると、嫡子である十郎太郎（久基）が跡を継いだ。若年のため出田親基を後見人とした。親基は親賢の弟であり、出田氏の養子となっている。このほかにも、城親冬の子である政冬や、親賢の次男武房が出田家の養子となっているように、出田氏と城氏は深い関係にあった。

その後、島津氏は肥後侵攻を進め、天正13年（1585）には島津義弘が肥後国の守護代となる。さらに、大友方の甲斐宗運が死去すると阿蘇氏も降伏させ、島津氏は本格的な肥後支配と豊後侵攻を開始した。天正15年（1587）4月、島津攻めのため豊臣秀吉が隈本城に入城する。秀吉の右筆が記した「九州御動座記」<sup>12)</sup>には、隈本城について「城十郎太郎と云者相踏候、数年相拵たる名城也」と賞賛している。さらに続けて、「五千計の大將、さしも嶋津一方之かためを為頼侍といへとも、就御動座無一支、居城に降参申、證人を出、御味方参候」とあり、城氏は島津氏にも信頼の置かれていた武将であったが、秀吉に対して抵抗することなく降参し味方になったと記されている。同年6月、肥後国は佐々成政に与えられ、成政は隈本城に入城した。しかし、成政による国人たちの知行の削減と検地の断行により、7月には国衆の一揆が発生する。

## (2) 加藤清正の入国と古城・新城

肥後国衆一揆を招いた佐々成政は、天正16年（1588）閏5月14日に切腹させられる。成政に代わって肥後北半国を加藤清正、南半国を小西行長が治めることとなった。清正は戦国期の領主たちが居城とした古城の隈本城に入ったと考えられ、その後隈本城の普請・作事を行なっていることが史料より判明する。居城の普請に関する具体的な指示を出している史料で最も古いものは、天正19年（1591）2月26日付の「加藤清正書状」<sup>13)</sup>である。これによれば、清正は重臣たちに磊（石垣）<sup>らい</sup>・堀の普請を指示している。その後、天正から文禄年間にかけて居城の普請に関する具体的な指示がなされている。この時普請しているのは、現在の第一高校にあたる古城と推測されている。同年4月には、本丸に「おうへ」を建てるための材木の準備や、「てんしゆへ之はし」が架設されている。なお、天正20年（1591）9月21日の「加藤清正覚書案」には「其元さふらいまち、さうかまへのへいかけさせ、よろつ丈夫ニ可申付候」とあるように、武家屋敷や惣構の堀を含めた城下一帯の整備も進められている<sup>14)</sup>。

一方、茶臼山での熊本城の築城時期は、通説では「続撰清正記」の記述から慶長6年（1601）の着工とされているが、近年の研究ではその説に疑問が呈されている<sup>15)</sup>。茶臼山に形成された熊本城に関して、残されている史料で最も古いものは、慶長5年（1600）10月26日付の加藤喜左衛門・下川又左衛門宛の清正書状とされる<sup>16)</sup>。これによると、「如水其元被通候者、新城ニ而振舞候て可然候間、得其意、天守之作事差急、豊以下可取合候」とあり、島津討伐のために熊本を通過する黒田如水を「新城」で歓待するために天守の作事を急がせている。この時点で天守は豊を敷く段階まで作事が進んでいた。

このことから、熊本城の着工の時期は清正が朝鮮出兵から帰国した慶長3年（1598）末から翌4年頃と想定される。なお、熊本城内から「慶長四年八月吉日」銘の瓦が出土している。また、小山の瓦職人であった福田家の先祖附には、初代五右衛門が慶長3年の熊本城造営の際に瓦師棟梁職に任じられたと記される<sup>17)</sup>。この時期には建物に葺く瓦を準備する段階にまで城の普請・作事が進んでいたとみることができる。

熊本城の完成時期については、乃美家蔵とされる文書に「隈本之文字之事、今度御城出来候ニ付御改候而、熊本と御書被成候」とあることから、慶長12年（1607）とされてきた<sup>18)</sup>。なお、慶長12年4月24日付の並河金右衛門宛の清正書状<sup>19)</sup>では「其地普請如何申付候哉、漸出来之時分ニ候」と述べられており、完成間近の状態であった。慶長15年の清正書状では本丸御殿の存在及び花畑屋敷の作事を指示しており<sup>20)</sup>、この頃には天守や櫓などが完成し、居住空間である御殿の作事が行われていたとみられている。

### （3）細川家入国後の熊本城

寛永9年（1632）、加藤忠広が改易となり、肥後国には細川忠利が入国する。忠利は12月9日に熊本城に入城しているが、この時の感想を「事外ひろき国にて候、城も江戸之外にはこれほとひろき見不申候」と、息子の光尚に伝えている<sup>21)</sup>。

「肥後御入国宿割帳」<sup>22)</sup>には、入国後から屋敷割が行われるまでの間、家臣たちは城下の寺や商人の家に宿泊したことが記されている。忠利が家臣らの屋敷割を行った際に使用されたと考えられる「熊本屋鋪割下絵図」（熊本県立図書館蔵）は、書かれている家臣の名前から、寛永6～8年の加藤忠広代の絵図と推定される<sup>23)</sup>。異筆で細川家臣の名前が書き込まれており、加藤氏から引き継いだ絵図を細川家が屋敷割のために使用したものと考えられる。「熊本屋鋪割下絵図」の記載範囲は、北は出京町、南は白川と坪井川の合流地点、東は白川、西は井芹川となっている。加藤家末期の熊本城ならびに城下は、細川家時代の熊本城・城下のほぼ原型を示している。

細川家は入国後、加藤氏から引き継いだ熊本城の補修や改変を行っていることが、絵図や古文書より判明する。まず、寛永10年（1633）8月5日付の「肥後国隈本城廻り普請仕度所目録」<sup>24)</sup>によれば、水道・堀・土手の11ヶ所988間、石垣25ヶ所1503坪、堀4ヶ所130間、新櫓27つ（うち4つは櫓門）、新門13ヶ所を普請場所として挙げている。さらに、翌11年（1634）3月17日、忠利は江戸幕府の土井利勝・酒井忠勝宛に「肥後代」（加藤代）よりの堀・櫓の修復や、前年に破損した石垣の修築を願い出ている<sup>25)</sup>。幕府に提出された絵図の控が「肥後国熊本城廻り普請仕度所絵図」（熊本県立図書館蔵、5頁）であり、新しく普請を行う箇所を朱で示している。本丸部分の補修は比較的少なく、二の丸や三の丸の堀や石垣、門の増築が多く計画されている。絵図の端には石垣・櫓台等27ヶ所、土手切立5ヶ所、堀4ヶ所、櫓28ヶ所、門12ヶ所、堀の拡張4ヶ所、水通し1ヶ所の普請と堀の浚渫の許可を願う旨が記される。これに対し、4月14日には江戸幕府老中の連署による熊本城普請許可の奉書が出された<sup>26)</sup>。この絵図と前年8月に作成された「肥後国隈本城廻り普請仕度所目録」と比較すると、新たに堀の浚渫と花畑屋敷北の石垣1ヶ所、坪井川沿いの石垣2ヶ所が普請場所として追加されているほか、櫓が1ヶ所増加し、逆に門は1ヶ所減少しているのが分かる。

普請の進捗としては、寛永13年（1636）には江戸幕府老中酒井忠勝に対して「先年差上候絵図」に記載

された普請箇所のうち、半分も着手していないと述べている<sup>27)</sup>。その後、寛永11年に申請された普請に関する史料として、「御自分御普請」に収録されている寛永21年（1644）2月12日付の「熊本御城御普請所之目録」がある<sup>28)</sup>。本史料には、普請が完了していない場所を白付紙で示し、付札のない箇所については普請が完了した場所であると記される。史料中に、「此目録絵図之書付ニ引合、間数・所数相違無御座候」とあり、おそらく11年に作成した絵図で間数と普請場所とを照らし合わせて確認したと考えられる。

この文書によって寛永21年の段階で普請・作事の終了した場所を確認すると、土手は5箇所のうち3箇所、石垣は27箇所のうち12箇所、堀は4箇所のうち3箇所、水通しと堀はすべての箇所の普請が終了している。また、新しく建てる計画であった櫓は28箇所のうち8箇所、門は12箇所のうち3箇所が完成している。以上の普請申請箇所は、最終的に完了しなかったものが複数あることが、幕末までに作成された熊本城関係の絵図から見てとれる。

また、寛永11年に申請した普請箇所以外にも、同17年（1640）には白川から川尻までの井手の拡張や、本丸東の孕んだ石垣の修復を申請し、二代藩主の光尚の時期には洪水による城廻りの破損について、その修復許可を求め、許可されている<sup>29)</sup>。熊本城の修理等の記録は前章第2表に概略を示した。これ以降、幕末にいたるまで普請願絵図なども複数残されており、細川期の熊本城の変遷を追うことが出来る。

#### （4）廃藩置県後の熊本城

明治4年（1871）、廃藩置県により熊本県庁は旧藩主の邸宅であった花畑邸に置かれた。同年8月20日、鎮西鎮台の設置が決定すると、本営を熊本県庁に置いた。これにより、県庁は二の丸の有吉邸へと移ることとなった。鎮西鎮台に花畑邸が引き渡されたのは明治5年（1872）4月3日のことである。明治6年（1873）、鎮西鎮台は熊本鎮台へと改称し、鎮台は熊本城に置かれた。この年3月に二の丸の操練場の兵営の建設が始まる。その後、明治7年（1874）6月に熊本城は陸軍用地に編入され、熊本城本丸に鎮台本営が移転する。さらに明治8年（1875）4月15日、歩兵第十三聯隊が編制され、二の丸に屯営した。同年4月には砲兵第六大隊が発足し、現在の熊本市市民会館付近に仮営していたが、翌年には新兵舎が備前屋敷跡（現在の合同庁舎付近）に落成し、移転した。また、同年に編制された予備砲兵第三大隊も砲兵第六大隊の兵舎へ同居した。さらに、同年4月17日には工兵第六小隊が発足、花畑邸内に兵舎が置かれていたが失火のため全焼し、棒庵坂下仮兵舎へ移転している。

以上のように、廃藩置県から鎮台の設置によって熊本城内は様々な改変が行われた。明治6年9月には、「月見櫓取附堀已下何レモ大破、已ニ崩落ノ个所モ有之」という状況で、堀を解体している<sup>30)</sup>。明治初年に撮影された古写真によると、飯田丸の百間御櫓や数寄屋丸の五階櫓、広間が撤去されている<sup>31)</sup>。

明治10年（1877）に入ると、明治政府を下野していた西郷隆盛と、彼を支持する私学校党は、2月5日に挙兵した。明治15年（1882）に刊行された『熊本鎮台戦闘日記』<sup>32)</sup>には、明治10年2月14日から10月6日までの西南戦争の戦闘の景況等がまとめられている。これによれば、2月14日より熊本城郭内外の籠城の準備に取り掛かっていることが記されている。竹之丸では炊事場を設置し、糧米500石と薪・炭などを貯蔵した。また、職人を雇い「地雷火」を製造させている。15日には竹之丸と櫓方の両所に火薬庫を設け、敵弾による爆発を避けるため数箇所に分けて貯蔵した。16日に棒庵坂上から空堀へ降りる道を開通させ、17日には新堀門から法華坂にいたる道の一般人の通行を禁じ、翌18日、地雷や柵の設置、砲臺の築造を行った。また、元薩摩藩士であり、西南戦争では歩兵第十三聯隊第一大隊第三中隊長として熊本城に籠城した隈岡長道の戦闘日誌によれば、第三中隊の守備地では地雷を古城坂・鞍掛坂・法華坂の三ヶ所に埋設している<sup>33)</sup>。

そして19日、熊本城の天守をはじめ、大多数の建物が炎上する。この火災の原因については官軍の自焼説、薩軍の放火説、失火説、市中の火事の類焼説など様々ある<sup>34)</sup>。さらに、熊本の市中は、城下の民家な

どが薩軍の隠れ家や陣地となることを防ぐために、鎮台によって戦略的に焼き払われた。なお、家屋だけでなく、下馬橋をはじめとする主要な橋も薩軍の侵入を防ぐために官軍によって撤去された。

2月21日、薩軍が城下に侵入し熊本城での薩軍との戦闘が開始する。午後1時20分に熊本電信分局より伊藤博文参議宛に「唯今戦争始め候、大砲しきりに放つ」との電報が打たれている。籠城の際、鎮台は守備隊を①千葉城付近守備隊、②下馬橋付近守備隊、③古城付近の守備隊、④藤崎台付近の守備隊、⑤京町方面の守備隊の五大地区に分割し、予備隊を西出丸北地区に分置、本営を宇土櫓に置いた。

鎮台兵の主要武器はスナイドル銃であり、熊本鎮台には他鎮台に先駆けて明治9年(1876)秋にスナイドル銃が支給されている<sup>35)</sup>。なお、スナイドル銃の弾薬の欠乏を防ぐため、夜間の探偵射撃にはエンフィールド銃を使用することとした。そのため、エンフィールド銃や弾薬は各堡壘に供給されていた。

熊本城に設置されていた電信分局は21日午後3時40分に断線したが、鎮台より4月8日に川尻方面に出発した突圍隊が征討軍と連絡を通じるのにようやく成功する。その後、川尻方面の官軍が15日に熊本城に入城し、2ヶ月に及ぶ籠城戦は終了した。

西南戦争後も、熊本城は陸軍によって管理され、改変を受けた。明治12年5月に編集された「熊本城郭及市街之図」(国立国会図書館蔵)の市街図部分には、天守台に倉庫、天守台の前にはコの字型の建物が描かれている。このコの字型の建物は明治11年に建築された熊本鎮台本営である<sup>36)</sup>。

明治18年(1885)5月には第十一旅団の本部が千葉城に置かれた。同21年(1888)5月には、熊本鎮台は第六師団となり、師団司令部が本丸に置かれた。歩兵第十一旅団は本部を千葉城から飯田丸へと移す。また、歩兵十三連隊が二の丸に、歩兵第二三連隊が花畑旧藩邸と監物台に分屯した。騎兵第六大隊は山崎町に、砲兵第六連隊は城内備前屋敷に、輜重第六大隊は古京町に置かれた。工兵第六大隊は千葉城に置かれたが、明治22年(1889)6月に大江渡鹿村の新兵営に移転している。明治27年(1894)には花畑旧藩邸の新築兵舎が完成し、歩兵第二三連隊はすべて花畑に移った。その後、師団のほとんどの兵営は大正14年(1925)頃までに城内から移転し、終戦後まで同じ位置にあったのは輜重第六大隊のみであった。

明治22年7月28日、熊本地方でマグニチュード6.3と推定される強い地震が発生した。震源地は金峰山東麓付近であったことから、金峰山地震と呼ばれる。この地震によって熊本城内も大きな被害を受けた。白川新聞の発行者である水島貫之は、「熊本明治震災日記」に被災状況を記している。師団営内の石垣の崩壊箇所は頬当門より数寄屋丸・閤門入口及び閤門内の左右の石垣、元飯田丸跡、軍法会議所北、同会議所内(元櫓方)及び衛戍兵営弾薬庫内、百間石垣、東竹の丸石垣など、29箇所に及んだ。閤通路、西出丸、飯田丸の石垣については、日本地震学会が調査のために撮影した古写真が残されており、被害状況を確認することができる。崩落した石垣は、軍によって復旧された。

#### 〔註〕

- 1) 「来島文書」『新熊本市史 史料編 第二巻古代・中世』熊本市 1993 269頁
- 2) 「築山トキ氏旧蔵文書」『新熊本市史 史料編 第二巻古代・中世』555頁
- 3) 『新熊本市史 通史編 第二巻 中世』熊本市 1998
- 4) 「吉川家文書」『新熊本市史 史料編 第二巻古代・中世』254頁
- 5) 近年では、上記の2説に加え、花岡山(祇園山)を隈本城とする説も提起されている。村上豊喜「隈本城のはじまり(一)～(五)」『熊本城』第80～84号 2010～2011
- 6) 『肥後国誌』
- 7) 出田氏は「新撰事蹟通考」(武藤巖男・宇野東風・古城貞吉『肥後文献叢書(三)』株式会社歴史図書、1971)の系図によれば菊池氏三代経頼を祖とし、のちに菊池郡出田を領したことから出田姓を名乗るようになったとされる。

- 8) 「藤崎八幡宮文書」『新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世』667頁
- 9) 同上666～667頁
- 10) 「相良家文書」『新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世』316～317頁
- 11) 「藤崎八幡宮文書」『新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世』667～668頁
- 12) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世Ⅰ』熊本市 1994 3頁
- 13) 「広島大学所蔵猪熊文書」『新熊本市史 史料編 第三卷近世Ⅰ』22頁
- 14) 「中沢広勝氏蔵文書」『新熊本市史 史料編 第三卷近世Ⅰ』22～23頁、「西村清氏蔵文書」同32～36頁
- 15) 森山恒雄「加藤清正伝記『続撰清正記』の成立とその追加集の紹介(一)」(『熊本大学教育学部紀要』42号1993)によれば、「続撰清正記」の著者は、牛方・馬方騒動で美濃国岩村松平家乗に預け身となった和田備中一政の息子の和田利重である。本書は父の話と書き残された文書を元にし、さらに不分明な点を信州高島藩諏訪頼水に預け身となった中川周防に尋ね、寛文4年(1664)に著述されたとされる。このことから比較的信憑性の高い記事が多いが、熊本城築城については「予若年の時、肥後国退出いたし、其後見ざるにより、失念いたしたる所あまた有故、委不記候」と述べており、「続撰清正記」の記述を熊本城完成の根拠とするにはいまだ少し慎重さが求められる。
- 16) 「中澤広勝氏所蔵文書」『新熊本市史 史料編 第三卷近世Ⅰ』73～74頁
- 17) 平野流香『熊本市史』熊本市 1932
- 18) 「新撰事蹟通考」『肥後文献叢書(三)』所収
- 19) 「大阪城天守閣蔵吉村文書」『新熊本市史 史料編 第三卷近世Ⅰ』80～81頁
- 20) 中野嘉太郎『加藤清正伝』新潮社 1979 620～621頁
- 21) 『大日本近世史料 細川家史料 十三』74頁 1085号文書
- 22) 『新熊本市史 史料編 第四卷近世Ⅱ』熊本市 1996 3～28頁
- 23) 『新熊本市史 別編第一卷 絵図・地図上 中世・近世』熊本市 1993
- 24) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世Ⅰ』196～198頁
- 25) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世Ⅰ』191頁
- 26) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世Ⅰ』191頁
- 27) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世Ⅰ』192頁
- 28) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世Ⅰ』178～180頁
- 29) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世Ⅰ』181頁
- 30) Ref.A03023207100、公文別録・陸軍省衆規測鑑抜粹・第十三卷・明治四年～明治八年(国立公文書館)
- 31) 富田絃一『古写真に探る 熊本城と城下町』肥後上代文化研究会 1993
- 32) 日本史籍協会『熊本鎮台戦闘日記』東京大学出版会 1977
- 33) 原口長之・永田日出男・中村哲也校訂『西南戦争隈岡大尉陣中日誌』熊本史談会 1980
- 34) 炎上については、富田絃一「熊本城炎上の謎を考える」『熊本博物館報』11号 1999、猪飼隆明『西南戦争 戦争の大義と動員される民衆』歴史文化ライブラリー 253 吉川弘文館 2008、富田絃一「熊本城炎上の謎を探る」『熊本城』復刊百号記念号 熊本城顕彰会 2015
- 35) 陸上自衛隊北熊本修身会『新編西南戦史』原書房 1977
- 36) 鶴嶋俊彦「新史料『熊本城郭及市街之圖』」『熊本城調査研究センター年報1 平成25・26年度』熊本城調査研究センター 2015

〔主要参考文献〕

熊本市教育委員会『熊本市北部地区文化財調査報告書』1971

熊本市教育委員会『熊本市中央南地区文化財調査報告書』1978  
 熊本市教育委員会『熊本城三の丸森本櫓跡漆畑遺跡調査報告書』1979  
 熊本市教育委員会『熊本市中央北地区文化財調査報告書』1980  
 熊本市教育委員会『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』1982  
 荒木栄司『肥後古城物語』熊本日日新聞社 1982  
 田村実『熊本の土地の生い立ち』熊本地学会 1985  
 靖国神社社務所『靖国神社忠魂史 西南の役』青潮社 1990  
 横山勝三ほか「熊本市および周辺地域の地形・地質の概要と研究課題」『市史研究くまもと』第2号 1991  
 大塚虎之助『唯今戦争始ま候 電報にみる西南役』熊本日日新聞情報文化センター 1991  
 熊本大学『熊本大学放送公開講座 熊本城を科学する』熊本大学学生部 1992  
 乙益重隆「壺に埋収した玉」『弥生農業と埋納習俗』六興出版 1992  
 北野隆『城郭・侍屋敷古図集成 熊本城』至文堂 1993  
 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 別編第一巻 絵図・地図上 中世・近世』熊本市 1993  
 富田紘一『古写真に探る 熊本城と城下町』肥後上代文化研究会 1993  
 富田紘一「白川・坪井川流路と城下町の形成」『市史研究くまもと 第7号』熊本市 1996  
 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 史料編 第一巻考古資料』熊本市 1996  
 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第八巻現代Ⅰ』熊本市 1997  
 平野敏也・工藤敬一『図説 熊本県の歴史』河出書房新社 1997  
 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第一巻 自然 原始・古代』熊本市 1998  
 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第二巻 中世』熊本市 1998  
 富田紘一「熊本三河川と城下町の形成」『市史研究くまもと 第11号』熊本市 2000  
 柳田快明「南北朝期から戦国期の『隈本城』を考える」『市史研究くまもと 第11号』熊本市 2000  
 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第九巻現代Ⅰ』熊本市 2000  
 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第三巻近世Ⅰ』熊本市 2001  
 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第五巻近代Ⅰ』熊本市 2001  
 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第六巻近代Ⅱ』熊本市 2001  
 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第七巻近代Ⅲ』熊本市 2003  
 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 別編 第三巻年表』熊本市 2003  
 熊本県立美術館編『熊本城築城400年記念 激動の三代展』熊本城築城400年記念展実行委員会 2007  
 小川原正道『西南戦争 西郷隆盛と日本最後の内戦』中公新書 2007  
 富田紘一「『熊本城の歴史と探訪』第6回 加藤清正の熊本城築城」『熊本城 復刊68号』2007  
 富田紘一『熊本城 歴史と魅力』熊本城顕彰会 2008  
 富田紘一『定本熊本城』株式会社郷土出版会 2008  
 熊本市教育委員会『智照院細川家墓所』2008  
 熊本市教育委員会『熊本城跡 桜馬場地区－熊本城遺跡群桜馬場地区埋蔵文化財確認調査報告書－』2011  
 熊本県立美術館『生誕450年記念展 加藤清正』生誕450年加藤清正展実行委員会 2012  
 熊本日日新聞社編『加藤清正の生涯 古文書が語る実像』熊本日日新聞社 2013

## 第3章 石垣の遺構調査と保存修理工事

### 1. 平成14年度（県立美術館西側石垣保存修理工事）の事業

#### (1) 事業の目的と経過

##### a. 県立美術館西側の概要

##### 歴史資料

当該地は熊本市二の丸の西側、現在の熊本県立美術館本館の南西側に位置する。美術館南側の枡型から約50mで南西の出隅となり、堀に沿って北へ約16mでさらに隅部となり、東へ矩折れし土羽に入り込んでいる。

寛永6～8年（1629～1631）頃に描かれたとされる「熊本屋鋪割下絵図」（第10図、熊本県立図書館蔵）には、現在の県立美術館南側の枡形が描かれ、門が置かれている。門の西側石垣の南と西には空堀があり、西方で石垣・空堀ともに北に向って鉤状に折れる。堀は北の土手に突き当たるまで続き、石垣は鉤状に折れてわずかに北に入ったところで終わり、北の延長部は土手となっている。

次に、寛永11年（1634）に細川忠利が幕府に城郭の修理・改築の申請を行なった際に提出された絵図の控である「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」（第11図、熊本県立図書館蔵）には、当該部分の普請・作事を次のように申請している。①枡形の門を櫓門とすること、②空堀の幅を西側に5間拡張すること、③美術館西面にあたる土手139間の切立、④西面の土手と石垣が接する部分の高さ3間半、幅3間半の石垣普請、⑤その上に位置する櫓の作事、以上の5点である。このうち、櫓門と石垣上の櫓の作事については、絵図中に「得 御淀相済候へ共未取懸不申候」と付札があり、幕府より許可を得ながらも、寛永21年（1644）時点では実施には至っていない<sup>1)</sup>。これ以後の絵図では、枡形の門と番所、枡形より西へ石垣上に33間半の塀が描かれる（第12図「二ノ丸御門ヨリ有吉清九郎屋敷迄」、熊本県立図書館蔵）。空堀の拡張は実施されているが、石垣に沿って鉤状となっていた空堀は、西面の石垣の南端までとなっている。

門は宝暦頃には「住江甚左衛門下冠木門」と呼ばれていたが<sup>2)</sup>、明和4年（1767）に「宮内江出ル冠木門」と改称された<sup>3)</sup>。主要街道の起点である新一丁目御門前の札の辻から、一旦二の丸に入り二の丸御門・新堀御門を経由して京町へ抜ける際には、この「冠木門」を通過することとなり、門の内側の枡形には番所が置かれた。

明治7年（1874）に熊本城は陸軍用地に編入され、現在の美術館前の道路より東側には明治6年（1873）より二の丸操練場の兵営建設が開始され、その後歩兵第十三連隊が屯営した。当該の石垣下に位置した空堀は、西南戦争以前に通路として使用するために改変を受けていることが、絵図等より知られる<sup>4)</sup>。現在市道として利用されているこの通路は、西南戦争後には新一丁目御門付近まで開鑿され、「新道」・「新坂」と称された（第13図「熊本全図」、熊本県立図書館蔵）。「新道」上には二ノ丸より藤崎台へ「宮内橋」が架けられる。

##### 石垣

寛永の普請では、西側空堀東側土手139間の切立と同時に長さ70間に亘り空堀の幅を5間拡張して10間とし、鉤型に折れた南空堀は二の丸虎口から西へ17mほどの所まで短縮するように申請されている。しかし、現在の南面石垣の前面には空堀の痕跡はなく、寛永以降の絵図にも見えないので、この寛永の普請で空堀の東端から西端までを埋め立てたものとみられる。

防御力を弱める可能性がある空堀の埋め立ての理由は明らかではないが、当該石垣は現在空堀に面している西端で高さ9m以上あったことが判明するので、南面石垣のおよそ半分が埋没している可能性が高い。南面石垣は大きな孕みが全体にみられたことから昭和60年度・61年度に解体修理がされている<sup>5)</sup>。この時、



孕みの原因は石垣裏込めの不十分さによると推定されているが、すでに寛永期には石垣崩壊の危険が察知され、石垣前面の空堀をすべて埋め立てた可能性が考えられる。

空堀の屈曲部は現在、明治12年頃に西側空堀南端から新町に向けて丘陵を掘割り新道が開鑿され、二の丸から藤崎台への宮内橋が架けられている。宮内橋の橋台と周辺切岸は、この時の鎮台の工事で石垣となり空堀の痕跡を確認することはできない。

さて、今回積み直しされる西面石垣であるが、寛永11年「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」によれば、朱色の櫓がある石垣北端に朱線が鉤型に引かれ「矢倉下石垣つきさし 高三間半 長サ三間半」の書き込みがあり、その目録では「長三間半高三間半 一拾貳坪 中村鞠負屋敷後石垣、築捨を築留申度所」とある。また、同絵図には「得 御淀相済候へ共未取懸不申候」と白付札の貼り付けがある。普請後の記録である寛永21年の「熊本城御普請所之目録」には「白付札 一中村左馬進屋敷之のうしろ石垣 つきとめ (三間半 高サ三間半)」とあり、石垣上部の櫓建造とともに実施に至らなかったとする。築捨と築留の違いは今明らかではないが、築捨となっている石垣を築留にして上部に櫓を建造したいということだと理解できるので、築留石垣は隅角がある石垣を指すもので、築捨とは隅角をもたずに斜面に擦り付けただけの石垣と考えられる。

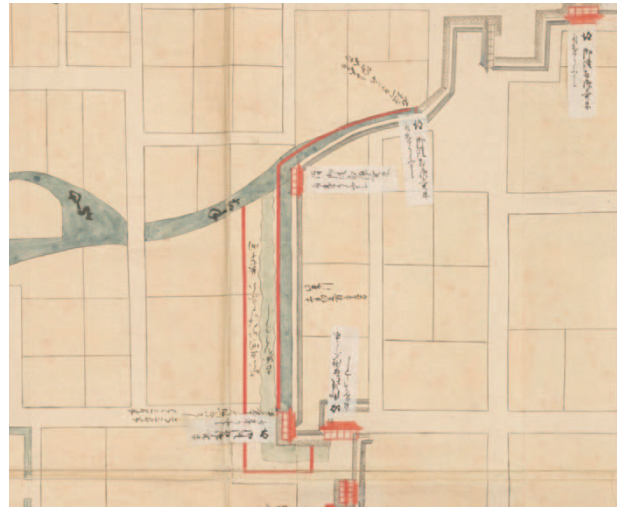
当該石垣を観察すると、南の隅角は下部三分の一は埋没しているが、角石は長方体に整形して大面と小面の比がおおよそ2対1で、方形に加工した角脇石を使用する明瞭な算木積みとなっていて、角石稜線は丸く面取りしてある。築石は長方体状の割石を主体としたやや波打つ布積みとなっていて、間詰石は築石上下に少なく左右に縦石を挟んでいることが多い。類似した石垣は、小天守や手取口の石垣にあり、慶長期後半代の普請に推定できそうである。一方、北側の隅角は上部四分の一の角石では左右の控えがほとんどない重箱積みに近い。角石のほとんどは小型で、稜線の面取りがなく鋭い稜を立てる。築石では一つ一つの形状は変わらないが、北隅角を中心に北下がり（図面では左下がり）に積んでいること、また、間詰石に縦石がほとんどないことも特徴的である。石垣全体に対して、この異質な部分は後世に積み直しされた部分と考えられる。この隅角は空堀切岸に擦り付けされた箇所ですべて構造的脆弱さがあり、寛永11年の補修箇所の候補となっていたと推定される。

#### 〔註〕

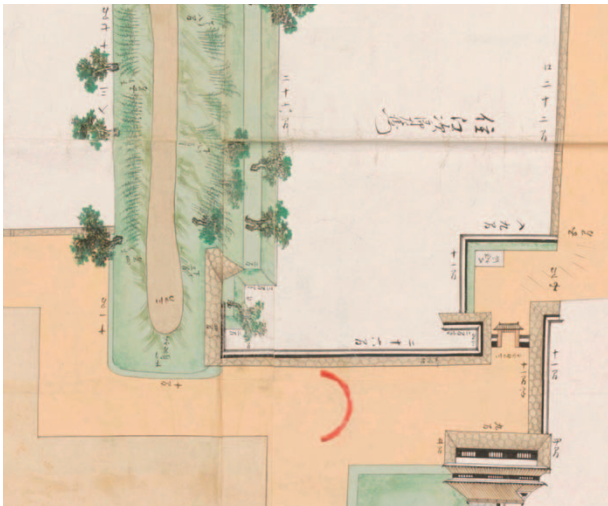
- 1) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世Ⅰ』熊本市 1994 178～180頁
- 2) 「御城外御櫓冠木門須戸御番所数御道具并橋数御国東西南北道程御領分町在人数村数宿馬船数帳」（永青文庫蔵、『新熊本市史 史料編 第四卷 近世Ⅱ』熊本市 1996 270号文書）
- 3) 「公私便覧続編」熊本大学附属図書館寄託永青文庫細川家文書4.3.10, 8
- 4) 「両軍配備図」（熊本博物館蔵）
- 5) 『特別史跡 熊本城跡 美術館南側石垣保存修理工事報告書』熊本市 1987



第10図 「熊本屋鋪割下絵図」  
(熊本県立図書館蔵)



第11図 「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」  
(熊本県立図書館蔵)



第12図 「二ノ丸御門ヨリ有吉清九郎屋敷迄」  
(熊本県立図書館蔵)



第13図 「熊本全図」  
(熊本県立図書館蔵)

## b. 石垣の現状と工事に到る経緯

熊本城跡では、昭和41年度から孕みが顕著な個所や明治初期に撤去された石垣の保存修理や復元整備を実施しており、当該地については昭和61・62年度に孕みが顕著な部分東側約43.6m、134.0㎡が解体修理（積み直し）が実施され、同時に孕みの原因等の調査も実施されている。

その後の経年等により市道に面した西側部分で比較的下部の孕みが顕著となってきたことと併せて、市道（歩道）に面しており、歩行者及び車両の通行に危険であることから、安全対策を含めて保存修理工事を実施した。

c. 事業概要（事業の経過及び事業費）

①現状変更等

文化財保護法による現状変更等許可申請日 平成15年7月30日

許可日 平成15年9月4日

②文化庁補助事業

文化庁補助事業名 特別史跡熊本城跡 記念物保存修理事業

補助申請日 平成14年4月17日

補助金交付決定日 平成14年5月30日

平成15年2月28日

計画変更の経過と理由

第1回目 <美術館西側から本丸御殿跡一帯への修理箇所の変更>

<変更理由>

熊本城跡石垣保存修理事業計画では、孕み等の顕著な箇所を優先的に実施することとして平成14年度の修理箇所を決定していたが、その後の検討委員会（史跡部会）において現地調査及び再検討の結果、当該箇所が「西南戦争時の火災熱による損傷も著しく、崩落の危険性が高いため緊急に実施すること」との指導を受けたものである。また、本丸御殿大広間棟等の建造物復元整備の範囲内であることとも併せて早急に実施するものである。なお、当初計画の美術館西側については、年次計画に基づき次年度以降に実施することとした。

計画変更承認申請日 平成14年9月19日

計画変更承認日 平成14年10月2日

実績報告日 平成15年4月3日

第2回目 <美術館西側の追加変更>

<変更理由>

計画変更により次年度以降に延期した当該美術館西側石垣について、緊急性が高いことから、文化庁と協議の結果、14年度に合せて実施することとなった。

このため、当該年度では工事完了が困難であることから、事業期間を平成15年7月31日への変更も併せて行い、平成15年3月31日に繰越承認を得て事業を継続した。

計画変更承認申請日 平成14年12月19日

計画変更承認日 平成15年2月28日

繰越承認日 平成15年3月31日

出来高報告日 平成15年4月3日

実績報告日 平成15年8月27日

③事業費（第4表）

収入の部（単位：円）		支出の部（単位：円）		備 考
区 分	収 入 額	区 分	支 出 額	
所有者等負担額	32,400,000	委託費	(798,000)	
国庫補助額	36,000,000	工事請負費	34,864,427	美術館西側
			35,122,500	本丸御殿
県補助額	3,600,000	その他の経費	466,510	
市町村補助額				
その他				
合計	72,000,000		72,000,000	

事業は本丸御殿大広間棟跡の石垣保存修理、復元工事と併せて実施した。

④測量設計

委託業務名	熊本城跡美術館西側石垣保存修理工事測量設計業務委託
契約期間	自平成15年2月27日 至平成15年3月28日
契約日	平成15年2月27日
完成日	平成15年3月28日
検査日	平成15年3月28日
業務概要	地形測量、石垣立面図作成及び工事設計

③保存修理工事

工事名	特別史跡熊本城跡美術館西側石垣保存修理工事
工事期間	自平成15年3月31日 至平成15年7月31日
契約日	平成15年3月31日
変更契約日	平成15年7月17日
工事完成日	平成15年7月31日
工事検査日	平成15年8月12日

(2). 保存修理工事

a. 工事概要

工事は石垣の孕み等が顕著である部分を中心に目視による解体範囲を設定し、本来の勾配を基準として復旧を行った。築石及び裏込栗石は再利用に努め、復旧に適さない築石及び土砂等の選別により不足した栗石については同質同材を補足した。復旧の基準勾配は修理の対象とした面で最も変位の少ない箇所を選定して実施した。石垣天端付近の樹木は管理者である県立美術館と協議し伐採、抜根を行った。

また、石垣南側の石組水路は本来、西側の堀に排水先が設定されており、西側下部の市道に新たに歩道が整備されたことにより、雨水が歩行者等に影響することから、既存排水溝の解体修理及び勾配調整を行い、南側中央付近に流入口設置し、新たに管渠を敷設し南側の空堀に排水することとした。

第5表 工事概要

工 事 種 別		単 位	数 量	備 考
施工延長		m	31.5	
石積工	石垣解体工	m <sup>2</sup>	199.0	雑石控え60～80cm
	空石積工	m <sup>3</sup>	199.0	〃
	吸出防止材敷設	m <sup>2</sup>	93.0	
雑 工	樹木伐採処理工	本	1.0	シイノキ
	排水溝解体修理	m	47.5	凝灰岩
	付帯石積解体復旧	m <sup>2</sup>	8.4	練石積控え35cm
	管渠敷設工	m	24.5	径200mm

b. 工事実施

工事は設計図書及び添付の熊本市制定「公園工事仕様書」「安全管理仕様書」、熊本県土木部制定「土木工事共通仕様書」及び特記仕様書により実施した。

<特記仕様書>

1. 特別史跡熊本城跡の重要な遺構の保存修理であることを十分認識した上で施工に当たり、工事に従事する石工はもちろん作業員に至るまで、文化財であることの意識徹底に努めること。
2. 既存石垣の取り外しに先立ち、各測点における現況勾配を詳細に記録し、復元における勾配決定の参考にすること。また、石垣勾配に併せて根石深さの調査を実施し記録すること。
3. 既存石垣の取り外しは、築石に番号を付して取り外すが、取り外しに際し築石の控え、各築石毎に面の大きさ、控え長等を記録するとともに、現況の裏栗石厚さの状況も併せて記録するものとする。
4. 既存石垣の取り外しに際し、石垣内部等より判明していない遺構（排水溝等）が検出された場合は、直ちに係員に連絡を取り指示に従うこと。この際記録のため調査を行うことがあるので考慮すること。
5. 修理箇所は下部に歩道等が隣接しているため、安全対策は十分に行い、特に築石の吊り降ろし、吊り込みの際は誘導員を配置するなど、安全管理には十分な対策を講じて事故防止に努めること。
6. 石積み工法は「算木積み」と「打ち込みはぎ」の併用によっておこない、現状の築石の配列等を十分参考にすること。
7. 石工は城郭石積み（熊本城跡）の石垣修理等に三年以上従事した経験を持つ石工を採用することとする。また、一般土木工事の石積工事の経験を有し、城郭石垣の修理工事等に参加を希望するものがあれば積極的に採用すること。
8. 本修理工事は、石工の経験と古来工法の理解が重要な要素となるため、条件に適応しなくなり工事実施が困難となった場合は、係員と協議し承認を受けた後実施すること。
9. 本工事の実施に当たっては、工事車両や資材の搬入が二の丸広場園路などを経路としているため、観光客優先に心がけ、観光客へ危害を及ぼすことのないよう十分注意して通行すること。

<石垣解体修理工事>

①準備工

- ・石垣解体に支障が予想される天端付近の樹木（シイノキ）について、管理者である県立美術館と立会い協議の上、伐採、抜根による処分とすることとした。
- ・工事に先立ち石垣の現況勾配の再確認及び基準高さの設定を行い、隅各部や基準となる石垣天端の観測を行った。

・石垣面の清掃を行い、縦横50cm間隔にて墨打ちを行い、石垣立面図を利用して解体範囲内の築石に番号を付した。復築の際混在することを避けるため各面ごとに区分して番号を付した。

## ②解体工

- ・解体に先立ち石垣上部の平場に塀等の遺構の存在の有無を確認しながら、人力及び小型のバックホーにより慎重に掘削をおこなった。美術館新築整備の際に盛土整備がそれており、当時の遺物、遺構は確認できていない。
- ・裏込栗石は石垣天端より平均して40cmから確認され、天端付近の幅はおよそ1.5mで、解体範囲下部では1.0mであった。
- ・解体は一石毎に行い、前面に付しておいた番号を確認しながら、その番号を築石胴部にペンキを用いて付した。また、吊り出しは築石にキズをつけないよう布製のものを採用して実施した。
- ・角石の解体は特に慎重に実施し、二段毎に座標値及び高さを記録し、復築の目安とした。
- ・築石は基本的に全て再利用することから、角面毎に区分して集積し、復築の際吊り込みが容易なように、整理して配列した。
- ・築石は一石毎に土砂等の清掃を行い、面及び控え長さの記録を行い整理した。なお、50個毎に写真撮影し整理した。
- ・裏込栗石はすべて再利用の対象としたことから、所定の場所に集積し、土砂との選別作業を行い、出来るだけ土砂等の付着にも注意を払って再利用に備えた。

## ③石積工（復築）

- ・復築に先立ち、工事担当者（監督員）の立会のもと、解体前の測量値、基準とした勾配を基に遣り方を設置した。
- ・復築は基本的に一段毎に行い、築石の配置は立面図や事前に撮影した写真、及び事前に墨入れした方格線を参考にして、一段毎に勾配等を確認するなど慎重に行った。
- ・胴込栗石はズレが起きないように慎重に詰め、裏込栗石は十分な締め固めを行った。
- ・角石部分では二段毎に工事担当者（監督員）に確認を求め、承認を得て作業を継続した。

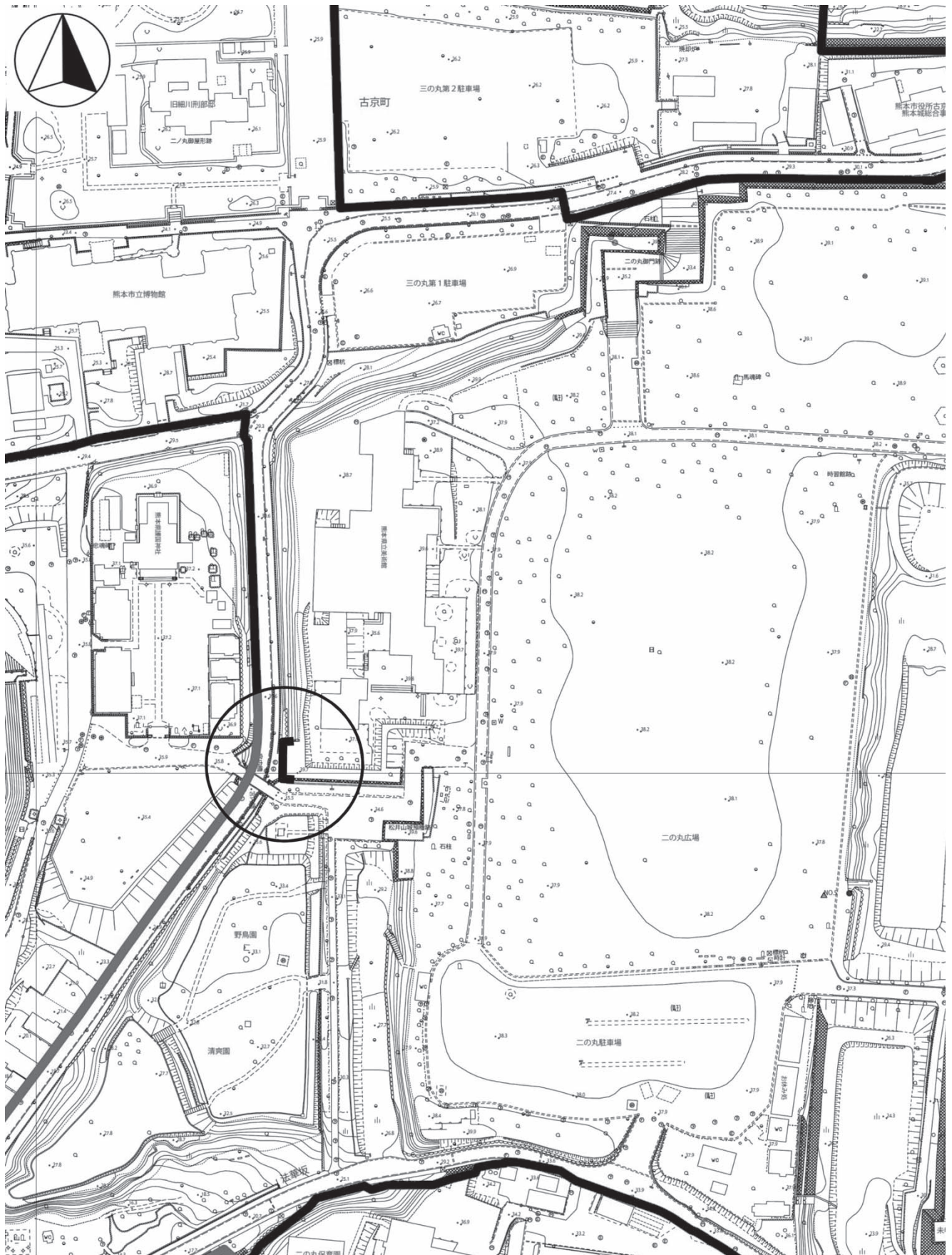
### <その他の付帯工事>

#### ①石組排水溝及び管渠埋設

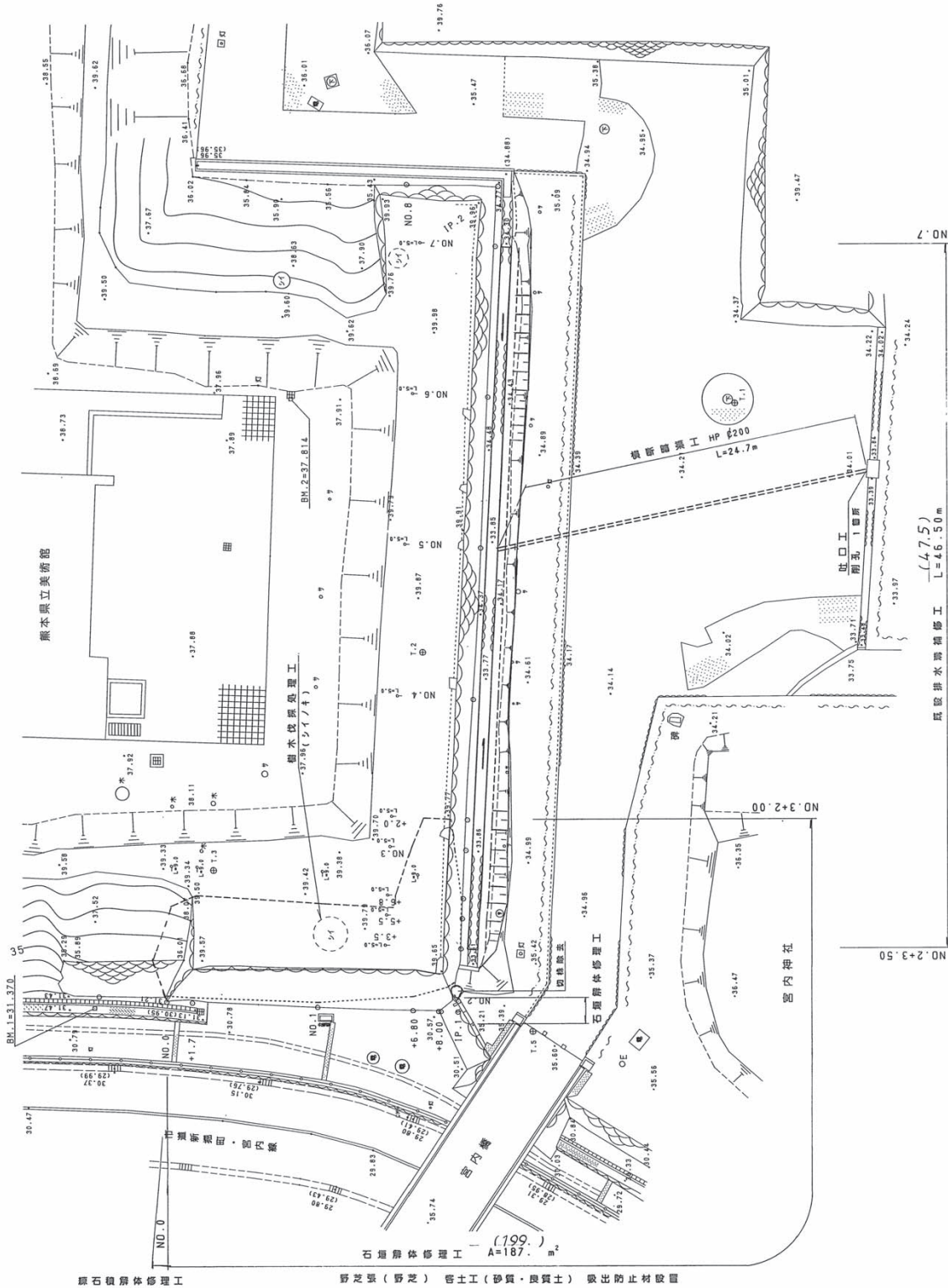
- ・石垣と同様に遺構であることから、解体は慎重に行った。石材が凝灰岩であることから、作業により毀損等の無いよう慎重に据え直しを行った。経年による欠損部分については、同質材を用いて補足した。

### <工事設計変更>

石垣は北、西、南の3面で構成されており、北面に接続する練石積みを解体した後、北西隅角部から解体を進めた結果、事前に確認していた以上に法側に延びており、新たに検出した部分についても修理が必要であることが判明したため、修理面積を追加した。また、裏込栗石は当初予定より土砂等の混入が多く、採取量が減少したことから購入数量を追加した。



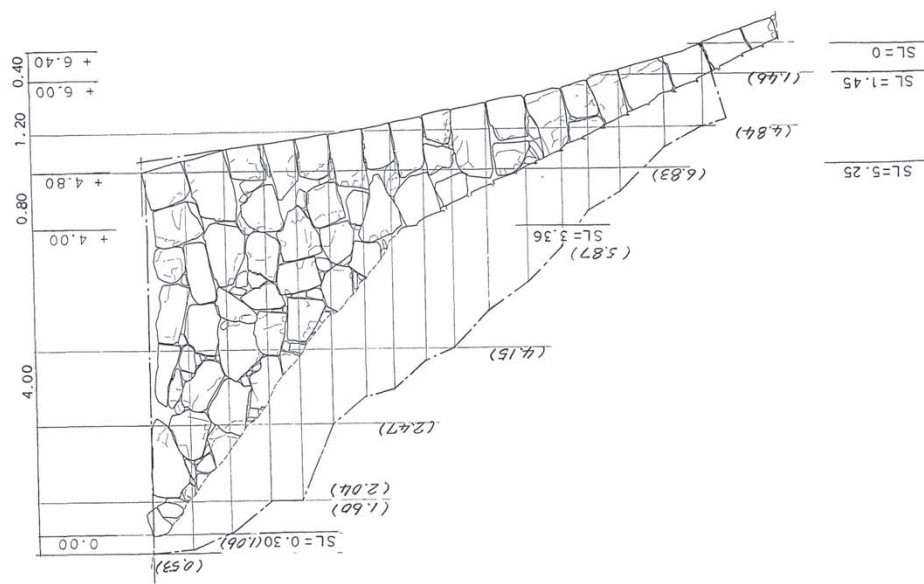
第14図 工事位置図



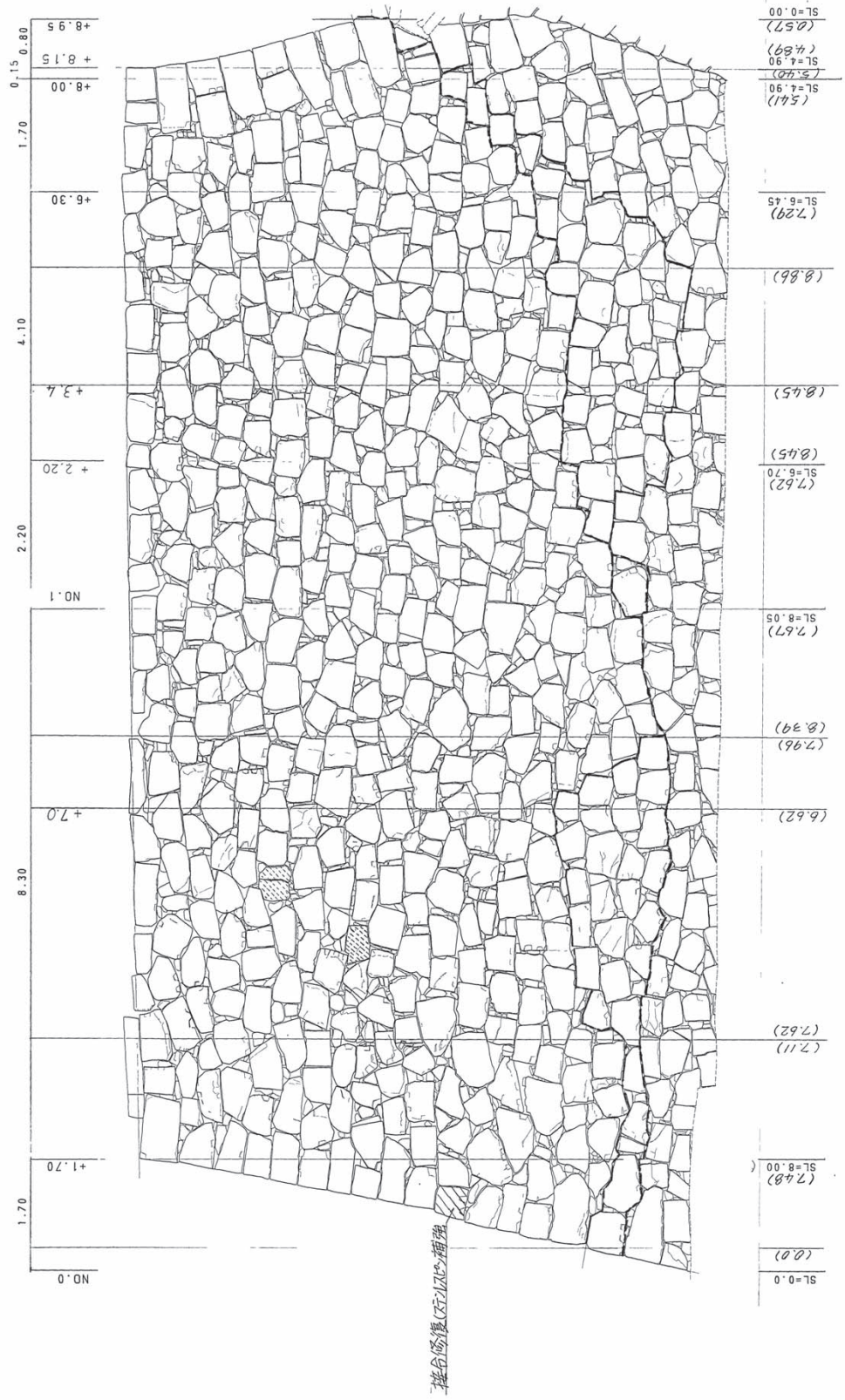
工事概要			
種別	石垣全量積 (m <sup>3</sup> )	修理面積 (m <sup>2</sup> )	備考
石垣修理			
A	15.0	(24.2)	
B	162.3	(132.1)	
C	58.3	(42.6)	
計	235.6	(199.1)	187.8
石垣解体修理			
		(8.4)	27.0
排水工			
修理		(4.75)	46.5(m)
即築		(1)	24.7(m)
雑工			
樹木伐採			(1)
切株除去			(1)

第15図 工事平面図



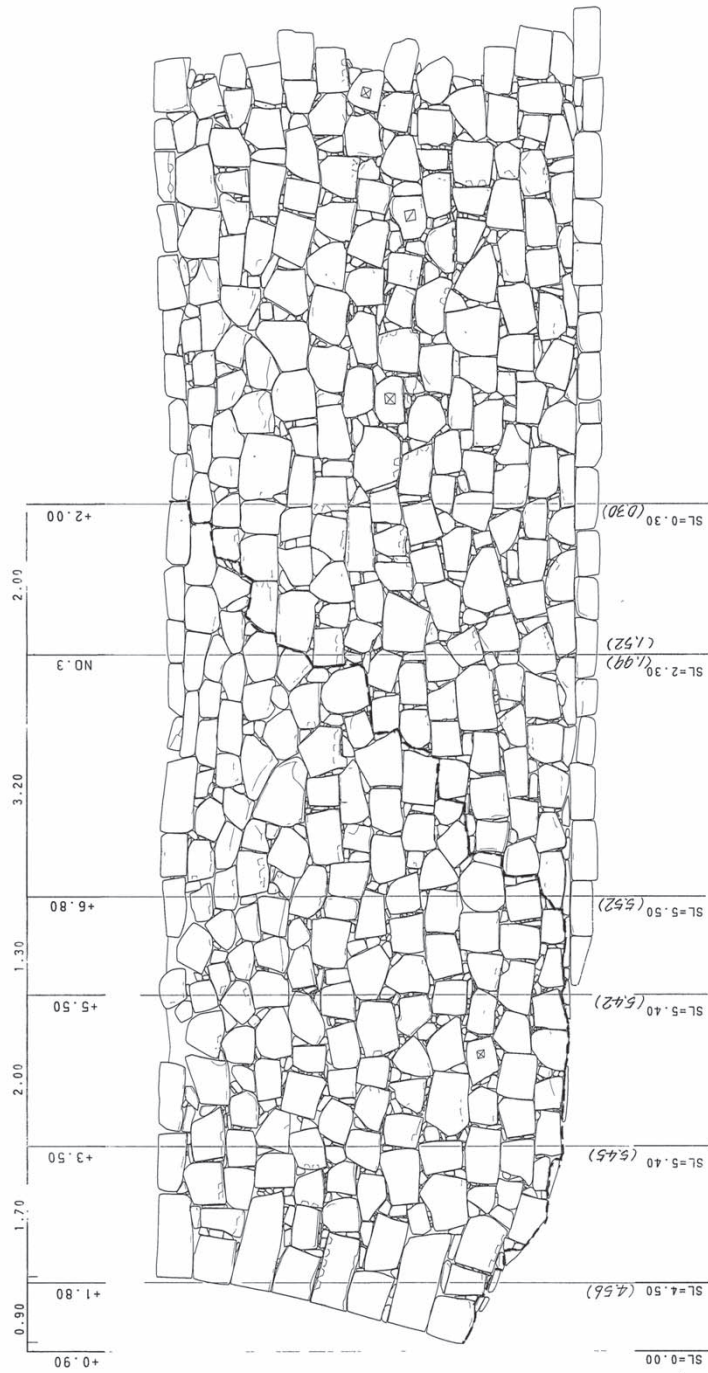


第16图 石垣立面图 (A面)

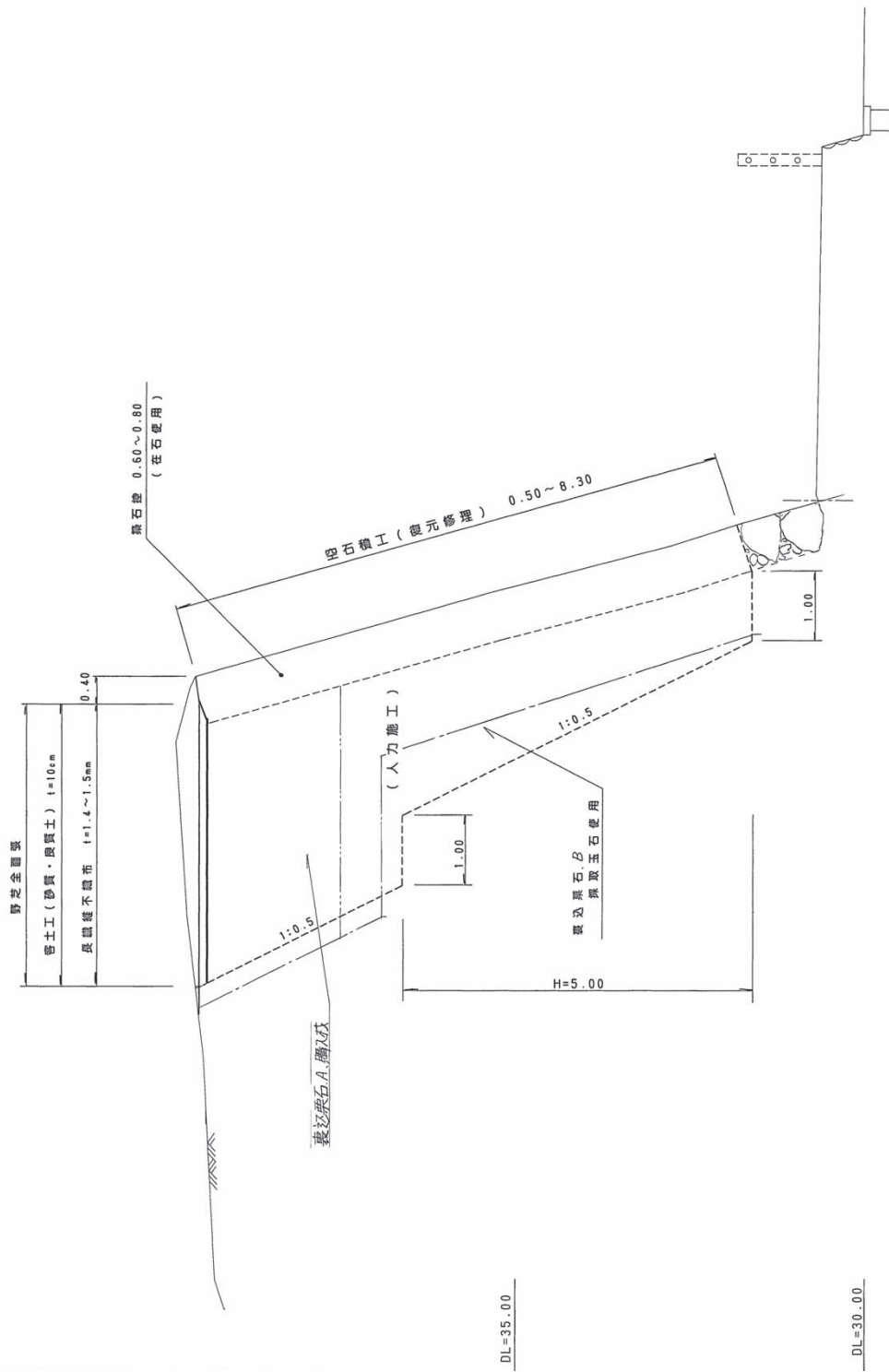


第17图 石垣立面图 (B面)

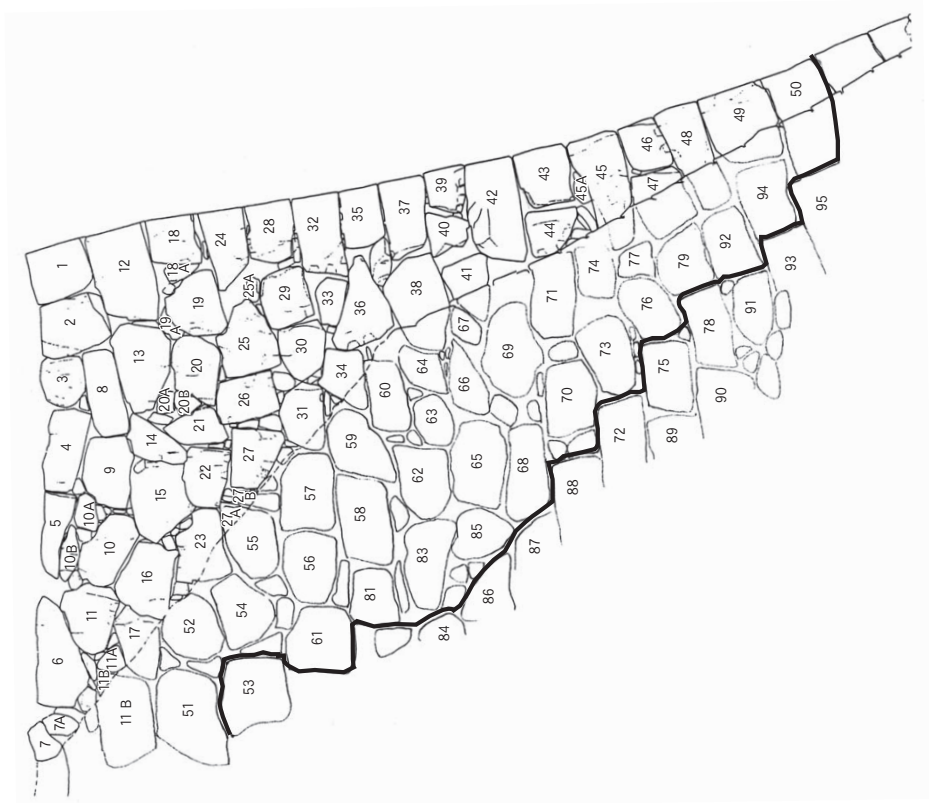
交管



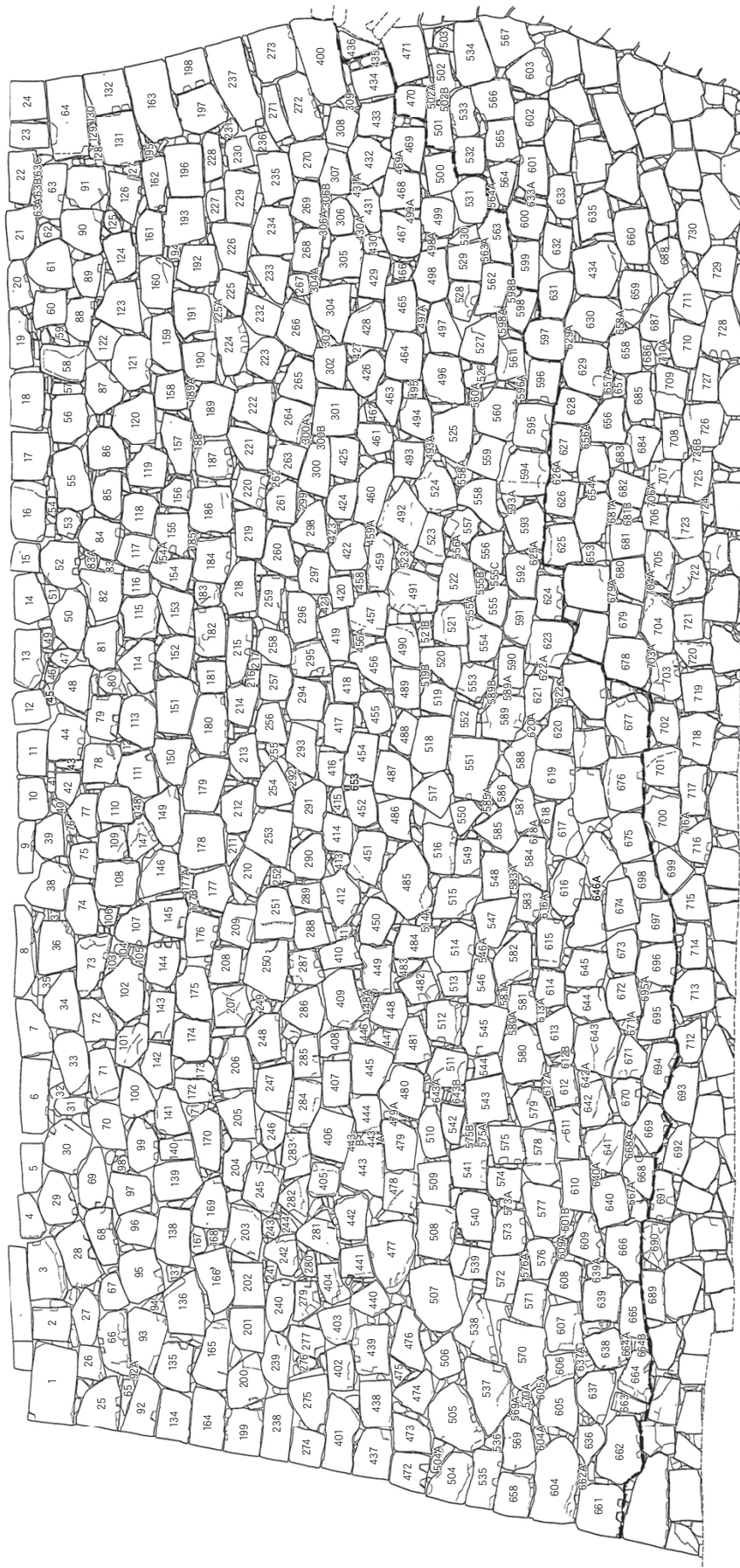
第18图 石垣立面图 (C面)



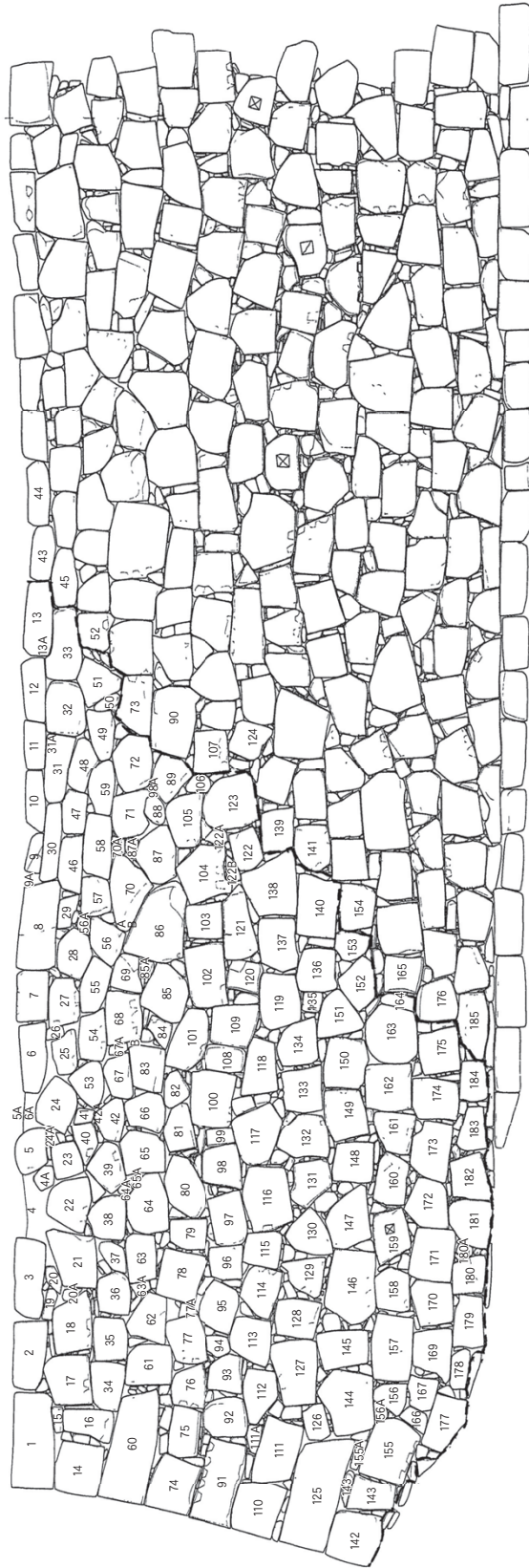
第19図 標準断面図 No. 1 付近



第20図 築石番号管理図 (A面)



第21图 築番号管理図 (B面)



第22图 築石番号管理図 (C面)

第6表 築石管理表 (A面-1)

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
1	○	1	1		角石	980	550	490
2		2				500	540	780
3		3				440	370	500
4		4				800	340	540
5		5				780	260	640
6		6				1,020	480	460
7		7				540	300	600
8		8				750	330	450
9		9				640	440	710
10		10				760	480	630
11		11				590	400	670
12	○	12	25		角石	500	550	800
13		13				750	380	610
14		14				380	360	480
15		15				720	500	680
16		16				660	500	550
17		17				580	380	800
18	○	18	92		角石	500	450	760
19		19				560	520	580
20		21				330	530	560
21		22				570	400	500
22		23				490	450	510
23	○	24	134		角石	650	430	750
24		25				680	560	600
25		26				390	600	710
26		27				600	360	700
27	○	28	164		角石	520	450	750
28		29				500	450	720
29	○	30				470	460	530
30		31				550	400	640
31	○	32	199		角石	600	530	630
32		33				470	250	560
33		34				460	420	700
34	○	35	238		角石	550	390	770
35		36				810	450	440
36	○	37	274		角石	520	450	740
37		38				700	530	740
38	○	39	401		角石	330	410	1,000
39		40				260	380	450
40		41				450	410	920
41	○	42	437		角石	650	470	900
42	○	43	472,473		角石	500	500	900
43		44				450	380	600
44	○	45	504		角石	570	500	1,000
45	○	46	535		角石	780	300	450
46		47				470	410	450
47	○	48	568		角石	500	500	900
48	○	49	604		角石	700	650	1,000
49		51				630	580	580
50		52				770	510	600
51		54				520	560	700
52		55				390	410	800
53		56				460	520	440
54		57				540	430	630



第6表 築石管理表（A面－2、B面－1）

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
55		58				630	370	850
56		59				470	520	630
57		60				550	380	470
58		61				450	400	570
59		62				530	510	650
60		63				340	270	620
61		64				330	370	580
62		65				800	490	480
63		66				460	230	1,110
64		68				440	260	670
65		69				520	390	470
66	○	70				550	400	650
67		71				430	410	710
68		73				660	390	850
69		74				470	420	550
70		76			割れ石	450	400	700
71		77				330	200	260
72		79			割れ石	500	450	800
73		81				420	400	680
74		83				820	380	450
75		85				400	310	600
76		92				580	470	800
77		113				710	380	500
78			2			410	450	570
79			3			680	390	720
80			4			550	260	540
81			5			600	270	720
82			6			950	350	850
83			7			700	380	740
84			8			1,080	220	710
85			9			640	190	610
86			10			530	380	650
87			11			510	370	600
88			12			390	400	710
89			13			750	580	590
90			14			580	390	600
91			15			320	340	700
92			16			710	430	540
93			17			600	470	560
94			18			670	400	710
95			19			720	200	590
96			20			580	280	500
97			21			620	370	730
98			22			650	310	610
99			23			320	530	710
100	○		24	1	角石	490	450	1,100
101			26			440	300	630
102			27			680	290	410
103			28			780	410	740
104			29			580	460	430
105			30			650	550	740
106			31			210	440	700
107			32			170	190	180
108			33			730	380	520

第6表 築石管理表 (B面-2)

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
109			34			700	450	640
110			35			360	170	240
111			36			610	470	780
112			38			560	480	840
113			39			500	370	700
114			40			200	110	290
115			41			260	100	200
116			42			380	310	700
117			43			330	120	140
118			44			600	470	650
119			45			240	110	200
120			46			220	120	270
121			47			250	240	520
122			48			540	440	650
123			49			220	430	260
124	○		50			700	450	620
125			51			270	190	220
126			52			590	460	700
127			53			310	320	610
128			54			250	140	150
129			55			770	440	390
130			56			590	450	630
131			57			150	340	250
132			58			350	630	380
133			59			130	280	250
134			60			370	470	510
135			61			570	590	580
136			62			240	300	310
137			63			650	280	480
138	○		64	14	角石	580	520	1,020
139			67			430	350	660
140			68			730	320	600
141			69			720	360	430
142			70			580	330	530
143			71			680	350	550
144			72			530	390	630
145			73			750	380	650
146			74			630	370	530
147			75			440	310	580
148			76			80	180	180
149			77			550	350	520
150			78			500	430	840
151			79			470	380	720
152			80			290	300	650
153			81			580	380	680
154			82			570	390	690
155			83			150	300	240
156			84			440	500	550
157			85			540	360	630
158			86			550	410	700
159			87			450	460	540
160			88			530	330	500
161			89			460	330	550
162			90			530	450	630

第6表 築石管理表 (B面-3)

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
163			91			520	530	940
164			93			680	460	690
165			95			630	490	610
166			96			400	450	680
167			97			450	500	640
168			98			200	230	250
169			99			670	400	610
170	○		100			630	420	710
171			101			510	380	620
172			102			770	520	700
173			103			270	90	220
174			104			180	200	240
175			105			170	200	250
176			106			210	220	410
177			107			440	430	670
178			108			550	530	600
179			109			400	370	600
180			110			460	440	490
181			111			550	420	520
182			112			180	270	250
183			113			550	470	700
184			114			530	450	880
185			115			520	470	400
186			116			310	380	390
187			117			380	440	640
188			118			490	420	700
189			119			500	480	700
190			120			600	530	800
191			121			710	490	730
192			122			380	330	450
193			123			590	550	500
194			124			550	350	660
195			125			300	170	200
196			126			520	370	550
197			127			200	160	170
198			128			230	90	150
199			129			290	120	250
200			130			210	100	190
201			131			620	450	790
202	○		132	60	角石	480	530	1,110
203			135			560	430	700
204			136			670	470	760
205			138			700	460	620
206			139			440	600	590
207			140			270	450	670
208			141			570	410	630
209			142		割れ石	540	390	810
210			143			620	320	600
211			144			530	440	820
212			145			440	420	590
213			146			510	500	680
214			147			400	380	610
215			148			220	150	200
216			149			620	400	800

第6表 築石管理表 (B面-4)

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
217	○		150			550	430	700
218			151			690	500	790
219			152			420	440	710
220			153			500	410	590
221			154			320	520	830
222			155			500	380	680
223			156			360	400	700
224			157			800	360	770
225			158			450	400	730
226			159			650	320	630
227			160			660	400	700
228			161			520	330	550
229			162			630	300	550
230	○		163	74	角石	600	540	1,000
231			165			700	420	480
232			166			660	430	740
233			167		割れ石	130	190	280
234			168		割れ石	300	140	240
235			169			590	430	600
236			170			740	350	570
237			171			130	220	330
238			172		割れ石	550	480	650
239			173		割れ石			
240			174			440	460	660
241			175			630	430	450
242			176			530	420	660
243			177			540	440	760
244			178			680	540	750
245			179			750	500	750
246			180			750	420	610
247			181			370	350	580
248			182			640	390	720
249			183			280	290	350
250			184			490	470	800
251			186			530	540	690
252			187			450	430	570
253			189			650	520	610
254			190			490	390	650
255			191			530	470	760
256			192			520	500	600
257			193			500	460	840
258			196			650	450	670
259			197			630	570	740
260	○		198	91	角石	450	520	960
261	○		200			500	530	700
262			201			530	460	660
263			202			500	400	640
264			203			600	510	640
265			204			560	350	540
266			205			540	460	720
267			206		割れ石	640	440	590
268			207			520	490	700
269			208			480	350	660
270			209			500	430	590

第6表 築石管理表 (B面-5)

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
271			210			490	390	730
272			211			380	200	190
273			212			610	450	530
274			213			540	370	580
275			214			470	330	650
276			215			750	330	670
277			216			210	150	250
278			217			200	150	300
279			218			630	400	550
280			219			600	400	700
281			220			390	400	640
282			221			530	470	680
283			222			600	520	600
284			223			450	440	600
285			224			700	420	770
286			225			490	400	590
287			226			550	500	580
288			228			540	250	680
289			229			610	400	770
290			230			400	340	750
291			231			160	260	320
292			232			420	450	670
293			233			520	510	850
294			234			620	520	780
295			235			580	400	700
296			236			240	260	350
297	○		237	110	角石	600	550	1,130
298			239			680	360	650
299			240			620	360	800
300			241			280	160	220
301			242			520	450	700
302			243			230	230	150
303			244			150	200	260
304			245			590	460	550
305			246			460	310	820
306			247			560	480	570
307			248			570	450	780
308			249			150	280	550
309	○		250			650	580	650
310			251			640	480	680
311			252			200	330	430
312			253			600	510	750
313			254			540	450	650
314			255			190	220	170
315			256			480	350	650
316			257			410	420	780
317			258			400	420	800
318			259			550	290	570
319			260			540	420	650
320			261			500	400	700
321			263			400	400	640
322			264			500	420	630
323			265			480	420	740
324			266			720	460	680

第6表 築石管理表 (B面-6)

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
325			268			570	340	900
326			269			450	350	750
327			270			480	460	600
328			271			630	190	600
329			272			800	380	720
330	○		273	125	角石	570	580	1,350
331			275			750	460	650
332			276			170	270	200
333			277			380	450	720
334			278			190	220	120
335			279			490	350	600
336			280			330	160	350
337			281			570	500	700
338			282			530	400	900
339			283		割れ石	480	340	450
340			284			570	360	750
341			285			510	350	740
342			286			500	550	700
343			287			420	400	570
344			288			460	400	760
345			289			300	420	470
346			290			540	420	620
347			291			600	400	650
348			292			300	150	220
349			293			520	360	700
350			294			480	460	580
351			295			380	480	740
352			296			600	370	700
353			297			540	380	630
354			298			530	490	800
355			299			210	230	180
356	○		300			670	380	700
357			301			570	600	600
358			302			480	400	650
359			303			120	300	200
360			304			600	460	700
361			305			500	470	600
362			306			450	300	650
363			307			570	400	750
364			308			450	470	700
365	○		400	142	角石	560	600	1,100
366			402			500	360	820
367			403			420	400	650
368			404			500	300	660
369			405			400	400	680
370			406			590	560	730
371			407			600	350	520
372			408			300	420	520
373			409			710	460	930
374			410			330	510	530
375			411			130	250	200
376			412			600	440	570
377			413			170	250	300
378			414			420	350	630

第6表 築石管理表 (B面-7)

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
379			415		350	200	250	
380			416		440	340	740	
381			417		560	360	650	
382			418		420	370	650	
383			419		580	350	640	
384			420		380	300	600	
385			421		250	200	230	
386			422		540	510	600	
387			423		300	140	170	
388			424		450	380	900	
389			425		530	400	730	
390			426		570	450	670	
391			427		160	240	470	
392			428		500	500	600	
393			429		530	340	505	
394			430		200	300	320	
395			431		500	340	580	
396			432		520	520	650	
397			433		500	500	600	
398			434		530	380	650	
399			438		600	400	650	
400			439		600	450	980	
401			440		420	520	600	
402			441		400	400	500	
403			442		530	360	520	
404			443		530	580	650	
405			444		410	370	650	
406			445		600	500	800	
407			446		300	210	300	
408			447		250	270	280	
409			448		400	430	800	
410			449		570	370	600	
411	○		450		560	400	720	
412			451		600	430	650	
413			452		480	400	700	
414			454		580	400	750	
415			455		500	350	700	
416			456		500	420	750	
417			457		500	450	650	
418			458		300	180	230	
419			459		680	350	530	
420			460		460	350	560	
421			461		400	420	660	
422			463		480	340	550	
423			464		600	460	650	
424			465		560	410	850	
425			467		470	530	800	
426			468		700	500	660	
427			469		480	430	550	
428			470		370	400	750	
429			474		500	400	640	
430			476		350	750	800	
431			477		570	800	1,013	
432			478		520	400	700	

第6表 築石管理表 (B面-8)

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
433			479		600	400	750	
434			480		570	570	600	
435			481		560	400	750	
436			482		430	450	600	
437			484		370	500	700	
438			485		900	600	700	
439			486		470	430	750	
440			487		550	460	780	
441			488		480	300	750	
442			489		520	350	700	
443			490		500	400	730	
444			491		530	840	800	
445			492		550	600	550	
446			493		450	400	600	
447			494		450	420	730	
448			495		200	260	300	
449			496		520	600	850	
450			497		360	630	850	
451			498		430	600	600	
452			499		430	450	600	
453	○		500		450	500	730	
454			501		320	560	650	
455			505		650	800	620	
456			506		370	450	650	
457			507		850	600	900	
458			508		640	440	540	
459			509		520	340	640	
460			510		650	340	800	
461			511		440	500	800	
462			512		600	500	900	
463			513		270	400	500	
464			514		600	500	1,000	
465			515		500	570	650	
466			516		600	330	750	
467			517		500	480	560	
468			518		440	700	550	
469			519		400	420	570	
470			520		540	420	700	
471			521		450	500	600	
472			522		430	530	630	
473			523		300	600	700	
474			524		460	600	800	
475			525		500	700	650	
476			526		400	340	600	
477			527		420	600	700	
478			528		400	530	580	
479			529		450	430	700	
480			530		330	180	400	
481			531		400	560	800	
482			532		380	420	800	
483			537		520	800	1,050	
484			538		500	600	1,050	
485			539		480	410	600	
486			540		450	600	600	



第6表 築石管理表 (B面-9)

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
487			541		450	540	950	
488			542		270	470	960	
489			543		520	570	800	
490			544		340	230	430	
491			545		480	560	800	
492			546		340	560	500	
493			547		400	550	750	
494			548		360	590	700	
495			549		320	450	800	
496	○		550		340	410	550	
497			551		580	780	720	
498			552		290	420	700	
499			553		370	420	800	
500			554		400	480	750	
501			555		400	480	750	
502			556		430	460	700	
503			557		370	340	450	
504			558		460	500	900	
505			559		400	500	670	
506			560		550	700	750	
507			561		350	500	800	
508			562		370	550	670	
509			563		380	630	600	
510			564		360	530	670	
511			569		370	630	540	
512			570		550	850	750	
513			571		420	490	600	
514			572		400	570	620	
515			573		400	440	600	
516			574		420	400	600	
517			575		400	470	600	
518			576		350	500	720	
519			577		500	620	730	
520			578		370	630	550	
521			579		450	470	700	
522			580		560	650	760	
523			581		300	450	500	
524			582		500	550	650	
525			583		300	430	650	
526			584		440	530	800	
527			585		500	400	650	
528			586		400	320	400	
529			587		300	480	700	
530			588		430	460	850	
531			589		500	520	600	
532			590		330	500	620	
533			591		350	550	700	
534			592		340	520	670	
535			593		460	530	700	
536			594		600	630	630	
537			595		450	550	530	
538			596		410	500	700	
539			597		510	470	800	
540			598		310	500	630	

第6表 築石管理表 (B面-10)

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
541			599		320	440	700	
542	○		600		440	500	900	
543			605		500	620	800	
544			606		360	270	620	
545			607		450	540	800	
546			608		360	450	620	
547			615		360	520	700	
548			616		380	660	650	
549			617		350	700	630	
550			618		200	350	600	
551			619		550	600	800	
552			620		430	630	650	
553			621		300	540	850	
554			622		200	280	360	
555			623		530	550	700	
556			625		420	530	780	
557			626		370	430	620	
558			627		350	600	570	
559			628		480	430	700	
560			629		520	640	800	
561			630		600	530	550	
562			631		430	580	720	
563			632		370	470	700	
564			634		520	560	650	
565			636		320	500	850	
566			637		450	550	1,000	
567			638		430	450	700	
568			639		480	530	730	
569			646		500	600	750	
570			647		450	600	650	
571			648		400	650	600	
572			649		400	450	600	
573	○		650		700	530	550	
574			651		410	540	550	
575			652		550	540	720	
576			653		300	260	350	
577			654		420	600	730	
578			655		400	460	650	
579			656		450	540	850	
580			657		180	250	240	
581			658		400	500	730	
582			659		420	450	600	
583			674		400	600	630	
584			675		430	600	570	
585			676		460	670	670	
586			680		430	500	630	
587			681		500	400	730	
588			682		450	380	850	
589			683		300	330	650	
590			684		370	580	750	
591			685		350	570	800	
592			686		170	280	370	
593			687		400	620	670	
594			698		310	500	550	

第6表 築石管理表（B面－11、C面－1）

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
595			705			350	570	700
596			706			310	310	640
597			707			400	440	800
598			708			300	540	600
599			709			410	570	920
600			710			400	600	650
601				2		730	320	630
602				3		850	340	450
603				4		610	340	660
604				5		600	320	570
605				6		800	350	420
606				7		520	380	450
607				8		920	430	330
608				9		490	230	630
609				10		500	250	490
610				11		710	260	550
611				12		840	370	680
612				13		610	320	760
613				15		270	130	270
614				16		290	280	700
615				17		560	520	670
616				18		570	440	500
617				19		350	100	230
618				20		310	150	210
619				21		610	450	520
620				22		560	470	520
621				23		380	360	650
622				24		600	440	700
623				25		450	300	600
624				27		510	350	620
625				28		550	370	520
626				29		320	280	650
627				30		790	250	500
628				31		780	300	430
629				32		550	560	620
630				33		810	370	460
631				34		540	370	690
632				35		500	390	700
633				36		440	410	600
634				37		270	280	460
635				38		500	440	560
636				39		570	420	500
637				40		470	280	450
638				41		390	130	410
639				42		470	370	440
640				46		600	360	640
641				47		470	350	540
642				48		620	380	790
643				49		550	360	770
644	○			50		150	200	350
645				51		510	460	730
646				53		470	430	700
647				54		530	370	470
648				55		580	330	740

第6表 築石管理表 (C面-2)

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
649				56		430	430	480
650				57		390	310	800
651				58		660	430	470
652				59		580	360	640
653				61		440	540	550
654				62		520	440	570
655				63		540	330	600
656				64		660	440	560
657				65		460	550	740
658				66		420	430	650
659				67		500	350	630
660				68		540	410	590
661				69		400	330	600
662				70		430	480	460
663				71		540	460	700
664				72		590	530	580
665				75		570	340	630
666				76		470	400	790
667				77		530	460	550
668				78		570	530	560
669				79		350	430	660
670				80		710	430	740
671				81		520	320	560
672				82		300	270	450
673				83		500	380	590
674				84		250	350	590
675				85		630	480	690
676				86		860	530	920
677				87		580	440	720
678				88		300	180	380
679				89		460	400	700
680				92		360	500	720
681				93		420	370	640
682				94		240	220	340
683				95		520	420	780
684				96		350	340	600
685				97		550	370	450
686				98		480	440	550
687				99		190	320	420
688	○			100		650	500	700
689				101		730	410	590
690				102		720	450	530
691				103		380	320	800
692				104		610	540	760
693				105		580	350	510
694				106		240	200	260
695				108		320	450	520
696				109		520	500	640
697				111		700	450	720
698				112		620	360	640
699				113		500	480	910
700				114		580	430	570
701				115		380	410	710
702				116		680	530	500

第6表 築石管理表 (C面-3)

通し番号	写真管理	管理番号			備考	a 辺(mm)	b 辺(mm)	c 辺(mm)
		A 面	B 面	C 面				
703				117	割れ石	630	510	650
704				118		570	330	830
705				119		630	450	640
706				120		330	350	670
707				121		700	320	740
708				122		440	350	610
709				126		400	280	300
710				127		720	390	700
711				128		440	440	520
712				129		440	410	670
713				130		470	440	710
714				131		550	470	590
715				132		490	630	680
716				133		480	420	600
717				134		450	430	490
718				135	割れ石	200	220	250
719				136		500	430	650
720				137		570	410	630
721				138		640	640	890
722				143		350	500	910
723				144		700	600	780
724				145		410	600	810
725				146		810	540	800
726				147		550	500	800
727				148		450	440	700
728				149		570	450	870
729				150		580	430	700
730				151		460	510	740
731				152		400	420	840
732				155		690	540	560
733				156		280	340	530
734				157		720	480	830
735				158		490	390	780
736				159		510	420	650
737				160		600	350	570
738				161		440	450	630
739				162		510	510	840
740				163		650	570	800
741				167		260	320	690
742				169		480	460	550
743				170		460	470	600
744				171		570	490	830
745				172		540	470	600
746				173		690	460	670
747				174		430	550	790
748				175		500	460	750
749				177		620	430	590
750				179		590	320	700
751				180		400	380	730
752				181		530	500	600
753				182		490	400	700
754				183		520	320	600
755				184		450	300	640



A面完成



B面完成



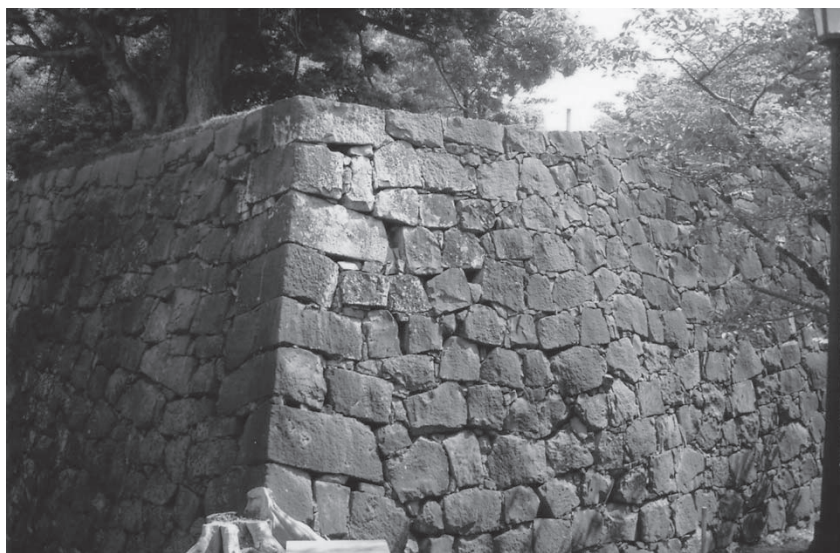
C面完成



A面着工前



B面着工前



C面着工前



解体範囲明示B面



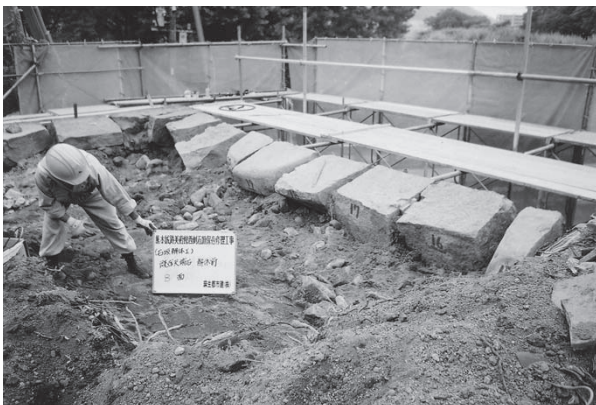
墨打ち状況B面



番号打ち状況B面



天端掘削状況A B面



天端掘削状況B C面



築石検測状況B面



築石検測状況C面



築石番号付けB面





角石解体状況 B C 面



掘削完了検測 B 面



掘削完了検測 B 面



角石解体状況 A B 面



角石解体状況 A B 面



裏込栗石採取状況 B 面



築石保管状況



栗石選別状況



丁張設置検査状況 C 面



鉛板設置状況 B 面



築石及び裏込栗石検測 B 面



裏込栗石転圧状況 B 面



角石据付状況 A B 隅部



角石据付状況 A B 隅部



胴込栗石充填状況 B C 面



裏込栗石検測 B 面



裏込栗石転圧状況C面



天端石据付A面



角石天端石据付A B面



裏込栗石敷均検測B C面



砕石転圧状況A B面



吸出し防止シート敷設A B面



覆土敷均し状況A B面



張芝完了A B面

## 2. 平成15年度（元札櫓御門跡南側石垣）の事業

### (1) 事業の目的と経過

#### a. 元札櫓御門跡の概要

##### 歴史資料

当該地は熊本市本丸南の竹の丸の北側のほぼ中央に位置する。元札櫓御門は、竹の丸から飯田丸、天守へ向う屈折した通路のうち、最初に通過する櫓門である。「御城内御絵図」（熊本市蔵）によると、元札櫓御門は梁間3間、桁行10間の西向きの櫓門で、北側の妻部から西へ14間の塀が矩折れして続き、要人御櫓に接続している。また、石塁南側には東に長さ6間の塀があり、東端は梁間3間、桁行4間半の茶御櫓が描かれる。茶御櫓東端から北へ長さ24間の塀が東竹の丸石垣まで続いている。

元札櫓御門を通過し、北へ向うと札櫓御門と呼ばれる三階櫓門があり、独立した石垣上に建つ西竹の丸五階櫓と飯田丸を繋いでいる。寛永6～8年（1629～1631）頃の「熊本屋鋪割下絵図」（熊本県立図書館蔵）には、元札櫓御門・札櫓御門にあたる部分に櫓門の描写が確認でき<sup>1)</sup>、両者は加藤期にすでに櫓門として成立している。享保頃の「肥州録」には、「西竹丸古札櫓御門」の名称が見えるが<sup>2)</sup>、明和6年（1769）頃の「御城内御絵図」では「元札櫓御門」となっている。

通常、城内の通行は各所の門や番所で規制され、他城郭においても、掃除・屎尿処理を行なう領民や、城普請に携わる職人の通行を許可する門札が発給されている<sup>3)</sup>。熊本城においては、当該の櫓門も本来は札を改める場所であったと考えられるが、その機能が「札櫓門」に移ったことから「元札櫓門」と称されたと想定される。

明治9年（1876）の「城郭之図」（国立国会図書館蔵）作成時点では、元札櫓御門が存在していたことが判明するが<sup>4)</sup>、その後解体されたとみえる。

##### 石垣

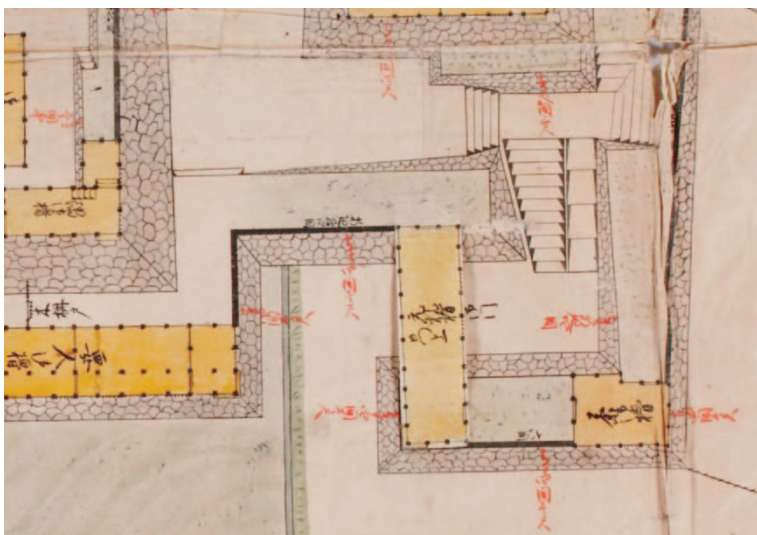
竹の丸から本丸へ向う通路には南から元札櫓御門、五階櫓、札櫓御門が連続し、周囲の高石垣上には通路を睥睨する格好で多くの櫓や塀が取り囲んでいた。元札櫓御門の台は、その連続する枡形の最初に位置する虎口を構成した石垣である。門の南側土台となる石塁は、五階櫓の南外方に左腕を大きく振り出した形となっている逆L字形の平面をもつ。石塁の高さは6.7m、石塁上面の幅は上端7.2m下端10.1m、南北の長さ41m、東西の長さ26.6mである。元札櫓御門は石塁の西端に位置した3間×10間規模の櫓門で、石塁東端には平屋で石落しを持った3間×4間半の「茶御櫓」が載る。この石塁は、東竹の丸の石垣に遅れて造成された石垣であることが、両石垣が接する入隅によって確認できる。

門の台となった石塁の特徴を述べる。隅角の進入角は北側が67度、南側が72度で、多くが算木積みで、長方体に成形され丸面取りした角石を使用するが、左右の控えは小さく独立した角脇石がなく築石を兼ねている場合がほとんどである。築石の勾配は内側が68度で外側が77度となっている。角石と同等の高さの直方体に近い形状の割石を主体とするため、上下での間詰石はほとんどなく左右に縦石の間詰石を多用する。石塁屈曲部の入隅は交互に築石を重ねており、石塁全体が同時期に普請されていると考えられる。

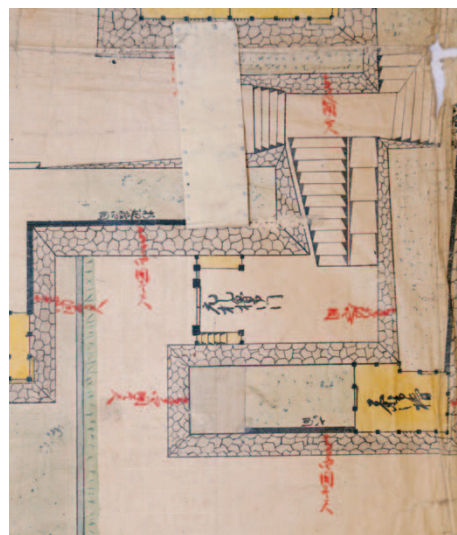
ただし、この石塁北面下部にはより大型の不整形粗割石と塊石の間詰石で積まれた布崩し積み石垣が最大4mの高さで内包されているので、先行する石塁が存在したことが明らかである。また、西面石垣の上部3段は築石が直方体となり左右にも間詰石をほとんど使用しないこと、さらに南北方向石塁内側の中程にある雁木（石段）南の隅角周辺は角石に面取りがなく間詰石をほとんど使用していない。この2箇所は細川時代以降での修理が想定される。

〔註〕

- 1) 北野隆『城郭・侍屋敷古図集成 熊本城』至文堂 1993 10頁
- 2) 森下功・松本寿三郎編『肥後国地誌集』青潮社 1980
- 3) 近藤浩二「尼崎城門の領民通行—村々へ渡された『御門通札』—」『地域紙研究 尼崎市史研究紀要』38(2)号 尼崎市立地域研究史料館 2009、白峰旬「文化期金沢城二の丸再建工事期間中における城門の通行規制に関する考察—『御造営方日並記』の内容分析から—」『別府大学紀要』50号 2009
- 4) 鶴嶋俊彦「新史料『熊本城郭及市街之圖』」『熊本城調査研究センター年報1 平成25・26年度』熊本城調査研究センター 2015 39頁



第23図 「御城内御絵図」  
元札櫓御門上



第24図 「御城内御絵図」  
元札櫓御門

#### b. 石垣の現状と工事に到る経緯

櫓門跡の石垣は門部及び茶御櫓、塀部分を含めて5面で構成されており、高さは凡そ6mである。石垣は2箇所の出隅部は算木積みで入り隅部は噛み合わせとなっており、平部は布目に近い乱れ積みで構築されている。築石は全て安山岩で構築されているが、石垣南面の天端から3石目付近には一部に島崎石（安山岩）が採用されており、時期の特定は困難であるが、何らかの理由で改修されていると思われる。

元札櫓御門跡南側の石垣は経年による孕みや間詰め石の落下が顕著であり、天守台等へ到る主要な見学通路であることから、観光客等の安全を確保する必要がある。

以上のことにより、櫓台南側について、上面の遺構調査及び石垣の孕みや間詰め石の落下が顕著な部分を中心として解体修理工事等を実施した。

##### ①現状変更等

文化財保護法による現状変更等許可申請日 平成15年12月18日

許可日 平成16年1月22日

##### ②文化庁補助事業

文化庁補助事業名 特別史跡熊本城跡 記念物保存修理事業（石垣修理）

補助申請日 平成15年4月15日

補助金交付決定日 平成15年5月30日

なお、本事業は本丸御殿跡の石垣保存修理工事と合せて実施したものである。

計画変更の経過と理由

(変更理由)

当該事業は本報告の元札櫓御門跡及び本丸御殿跡の2ヶ所を実施しており、本計画変更は本丸御殿跡での計画変更が主要なものであるため、詳細な記述は省略した。なお、元札櫓門跡では解体範囲を拡張している。

計画変更承認申請日 平成16年3月8日

計画変更承認日 平成16年3月11日

実績報告日 平成16年3月31日

c. 事業概要

①事業費（第7表）

収入の部（単位：円）		支出の部（単位：円）		備 考
区 分	収 入 額	区 分	支 出 額	
所有者等負担額	28,900,000	調査経費（賃金等）	652,948	
国庫補助額	32,500,000	委託費	1,891,050	
県補助額	3,600,000	工事請負費	61,990,884	
市町村補助額	0	需用費	465,118	
その他	0			
合計	65,000,000		65,000,000	

※本表事業費のうち工事請負費には本丸御殿跡の石垣保存修理分を含む。

②測量設計

委託業務名 熊本城跡石垣保存修理測量・設計業務委託  
 契約期間 自平成15年7月29日 至平成15年8月27日  
 契約日 平成15年7月29日  
 完成日 平成15年8月27日  
 検査日 平成15年8月27日  
 業務概要 地形測量、石垣立面図作成、工事設計

③保存修理工事

工事名 特別史跡熊本城跡石垣保存修理工事  
 工事期間 自平成15年9月16日 至平成16年3月15日  
 契約日 平成15年9月16日  
 変更契約日 平成16年3月4日  
 工事完成日 平成16年3月18日  
 工事検査日 平成16年3月31日

※本工事は元札櫓御門跡及び本丸御殿跡と合わせて実施している。

④発掘調査

遺構調査期間 自平成15年12月4日 至平成15年12月16日

## (2) 発掘調査

### a. 調査の方法 (第25、26図)

櫓台の石垣にはらみがみられたため、石垣の解体修理を行った。この解体修理に先立ち、櫓台上面の発掘調査を行った。櫓台は、平面逆L字型を呈し、東西幅約24mで、東端から北へ折れる。建物は解体・撤去されており、調査前は石畳のみの状態であった。発掘調査は人力により表土から手掘りで行った。調査対象は、櫓台上面であり、「門」部分の調査は行っていないため、以下では元札櫓と記述する。遺物は「元札櫓」「茶御櫓」「元札・茶御櫓間」「茶御櫓北」で分けて層位毎に取り上げている。図面作成作業は、広域グリッドを設定し行った。調査期間は、平成15年11月28日から、同年12月16日である。

### b. 調査の成果

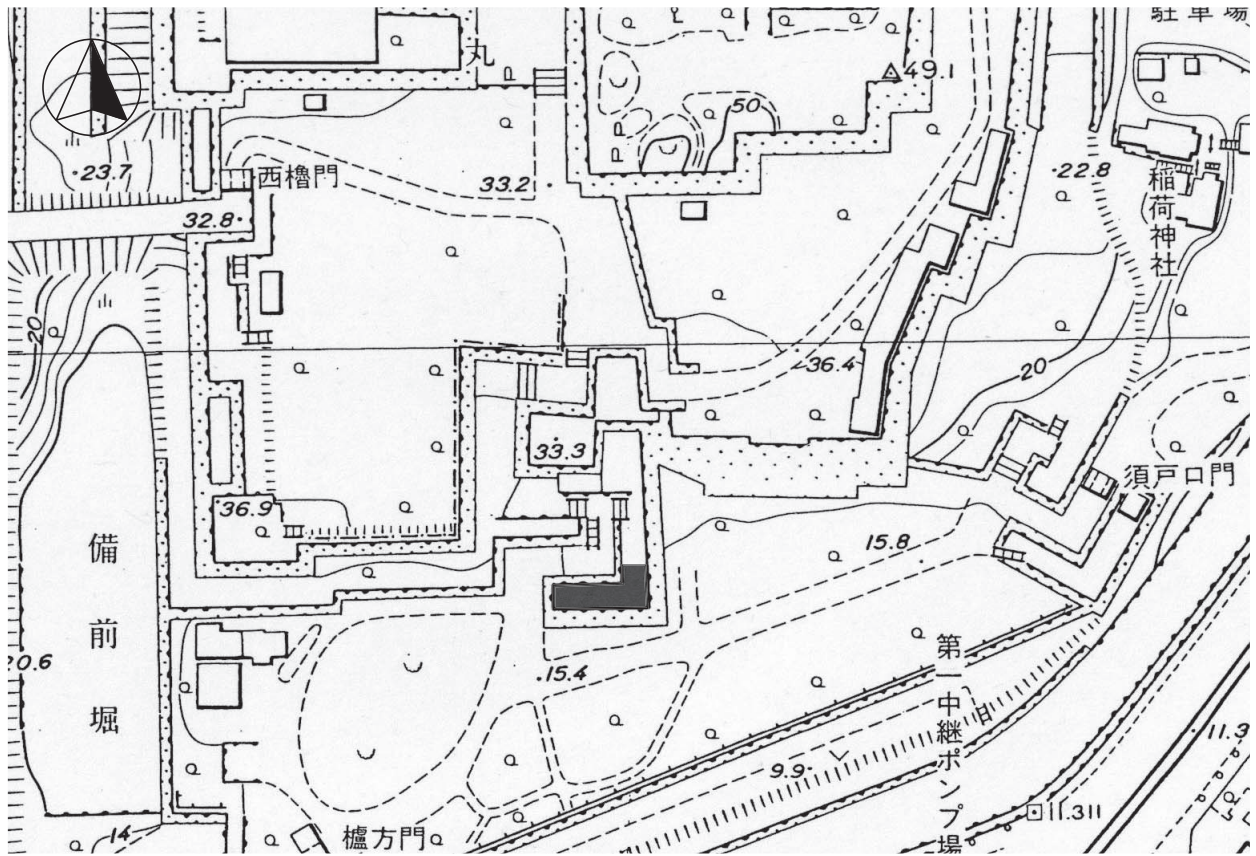
#### 遺構 (第27～37図)

元札櫓は、石垣の輪どりによって羽子板状に西に開く櫓台の西端の上に乗る格好である。石垣の西端は南北幅約7.3mで、西端から5m東側で礎石列を確認した。礎石列部分の南北幅は6.45m。調査前の地表面下40～60cmでぐり石を確認した。ぐり石上面のレベルは21.8m前後で、石垣沿いは浅くなる。石垣内側沿いのぐり石は、やや大振りで人頭大ものが使用されている。ぐり石上に堆積していた土は整然と堆積し、全体的に軟質であり、石垣との天端合わせのための客土と判断している。表土上にみられた安山岩はこの層の中で収まる。よって、元位置ではないことが確実であり建物の礎石ではない。礎石の可能性があるものは、ぐり石上面で安定した一石だけである。櫓台の石垣の観察では、西面で上から3段、南北両面で上から2・3段は積み直しが行われている。これがどの時期に行われたのかは不明瞭だが、石垣内側沿いのぐり石は積み直しの際に置かれたものであろう。礎石列は、当初は安山岩のみで構成されていたが、安山岩や凝灰岩を挿石している。石垣天端石と当初の礎石列の高低差は、南側で75cmである。

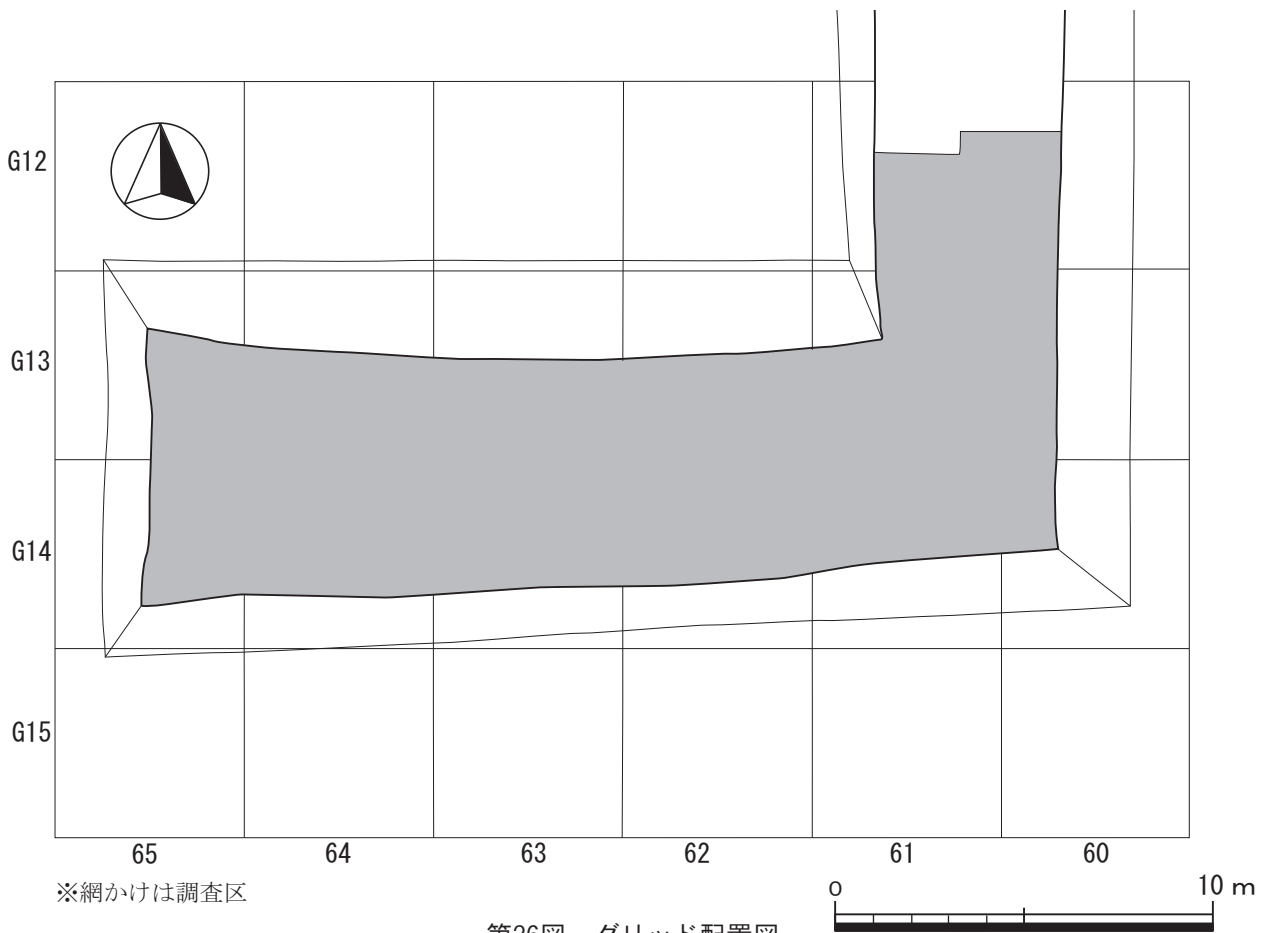
茶御櫓は、櫓台の東端にあった建物で、3間×4間半の東西棟である。「御城内御絵図」では、北壁が西から2間で鍵状に折れ東へ2間半続く建物で、北壁に入口が設けられている。調査の結果、櫓台上面はいびつな長方形を呈し、東西約9m、南北約6mで、東端から約8.5m西側で礎石列を確認した。表土の厚さは、現地表下30～40cmで、表土の下から土間状の地業土を確認した。地業土は30cm前後の厚さで、しまりの強い土が版築状に貼られていた。地業土下はぐり石である。ぐり石は、こぶし大が多いが、南側石垣沿いでは人頭大のものが使われている。礎石列は安山岩で、挿石はないが石垣天端とは高低差がある。南側の高低差は顕著で、約60cmである。表土中に安山岩が数石あったが、安定したものはない。元位置ではなく、礎石ではないと判断している。北側の石垣沿いには3石の平らな石が据えられている。芯心距離で120cmの等間隔である。鍵状に折れた部分に関連する礎石の可能性がある。

「御城内御絵図」では、元札櫓と茶御櫓の間は、南側に塀が設けられている。元札櫓・茶御櫓の礎石列間は、表土下に茶御櫓下と同様の地業土がみられた。同じような質の土が版築状に貼られていたが、茶御櫓に比べかなり分厚く70～80cmの厚さがある。地業土は中央部分が深く、西と東の礎石列に向けて船底上に浅くなる。地業土下はぐり石である。南側石垣沿いの地業土上面には、3ヶ所のぐり石の集中がみられた。壁の控え柱の根固石と思われる。集中部の平面形は、直径130～150cmほどのいびつな円形である。集中部の芯心距離は300cmと360cmで等間ではないが、礎石列間が約10mであることから、元札櫓東壁－控え柱－控え柱－控え柱－茶櫓西壁が1間(2m)－1.5間(3m)－1.5間－1間で割付であった可能性も想定できる。茶御櫓の北側からも地業土が検出され、東側石垣沿いに2ヶ所のぐり石集中がみられた。集中部の芯心距離280cmである。東側壁の控え柱の根固石であろう。地業土の下位からは多量の瓦が出土している。九曜紋瓦も出土しており、今回確認した地業土が貼られたのは細川期以降である。

元札櫓は、礎石も明確ではなく、現表土を入れる際に攪乱された可能性もある。茶御櫓は、地業土が残存していたが、礎石は明瞭ではない。両櫓ともに東柱の配置は不明である。

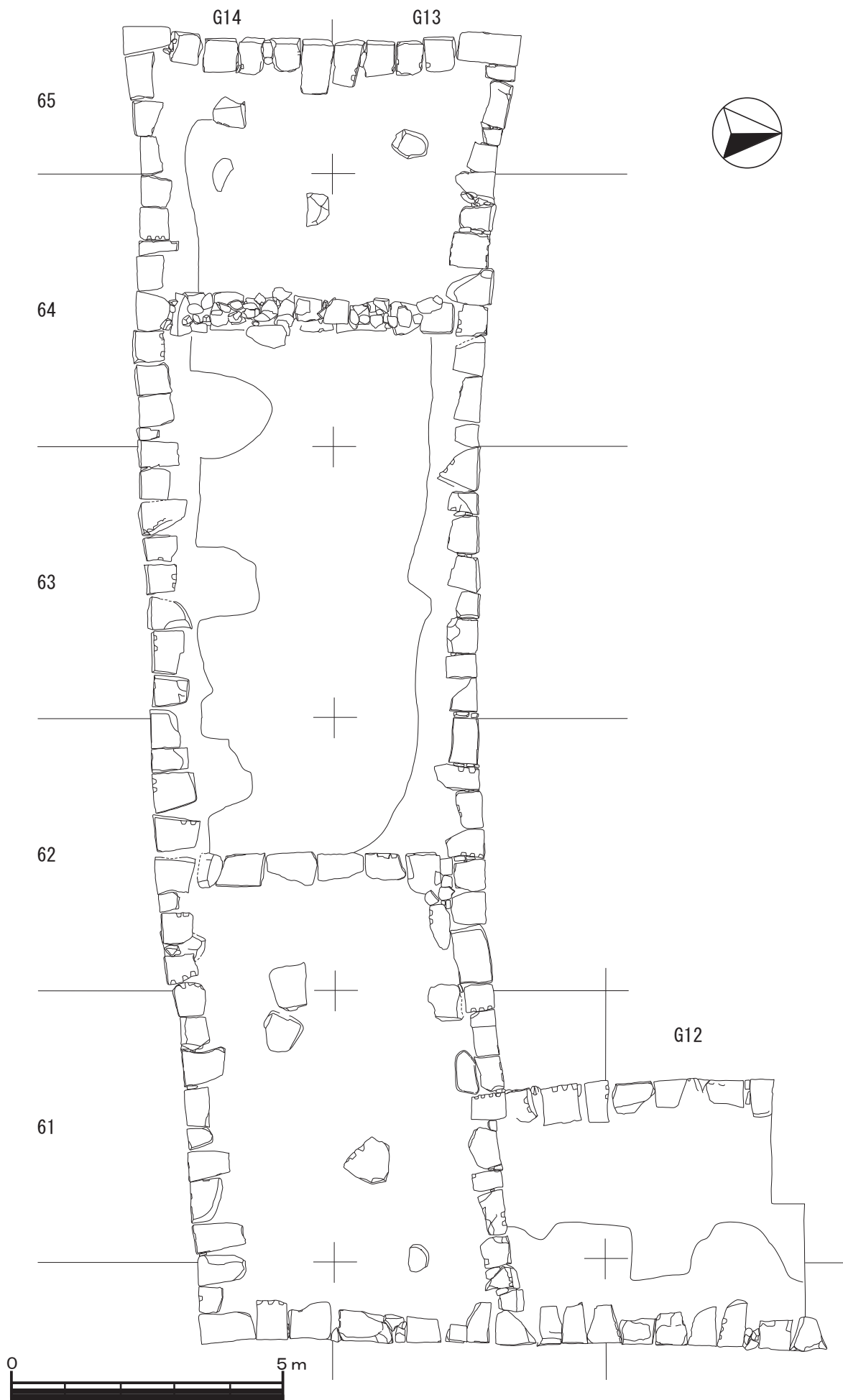


第25図 調査区位置図 (1 / 2,500)

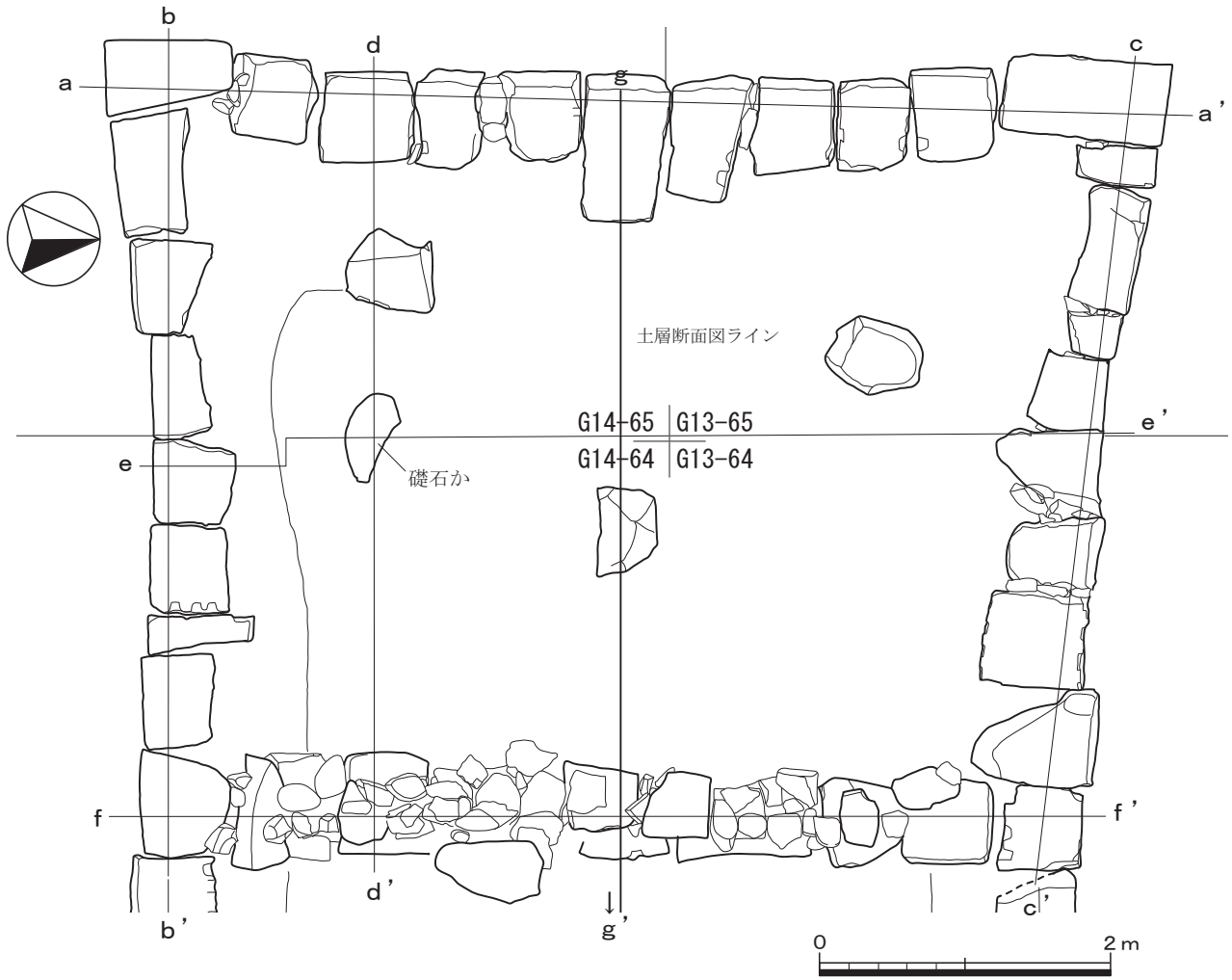


第26図 グリッド配置図

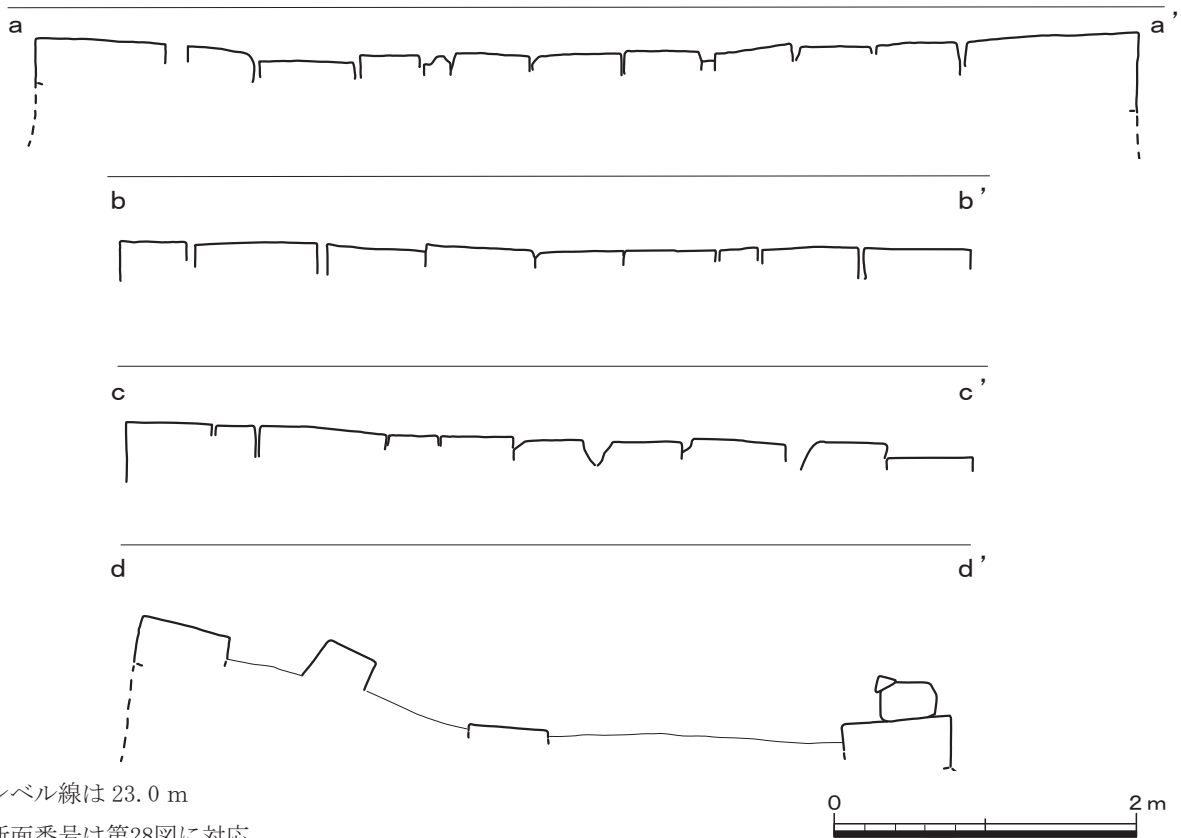




第27図 遺構実測図 元札櫓全体図

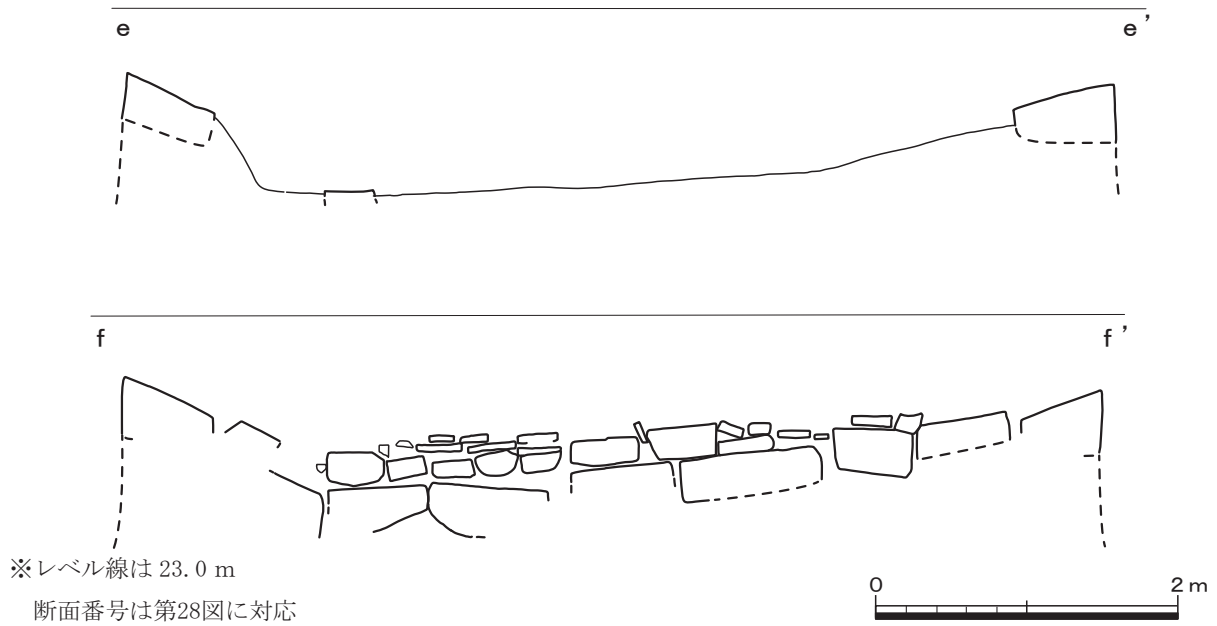


第28図 遺構実測図 元札櫓平面図

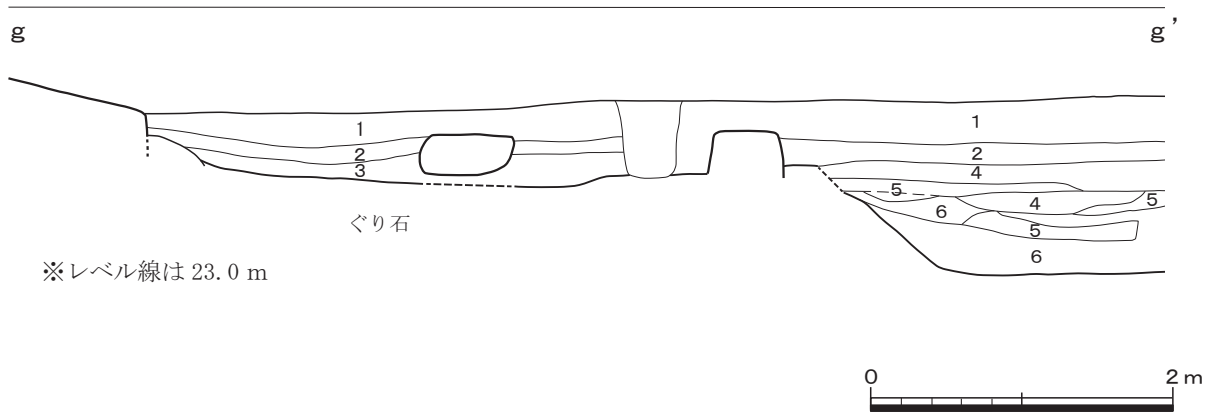


※レベル線は 23.0 m  
断面番号は第28図に対応

第29図 遺構実測図 元札櫓断面図 1



第30図 遺構実測図 元札櫓断面図2



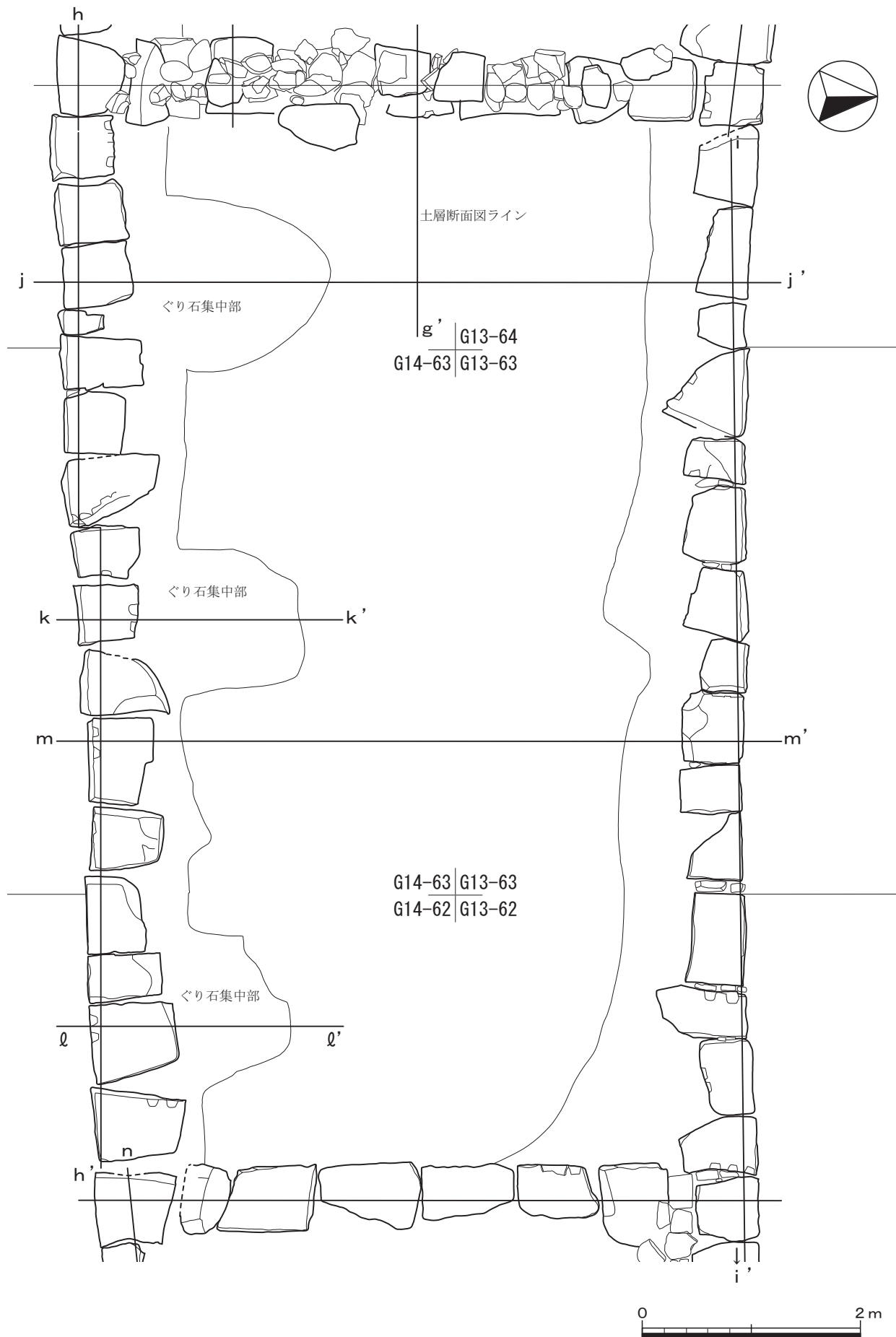
1. 黒褐色土  
現在の表土。現代の遺物。近世瓦を多く含む。しまり・粘性弱い。
2. 黒色土  
1に近似した土。炭化物を多く含む。  
元札櫓と茶御櫓付近にみられ、間にはほとんどみられない。
3. 暗褐色土  
しまり・粘性やや強い。瓦をまばらに含む。

※1～3は近現代の客土

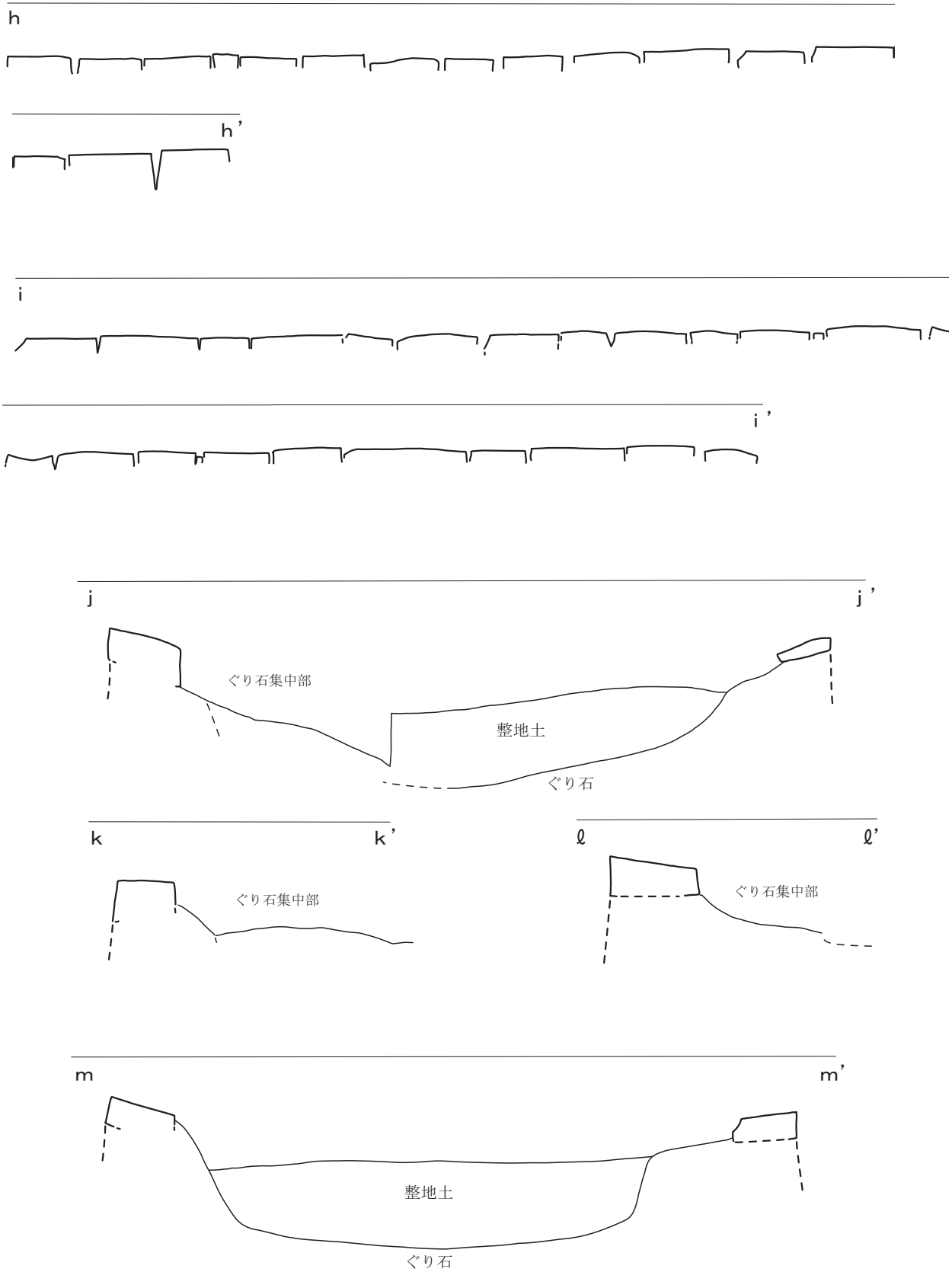
4. 暗褐色土  
粘性強く、砂質感も強い。褐色土がブロック状に入る。
5. 灰色土  
粘性強く、砂質感も強い。小礫がやや目立つ。
6. 4・5が混在した土。  
近世瓦を多く含む。

※4以下は整地土。全体的にしまりが強く、櫓台の本来の表土と判断している。1～3をI層、4以下をII層として遺物を取り上げている。

第31図 遺構実測図 土層堆積状況



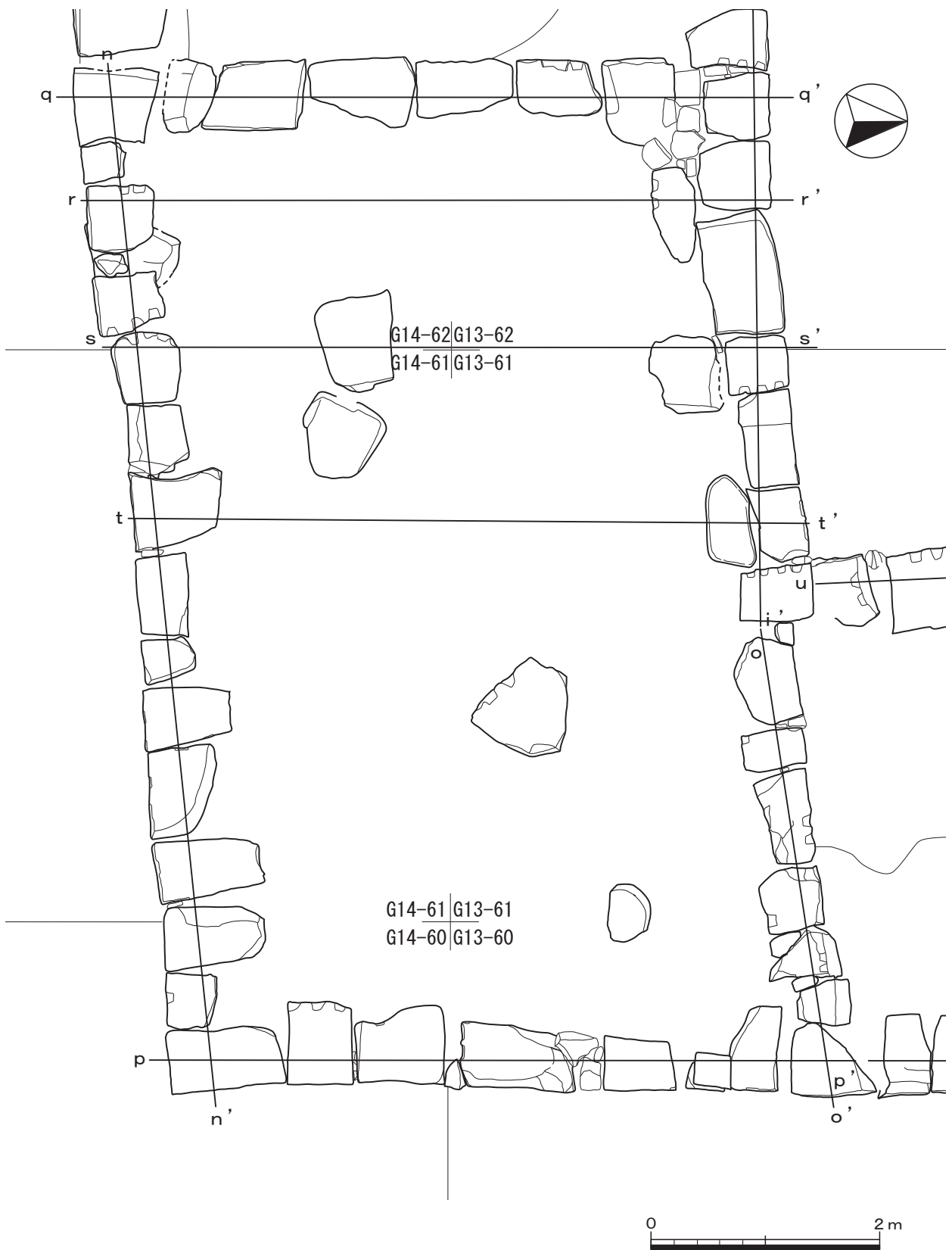
第32図 遺構実測図 元札櫓・茶御櫓間平面図



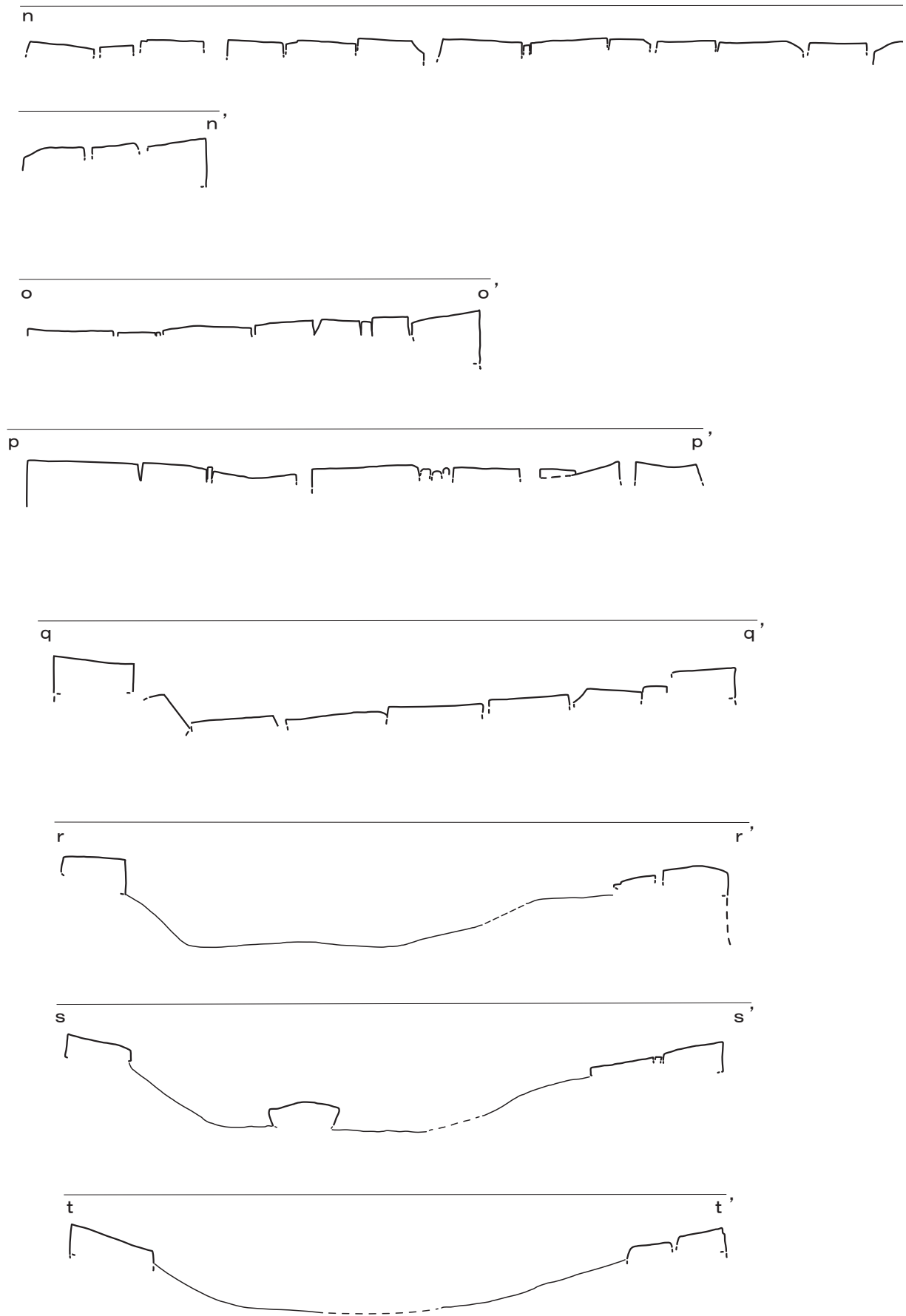
※レベル線は 23.0 m  
 断面番号は第32図に対応



第33図 遺構実測図 元札櫓・茶御櫓間断面図



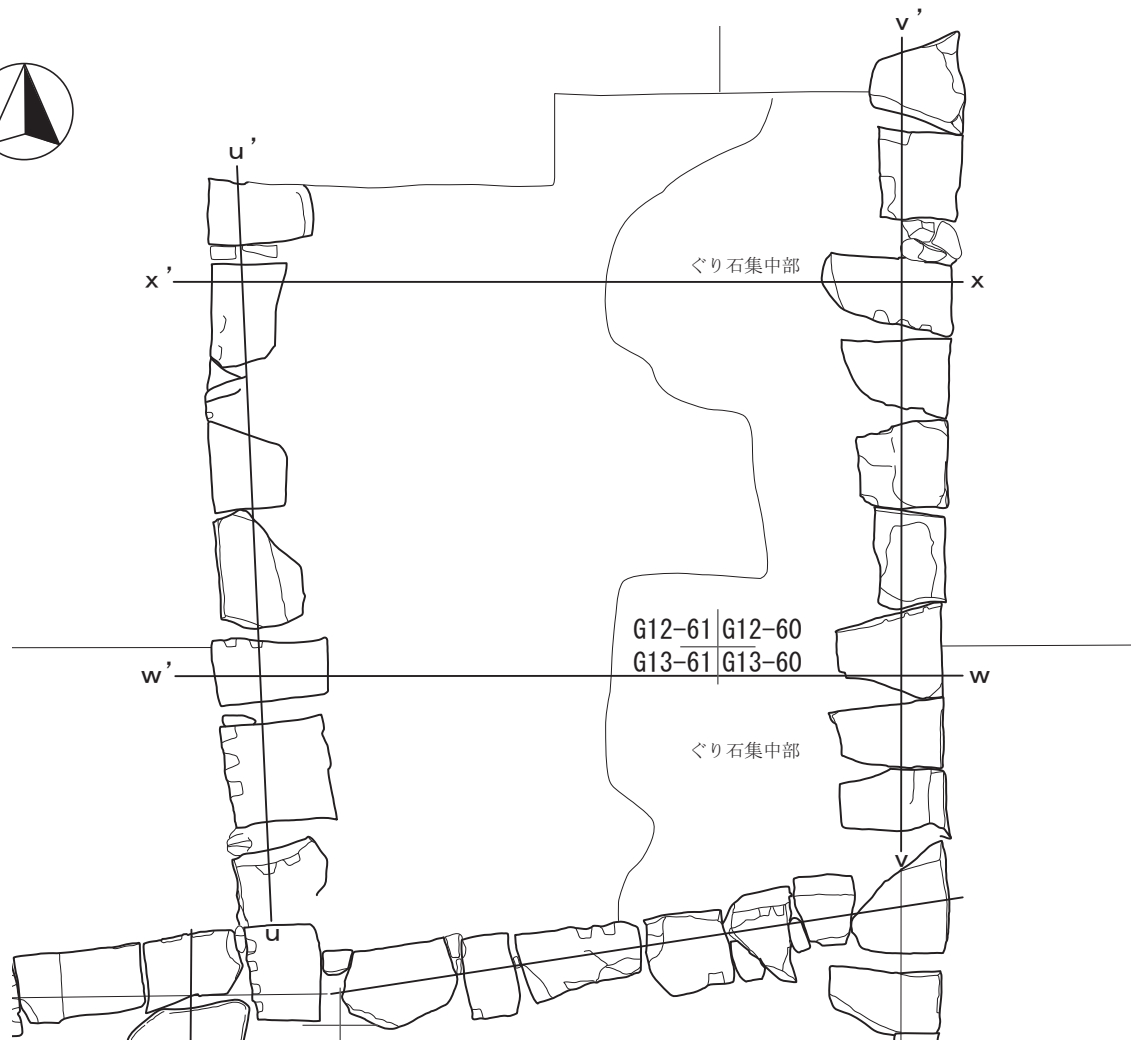
第34図 遺構実測図 茶御櫓平面図



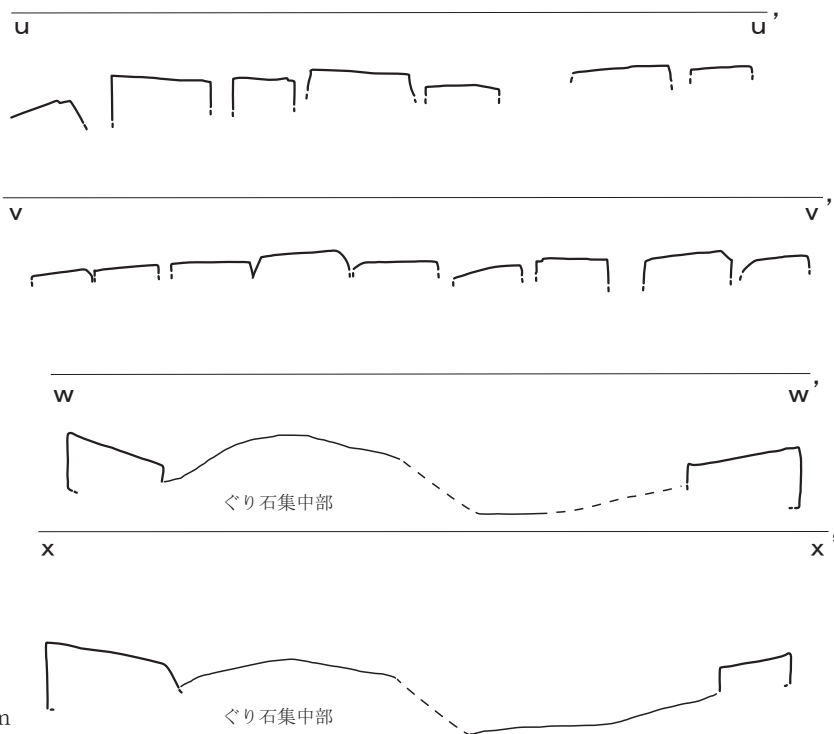
※レベル線は 23.0 m  
 断面番号は第34図に対応



第35図 遺構実測図 茶御櫓断面図



第36図 遺構実測図 茶御櫓北平面図



※レベル線は 23.0 m  
断面番号は第36図に対応

第37図 遺構実測図 茶御櫓北断面図







元札櫓御門（西より）



元札櫓・茶御櫓（東より）



元札櫓（東より）



元札櫓・茶御櫓間整地層半裁状況



整地層内桔梗紋瓦出土状況



整地層版築状況



茶御櫓（西より）



茶御櫓北（南より）

遺物

①土器・陶磁器類（第38図1～5，第8表）

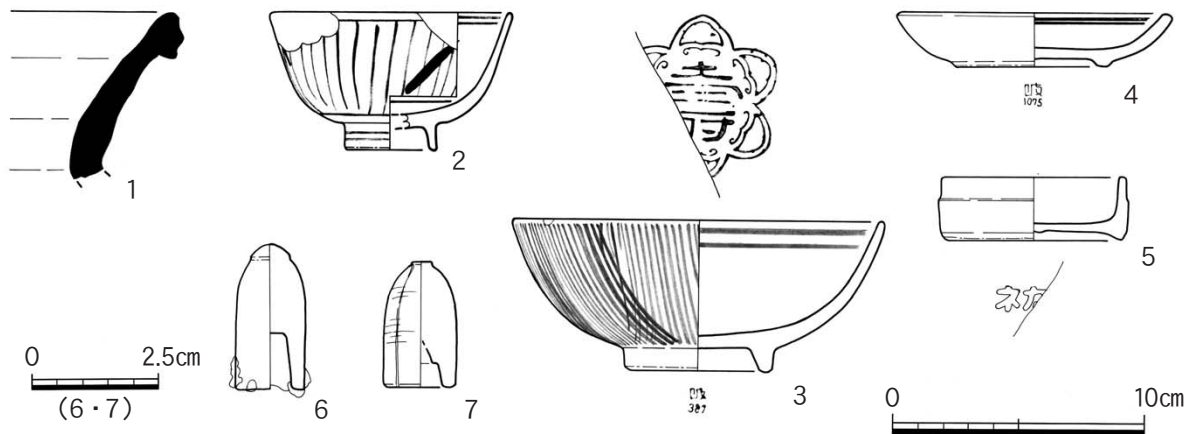
1は須恵器甕の口縁部片である。頸部は接合面で欠折している。2は肥前系磁器染付の端反碗である。胎土は灰色味が強く、呉須は暗青緑色を呈する。3・4は統制陶磁器である。3は磁器釉下彩大碗で、外面には酸化クロムにより18本1単位の縞文を、内底には化学コバルト、ゴム版絵付けにより意匠化された寿字文が施される。高台内には「岐987」銘（化学コバルト・ゴム版）が認められ、これは岐阜県駄知陶磁器工業組合の久野賢一を示す統制番号である<sup>1)</sup>。4は軍用食器の磁器釉下彩皿で、内面口縁部に酸化クロムによる横線2条が施される。高台内には統制番号「岐1075」銘（酸化クロム・ゴム版）が認められる。3・4ともに硬質で光沢感のある胎土である。なお、4はⅡ層（江戸期の整地層）出土であるが、ノイズの可能性が高い。5は硬質陶器の合子である。泥漿流し込み成形で畳付以外総釉である。外底には「□カネ」銘のエンボスが認められる。

〔註〕

1) 桃井 勝「昭和16年3月 岐阜県陶磁器工業組合連合会所属生産者別標示記号（統制番号）」『美濃の古陶 美濃古窯研究会会報No.8』美濃古窯研究会 1999

②金属製品（第38図6・7，第9表）

6・7は鉛製のエンフィールド銃弾である。ともに圈溝が無く、弾底凹部断面が台形を呈する形態である。7は、通常、銃腔を通過する際に消失してしまう鑄造時の鑄バリ・横皺が残っており、さらに着弾の衝撃による歪みが認められないことから未使用弾である可能性が高い。



第38図 陶磁器・金属製品実測図（1／3・2／3）

第8表 陶磁器類観察表

図-No.	整理No.	位置	焼成形態	器種	計測値(単位cm, 括弧内推定値)	産地	備考
38-1	1	I層	須恵器	甕			口頸部横ナデ, 頸屈曲部接合面から欠折
-2	2	I層	磁器染付	端反碗	口径(9.5), 高台径(3.5), 器高5.4	肥前系	胎土灰色味, 呉須暗青緑色, 主文は縞文
-3	4	I層	磁器釉下彩	大碗	口径(14.6), 高台径5.5, 器高6.0	岐阜	胎土ガラス質, 外面は酸化クロムによる縞文, 内底・高台内は化学コバルト・ゴム版による寿字文・統制番号「岐987」
-4	5	Ⅱ層	磁器釉下彩	皿	口径11.0, 高台径6.1, 器高2.2	岐阜	軍用食器, 胎土ガラス質, 酸化クロム, 内面口縁部に2条横線, 高台内に統制番号「岐1075」(ゴム版)
-5	3	I層	硬質陶器	合子	口径(7.3), 高台径(7.0), 器高2.5	不明	泥漿流し込み成形, 透明釉, 外底エンボス「□カネ」

第9表 金属製品観察表

図-No.	整理No.	出土位置	名称	計測値(mm, g)	備考
38-6	7	I層	エンフィールド銃弾	底径14.7, 長さ29.6, 重さ33.4	鉛製, 弾底凹部断面台形
-7	6	I層	エンフィールド銃弾	底径14.3～14.5, 長さ25.5, 重さ33.6	鉛製, 弾底凹部断面台形(段あり), 未使用弾

### ③瓦（第39～49図、第10表）

#### ア．軒丸瓦

##### 三巴文軒丸瓦（第40図1～11）

1～6は巴文が右巻きである。巴頭は丸く勾玉状で断面略台形を呈し、巴尾は長く各巴が接続している。周囲には16個の珠文が巡る。いずれも周縁には離れ砂の付着あるいはその痕跡が認められる。

7～11は巴文が左巻きである。7は小さめの巴文の周囲に10個の珠文が巡る。巴頭は勾玉状で括れが明瞭である。巴頭断面は外側が丸く、内側に稜を有するもので、1/4に裁断した円形を呈する。巴尾は長く各巴は接続する。8は周囲に推定12個の珠文が巡る（現況7個）。巴頭は先端が尖る鉤状を呈し、断面は中央に緩やかな稜があり、略三角形を呈する。各巴は接続する。文様区と周縁の段差は垂直ではなく、部分的に傾斜したり段差を持ったりしている。9は周囲に16個の珠文が巡る。巴頭は丸く勾玉状を呈し、断面は稜が無く丸い。各巴は分離している。10は周囲に推定20個の珠文が巡る（現況17個）。巴頭は勾玉状で断面形は丸い。丸瓦部凹面にはコビキ痕Aが認められる。11は周囲に推定22個の珠文が巡る（現況13個）。巴頭は先端が尖る鉤状を呈し、断面は中央に稜があり、略三角形を呈する。巴頭同士は近く、ほぼ接している。巴尾は長く、各巴は接続する。文様区と周縁の段差は垂直ではなく概ね2段になっている。桐紋軒丸瓦（第40図12）

桐紋は豊臣秀吉が朝廷から下賜された家紋で、秀吉の生前には、瓦当文様への採用は彼の許可が必要であったと考えられている。本資料は五三の桐である。熊本城内出土の桐紋瓦には、中央の葉の先端が真っ直ぐに垂下するものと曲がるものがあり、本資料は前者である。葉脈は、主脈は稜線により、側脈は段差により表現され、三葉の結節部には珠文が配されている。花の形状には二者があり、中央と左側の茎先端の花は菱形で、他の花は弁の表現が認められる。

##### 桔梗紋軒丸瓦（第40図13～第41図21）

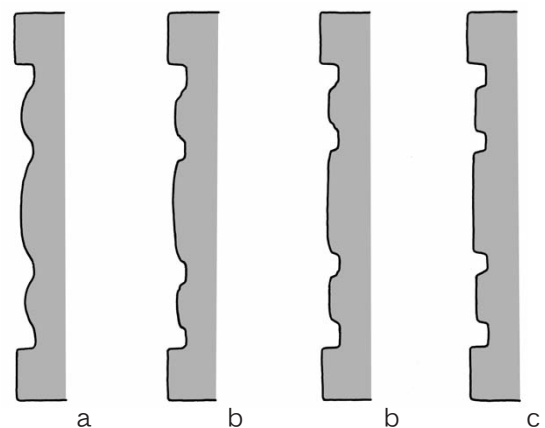
加藤家家紋瓦である。13は周囲の珠文が無いもので、花卉の外側辺は14～21に比べて張り、弁先に向けて照り起りがみられる。14～21は中心円内に桔梗紋が配され、雄蕊上に沈線が刻されるもので、周囲には珠文9個が巡る。珠文の配置には、桔梗の上向きの花弁先端の延長上に珠文の1つが位置するもの（16～21）、ずれるもの（14・15）の二者がある。19～21は、珠文の範ズレが顕著で、21については文様区と周縁の段差が部分的に階段状を呈している。

##### 九曜紋軒丸瓦（第39図、第41図22～第44図51）

細川家家紋瓦である。中央の大きな珠文とそれを囲む8つの珠文で構成される文様区と周縁により瓦当を形成している。報告の便宜上、珠文を「曜」と呼び、中央の曜を中心曜、それを囲む8つの曜を周曜と呼ぶこととする。

型式属性を見出しにくい文様形態であるが、本報告では、九曜紋の断面形に注目し、仮に以下の3類に分ける（第39図）。

- a類：各曜周縁の角が無く（上面と側面の境が緩やか）、断面形は丸い。範ズレは認められない。
- b類：曜の上面が緩やかに張るもの、あるいは上面中心付近は平坦であるものの周縁付近が傾斜するものである。両者の区別がつかない個体が多い。周曜には殆どの個体において範ズレが認められる。曜の上面に指頭痕が認められるものが多いことも本類の特徴である。



第39図 九曜紋軒丸瓦断面模式図

c類：曜の上面がほぼ平坦なものである。b類に比べて上面と側面との境、側面と地（文様周辺の空白部）との境は明瞭である。ただし、これらの境は、道具瓦にみられる九曜紋のように角度が90度でエッジが明瞭なものではなく、鈍角で角がやや丸味を帯びる傾向が強い。周曜に範ズレを認めるものが多い。

以下、上記の分類に従って報告する。

22はa類である。23～45はb類である。瓦当表面に注目すると、23～26には離れ砂痕が、27にはその可能性がある痘痕状の窪みが、28～31にはキラコの付着が認められる。30～32の丸瓦部凹面にはコビキ痕Bが認められる。29～32・43は文様区と周縁の段差が垂直ではなく、部分的に階段状を呈している。26の丸瓦部凸面には「弥右衛門」銘の刻印（第49図83）が押されている。46・47は、中心曜はc類、周曜はb類といったように中心曜と周曜とで断面形が異なるものである。48～51はc類である。49～51は、文様区と周縁の段差が部分的に階段状を呈している。51は、瓦当面にキラコの付着が、丸瓦部凹面にコビキ痕Bが認められる。

#### イ. 軒平瓦

##### 三葉文軒平瓦（第44図52～56）

52は中心飾が下三葉文で、中央の一葉は立体感がある陽刻、脇の二葉はやや平板な陽刻で表現されている。唐草文は中心飾の上部から伸びるが、左右対称ではない。左側については上・下・上に反転し、子葉先端は巻きが強い。瓦当上部を面取りしている。

53～56は中心飾が上三葉文である。53～55の上三葉文は稜線が明瞭で断面三角形を呈する。中心飾の下部から伸びる唐草文は下・上に反転し、各子葉は分離している。56の上三葉文は稜線が不明瞭である。中心飾の下位から伸びる唐草文は上・下・上に反転し、各子葉は分離している。53～56の全てに瓦当上部の面取りが認められ、56については中央付近において面取り幅が広い（～9mm）。53は平瓦部凹・凸面ともにコビキ痕Aが、52・54・55は平瓦部凹面に凸型台痕の可能性が指摘できる板目が認められる。

##### 立木文軒平瓦・珠文軒平瓦（第44図57・58）

57の中心飾は幹様の縦線から左右に枝が伸びるような文様で、立木文とした。唐草文は中心飾の下位から先端が下向きに小さく巻く蔓が波打ちながら伸び、これに上下2本の子葉が付加されるものである。瓦当上部は面取りされ、平瓦部は凹・凸面ともにコビキ痕Aが認められる。58は中心飾が上下2点の珠文である。唐草文は下側の珠文付近から伸びている。各子葉は短く分離し、先端が双葉状に開くものがみられ、内側の3葉は幅が太い。

##### 桔梗紋軒平瓦（第44図59・60）

59・60では中心飾（桔梗紋）に差異が認められ、59は立体的な陽刻で、60は59に比べて突出が低く平板である。唐草文はともに中心飾の下位から伸びて下・上に反転し、各子葉は分離する。59は平瓦部凹面にコビキ痕Bが認められる。60は瓦当上部が面取りされ、中央付近において幅が広い（～1.6cm）。

##### 九曜紋軒平瓦（第44図61～第45図72）

中心飾が九曜紋のもので、唐草文の文様形態により5大別できる。

61の唐草文は中心飾下部から伸び、各子葉は分離する。大きくは下・上の2回反転であり、これに枝状の子葉が付加されている。子葉の先端は珠文状・二股状のものがみられる。瓦当面にはキラコが付着している。平瓦部凹面には刻印「平吉」（第48図73）が認められる。

62～67の唐草文は中心飾のやや下位から伸び、内側3葉が下方に反転し、先端が双葉状に開く。62～64は、瓦当上部を狭く面取りし、後、ナデ調整により丸く仕上げている。平瓦部凹面には、66に「五十」（第50図136）、67に「五」（第50図132）の刻印が認められる。

68～70の唐草文は中心飾下部から伸び、下・上・下に反転する。68・69は瓦当上部を狭く面取りし、後、

ナデ調整により丸く仕上げている。70は平瓦部凹面に刻印「金七」（第48図45）が認められる。

71の唐草文は、先端部の卷きが表現されない鎌形の子葉が下・上・上に反転する。瓦当上部は狭く面取りし、後、ナデ調整により丸く仕上げている。平瓦部凹面には刻印「信カ」（第53図227）が認められる。

72の唐草文は中心飾の中位付近から伸び、先端部の卷きが表現されない鎌形の子葉が上・下・上に反転する。各子葉は分離している。

#### 釘抜き紋軒平瓦（第45図73）

中心飾は家老二座米田家家紋の釘抜き紋である。唐草文は九曜紋軒平瓦62～67と同形態で、内側3葉が下方に反転し、先端が双葉状に開く。

#### 李朝系軒平瓦（第45図74・75）

朝鮮半島産の李朝瓦の影響を受け、国内で生産された「李朝系」とされる瓦である。

74は滴水瓦である。瓦当面は表面の荒れが著しい。2本の縦稜線で画された文様区中央に現況で「慶長四（以下不明）」銘が刻まれる。「慶長四年八月吉日」であろう。左右には頭部に花形の装飾を付加した瑞雲文、梵字様の意匠をもつ円文を配する。文様区上辺～周縁内側面には粘土ナデツケが認められ、これは平瓦部との接合を補強する措置とみられる。瓦当部と平瓦部との接合角度は約100度である。瓦当上部の面取りは中央付近が幅広い（～9mm）。平瓦部凹面には二重丸に十字文の刻印（第55図317）が認められる。

75は垂瓦である。瓦当面の上下幅が広い点、平瓦部との接合角度が鈍角になる点から李朝系瓦と捉えられる。中心飾の下三葉文は、立体的に葉脈が表現されている。唐草文は中心飾の上部から伸び、上・下・上に反転する。瓦当部と平瓦部との接合角度は約150度である。

#### 軒目板棧瓦（第45図76）

目板瓦部の残存状態が良好な破片である。軒丸部瓦当の九曜紋は低く、文様上面は緩やかに膨らむ。瓦当部の接合順序は、軒平部を接合した後に軒丸部を接合している。瓦当面にはキラコが認められる。

#### ウ．道具瓦

#### 鬼瓦（第46図77・78）

77は小片のため不確実ではあるが、現況から鬼瓦の可能性が高い。表面は周縁を設けておらず、沈線により桐紋を描いている。沈線は断面U字形を呈しており、先端が丸い棒状工具による施文とみられる。裏面は横断面弧状で各単位の境が明瞭な縦方向のケズリが認められる。

78は九曜紋鬼瓦の右下部分片で、右側の周縁の高まりも欠失している。九曜紋の彫りは高く、曜は上面が平坦で、周縁の角は明瞭である。文様区右下には刻印「五」（第50図124）が認められる。裏面には把手の基部が残存し、その周辺に粘土のナデツケが施されている。

#### 隅木蓋瓦（第46図79・80）

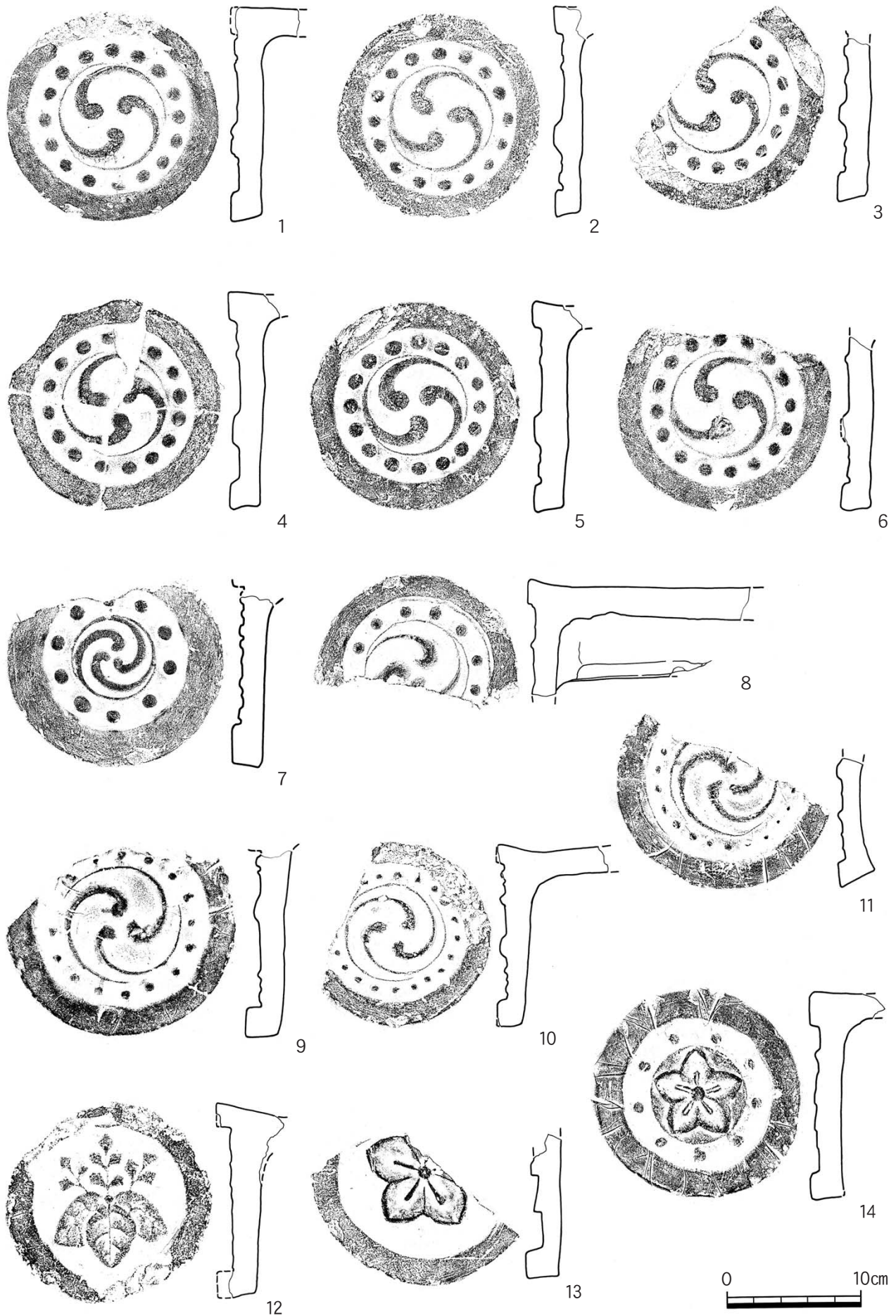
79・80ともに九曜紋が刻される。文様の彫りは高く、曜は上面が平坦で、周縁の角は明瞭である。79は文様区周縁と左側縁に、断面U字形の沈線が施される。端部が丸い棒状工具による施文とみられる。80は平面略六角形になるものとみられ、残存する下2辺は波状を呈する。瓦当裏面には水切り溝とみられる縦方向の緩やかな窪みが認められる。

#### 飾板瓦（第46図81）

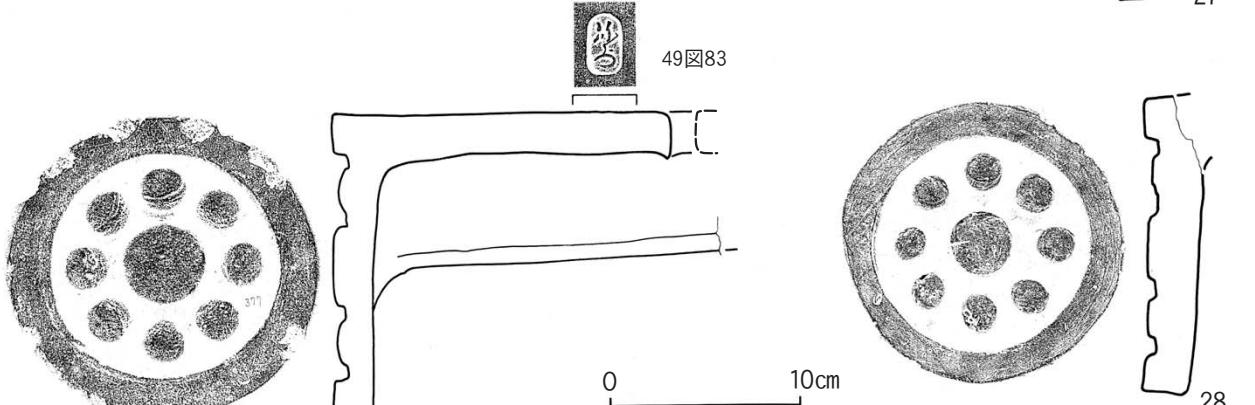
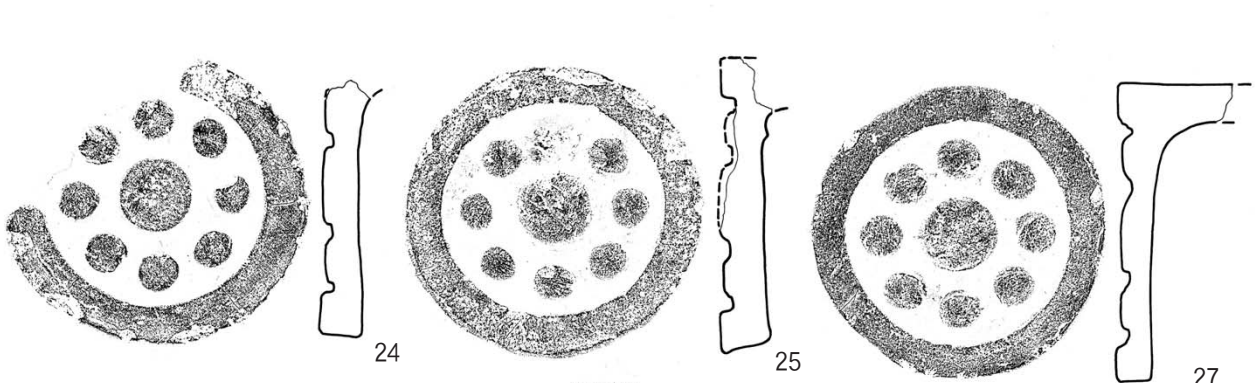
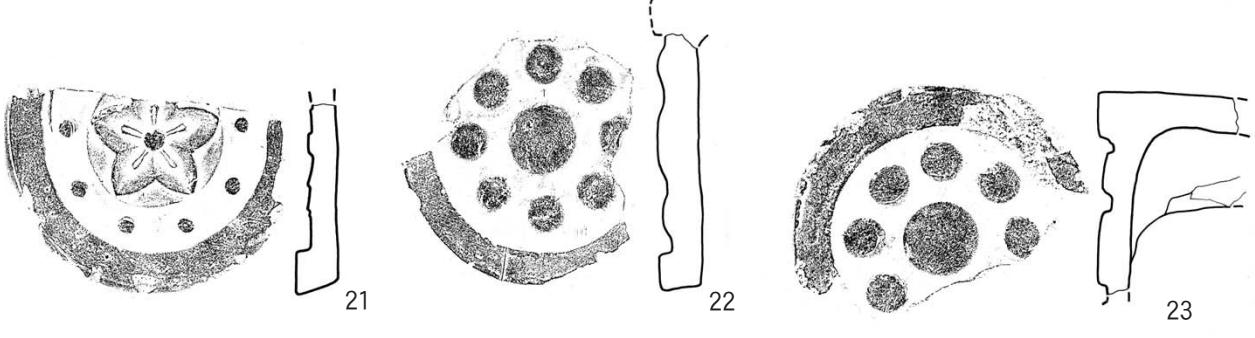
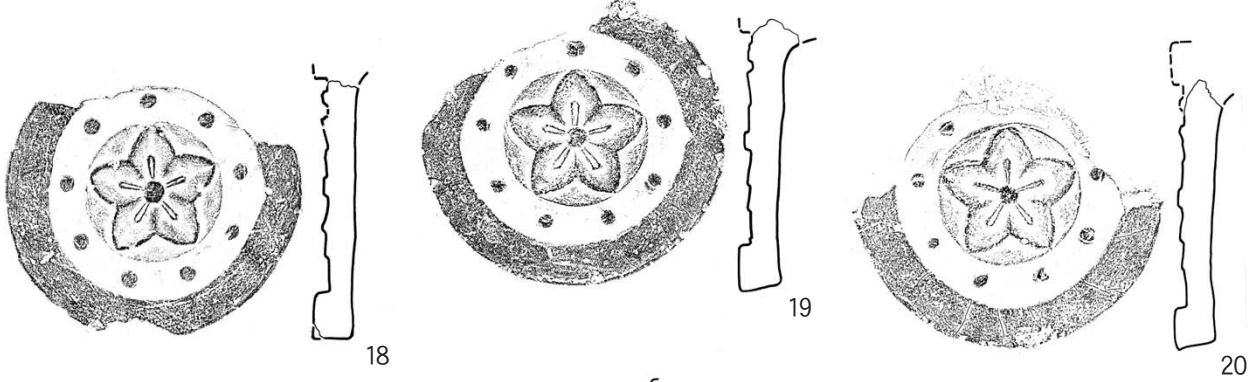
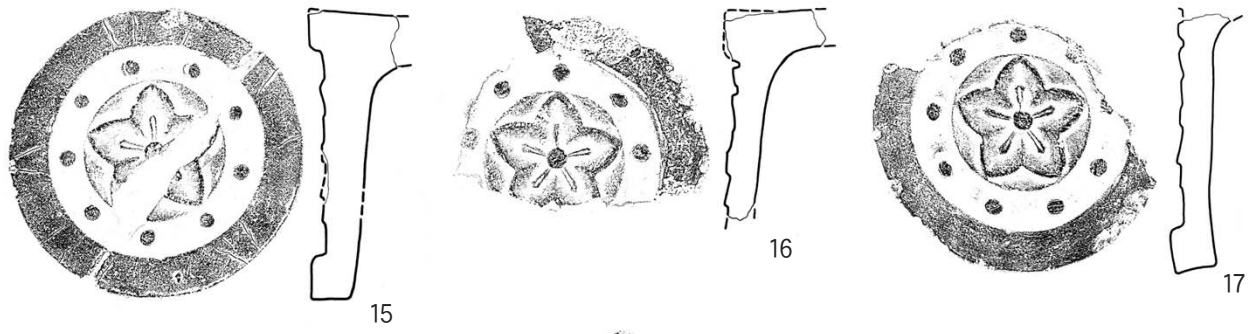
平面形は横長の長方形を呈する。中央の桔梗紋陽刻は、花卉間の境の稜は明瞭であるが、各弁中央の窪みは谷線を形成せず緩やかである。左側には2個の釘穴が、表→裏方向に穿たれている。上下の縁帯には桔梗紋と唐草文が施される。上側縁・左側縁は比較的丁寧なナデ、斜めに面取りされた下側縁と裏面はケズリ後やや粗いナデを施している。

#### ④瓦刻印（第47～55図，第11表）

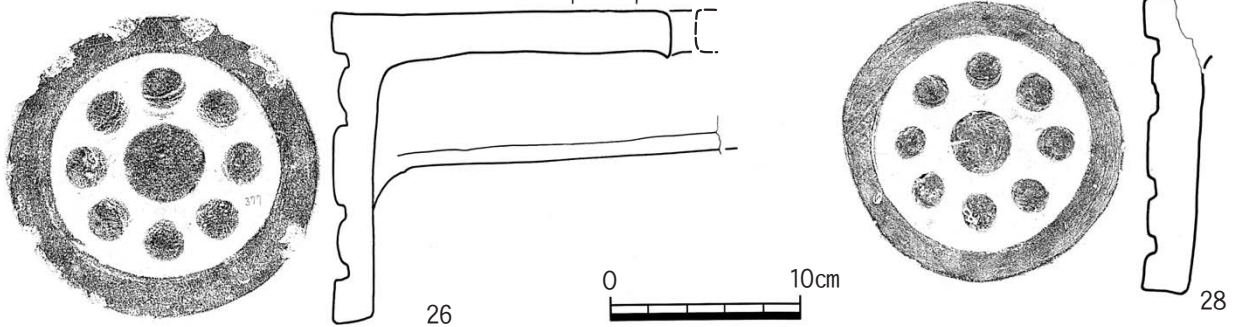
観察表をもって記すこととする。



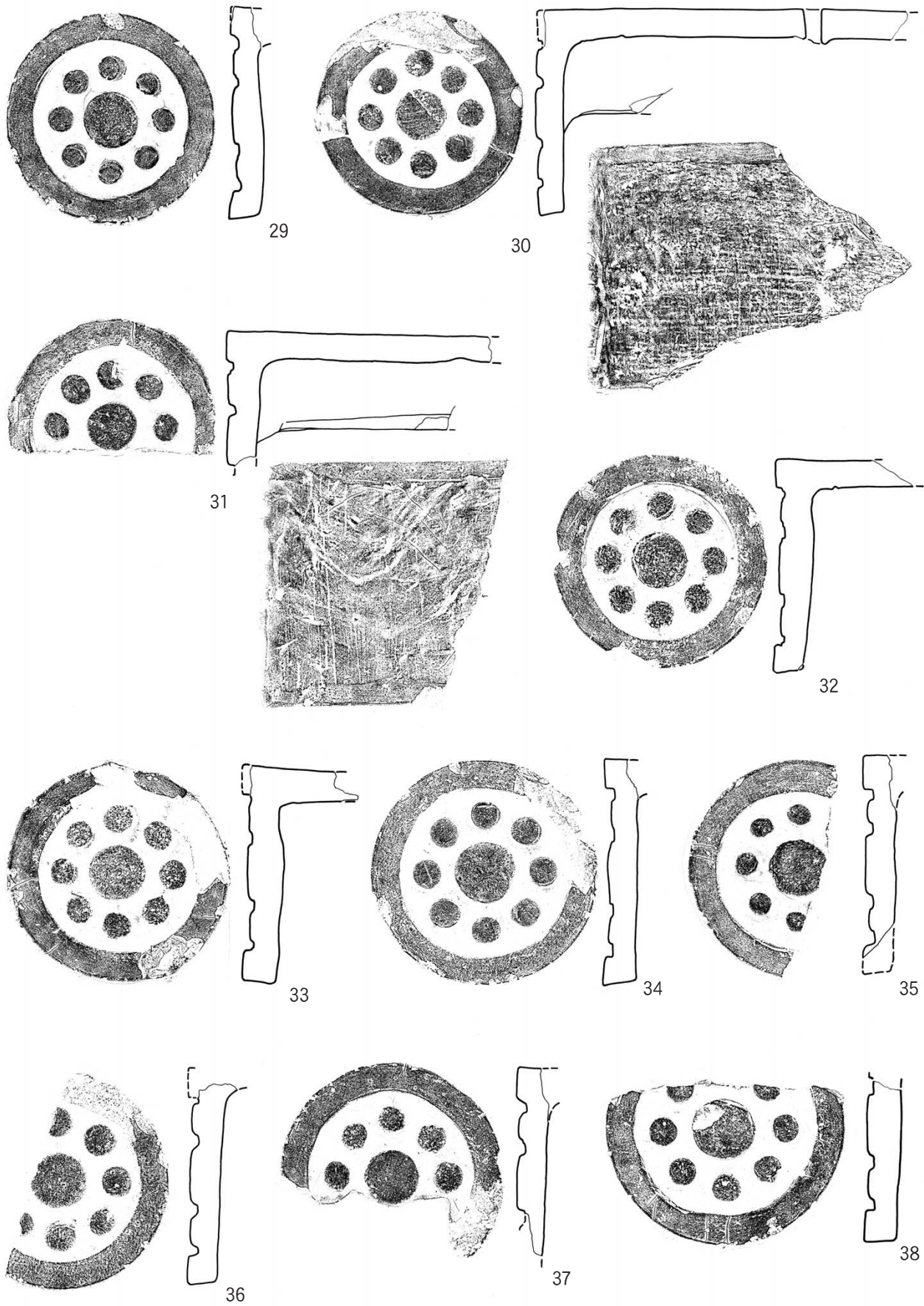
第40图 瓦实测图1 (1 / 4)



49图83



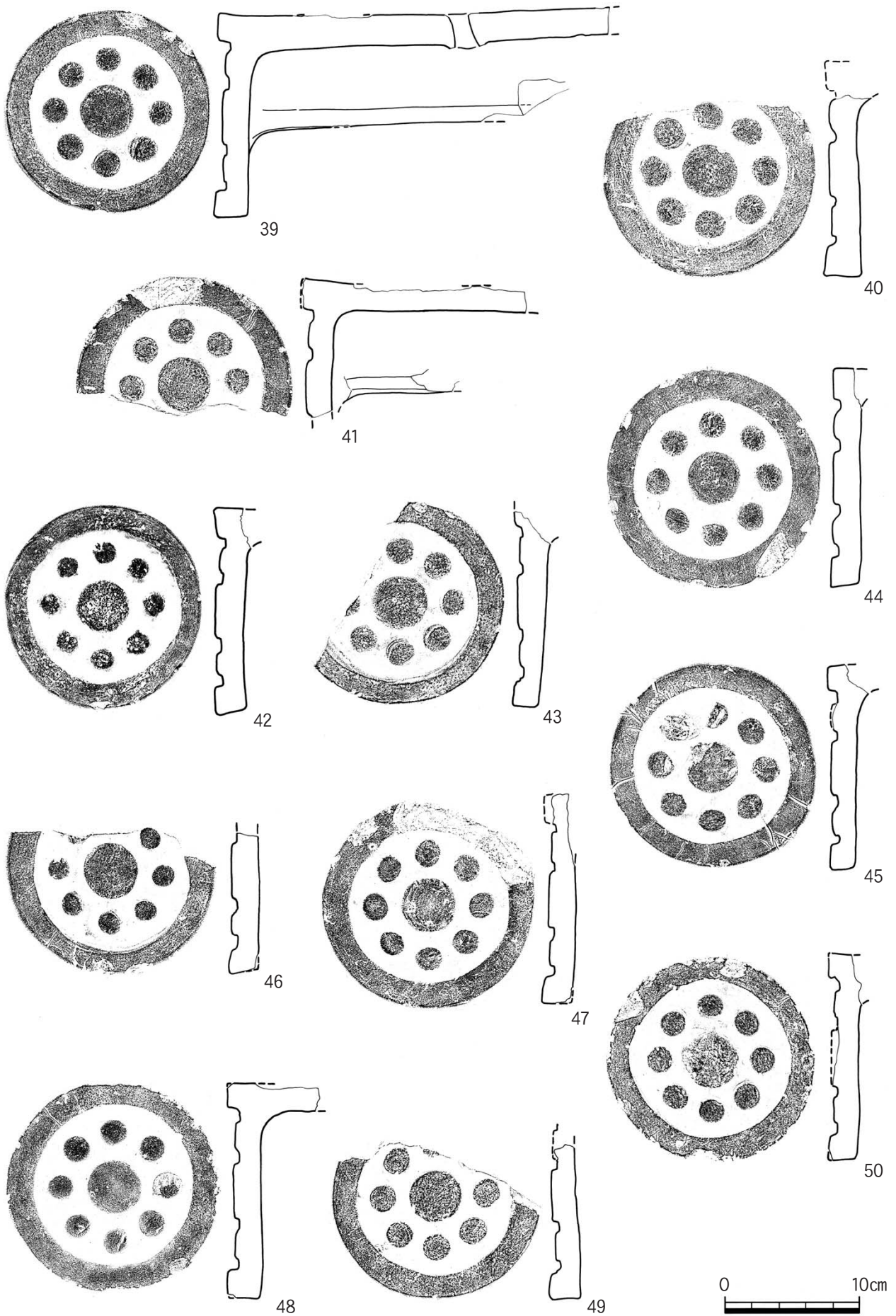
第41图 瓦実測图2 (1/4)



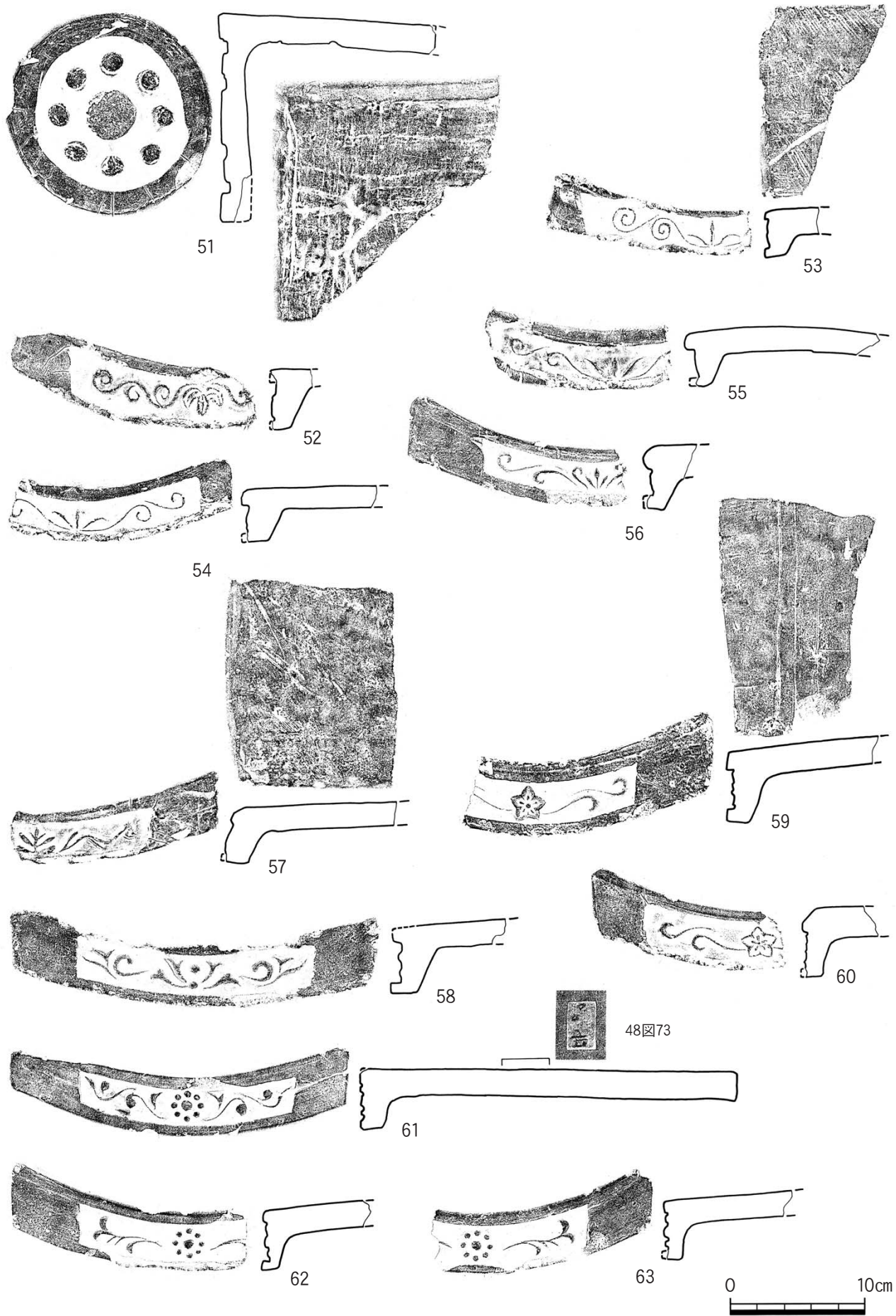
0 10cm

第42图 瓦実測图3 (1/4)

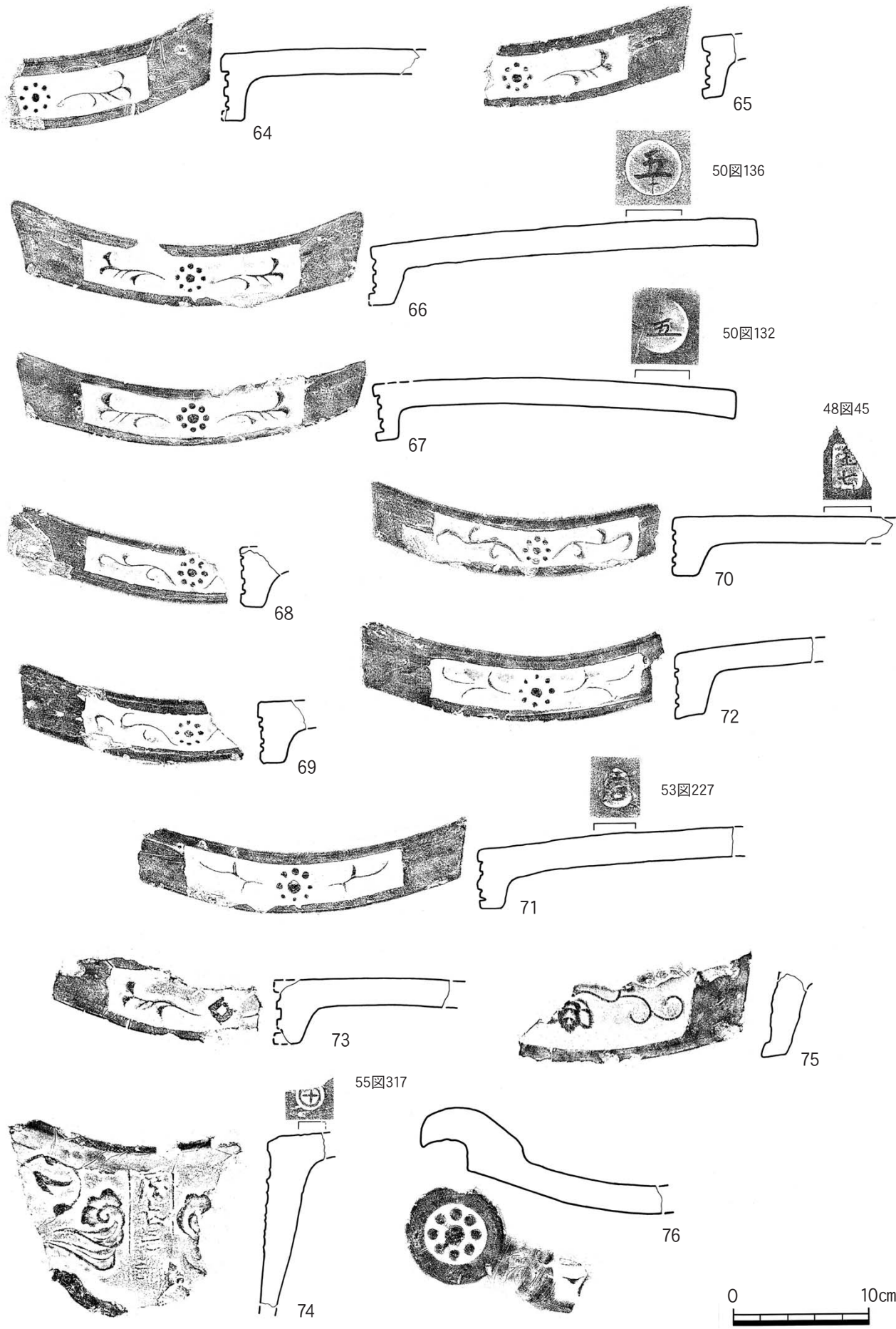




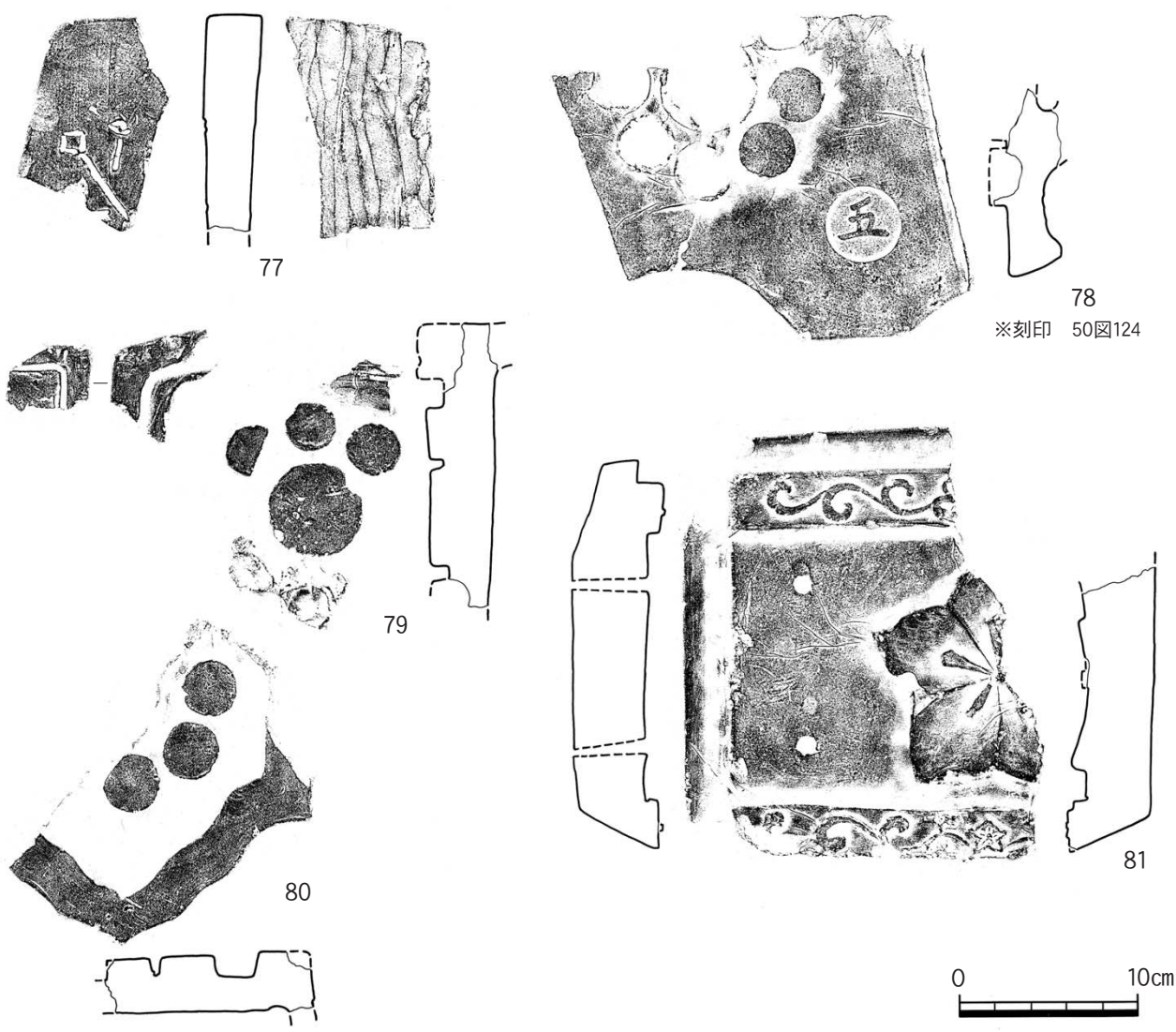
第43图 瓦実測图4 (1/4)



第44图 瓦実測图5 (1/4)



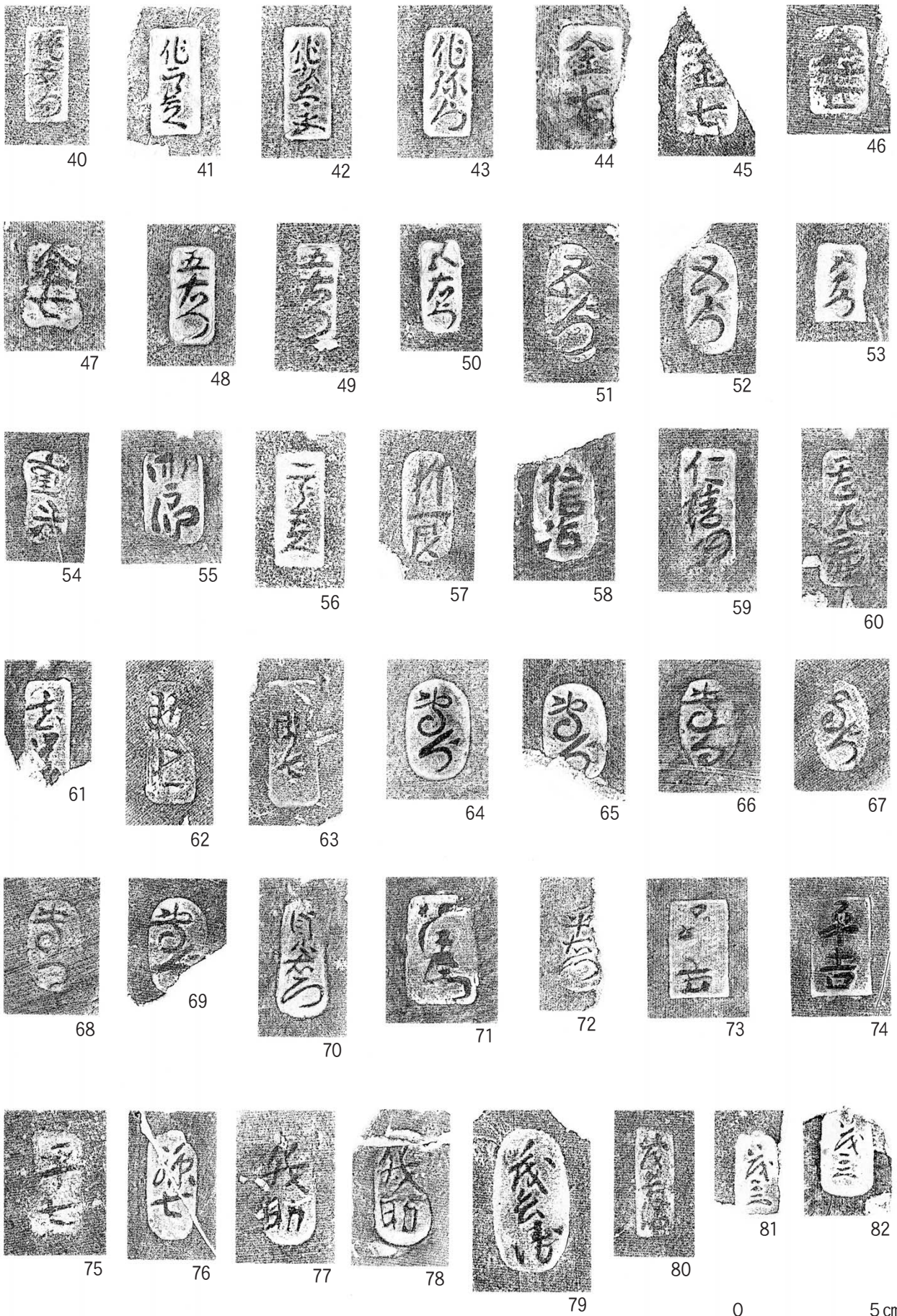
第45图 瓦实测图6 (1 / 4)



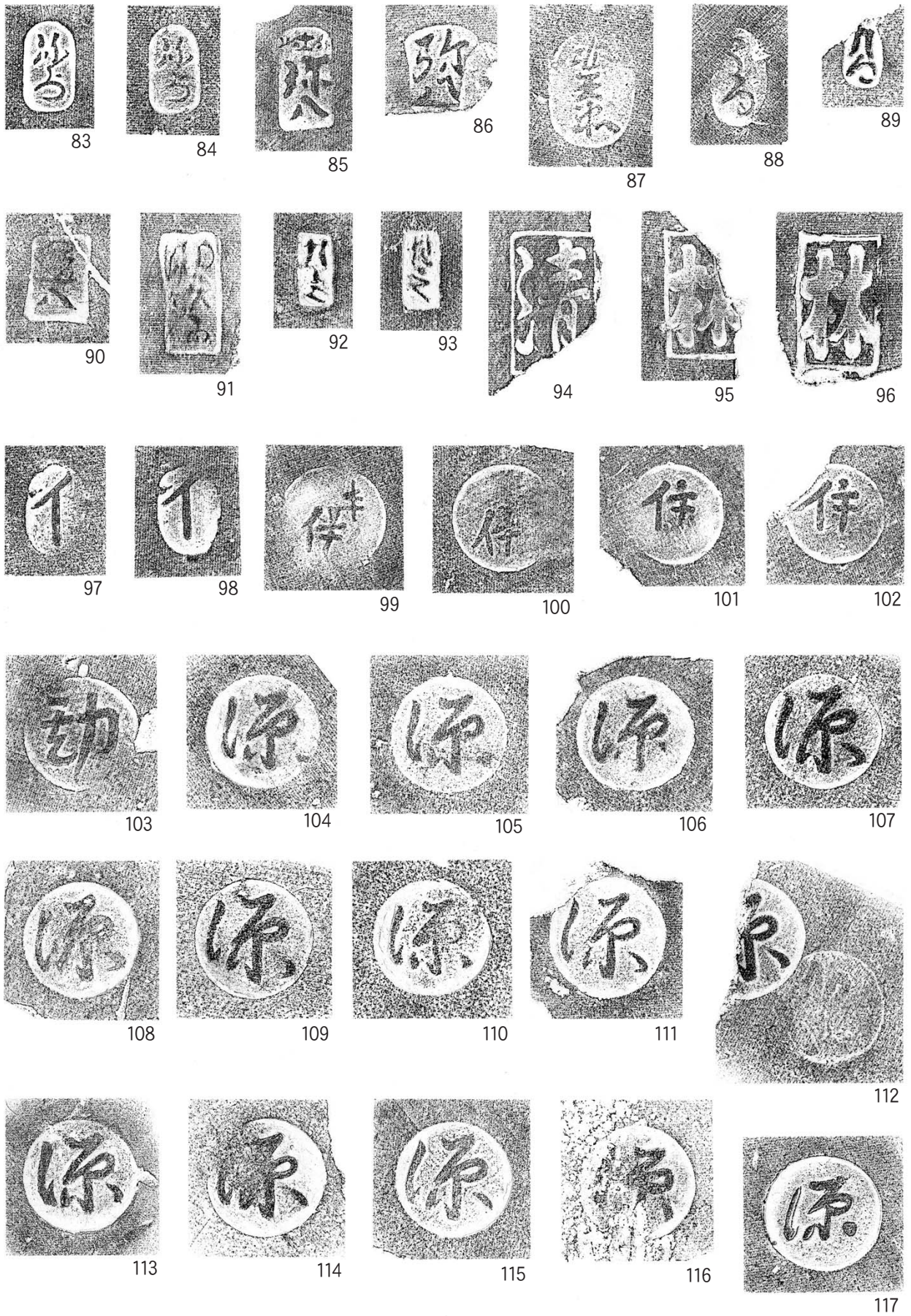
第46図 瓦実測図7 (1 / 4)



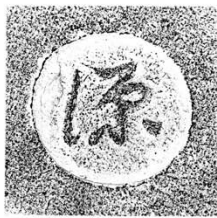
第47图 瓦刻印拓影1 (1/2)



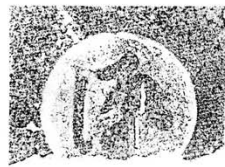
第48图 瓦刻印拓影 2 (1 / 2)



第49图 瓦刻印拓影3 (1/2)



118



119



120



121



122



123



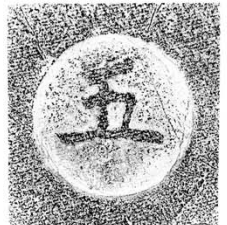
124



125



126



127



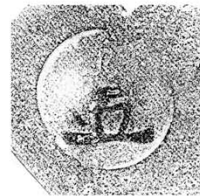
128



129



130



131



132



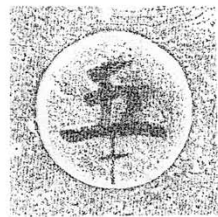
133



134



135



136



137



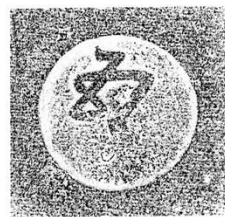
138



139



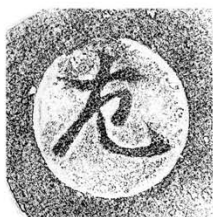
140



141



142



143



144



145



146

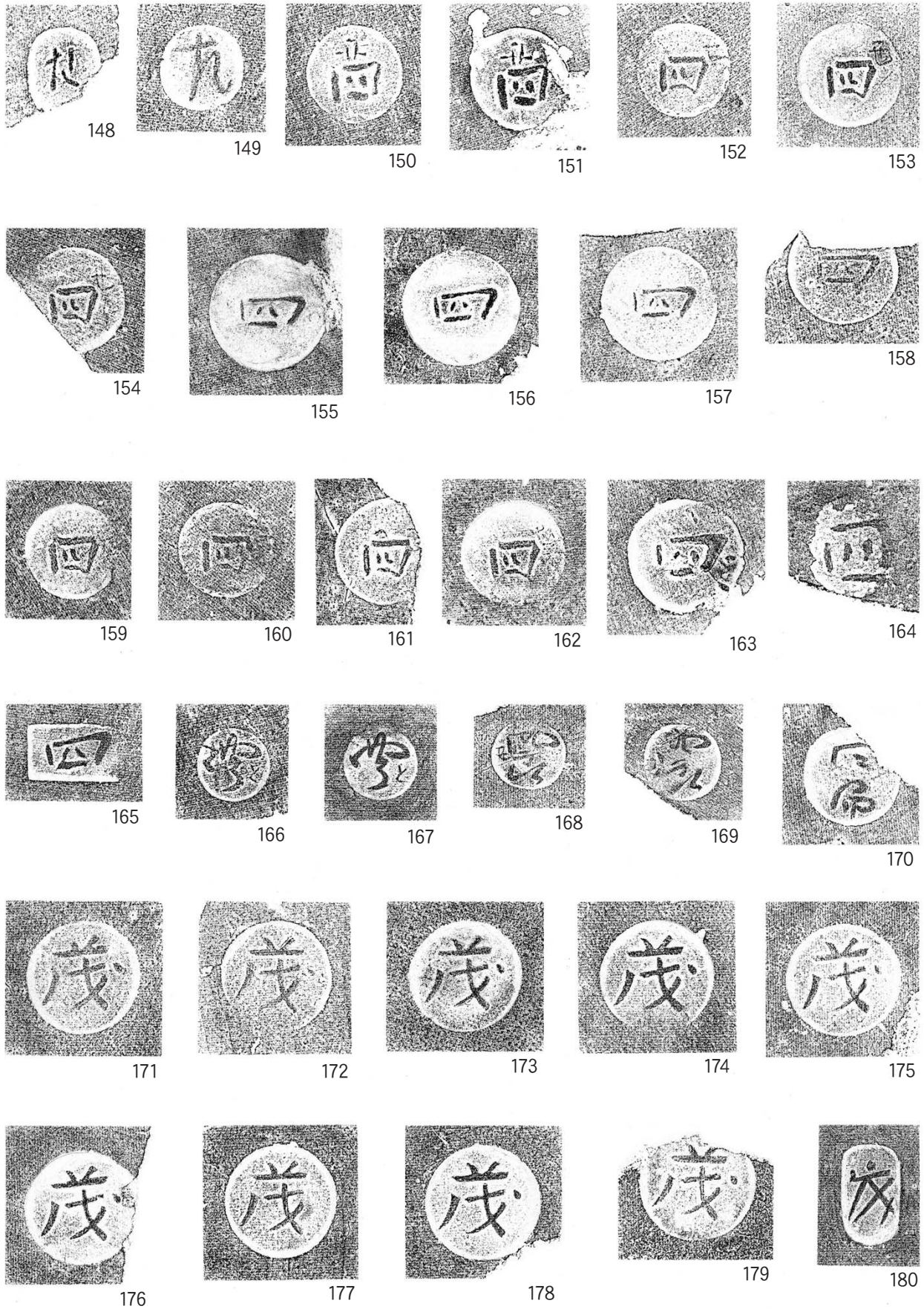


147



第50图 瓦刻印拓影4 (1/2)





第51图 瓦刻印拓影5 (1/2)



181



182



183



184



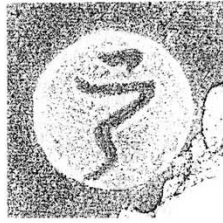
185



186



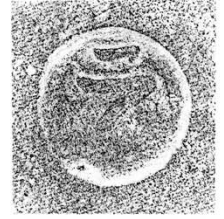
187



188



189



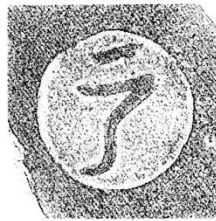
190



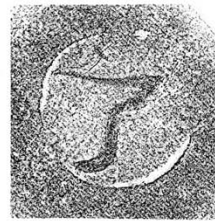
191



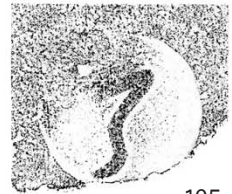
192



193



194



195



196



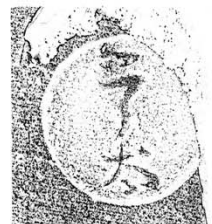
197



198



199



200



201



202



203



204



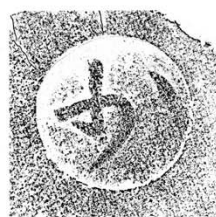
205



206



207



208



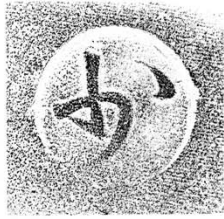
209



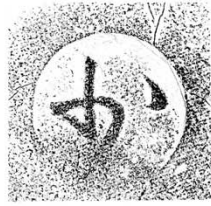
210



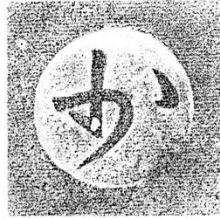
第52図 瓦刻印拓影6 (1/2)



211



212



213



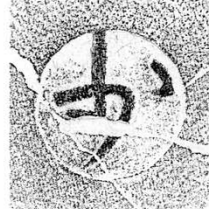
214



215



216



217



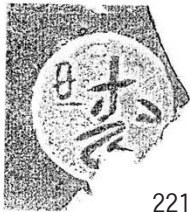
218



219



220



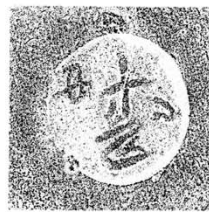
221



222



223



224



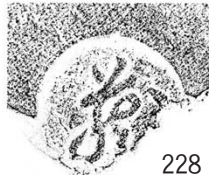
225



226



227



228



229



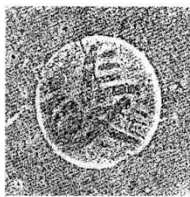
230



231



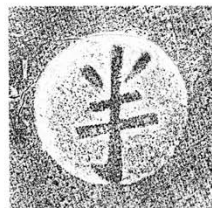
232



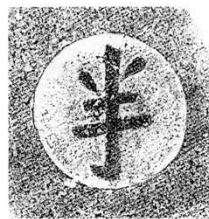
233



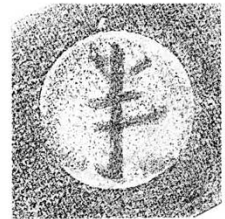
234



235



236



237



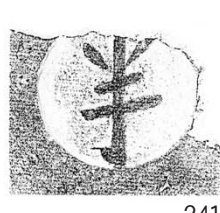
238



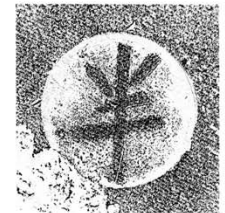
239



240



241



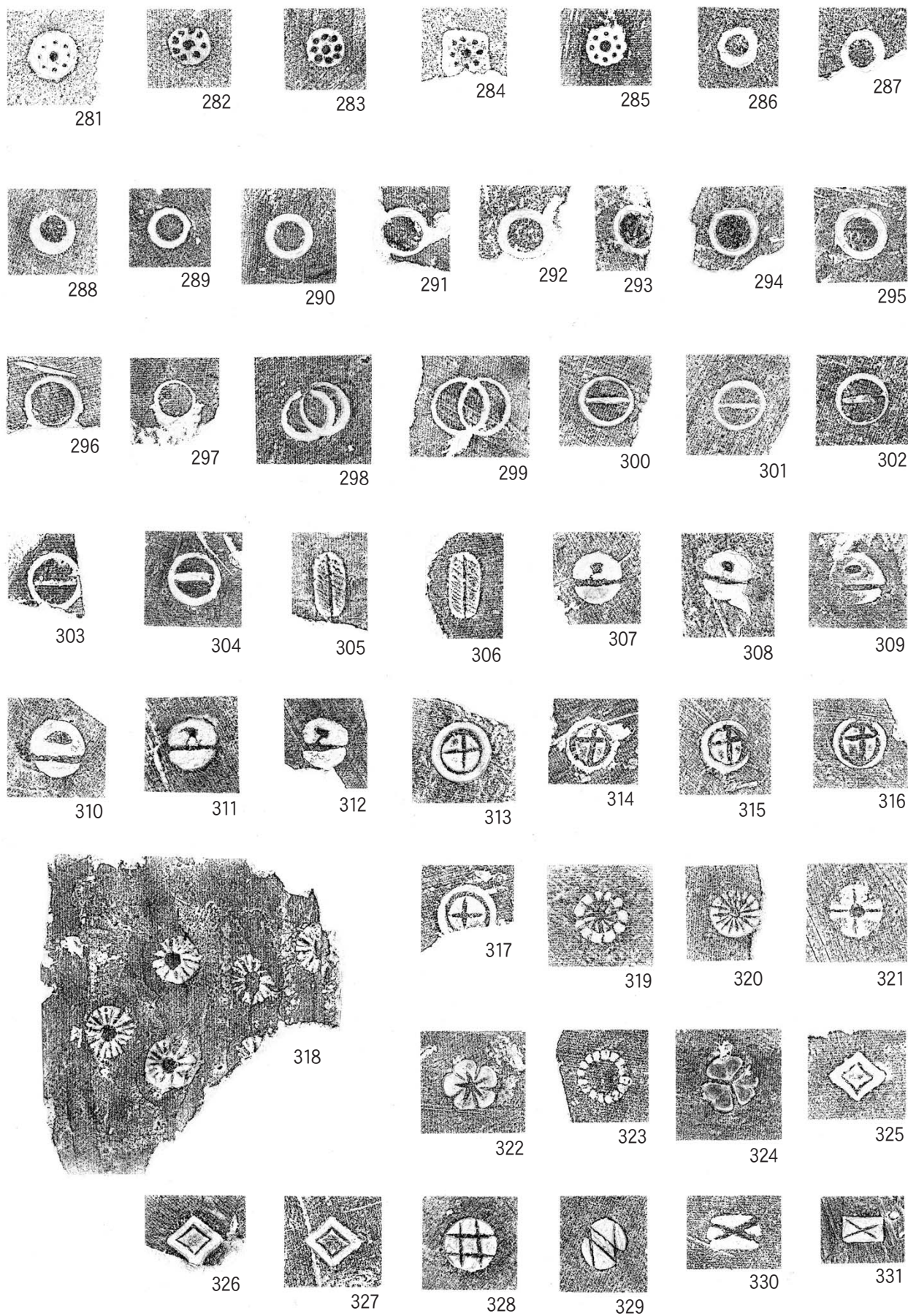
242



第53図 瓦刻印拓影7 (1/2)



第54图 瓦刻印拓影 8 (1 / 2)



第55图 瓦刻印拓影 9 (1 / 2)

第10表 瓦観察表 (1)

図 - No	整理No	出土位置	種類	調整	備考
40-1	381	茶槽Ⅰ層	三巴文軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ。瓦当面周縁離れ砂付着。	巴文右巻き。巴頭は勾玉状、断面台形。珠文16個。
-2	371	元札槽栗石	三巴文軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。瓦当面離れ砂付着。	巴文右巻き。巴頭は勾玉状、断面台形。珠文16個。
-3	370	元札Ⅰ層	三巴文軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。瓦当面離れ砂痕。	巴文右巻き。巴頭は勾玉状、断面台形。珠文16個。
-4	379	茶槽Ⅰ層	三巴文軒丸瓦	瓦当面磨耗、瓦当側縁・裏面ナデ。瓦当面周縁離れ砂。	巴文右巻き。巴頭は勾玉状、断面台形。珠文16個。焼成不良。
-5	380	茶槽Ⅱ層	三巴文軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。瓦当面離れ砂付着。	巴文右巻き。巴頭は勾玉状、断面台形。珠文16個。
-6	344	元札・茶槽間Ⅰ層	三巴文軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。瓦当面離れ砂付着。	巴文右巻き。巴頭は勾玉状、断面台形。珠文16個。
-7	353	元札・茶槽間Ⅰ層	三巴文軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	巴文左巻き。巴頭は勾玉状、断面は1/4円形(内側辺にのみ稜)、低い。珠文10個。
-8	342	元札・茶槽間Ⅱ層	三巴文軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凹面布目、凸面ナデ。	巴文左巻き。巴頭は鈎状、断面略三角形。珠文推定12個。
-9	392	茶槽Ⅰ層	三巴文軒丸瓦	瓦当面の調整不明(磨耗)。瓦当側縁・裏面ナデ。	巴文左巻き。巴頭は勾玉状、断面丸い。各巴は分離。珠文16個。
-10	407	元札槽Ⅱ層	三巴文軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凹面コビキA、凸面ナデ。	巴文左巻き。巴頭は勾玉状、断面丸い。各巴は分離。珠文推定20個。
-11	397	元札・茶槽間Ⅰ層	三巴文軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	巴文左巻き。巴頭は略鈎状、断面略三角形。珠文推定22個。
-12	405	元札槽Ⅱ層	桐紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	胎土暗灰色粒目立つ。
-13	414	元札槽Ⅰ層	桔梗紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	珠文無し。
-14	391	元札・茶槽間Ⅰ層	桔梗紋軒丸瓦	桔梗紋に指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	雄蕊上に沈線。珠文9個。珠文配置は16~21とは異なる。
41-15	383	茶槽Ⅱ層	桔梗紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ。	雄蕊上に沈線。珠文9個。
-16	368	元札槽栗石	桔梗紋軒丸瓦	瓦当は周縁・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ。	雄蕊上に沈線。珠文9個。
-17	382	茶槽Ⅱ層	桔梗紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	雄蕊上に沈線。珠文9個。
-18	351	元札・茶槽間Ⅰ層	桔梗紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	雄蕊上に沈線。珠文9個。
-19	352	元札・茶槽間Ⅰ層	桔梗紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	雄蕊上に沈線。珠文9個。
-20	369	元札槽栗石	桔梗紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	雄蕊上に沈線。珠文9個。
-21	350	元札・茶槽間Ⅰ層	桔梗紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	雄蕊上に沈線。珠文9個。
-22	409	元札槽Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面 a。
-23	364	元札槽Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ、凹面粗いナデ。瓦当面離れ砂痕。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。胎土暗灰色粒目立つ。
-24	367	元札槽Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。瓦当面離れ砂痕。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。胎土白色粒・暗灰色粒目立つ。
-25	348	元札・茶槽間Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。瓦当面離れ砂痕。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。
-26	377	元札・茶槽間Ⅱ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凹面コビキB?(不明瞭)、布目後粗いナデ、凸面ナデ。瓦当面離れ砂痕。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。丸瓦部凸面刻印(第49図83)。
-27	374	元札・茶槽間Ⅱ層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ。瓦当面痘痕状の窪み(離れ砂痕?)。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。
-28	347	元札・茶槽間Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。瓦当面薄くキラコ。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。
42-29	384	茶槽Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。瓦当面キラコ。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。
-30	385	茶槽Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凹面コビキB、凸面ナデ。瓦当面キラコ。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。
-31	365	元札槽Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凹面コビキB、凸面ナデ。瓦当面キラコ。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。
-32	363	元札槽Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ、凹面コビキB。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。
-33	413	元札槽	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凹面コビキB?(不明瞭)、凸面ナデ。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。
-34	376	元札・茶槽間Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。
-35	408	元札槽Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。
-36	406	元札槽Ⅱ層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。
-37	410	元札槽Ⅱ層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。
-38	358	元札槽Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面 b、周曜範ズレ。

第10表 瓦観察表 (2)

図-No	整理No	出土位置	種類	調整	備考
43-39	339	元札・茶櫓間Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凹面布目後粗いナデ、凸面ナデ。	九曜紋断面b、周曜範ズレ。胎土暗灰色粒目立つ。
-40	340	元札・茶櫓間Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面b、周曜範ズレ。胎土白色粒目立つ。
-41	357	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・裏面ナデ。丸瓦部凹面布目後粗いナデ、凸面ナデ。	九曜紋断面b、周曜範ズレ。胎土暗灰色粒目立つ。
-42	349	元札・茶櫓間Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面b、周曜範ズレ。
-43	362	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面b、周曜範ズレ。
-44	373	元札・茶櫓間Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面b、周曜範ズレ。
-45	361	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面b、周曜範ズレ。
-46	343	元札・茶櫓間Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。瓦当面キラコ。	九曜紋断面は中心曜c、周曜b。周曜範ズレ。
-47	412	元札櫓	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面は中心曜b、周曜c。周曜範ズレ。
-48	375	元札・茶櫓間Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凹面布目、凸面ナデ。瓦当面痘痕状の窪み(離れ砂痕?)。	九曜紋断面c。
-49	411	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面c、周曜範ズレ。
-50	341	元札・茶櫓間Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面c、周曜範ズレ。
44-51	366	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ、凹面コビキB。瓦当面キラコ。	九曜紋断面c、周曜範ズレ顕著。
-52	393	元札・茶櫓間Ⅱ層	下三葉文軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部面取りケズリ後ナデ(幅～1.3cm)。平瓦部凹面は板状痕(凸型台痕?)。	唐草文左右非対称、左側は上・下・上に反転。
-53	354	元札・茶櫓間Ⅱ層	上三葉文軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部面取りケズリ後ナデ(幅～8mm)。平瓦部凹凸面ともコビキA後粗いナデ。	上三葉文は稜線明瞭。唐草文反転下・上(各子葉分離)。
-54	387	茶櫓Ⅱ層	上三葉文軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部面取りケズリ後ナデ(幅～5mm)。平瓦部凹面ナデ、板状痕。凸面粗いナデ。	上三葉文は稜線明瞭。唐草文反転下・上(各子葉分離)。胎土暗灰色粒目立つ。
-55	395	茶櫓Ⅱ層	上三葉文軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部面取りケズリ後ナデ(幅～4mm)。平瓦部凹面ナデ、板状痕。凸面粗いナデ。	上三葉文は稜線明瞭。唐草文反転下・上(各子葉分離)。暗灰色粒目立つ。
-56	346	元札・茶櫓間Ⅰ層	上三葉文軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部面取りケズリ後ナデ(幅～9mm)。平瓦部凹凸面ともナデ。	上三葉文は稜線不明瞭。唐草文反転上・下・上(各子葉分離)。胎土灰色粒目立つ。
-57	396	茶櫓Ⅰ層	立木文軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部面取りケズリ後ナデ(幅～1.0cm)。平瓦部凹凸面ともコビキA後粗いナデ。	先端が下向きに巻く蔓に上下2本の子葉を付加。
-58	378	元札・茶櫓間Ⅰ層	珠文軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。平瓦部凹凸面とも粗いナデ。	中心飾は上下2個の珠文。唐草文は各子葉短く分離。
-59	345	元札・茶櫓間Ⅱ層	桔梗紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。平瓦部凹面は板状痕(凸型台痕?)、コビキB後粗いナデ、凸面粗いナデ。	桔梗紋は立体的(彫りが高い)。唐草文反転下・上(各子葉分離)。
-60	398	茶櫓Ⅰ層	桔梗紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部面取りケズリ後ナデ(幅～1.6cm)。平瓦部凹面ナデ、板状痕、凸面粗いナデ。	桔梗紋は低く平板。唐草文反転下・上(各子葉分離)。胎土暗灰色粒目立つ。
-61	356	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。瓦当面キラコ。	唐草文反転大きくは下・上、枝様の子葉を付加(各子葉分離)。平瓦部凹面刻印(第48図73)。
-62	418	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部狭い面取り後ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文は内側3葉が下方に反転、先端は双葉状。
-63	417	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部狭い面取り後ナデ(幅～4mm)。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文は内側3葉が下方に反転、先端は双葉状。
45-64	416	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部狭い面取り後ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文は内側3葉が下方に反転、先端は双葉状。
-65	388	茶櫓Ⅰ層	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文は内側3葉が下方に反転、先端は双葉状。
-66	360	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文は内側3葉が下方に反転、先端は双葉状。平瓦部凹面刻印(第50図136)。
-67	420	元札櫓	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文は内側3葉が下方に反転、先端は双葉状。平瓦部凹面刻印(第50図132)。
-68	372	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部狭い面取り後ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文反転下・上・下。
-69	415	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部狭い面取り後ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文反転下・上・下。
-70	419	茶櫓Ⅰ層	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文反転下・上・下。平瓦部凹面刻印(第48図45)。
-71	359	元札櫓Ⅰ層	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上部狭い面取り後ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文反転下・上・上、各子葉は鎌形。平瓦部凹面刻印(第53図227)。
-72	386	茶櫓Ⅰ層	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文反転上・下・上、各子葉は鎌形、分離。胎土暗灰色粒目立つ。

第10表 瓦観察表 (3)

図-No	整理No	出土位置	種類	調整	備考
45-73	394	茶槽 I 層	釘抜き紋軒平瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文は内側3葉が下方に反転、先端は双葉状。胎土暗灰色粒目立つ。
-74	399	元札・茶槽間 I 層	「慶長」銘滴水瓦	瓦当周縁・側縁・裏面ナデ。瓦当上部面取りケズリ後ナデ(幅~9mm)。接合角度約100度。	左右に瑞雲文、円文を配する。瓦当面磨耗。平瓦部凹面刻印(第55図317)。
-75	401	茶槽 I 層	下三葉文垂瓦	瓦当文様区外・側縁ナデ、瓦当裏面掻き取るようナデ。接合角度約150度。	唐草文反転上・下・上。
-76	355	元札・茶槽間 I 層	九曜紋軒目板棧瓦	軒九部瓦当文様区外ナデ。目板瓦部・平瓦部とも上面ナデ、下面粗いナデ。瓦当面文様区内キラコ。	九曜紋低い。
46-77	389	茶槽 I 層	桐紋鬼瓦?	表面ナデ・指頭痕。側面ナデ。表面はナデ調整後桐紋施文。裏面は横断面弧状の縦位ケズリ。	桐紋は断面U字形(先端が丸い棒状工具による施文)。
-78	400	元札・茶槽間 II 層	九曜紋鬼瓦	九曜紋の文様上面、九曜紋周辺の空白部ナデ。下側縁は斜めに面取り後ナデ。裏面粗いナデ。	九曜紋は高く、断面四角形。文様区右下刻印(第50図124)。
-79	404	茶槽 I 層	九曜紋隅木蓋瓦	九曜紋周辺の空白部はナデ、九曜紋各曜間の狭い部分は未処理。周縁ナデ。上側縁ケズリ後ナデ。裏面粗いナデ。	九曜紋は高く、断面四角形。周縁と左側縁に断面U字形の沈線。
-80	403	元札・茶槽間 I 層	九曜紋隅木蓋瓦	文様区内の九曜紋周辺の空白部はナデ。周縁ナデ。側縁ナデ。裏面粗いナデ。	九曜紋は高く、断面四角形。
-81	402	元札・茶槽間 II 層	桔梗紋飾板瓦	表面中央の桔梗紋周辺の空白部は部分的なナデ。上・左側縁はナデ。下側縁・裏面はケズリ後粗いナデ。	上下の縁帯上には桔梗紋・唐草文。

第11表 瓦刻印観察表 (1)

報告No	整理No	出土位置	種類	刻印面	記銘・文様	報告No	整理No	出土位置	種類	刻印面	記銘・文様
47-1	262	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	元禄七戊ノ土山四右衛門	47-34	107	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	巳伊兵衛
-2	263	元札・茶槽間, I 層	平瓦	凹面	元禄十うしノ土山伊兵衛	-35	253	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	巳五右衛門
-3	327	茶槽, I 層	平瓦(部)	凹面	元禄拾一ノ小山次郎太	-36	21	元札槽, I 層	丸瓦	凸面	巳四郎口
-4	176	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	宝永口ノ小山勘	-37	231	元札・茶槽間, I 層	丸瓦	凸面	巳口右衛門
-5	184	元札槽, I 層	丸瓦	凸面	土山瓦大工ノ伊兵作	-38	229	元札・茶槽間, I 層	丸瓦	凸面	巳口右衛門
-6	249	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	土山瓦大工ノ伊兵作	-39	273	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	ワノ御用
-7	68	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	土山五右衛門	48-40	42	元札槽, 栗石	丸瓦	凸面	作五右衛門
-8	174	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	土山五右衛門(花形内)	-41	62	元札槽, 栗石	平瓦(部)	凹面	作二郎兵へ
-9	9	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	土山少大夫	-42	261	元札・茶槽間, I 層	丸瓦	凸面	作少太夫
-10	141	元札槽, II 層	平瓦(部)	凹面	土山少大夫	-43	278	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	作弥右衛門
-11	255	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	土山少大夫	-44	123	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	金七
-12	222	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	土山少大夫	-45	419	元札槽, I 層	軒平瓦	凹面	金七
-13	239	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	土山少大夫	-46	195	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	金七
-14	301	茶槽, I 層	平瓦(部)	凹面	土山少大夫	-47	125	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	金七
-15	45	元札槽, I 層	丸瓦	凸面	土山少太夫	-48	284	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	五右衛門
-16	101	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	土山少大夫	-49	186	元札槽, I 層	丸瓦	凸面	五右衛門
-17	137	元札槽, II 層	平瓦(部)	凹面	土山甚左衛門	-50	264	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	五右衛門
-18	314	茶槽, I 層	平瓦(部)	凹面	土山甚左衛門	-51	216	元札・茶槽間, I 層	丸瓦	凸面	五右衛門
-19	315	茶槽, I 層	平瓦(部)	凹面	土山甚左衛門	-52	48	元札槽, I 層	丸瓦	凸面	五右衛門
-20	100	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	土山甚左衛門	-53	182	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	五右衛門
-21	322	茶槽, II 層	平瓦(部)	凹面	土山甚左衛門カ	-54	84	元札槽, I 層	丸瓦	凸面	重兵(反転)
-22	294	茶槽, I 層	丸瓦	凸面	土山甚...	-55	153	元札槽, I 層	丸瓦	凸面	四郎
-23	234	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	土山ノ太...	-56	319	茶槽, I 層	平瓦(部)	凹面	二郎兵へ
-24	286	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	土山長兵衛	-57	109	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	新三郎
-25	212	元札・茶槽間, I 層	丸瓦	凸面	土山又七	-58	304	茶槽, I 層	平瓦(部)	凹面	信治
-26	279	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	土山弥右衛門	-59	238	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	仁衛門
-27	53	元札槽, I 層	丸瓦	凸面	土山与三兵へ	-60	87	元札槽, I 層	丸瓦	凸面	甚九郎
-28	330	茶槽, I 層	平瓦(部)	凹面	土山口右衛門	-61	312	茶槽, I 層	平瓦(部)	凹面	甚四郎
-29	57	元札槽, I 層	平瓦	凹面	土山ノ十兵衛	-62	318	茶槽, I 層	平瓦(部)	凹面	助七
-30	252	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	小山	-63	132	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	助七
-31	79	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	北村口	-64	8	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	専右衛門
-32	237	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	猿渡カ	-65	36	元札槽, I 層	平瓦部	凹面	専右衛門
-33	51	元札槽, I 層	平瓦(部)	凹面	北清	-66	244	元札・茶槽間, I 層	平瓦(部)	凹面	専右衛門



第11表 瓦刻印觀察表 (2)

報告No	整理No	出土位置	種類	刻印面	記銘・文様	報告No	整理No	出土位置	種類	刻印面	記銘・文様
48-67	89	元札槽, I層	丸瓦	凸面	専右衛門	50-118	189	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	源
-68	85	元札槽, I層	丸瓦	凸面	専右衛門	-119	120	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	源
-69	331	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	専右衛門	-120	152	元札槽, I層	平瓦	凹面	源
-70	16	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	貞右衛門	-121	15	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	源
-71	303	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	留右衛門	-122	287	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	五
-72	329	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	平右衛門	-123	335	茶槽, I層	丸瓦	凸面	五
-73	217	元札・茶槽間, I層	軒平瓦	凹面	平吉	-124	未定	元札・茶槽間, II層	鬼瓦	瓦当周縁	五
-74	260	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	平吉	-125	248	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	五
-75	180	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	平七	-126	43	元札槽, 栗石	丸瓦	凸面	五
-76	154	元札槽, I層	丸瓦	凸面	孫七	-127	119	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	五
-77	242	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	茂助	-128	104	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	五
-78	306	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	茂助	-129	41	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	五
-79	259	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	茂兵衛	-130	275	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	五
-80	188	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	茂兵衛	-131	285	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	五
-81	320	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	茂兵へ	-132	92	元札槽, I層	軒平瓦	凹面	五
-82	339	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	茂兵へ	-133	61	元札槽, 栗石	平瓦(部)	凹面	五十
49-83	377	元札・茶槽間, II層	軒丸瓦	凸面	弥右衛門	-134	106	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	五十
-84	194	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	弥右衛門	-135	91	元札槽, I層	軒平瓦(部)	凹面	五十
-85	308	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	…/弥八	-136	50	元札槽, I層	軒平瓦	凹面	五十
-86	313	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	弥八	-137	156	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	五十
-87	99	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	安兵衛	-138	337	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	五郎
-88	115	元札槽, I層	丸瓦	凸面	□右衛門	-139	13	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	五郎
-89	208	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	□左衛門	-140	55	元札槽, I層	平瓦	凹面	五郎
-90	190	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	□八	-141	167	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	五郎
-91	72	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	不明	-142	97	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	五郎
-92	175	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	不明	-143	24	元札槽, I層	丸瓦	凸面	左
-93	265	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	不明	-144	164	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	左
-94	277	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	清	-145	113	元札槽, I層	丸瓦	凸面	左
-95	250	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	林	-146	25	元札槽, I層	丸瓦	凸面	左
-96	290	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	林	-147	211	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	左
-97	158	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	イ	51-148	328	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	左
-98	37	元札槽, I層	平瓦	凹面	イ	-149	282	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	左
-99	110	元札槽, I層	丸瓦	凸面	午ノ/伊	-150	28	元札槽, 不明	平瓦(部)	凹面	丑四
-100	159	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	□/伊	-151	14	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丑四
-101	205	元札・茶槽間, II層	平瓦(部)	凹面	伊	-152	166	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丑/四
-102	135	元札槽, II層	平瓦(部)	凹面	伊	-153	151	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丑/四
-103	83	元札槽, I層	丸瓦	凸面	勘	-154	165	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丑/四
-104	300	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	源	-155	126	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	四
-105	333	茶槽, I層	丸瓦	凸面	源	-156	63	元札槽, 栗石	平瓦(部)	凹面	四
-106	143	元札槽, II層	平瓦(部)	凹面	源	-157	299	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	四
-107	214	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	源	-158	316	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	四
-108	140	元札槽, II層	平瓦(部)	凹面	源	-159	118	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	四
-109	257	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	源	-160	196	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	四
-110	170	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	源	-161	161	元札槽, I層	平瓦	凹面	四
-111	138	元札槽, II層	平瓦(部)	凹面	源	-162	117	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	四
-112	144	元札槽, II層	丸瓦	凸面	源(押し直し)	-163	317	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	四
-113	19	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	源	-164	220	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	四
-114	149	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	源	-165	39	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	四
-115	103	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	源	-166	121	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	と/四郎
-116	65	元札槽, 栗石	平瓦(部)	凹面	源	-167	35	元札槽, I層	平瓦	凹面	と/四郎
-117	233	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	源	-168	78	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	四郎/丑

第11表 瓦刻印觀察表 (3)

報告No	整理No	出土位置	種類	刻印面	記銘・文様	報告No	整理No	出土位置	種類	刻印面	記銘・文様
51-169	309	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	四郎/□	53-220	181	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	甚/丑
-170	70	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	四郎	-221	160	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	甚/丑
-171	246	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	茂	-222	90	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	甚/丑
-172	86	元札槽, I層	丸瓦	凸面	茂	-223	130	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	甚/□
-173	163	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	茂	-224	77	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	甚/丑
-174	221	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	茂	-225	227	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	甚/丑
-175	58	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	茂	-226	145	元札槽, II層	丸瓦	凸面	甚
-176	33	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	茂	-227	49	元札槽, I層	軒平瓦	凹面	信力
-177	230	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	茂	-228	129	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	藏
-178	269	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	茂	-229	67	元札槽, I層	丸瓦	凸面	太
-179	247	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	茂	-230	11	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丑/長
-180	206	元札・茶槽間, II層	平瓦(部)	凹面	茂	-231	225	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	長
52-181	197	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	子/庄	-232	254	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	長
-182	38	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	庄	-233	75	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	長
-183	93	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	庄	-234	52	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	半
-184	23	元札槽, I層	丸瓦	凸面	二郎	-235	168	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	半
-185	172	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	二郎	-236	296	茶槽, I層	丸瓦	凸面	半
-186	105	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	二郎	-237	332	茶槽, I層	丸瓦	凸面	半
-187	134	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	二郎	-238	192	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	半
-188	199	元札・茶槽間, II層	平瓦(部)	凹面	二郎	-239	267	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	半
-189	201	元札・茶槽間, II層	平瓦(部)	凹面	二郎	-240	203	元札・茶槽間, II層	平瓦(部)	凹面	半
-190	56	元札槽, I層	平瓦	凹面	二郎	-241	274	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	半
-191	112	元札槽, I層	丸瓦	凸面	二郎	-242	272	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	半
-192	241	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	二郎	54-243	20	元札槽, I層	平瓦	凹面	半
-193	232	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	二郎	-244	198	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	半
-194	185	元札槽, I層	丸瓦	凸面	二郎	-245	191	元札・茶槽間, I層	平瓦	凹面	半
-195	293	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	二郎	-246	256	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	半
-196	177	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	二郎	-247	64	元札槽, 栗石	平瓦(部)	凹面	半
-197	207	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	辰/二郎太	-248	209	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	半
-198	204	元札・茶槽間, II層	平瓦(部)	凹面	二郎太	-249	40	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	弥
-199	223	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	二郎太	-250	32	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	弥
-200	31	元札槽, 不明	平瓦(部)	凹面	二郎太	-251	270	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	弥
-201	219	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	二郎太	-252	102	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	弥
-202	69	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	二郎太	-253	336	茶槽, I層	丸瓦	凸面	馬弥
-203	321	茶槽, II層	平瓦(部)	凹面	二郎太	-254	243	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	弥
-204	276	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	二郎太	-255	18	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	弥
-205	271	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	二郎太	-256	46	元札槽, I層	丸瓦	凸面	弥
-206	266	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	二郎太	-257	288	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	弥
-207	81	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	少	-258	338	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	弥
-208	305	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	少	-259	82	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	弥
-209	71	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	少	-260	139	元札槽, II層	平瓦(部)	凹面	弥
-210	80	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	少	-261	224	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	弥
53-211	148	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	少	-262	178	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	弥
-212	12	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	少	-263	157	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丑安
-213	171	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	少	-264	236	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	丑安
-214	173	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	少	-265	74	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丑安
-215	34	元札槽, I層	平瓦	凹面	少	-266	291	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	与
-216	187	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	少	-267	76	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	与
-217	10	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	少	-268	213	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	嘉の略字カ
-218	95	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	少	-269	27	元札槽, 不明	平瓦(部)	凹面	助七(二重角枠内)
-219	108	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	少	-270	116	元札槽, I層	丸瓦	凸面	仁平次(二重枠内)

第11表 瓦刻印観察表 (4)

報告No	整理No	出土位置	種類	刻印面	記銘・文様	報告No	整理No	出土位置	種類	刻印面	記銘・文様
54-271	30	元札槽, 不明	平瓦(部)	凹面	五郎左衛門(分銅形内)	55-302	29	元札槽, 不明	平瓦(部)	凹面	丸に一つ引き文
-272	311	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	半左衛門(分銅形内)	-303	310	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	丸に一つ引き文
-273	281	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	半左衛門(分銅形内)	-304	268	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	丸に一つ引き文
-274	283	元札・茶槽間, I層	雁振瓦	凸面	猿渡(分銅形内)	-305	240	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	楕円に一つ引き文
-275	218	元札・茶槽間, I層	軒平瓦	凹面	猿渡(分銅形内)	-306	215	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	楕円に一つ引き文
-276	131	元札槽, I層	平瓦	凹面	猿渡カ(扇形内)	-307	323	茶槽, II層	平瓦(部)	凹面	丸に二?文
-277	73	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	庄(分銅形内)	-308	251	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	丸に二?文
-278	111	元札槽, I層	丸瓦	凸面	吉カ	-309	280	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	丸に二?文
-279	17	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	五右衛門	-310	325	茶槽, II層	平瓦(部)	凹面	丸に二?文
-280	96	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	五右衛門	-311	245	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	丸に二?文
55-281	66	元札槽, 栗石	平瓦(部)	凹面	九曜紋	-312	228	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	丸に二?文
-282	54	元札槽, I層	丸瓦	凸面	九曜紋	-313	59	元札槽, 栗石	平瓦(部)	凹面	二重丸内十字文
-283	226	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	九曜紋	-314	114	元札槽, I層	丸瓦	凸面	二重丸内十字文
-284	60	元札槽, 栗石	平瓦(部)	凹面	九曜紋	-315	258	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	二重丸内十字文
-285	22	元札槽, I層	丸瓦	凸面	九曜紋	-316	147	元札槽, II層	丸瓦	凸面	二重丸内十字文
-286	136	元札槽, II層	平瓦(部)	凹面	丸文	-317	399	元札・茶槽間, I層	滴水瓦	凸面	二重丸内十字文
-287	200	元札・茶槽間, II層	平瓦(部)	凹面	丸文	-318	297	茶槽, I層	丸瓦	凸面	花文(複数)
-288	292	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	丸文	-319	122	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	花文
-289	298	茶槽, I層	丸瓦	凸面	丸文	-320	124	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	花文
-290	128	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丸文	-321	94	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	花文
-291	210	元札・茶槽間, I層	丸瓦	凸面	丸文	-322	44	元札槽, 栗石	丸瓦	凸面	花文
-292	47	元札槽, I層	丸瓦	凸面	丸文	-323	193	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	花文
-293	150	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丸文	-324	26	元札槽, I層	丸瓦	凸面	三つ葉文
-294	133	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丸文	-325	324	茶槽, II層	平瓦(部)	凹面	菱形文
-295	162	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丸文	-326	235	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	菱形文
-296	146	元札槽, II層	丸瓦	凸面	丸文	-327	169	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	菱形文
-297	88	元札槽, I層	丸瓦	凸面	丸文	-328	179	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丸に井桁文
-298	98	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丸文(輪違い文)	-329	183	元札槽, I層	丸瓦	凸面	丸に袈裟懸け文
-299	307	茶槽, I層	平瓦(部)	凹面	丸文(輪違い文)	-330	142	元札槽, II層	平瓦(部)	凹面	×印
-300	289	元札・茶槽間, I層	平瓦(部)	凹面	丸に一引き文	-331	295	茶槽, I層	丸瓦	凸面	×印
-301	127	元札槽, I層	平瓦(部)	凹面	丸に一つ引き文						



第38图 3



第38图 3



第38图 6·7



第40图 1



第40图 2



第40图 4



第40图 5



第40图 6



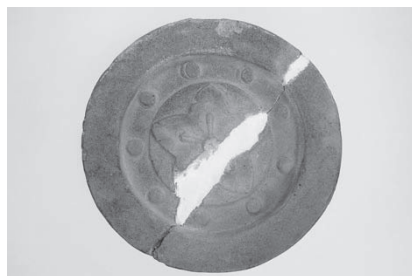
第40图 7



第40图 12



第40图 13



第41图 15



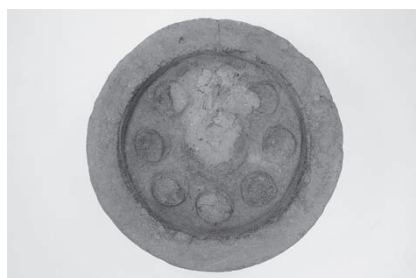
第41图 18



第41图 19



第41图 24



第41图 25



第41图 26



第41图 27



第41图28



第42图29



第42图30



第42图32



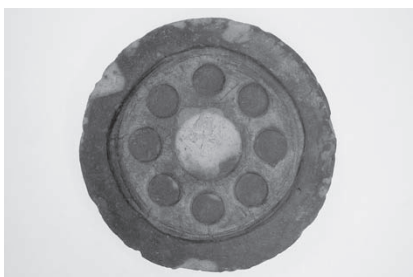
第42图34



第43图44



第43图48



第43图50



第43图50



第44图51



第44图52



第44图53



第44图53



第44图54



第44图56



第44图57



第44图57



第44图58



第44图59



第44图59



第44图60



第44图61



第45图66



第45图67



第45图70



第45图71



第45图72



第45图73



第45图74



第45图75



第46图77



第46图78



第46图79



第46图80



第46图81



第55图318

### (3) 保存修理工事

#### a. 工事概要

本工事は本丸御殿跡（廻り通路及び二様の石垣含む）の石垣保存修理工事（熊本城跡本丸御殿復元整備工事報告書2009年報告）と併せて発注、実施したものである。なお、元札櫓御門跡櫓台上面の工事前発掘調査は本工事発注後に、既に発掘調査が終了していた本丸御殿跡の工事中に実施した。主な検出遺構は櫓門の土台礎石列等である。工事はこれらの遺構を完了後に元位置に復旧することを前提として実施した。

第12表 工事概要

工 事 種 別		単位	数 量	備 考
施工延長		m	74.67	
解 体 工	石垣解体工	m <sup>2</sup>	356.00	雑石控え60～80cm
石 積 工	空石積工	m <sup>2</sup>	356.00	〃
雑 工	樹木伐採処理工	本	1.0	クスノキ、3.2m
	排水溝解体修理	m	20.0	
	同上石垣修理	m <sup>2</sup>	12.15	
遺構調査		〃	170.00	

#### b. 工事実施

工事は設計図書及び添付の熊本市制定「公園工事仕様書」「安全管理仕様書」、熊本県土木部制定「土木工事共通仕様書」及び特記仕様書により実施した。

<特記仕様書>

1. 特別史跡熊本城跡の重要な遺構の保存修理であることを十分認識した上で施工に当たり、工事に従事する石工はもちろん作業員に至るまで意識徹底に努めること。
2. 既存石垣の取り外しに先立ち、各測点における現況勾配を詳細に記録し、復元における勾配決定の参考にすること。また、石垣勾配に併せて根石深さの調査を実施し記録すること。
3. 既存石垣の取り外しは、築石に番号を付して取り外すが、取り外しに際し築石の控え、面の大きさ等を記録するとともに、現況の裏栗石厚さの状況も併せて記録するものとする。
4. 既存石垣の取り外しに際し、石垣内部等より判明していない遺構（排水溝等）が検出された場合は、直ちに係員に連絡を取り指示に従うこと。この際記録のため調査を行うことがあるので考慮すること。
5. 修理箇所は下部に歩車道が隣接しているため、安全対策は十分に行い、特に築石の吊り降ろし、吊り込みの際は誘導員を配置するなど、安全管理には十分な対策を講じて事故防止に努めること。
6. 石積み工法は「算木積み」と「打ち込みはぎ」の併用によっておこない、現状の築石の配列等を十分参考にすること。
7. 石工は城郭石積み（熊本城跡）の石垣修理等に三年以上従事の経験を持つものを採用することとするが、一般土木工事の石積工事の経験を有し、城郭石垣の修理工事等に参加を希望するものがあれば積極的に採用すること。
8. 本修理工事は、石工の経験と古来工法の理解が重要な要素となるため、条件に適応しなくなり工事実施が困難となった場合は、係員と協議し承認を受けた後実施すること。
9. 本工事の実施に当たっては、工事車両や資材の搬入が竹の丸広場園路などを経路としているため、観光客優先に心がけ、観光客へ危害を及ぼすことのないよう十分注意して通行すること。
10. 本工事箇所は、例年実施される「お城まつり」の主会場となっているため、工事実施は祭り終了後の着手とするので、考慮した工程計画とすること。

## <石垣解体修理工事>

### ①準備工

- ・石垣解体修理工事に伴う遺構調査により検出した櫓門跡及び茶御櫓跡の礎石及び石列などについて、修理完了後に現状に復旧するため、座標による位置及び高さ等について記録した。
- ・解体工事に先立ち石垣の現状勾配の再確認及び基準高さの設定を行い、隅各部や基準となる石垣天端の観測を行った。
- ・石垣面の清掃を行い、縦横50cm間隔にて墨打ちを行い、石垣立面図を利用して解体範囲内の築石に番号を付した。復築の際混在することを避けるため各面ごとに区分して番号を付した。

### ②解体工

- ・解体に先立ち石垣上部の礎石や石列は復築完了時に元位置に戻すため、人力によりラフテクレーンを利用して解体した。
- ・裏込栗石の解体は人力及び小型のバックホーを利用して慎重に実施した。
- ・築石は一石毎に番号を付した。管理番号は前面に付した番号を確認しながらペンキを用いて付した。また、吊り出しは築石にキズをつけないよう布製のものを採用して実施した。
- ・角石の解体は特に慎重に実施し、二段毎に座標値及び高さを記録し、復築の目安とした。
- ・石垣解体に合わせて、裏込栗石の充填幅についても、観測し写真撮影により記録した。
- ・築石は基本的に全て再利用することから、角面毎に区分して集積し、復築の際吊り込みが容易なように、陣木を敷くなど整理して配列した。
- ・築石は一石毎に土砂等の清掃を行い、面及び控え長さの記録を行い整理した。なお、50個毎に写真撮影により記録した。
- ・裏込栗石はすべて再利用の対象としたことから、所定の場所に集積し、土砂との選別作業を行い、出来るだけ土砂等の付着にも注意を払って再利用に備えた。
- ・櫓台内部はほとんどが安山岩の川原石及び割栗石で充填されており、既存栗石の再利用は全体の87%で、不足分の補充は安山岩の割栗石を購入して充填した。

### ③石積工（復築）

- ・復築に先立ち、工事担当者（市監督員）の立会のもと、解体前の測量値及び基準とした勾配を基に遣り方を設置した。
- ・復築前に解体範囲を明示するため、鉛板（厚さ3mm幅10cm）を敷設した。
- ・復築は基本的に一段毎に行い、築石の配置は立面図や事前に撮影した写真、及び事前に墨入れした方格線を参考にして、一段毎に勾配等を確認するなど慎重に行った。
- ・胴込栗石はズレが起きないように慎重に詰め、裏込栗石は十分な締め固めを行った。
- ・角石部分では2段毎に工事担当者（市監督員、現場代理人、石工）と立会いを行い、相互確認のうえ作業を継続した。

## <その他の付帯工事>

### ①水溝補修

櫓台北側石垣裾部の排水溝は、虎口内が盛土整備された時と同時期に土留めとして設置されたと思われる、北側石垣を北側の側壁とし、南側は雑割り石を積上げている。排水溝の底石に門の礎石の一部が確認されたが、排水溝は現状での排水機能を維持していることから、礎石は現状保存とし毀損部分の石垣修理として補修した。また、現状通路高さとの礎石の高低差により約50cmの盛土されていることが確認された。

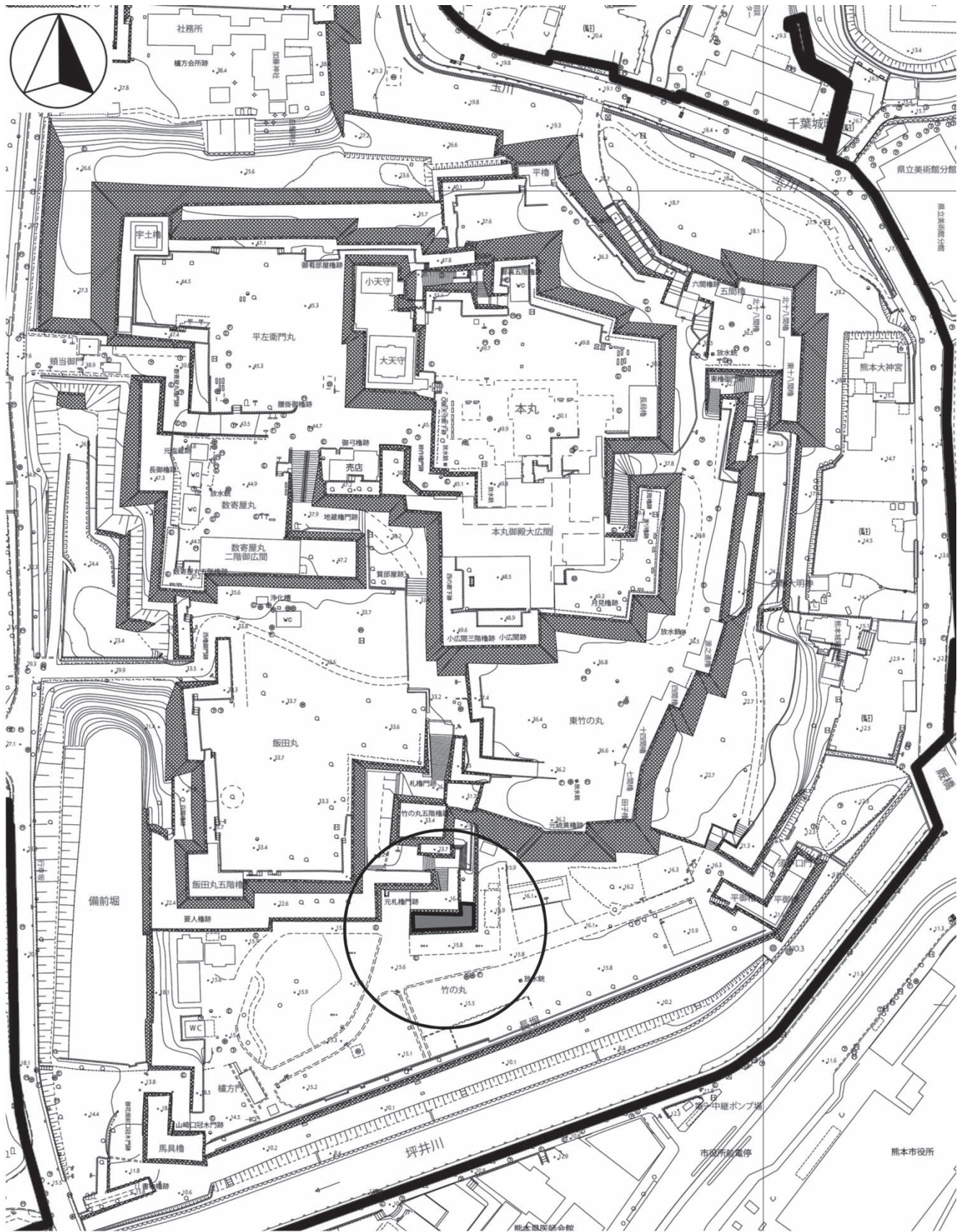


## ②樹木伐採、抜根

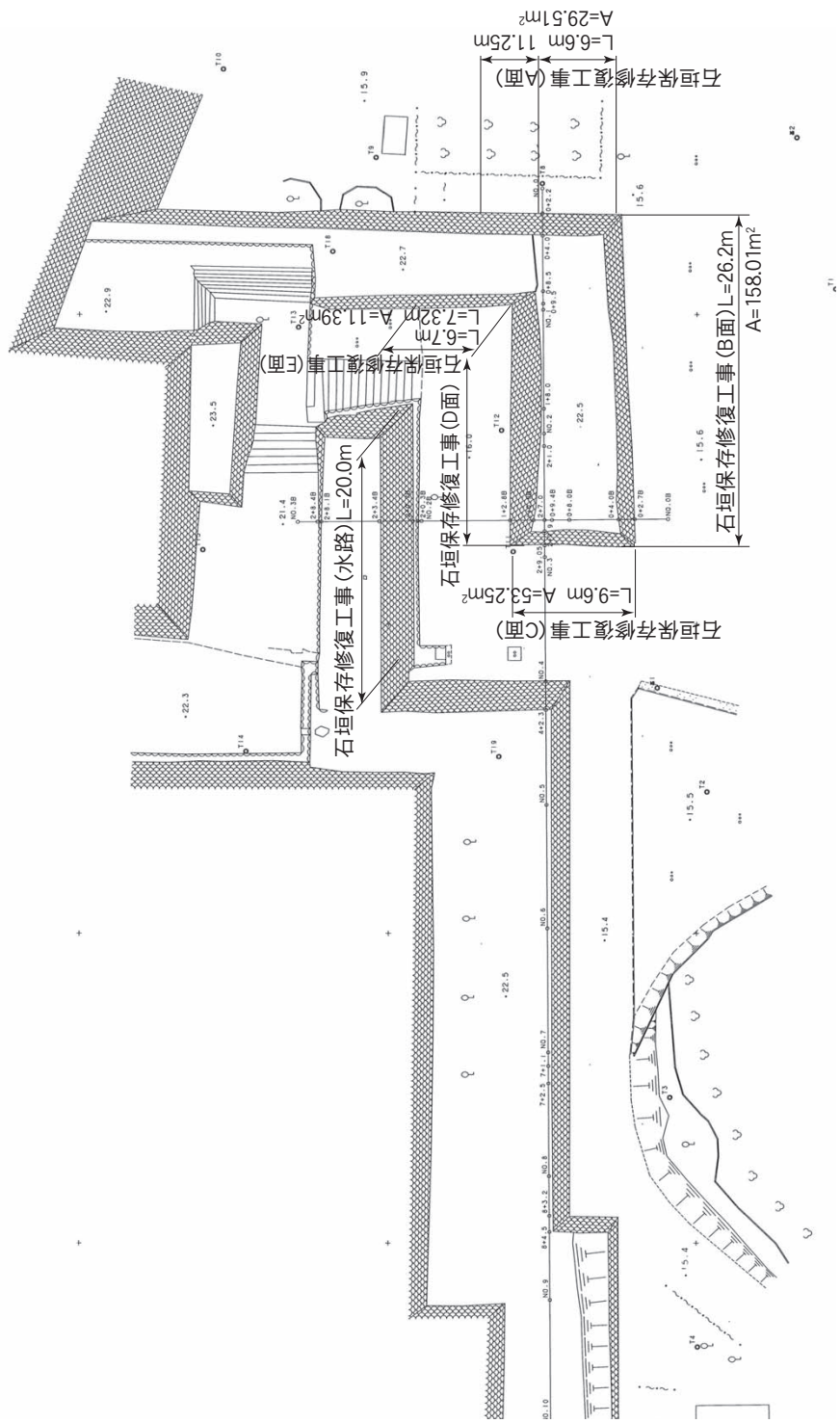
門内のほぼ中央のクスノキは櫓門の内部であり、江戸期には存在しない樹木であること、及び観光客の主要な動線であることから、埋蔵文化財担当者の立会いの上、遺構に配慮しながら伐採、抜根の処理を実施した。

### <工事設計変更>

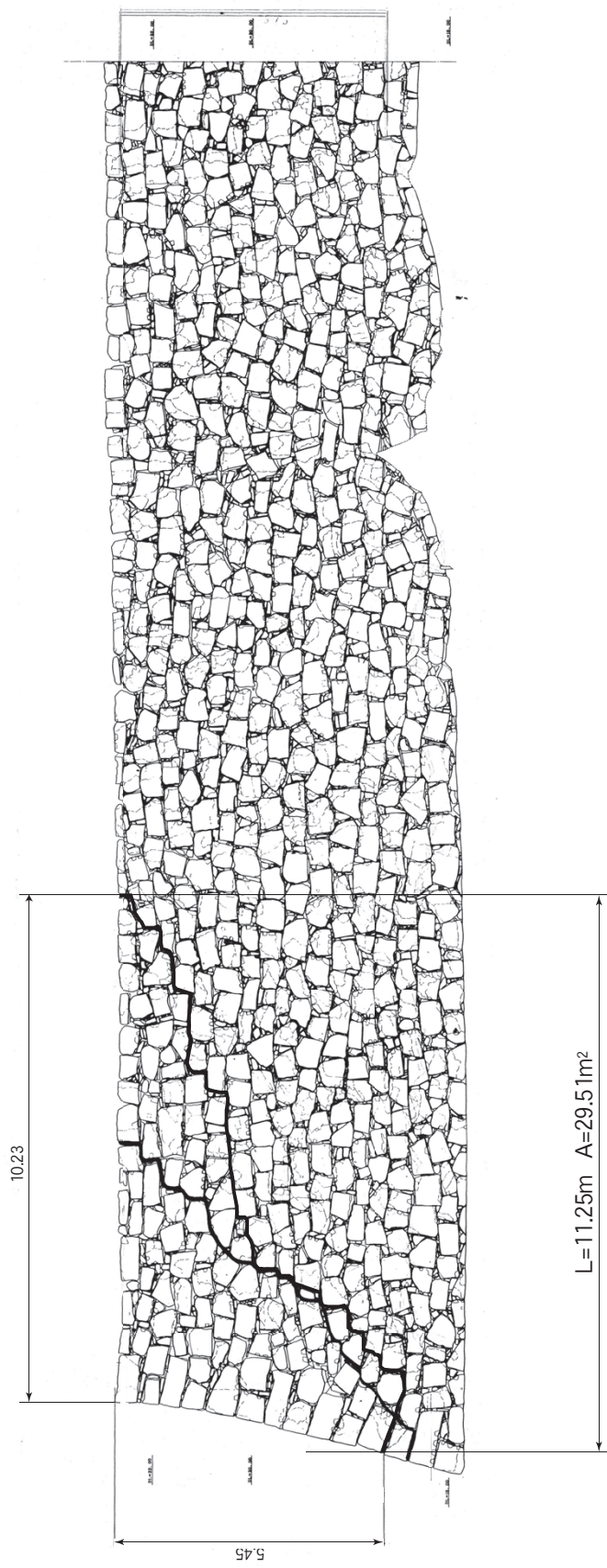
当初設計においては、石垣上部の櫓台部分については現状を基本とした形状に復旧することとし、解体範囲を設定していたが、櫓台における形状について城域全体を対象に再検討した結果、その一部を変更したことにより解体範囲を拡張することとした。また、解体前の測量値、基準とした勾配を基に復築のための遣り方を設置し、復元勾配及び前後左右の石垣面の取り合い等を再検討した結果、均一した石垣面とする必要から、解体面積を追加し復築することとした。



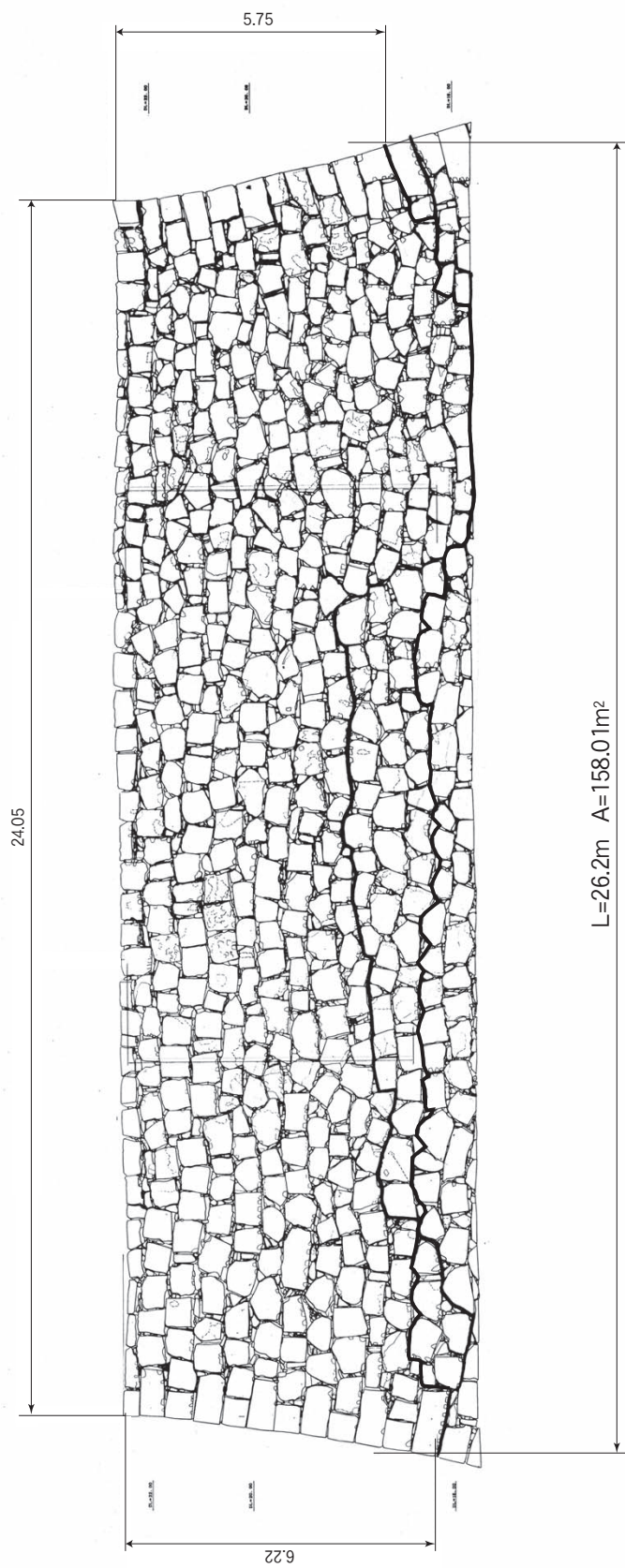
第56図 工事位置図



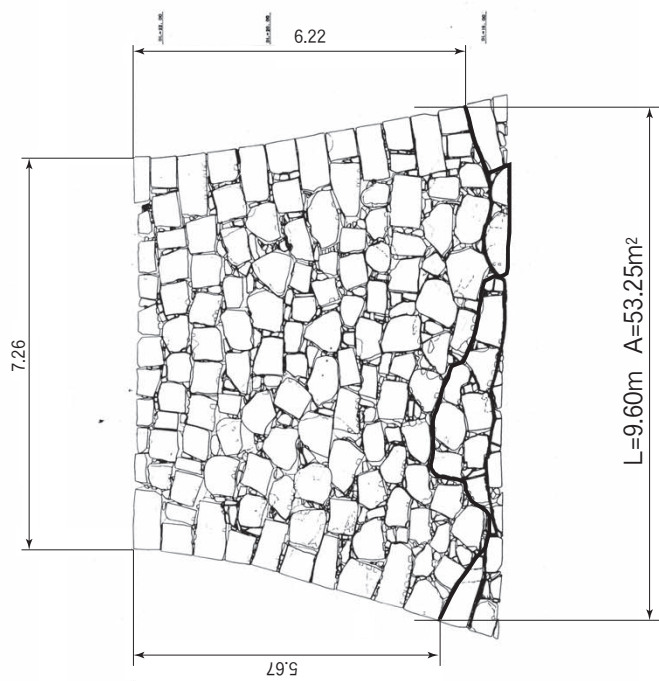
第57図 工事平面図



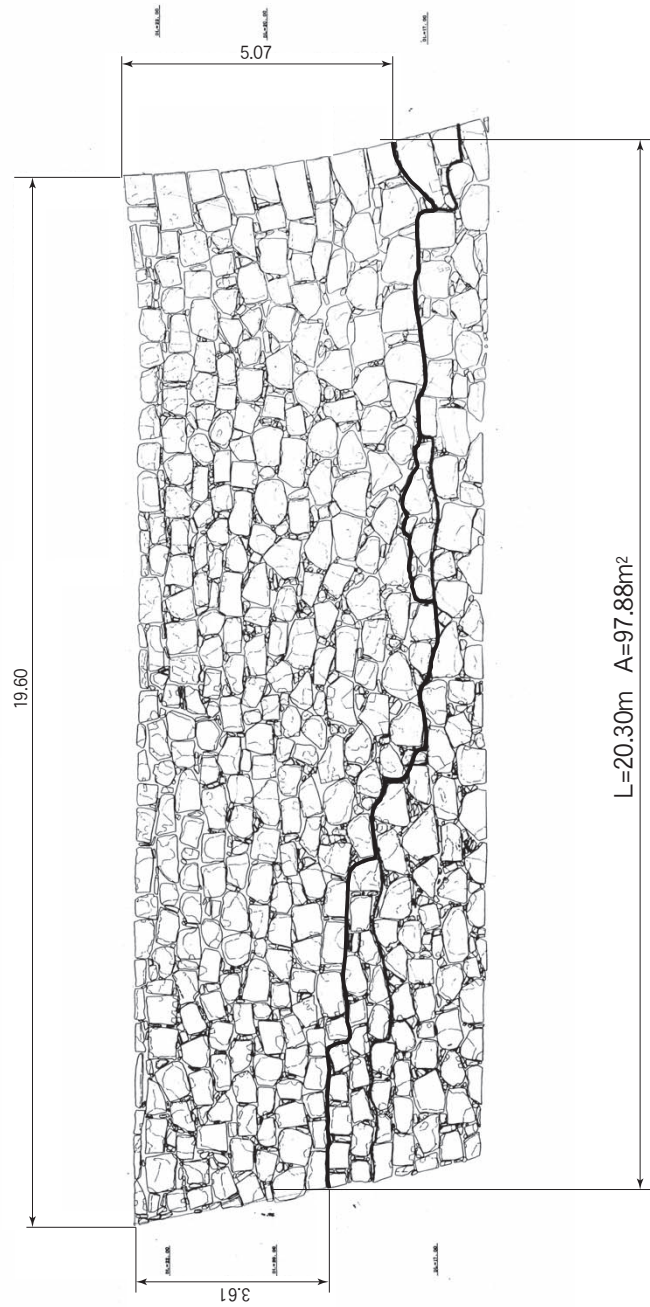
第58图 石垣立面图 (A面)



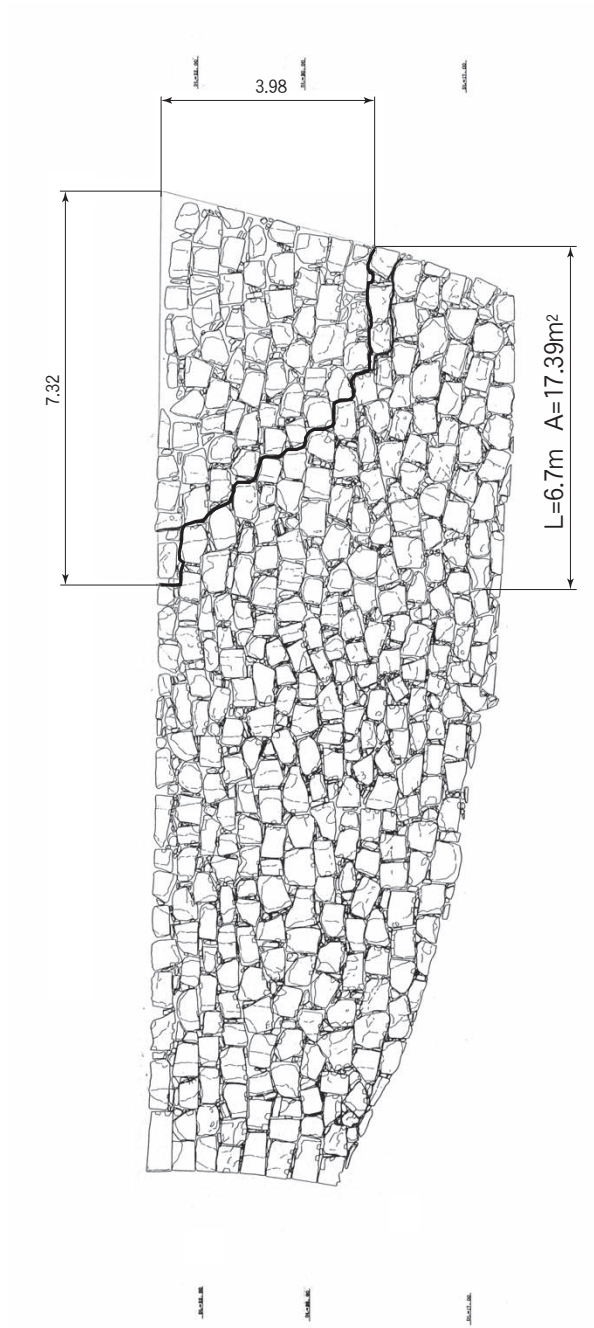
第59图 石垣立面图 (B面)



第60图 石垣立面图 (C面)

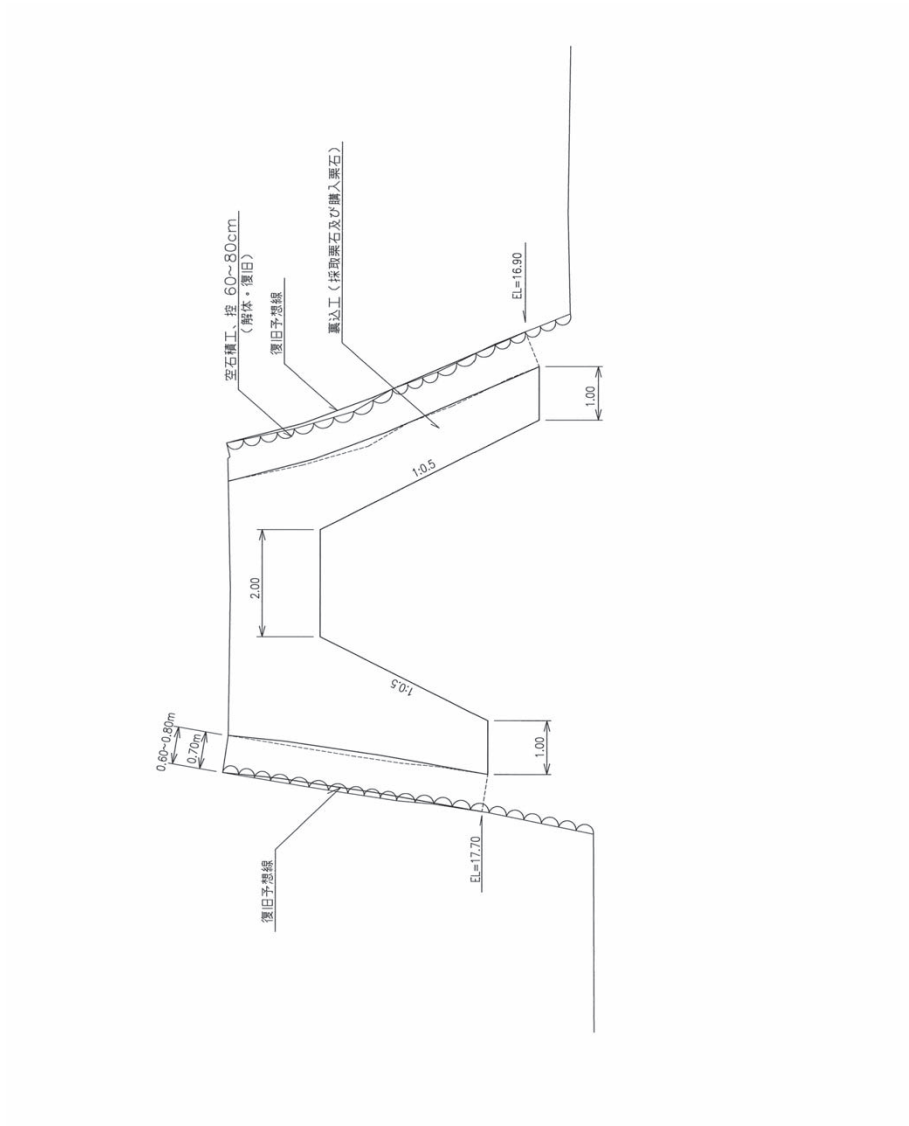


第61图 石垣立面图 (D面)

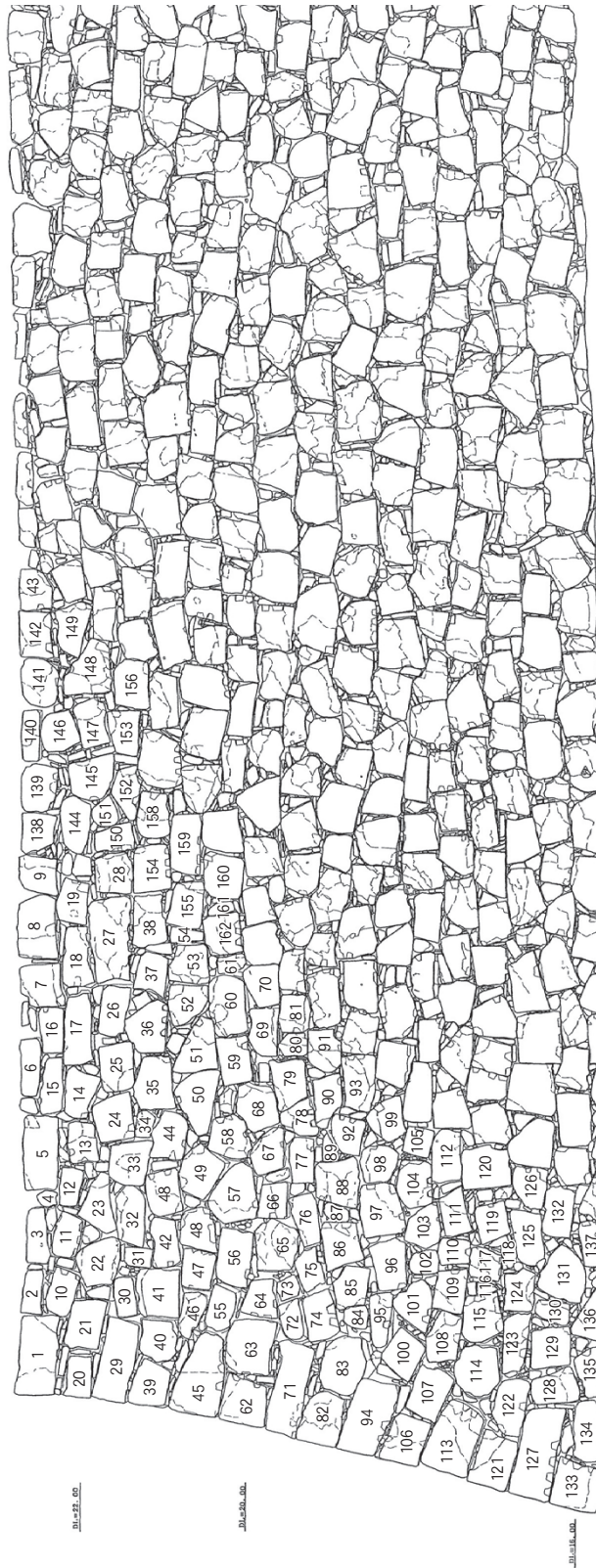


第62图 石垣立面图 (E面)

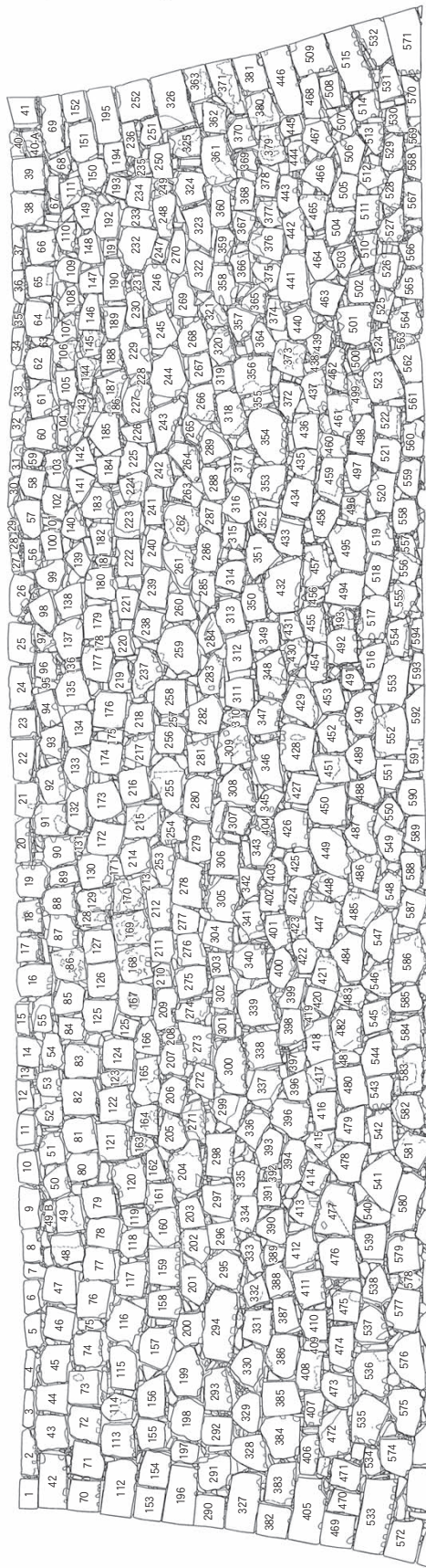




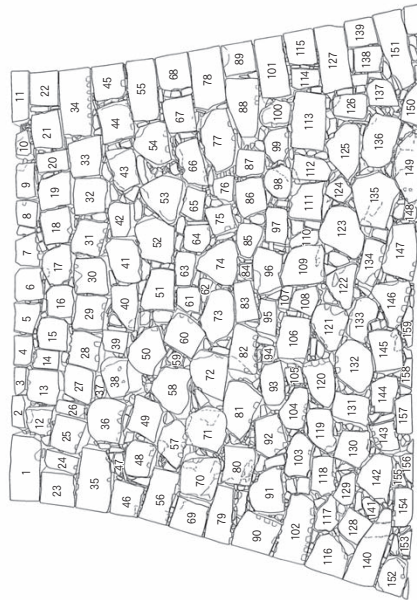
第63図 標準断面図 No. 2 付近



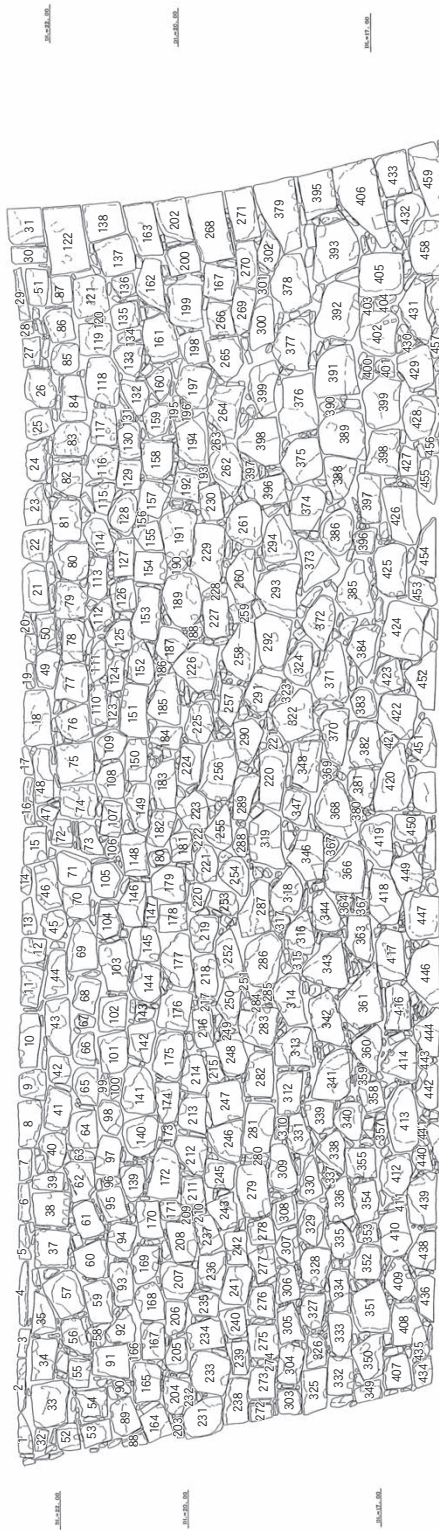
第64图 築石管理図 (A面)



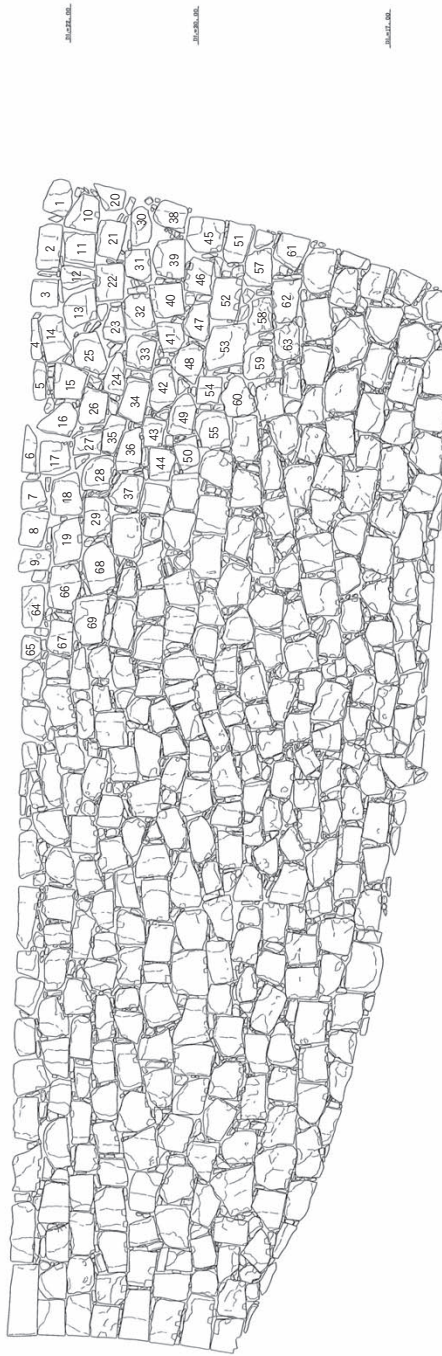
第65图 築石管理図 (B面)



第66图 築石管理図 (C面)



第67図 築石管理図 (D面)



第68图 築石管理図 (E面)

第13表 築石管理表（A面、B面－1）

A面									
番号	項目	在石	築石加工		形状寸法			写真管理	備考
			新補石	城内流用石	a	b	c		
1					1000	500	550		角石(B-41)
2					560	250	750		
3					710	280	550		
4									
5					900	430	600		
6					680	240	400		
7					510	500	800		
8					720	460	600		
9					400	460	800		
10					570	320	900		
11					540	310	650		
12					480	260	700		
13					480	370	560		
14					540	400	700		
15					680	280	650		
16					550	300	750		
17					850	350	750		
18					700	300	650		
19					480	340	750		
20									
21					600	430	800		
22					510	570	840		
23					640	350	800		

B面									
番号	項目	在石	築石加工		形状寸法			写真管理	備考
			新補石	城内流用石	a	b	c		
1					510	280	850		角石(C-11)
2					800	250	400		
3					620	180	400		
4					450	240	700		
5					570	300	500		
6					520	300	550		
7					250	400	700		
8					630	320	500		
9					680	400	600		
10					560	360	550		
11					500	350	550		
12					500	260	600		
13									
14					540	420	700		
15					520	220	500		
16					560	610	850		
17					440	380	600		
18					540	430	550		
19					570	500	700		
20					730	250	550		
21					620	380	600		
22					690	350	500		
23					450	410	700		
24					680	360	700		
25					650	390	800		
26					690	360	650		
27					320	150	350		

第13表 築石管理表 (B面-2)

		B面							
番号	項目	在石	築石加工		形状寸法			写真管理	備考
			新補石	城内流用石	a	b	c		
28					550	150	550		
29									
30					520	150	550		
31					570	220	550		
32					490	270	500		
33					670	260	750		
34					670	220	400		
35					370	150	450		
36					580	240	750		
37					750	200	500		
38					550	570	900		
39					610	600	1000		
40					480	200	400		
41									
42					960	530	470		角石(C-22)
43					590	550	1000		
44					460	600	1000		
45					670	600	1100		
46					550	560	1100		
47					600	630	1000		
48					630	600	950		
49					590	500	1000		
50					480	410	700		
51					530	430	650		
52					400	450	700		
53					450	430	700		
54					570	360	850		
55					600	330	800		
56					540	290	800		
57					680	420	800		
58					460	410	800		
59					270	330	550		
60					520	560	900		
61					560	440	1000		
62					560	500	900		
63									
64					600	480	1100		
65					540	500	1000		
66					530	500	900		
67					650	220	460		
68					350	320	800		
69									
70									
71									
72									
73									
74									
75									
76									
77									
78									
79									
80					470	530	750		
81					600	560	1050		



第13表 築石管理表（B面－3、C面）

B面									
番号	項目	在石	築石加工		形状寸法			写真管理	備考
			新補石	城内流用石	a	b	c		
82					620	580	1150		
83					550	580	1000		
84					380	430	800		
85					530	520	830		
86					580	550	1100		
87					560	490	900		
88					480	580	900		
89					300	500	700		
90					500	530	850		
91					540	550	1100		
92					630	440	700		
93					460	360	600		
94					570	420	550		
95									
96					440	400	600		
97					360	240	550		
98					620	360	800		
99					450	460	650		
100					520	350	700		

C面									
番号	項目	在石	築石加工		形状寸法			写真管理	備考
			新補石	城内流用石	a	b	c		
1					1120	500	550		角石(D-31)
2					540	240	600		
3					460	220	600		
4					500	350	600		
5					550	460	850		
6					550	500	950		
7					480	400	500		
8					430	380	600		
9					550	330	600		
10					430	250	500		
11									
12					460	440	800		
13					560	600	1000		
14					320	450	500		
15					550	540	950		
16					520	500	1000		
17					580	550	950		
18					580	550	1050		
19					560	580	1000		
20					310	550	500		
21					590	500	1000		
22									
23					550	600	1060		角石(D-122)
24					290	570	600		
25					570	520	1100		
26					520	220	600		

第13表 築石管理表 (D面-1)

		D面					写真管理	備考	
番号	項目	在石	築石加工		形状寸法				
			新補石	城内流用石	a	b	c		
1					600	180	400		
2					480	140	400		
3					470	130	500		
4					1000	120	600		
8					730	330	450		
9					400	450	800		
10					860	350	450		
11					650	340	450		
12					380	380	600		
13					550	210	550		
14					440	160	400		
15					620	350	500		
16					680	160	500		
17					400	140	500		
18					830	430	700		
19					370	130	400		
20					840	180	400		
21					760	400	600		
22					470	400	600		
23					630	360	800		
24					630	330	700		
25					480	460	600		
26					590	550	700		
27					470	300	500		
28					280	200	350		
29					600	150	350		
30					260	530	550		
31									
32					330	200	500		
33					770	540	770		
34					660	340	880		
35					650	360	740		
36					290	140	200		
37					610	530	740		
38					510	570	830		
39					260	520	430		
40					580	420	670		
41					680	420	450		
42					420	360	700		
43					870	400	500		
44					730	330	930		
45					480	410	550		
46					700	370	450		
47					280	310	530		
48					780	280	950		
49					640	320	900		
50					600	280	600		
51					580	330	750		
52					560	340	750		
53									
54									
55									
56									
57									

第13表 築石管理表（D面－2、E面）

D面									
番号	項目	在石	築石加工		形状寸法			写真管理	備考
			新補石	城内流用石	a	b	c		
58									
59									
60									
61									
62									
63									
64									
65					590	420	750		
66					480	340	770		
67									
68					530	460	600		
69					800	440	570		
70					500	440	450		
71					600	480	580		
72					470	340	630		
73					500	280	730		
74					500	570	850		
75					590	580	1100		
76					500	480	800		
77					550	500	830		
78					720	310	550		
79					580	500	700		
80					590	520	590		
81					600	400	860		
82					540	480	900		
83					540	570	1050		
84					750	360	500		
85					490	490	830		
86					580	440	960		
87					430	300	590		

E面									
番号	項目	在石	築石加工		形状寸法			写真管理	備考
			新補石	城内流用石	a	b	c		
1					570	420	600		
2					700	350	700		
3					400	400	700		
4					600	160	500		
5					600	200	500		
6					700	200	400		
7					400	360	750		
8					500	380	650		
9					300	460	600		
10									
11									
12									
13									
14					700	400	800		
64					730	380	700		



完成 全景



完成 A面



完成 B面



完成 C面



完成 D面



完成 E面



着工前 AB面



着工前 AB隅角部



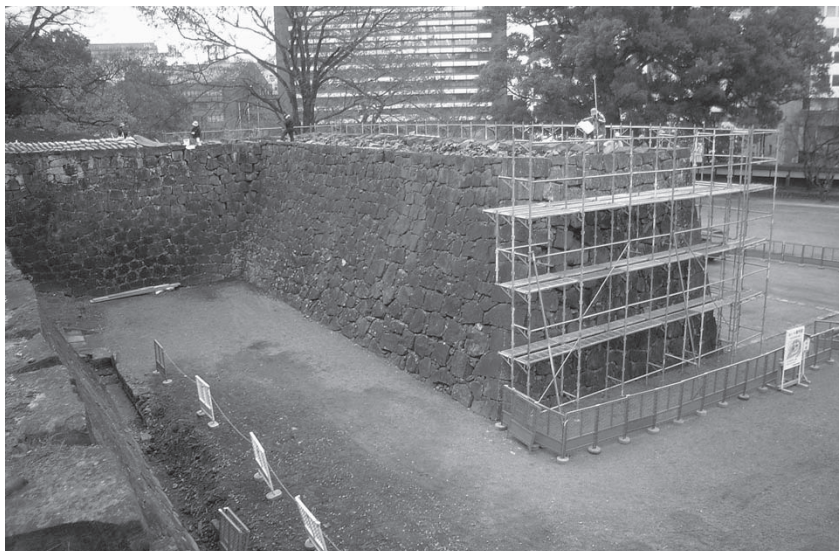
着工前 BC面隅角部



着工前 B面 全景



着工前 CD面 隅角部



着工前 全景 西より



着工前 C面



着工前 DE面 入隅部



着工前 D面



着工前 E面



着工前天端 A面



着工前天端 B面



着工前天端 C面



着工前天端 D面





解体状況、建物礎石



解体状況 A E 面



解体状況 B 面



解体状況 B 面 東



解体状況 A B 面隅部



解体状況 E 面



解体状況 C 面



解体状況 C 面



解体状況 D面



解体状況全景 西から



解体状況全景 東側 1



解体状況全景 東側 2



解体状況全景 東側 3



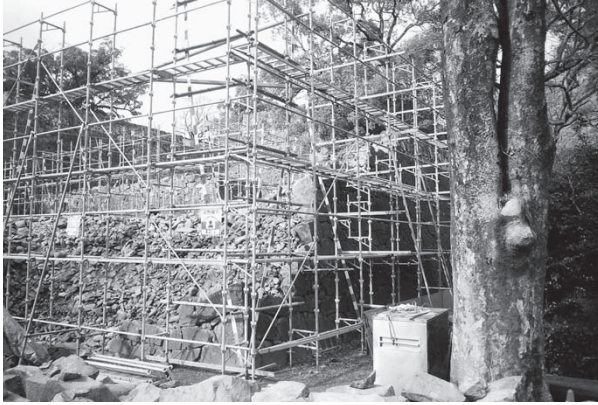
解体状況全景 西側



築石仮置き状況



栗石篩い分け状況



解体完了 AB面



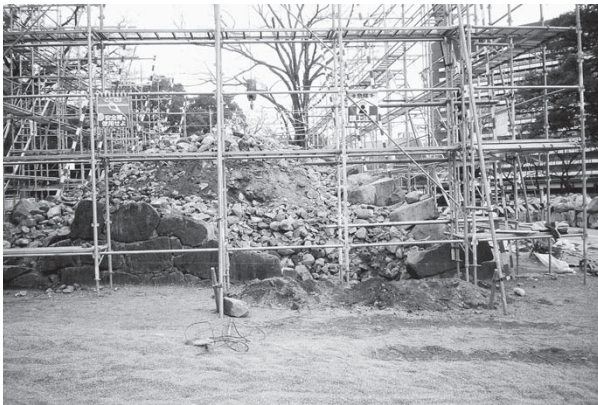
遣り方設置 AB面



遣り方設置 AE面



解体完了 C面1



解体完了 C面2



解体完了 CD隅部



D面 遣り方設置



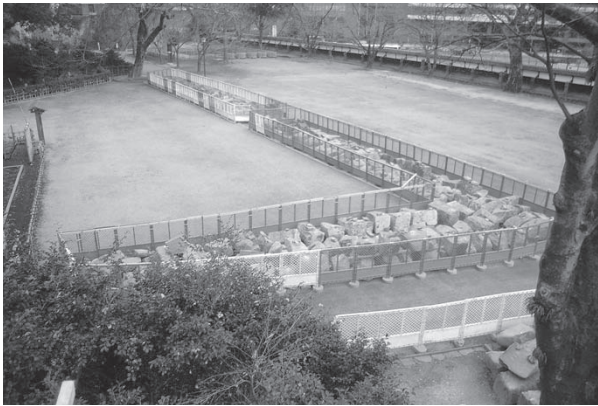
D面 遣り方設置



解体完了 DE入隅部



解体完了 遣り方



築石仮置き状況 1



築石仮置き状況 2



築石仮置き状況 3



鉛板設置



B面状況



角石据付



復築経過 D面



復築経過 B面



裏込栗石敷込B面



裏込栗石敷込全景



裏込栗石敷込D面

### 3. 平成16年度（要人御櫓跡）の事業

#### (1) 事業の目的と経過

##### a. 要人御櫓跡の概要

###### 歴史資料

当該地は熊本市本丸南の竹の丸の北側に位置する。「御城内御絵図」（熊本市蔵、第71図）によると、飯田丸を構成する石垣まで幅約4間の平場が造成され、備前堀から東の元札櫓御門前の虎口までの石垣上に要人御櫓が構築されている。要人御櫓は接続する2棟からなり、東の櫓は梁間3間桁行22間、西の櫓は梁間3間桁行23間で西端の北側には2間×3間の部屋が附く。櫓の両端には石落としが設けてあり、内部の窓側には武者走りとなる通路となっていた。

「熊本城廻絵図」（熊本県立図書館蔵、第70図）では、竹ノ丸のうち、要人御櫓台下にあたる場所に「西郡要人」の名が見える。図中に記入されている家臣名から、細川氏入国後から遠くない時期の状況を描いたものと推察されるが、同時代に作成・使用されたものか確証を得ない。西郡要人は、寛永16年（1639）から正保2年（1645）まで熊本藩の奉行を勤めた人物である。この絵図より以前の寛永6～8年頃の「熊本屋鋪割下絵図」（熊本県立図書館蔵、第69図）には、当該部分に「御下台所」とある。細川氏の入国後、西郡要人にこの台所一帯が預けられたため、隣接する石垣上にあった櫓を要人御櫓と称するようになったとも考えられる<sup>1)</sup>。「要人櫓」の呼称は、享保年間にはすでに史料で確認することができる<sup>2)</sup>。

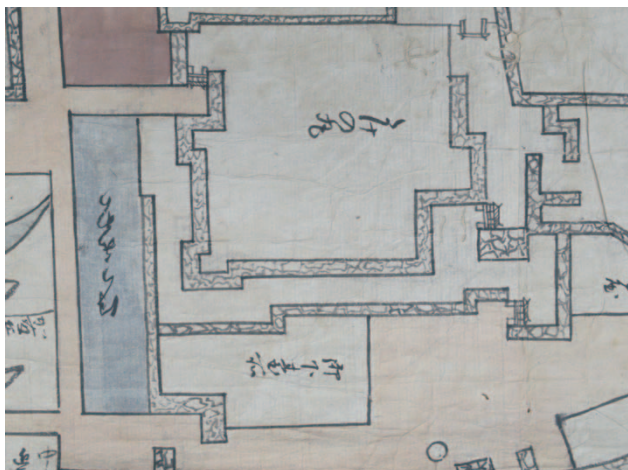
第73図は、明治初期に南坂下から飯田丸と本丸方向を撮影したものである。右上に飯田丸五階櫓が、その一つ下の石垣上に要人御櫓の西端がみえる。その後の、明治9年に作成された「城郭之図」（国立国会図書館蔵、第72図）では、要人御櫓は確認できない。

###### 石垣

飯田丸南には幅9m前後で犬走り状に廻る帯曲輪があり、東西棟の連結する二棟の平櫓「要人御櫓」があった。両櫓の台となった石垣は、東辺長14m、南辺長90m、西辺長44m、総延長148m、高さは曲輪内で6.8m、備前濠側で水面から10.6mとなる。石垣中間にある長さ4mの折角の入隅の観察では、西側石垣が先行して普請されている。

西側石垣は、隅角の進入角60度で、角石は高さ68～72cm、長さ120～141cm、幅66～73cm程度の略長方体に成形し、稜線を大きく面取りする。築石は勾配76度ほどで直方体ないしは長方体に近似したやや大型の粗割石を使用し、間詰めには主に塊石を用い、緩やかに波打つ布積みとなっている。西側石垣の上部の角石で3石分ほどは石垣が欠失し（今回の修補箇所）、その西方の大半は間詰め石をほとんど用いない布積みで異質である。これは明治22年の金峰山地震で直上の飯田丸五階櫓台が崩壊した際、大量の石材の重圧によって二次的に崩落した箇所で、陸軍による修復を受けた箇所と考えられる。

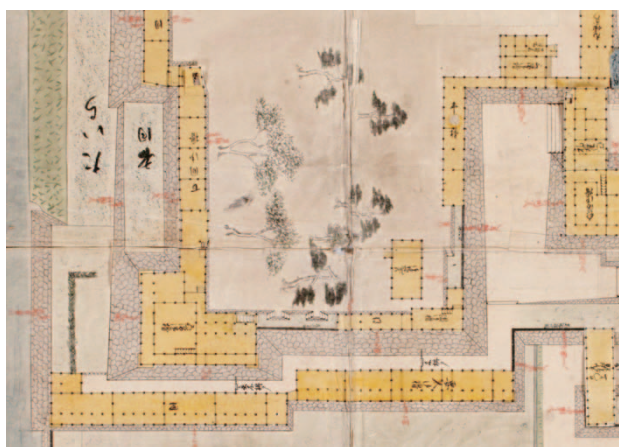
一方、東側石垣の場合は、隅角の進入角が63度で、角石は高さが62～66cm、長さ108～120、幅67cmの長方体で、稜線を細かく面取りした算木積みとなっている。角脇石をもつ隅角もあるが、角石の控えが小さいものが多く、多くは築石を兼ねている。築石は勾配が64度で高さが36～45cm程度の長方体の割石を用いるために布積みとなっている。築石の高さや形状が近似しているため、間詰め石は築石の左右での縦石の使用が多い。なお、東側石垣では隅角から2.3m奥には隅角が重箱積みとなっている先行する東西方向の石垣東面が露出している。



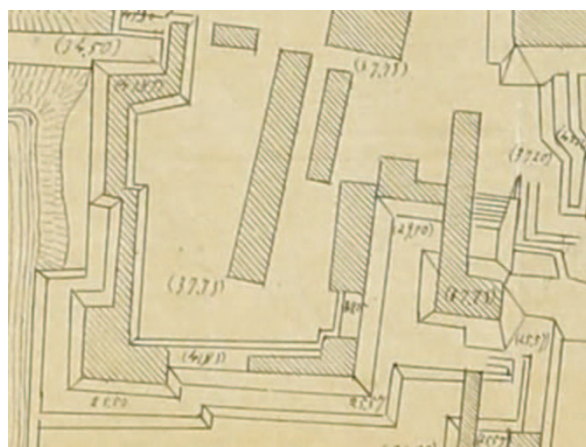
第69図 「熊本屋鋪割下絵図」  
(熊本県立図書館蔵)



第70図 「熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)



第71図 「御城内御絵図」(熊本市蔵)



第72図 「城郭及市街之図」城郭之図部分  
(国立国会図書館蔵)



第73図 「熊本城の景色(9)」(長崎大学附属図書館蔵)

〔註〕

- 1) このほかに、人名に由来する櫓として、源之進御櫓がある。「綿考輯録 卷四十六」に、河喜多源之進という人物が、「綱利君御幼年の比六斎門の上御櫓一ヶ所御預け被成、従類共ニ居住いたし候由、今以源之進櫓と唱候と也」とある。
- 2) 「肥集録」森下功・松本寿三郎編『肥後国地誌集』青潮社 1980

b. 石垣の現状と工事に到る経緯

明治初期に熊本城跡のほぼ全域が鎮西鎮台後の熊本鎮台の管理下となり、竹の丸にも火薬庫等が整備されており、要人御櫓台の石垣は爆発などにより石垣が飛ばされるなどの危険性を回避するため、元札櫓御門前の虎口付近から約50mに渡って撤去されたと云われている。

熊本城跡では昭和41年度から孕みが顕著な個所や、明治初期に撤去された石垣の保存修理や復元整備を実施しており、要人櫓台の石垣についても、昭和51、52年度に実施した西竹の丸五階櫓台石垣の解体修理の際にその一部（東隅から9.7m）が復元整備されているが、撤去部分が残されており本来の姿に復元することが城としての景観からも適切である。

①現状変更等

文化財保護法による現状変更等許可申請日 平成16年9月30日

許可日 平成16年10月29日

②文化庁補助事業

文化庁補助事業名 特別史跡熊本城跡 記念物保存修理事業（石垣保存修理）

補助申請日 平成16年4月20日

補助金交付決定日 平成16年6月16日

実績報告日 平成16年3月31日

c. 事業概要（規模及び事業費）

①事業費（第14表）

収入の部（単位：円）		支出の部（単位：円）		備 考
区 分	収 入 額	区 分	支 出 額	
所有者等負担額	7,360,000	委託費	2,730,000	
国庫補助額	9,200,000	工事請負費	15,142,874	
県補助額	1,840,000	調査経費	110,045	
市町村補助額	0	需用費その他	417,081	
その他				
合計	18,400,000		18,400,000	

②委託

委託業務名 熊本城要人櫓跡石垣立面図作成業務委託

自平成17年1月20日 至平成17年3月31日

契 約 日 平成17年1月20日

完 成 日 平成17年3月31日

検 査 日 平成17年3月31日

業 務 概 要 石垣立面図作成



③保存整備工事

工 事 名	特別史跡熊本城跡 要人櫓跡石垣復元整備工事
工 事 期 間	自平成16年12月1日 至平成17年3月25日
契 約 日	平成16年12月1日
変更契約日	平成17年3月4日
工事完成日	平成17年3月25日
工事検査日	平成16年3月31日

④発掘調査

遺構調査期間	自平成16年12月24日 至平成17年1月20日
--------	--------------------------

## (2) 発掘調査

### a. 調査の方法 (第74・75図)

調査地は、飯田丸曲輪南面石垣にとりつく犬走り状の帯曲輪の上面に位置する。調査期間は平成16年12月24日から平成17年1月20日、調査面積は約90㎡である。既設配管周辺の表土を重機で除去し、遺物包含層の掘り下げと遺構の検出は人力で行った。遺構・遺物の出土状況等の記録図は、手実測に測量機械を併用しながら主に縮尺20分の1と10分の1で作成した。排土は調査区内に仮置きし、遺物を採集した後、工事終了後の整地に使用した。

調査グリッドは、縮尺2,500分の1の地図上において日本測地系座標を基に設定した。まず、熊本城域全体を覆うように500m×500mの大グリッドを設けてA～Mのアルファベットを冠し、それぞれの大グリッド中に5m×5mの小グリッドを設定して北から南、東から西へ1～100の番号をつけ、アルファベットの大グリッド名と小グリッドの数字2つを組み合わせることでグリッド名とした。(例：A100-100グリッド)

### b. 調査の成果

#### 遺構 (第76～79図)

要人御櫓跡の帯曲輪に設定したトレンチで、安山岩製の礎石と凝灰岩製の溝SD2を検出した。基本層序は以下の通りである。

1層：黒褐色土 (10YR 2/2) ぐり石を多く含む。

2層：黒褐色土 (10YR 2/2) ぐり石を含む。

3層：暗褐色土 (10YR 3/4) 焼土・炭化物を含む。

4層：暗褐色土 (10YR 3/3) 焼土・炭化物と漆喰片を多く含む。

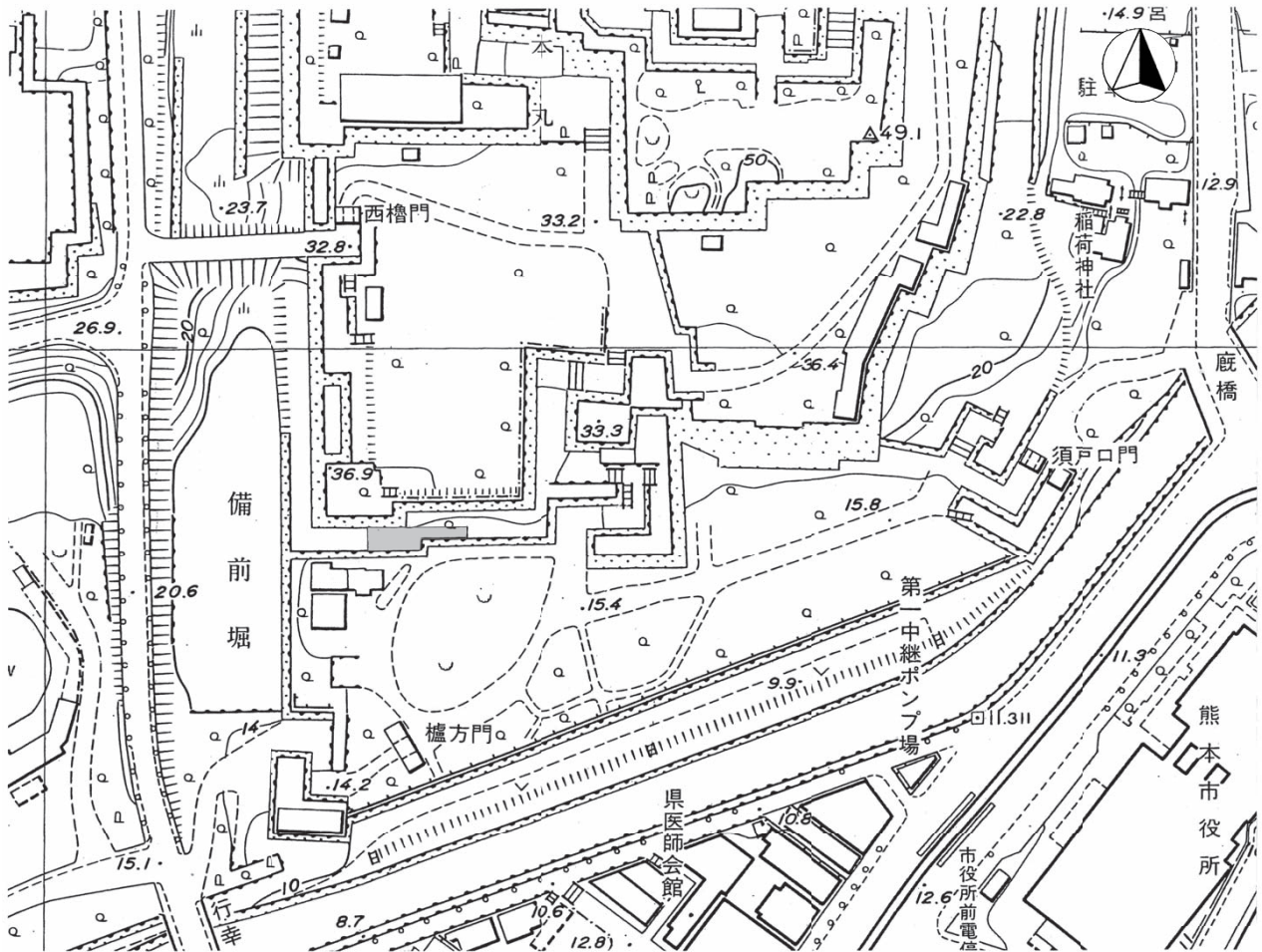
5層：暗褐色土 (10YR 3/4) 焼土・炭化物と漆喰片を多く含む。ややしまる。旧地表面か。

A層：褐色土 (10YR 4/4) 焼土・炭化物と漆喰片を多く含む。近世瓦片が混じる。溝の埋土。

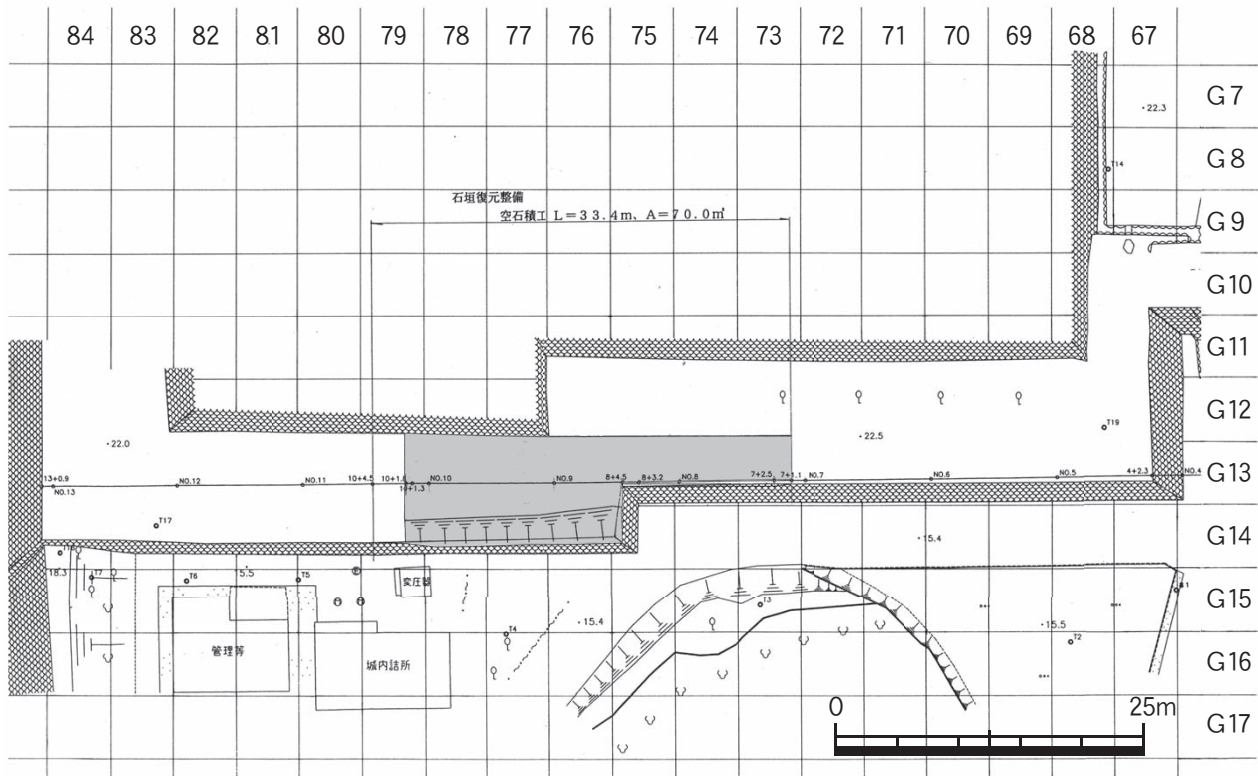
礎石は、帯曲輪石垣中程の入隅北側で南北方向に並ぶ2石、同じく入隅より西側で東西方向に並ぶ4石が検出されている。SD2は、南北方向の礎石の並びに沿って南進し、西へ折れて東西方向に並ぶ礎石と並走していた。SD2と礎石の間隔は、心々で計測して約110cmであった。検出遺構の配置と「御城内御絵図」との比較から、礎石はそれぞれ櫓の東棟の西壁と西棟の北壁部分に相当し、SD2は櫓の北側を通る雨落ち溝と判断した。櫓の柱間寸法は6尺5寸(約2m)と推測している。SD2は側石の幅が約10cm、内法が30～40cm、深さは20～30cmで、櫓の東棟の雨落ち部分の南端では東西の幅が75cmに広がっていた。この拡幅部分から3.6m西側では、SD2から北の石垣入隅に向かって分岐する溝があり、飯田丸跡の南辺石塁で検出された暗渠<sup>1)</sup>の排水を受けていたものと考えている。雨水はSD2の拡幅部分から帯曲輪石垣の入隅部分へ導水されていたが、拡幅部分から南側では側石が抜き取られ、底石を残して埋め戻した上に礫を積み、溝が塞がれていた。このSD2が塞がれた部分の南側では、溝状の石組SD1が検出されている。SD1は、幅15cm程の方柱形に加工した凝灰岩を裏込め上に直接並べて側石としており、底石は設けていなかった。側石の天端から5cmほど下の部分に検出された暗褐色土が基底面と考えている。東側は帯曲輪の東面石垣に開く排水口に向かっており、櫓廃絶後の排水施設として、SD2の改変と同時か、それ以降に造られたものと考えている。

#### 〔註〕

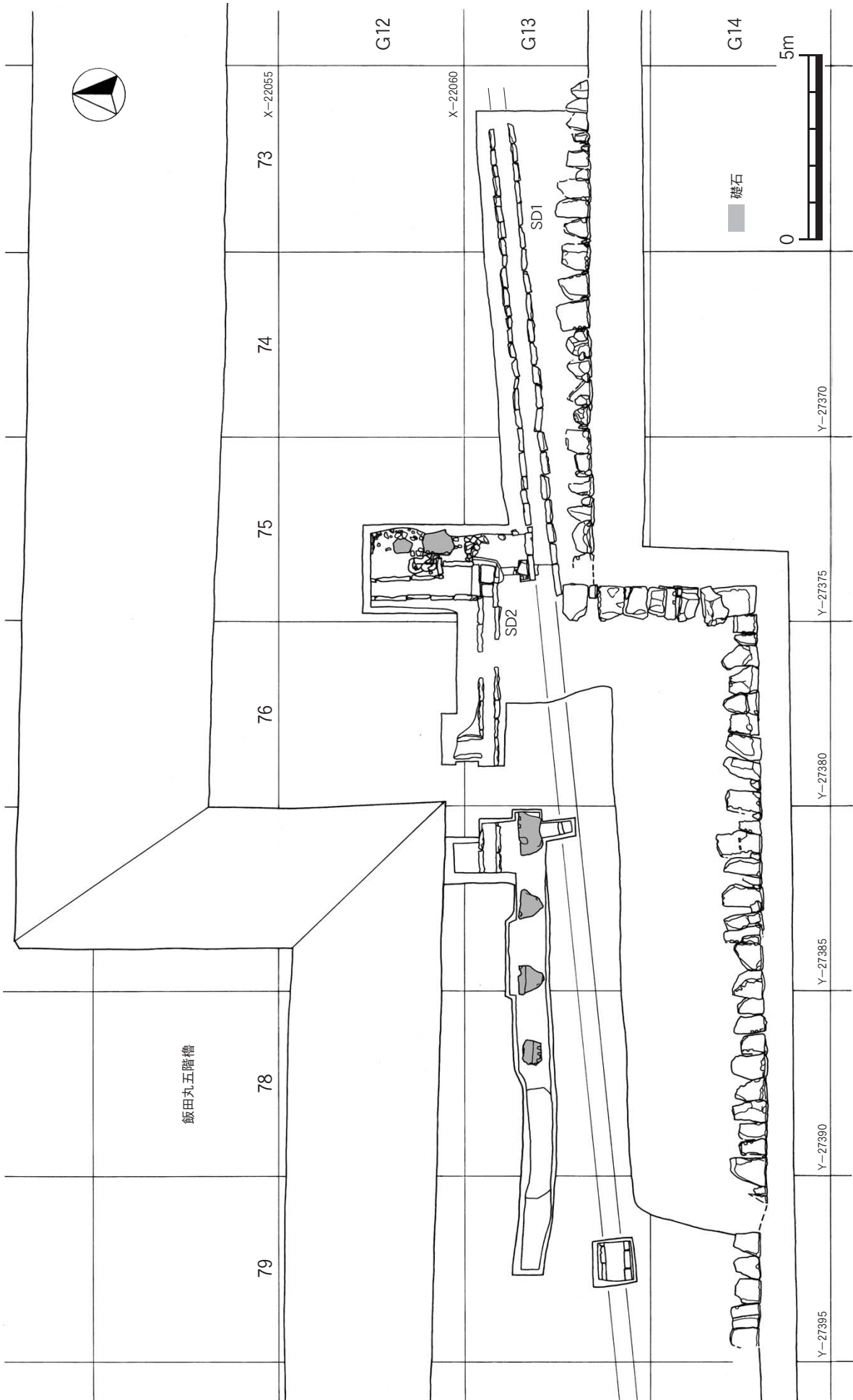
1) 『熊本城跡発掘調査報告書1－飯田丸の調査－』熊本市熊本城調査研究センター 2014



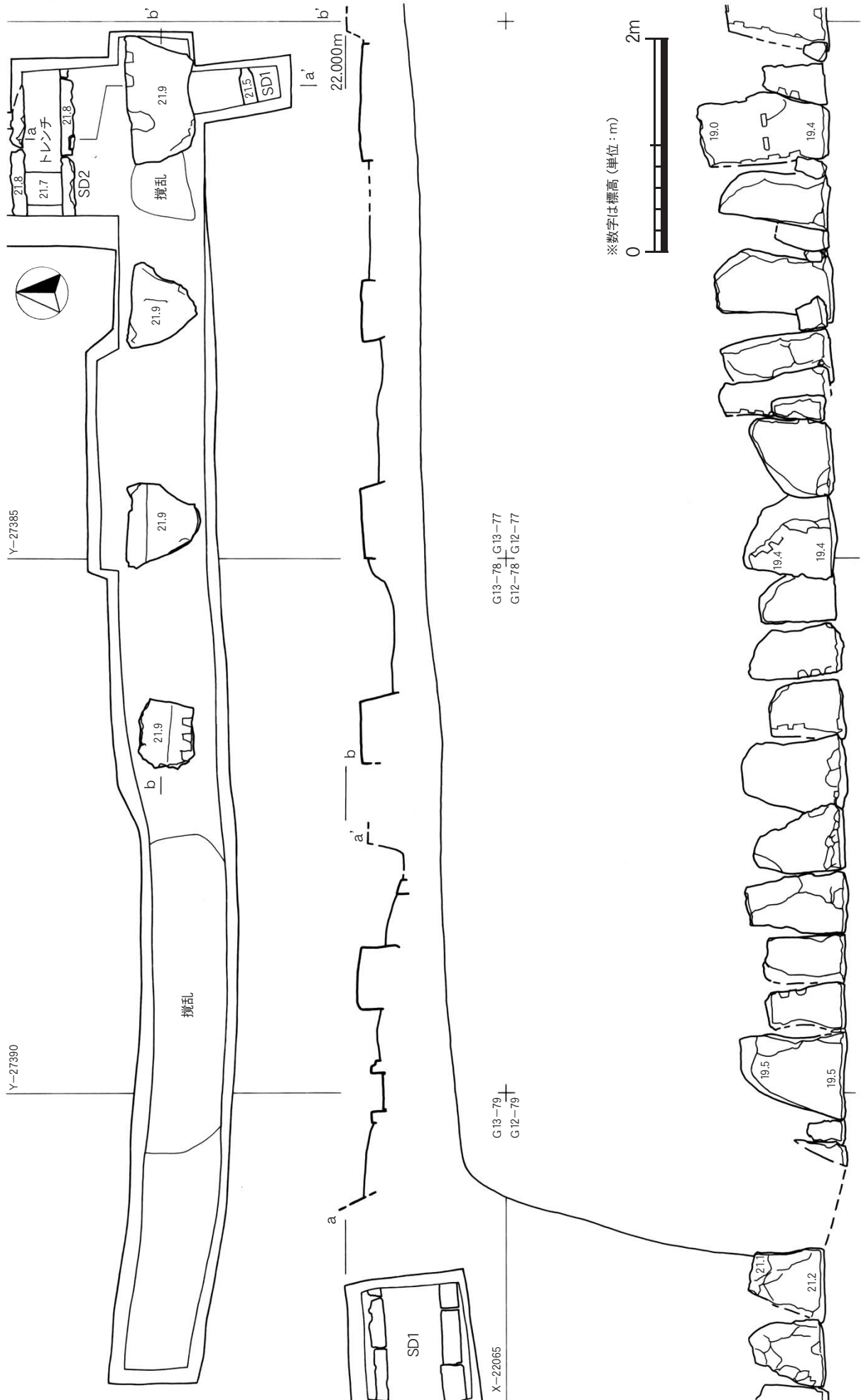
第74図 調査区位置図 (1 / 2,500)



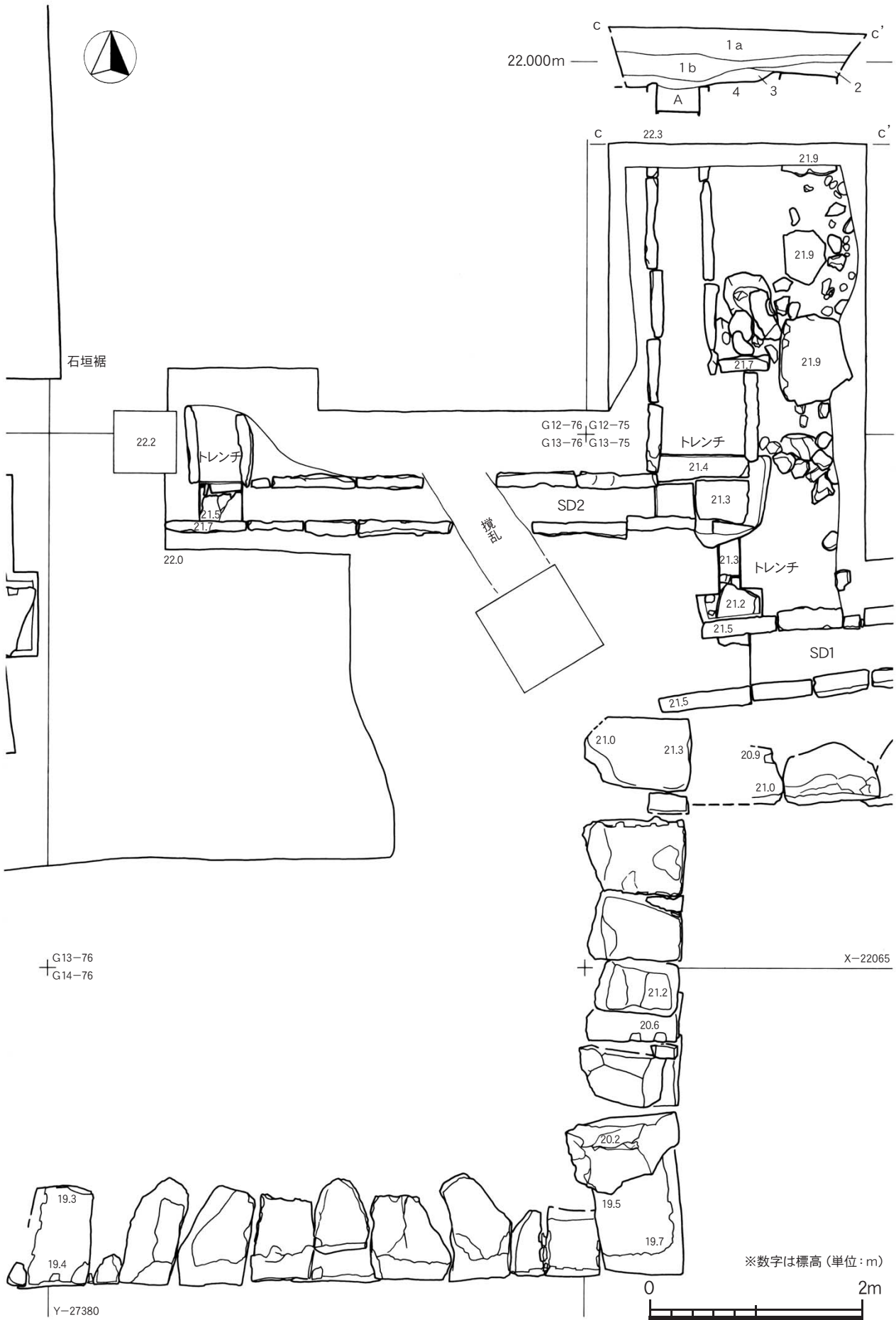
第75図 グリッド配置図 (1 / 600)



第76図 遺構配置図 (1 / 150)



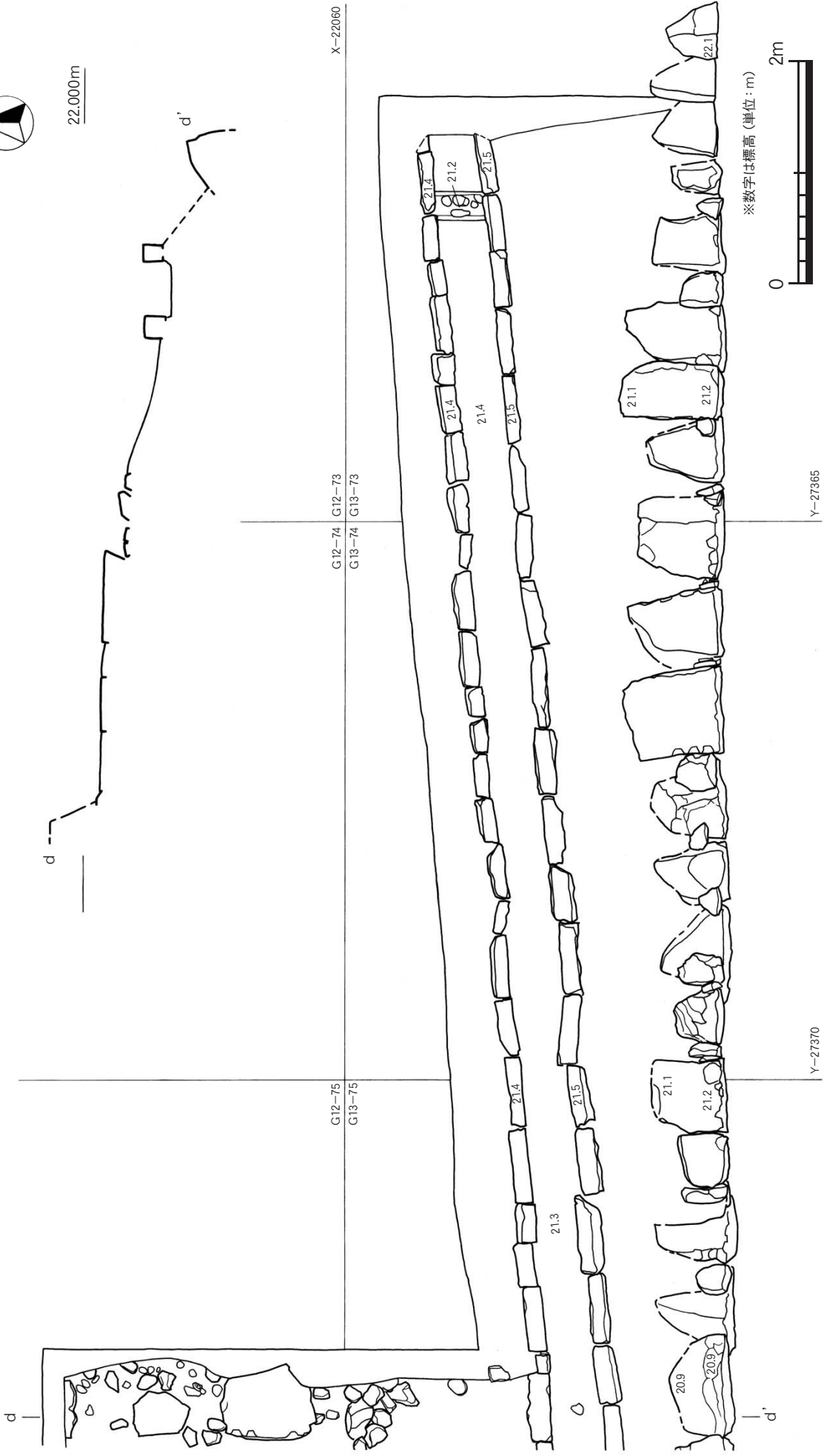
第77図 遺構実測図 平面・断面図1 (1 / 50)



第78図 遺構実測図 平面・断面図2 (1/50)



22.000m



第79図 遺構実測図 平面・断面図 3 (1 / 50)



SD 2 改変部分 (北東より)



SD 2 礫撤去後 (東より)



東側櫓礎石とSD 2 (北より)



SD 1 (西より)



西側櫓礎石とSD 1・2 (東より)



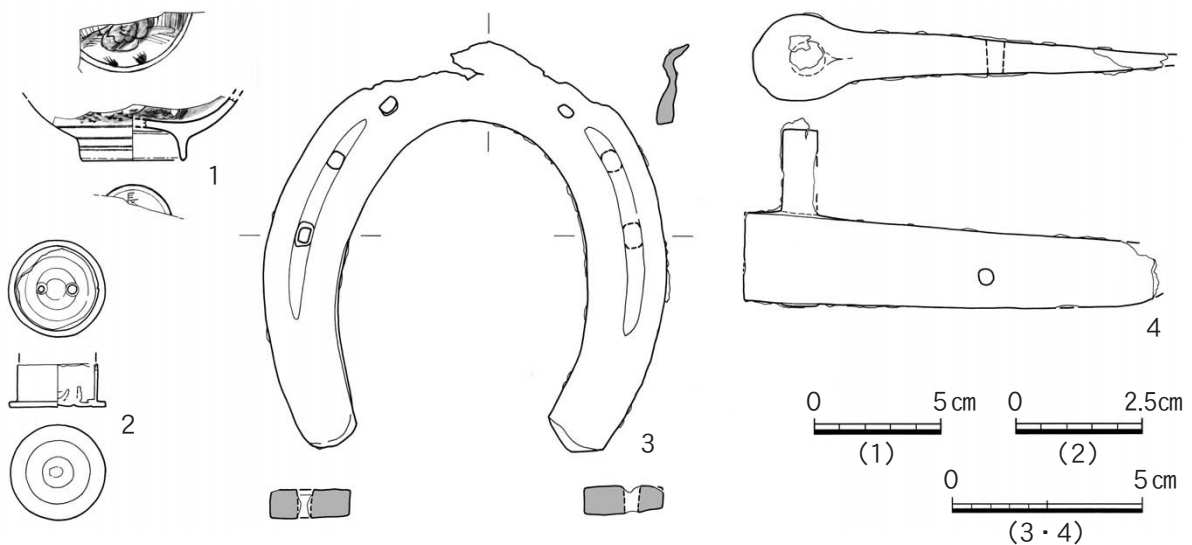
遺物

①陶磁器（第80図1，第15表）

1は景德鎮窯系青花碗である。底部は饅頭芯を呈し、小野E群に類する。内底に人物文、高台内に長春銘が施されている。

②金属製品（第80図2～4，第16表）

2はスナイドル銃薬莖である。ディスク（底板）が真鍮製であり、雷管のキャップチャンバー側辺が胴張り形であることからマークⅡ・Ⅲ型式と考えられる。ディスク中央の雷管には打撃痕が認められる。なお、キャップチャンバー上面の小穴は、通常と異なり2箇所である。3は蹄鉄である。平面卵形で丸味が少ない形状から後蹄と考えられる。爪先側は磨り減り、欠損している。4は鉄製の肘壺金物で、扉の開閉に伴うものである。円柱形の軸を一方の端に挟み込むようにして鉄板を折り曲げ、これを叩いて成形している。側面には目釘穴が穿たれている。



第80図 陶磁器・金属製品実測図（1／3・1／2・2／3）

第15表 陶磁器類観察表

図-No.	整理No.	出土位置	焼成形態	器種	計測値(単位cm, 括弧内推定値)	産地	備考
80-1	1	表土	磁器青花	碗	高台径(4.0)	景德鎮	饅頭芯、内底人物・高台見込み圏線内「長春」

第16表 金属製品観察表

図-No.	整理No.	出土位置	名称	計測値(mm, g)	備考
80-2	2	表土	スナイドル銃薬莖	底板径19.3	銅製・底板真鍮製(マークⅡ・Ⅲ), 打痕認あり
-3	4	表土	蹄鉄	最大幅106	鉄製, 後蹄, 爪先側磨耗・欠損
-4	3	表土	肘壺金物	高さ41, 幅~23, 軸径9	鉄製, 側面に目釘穴

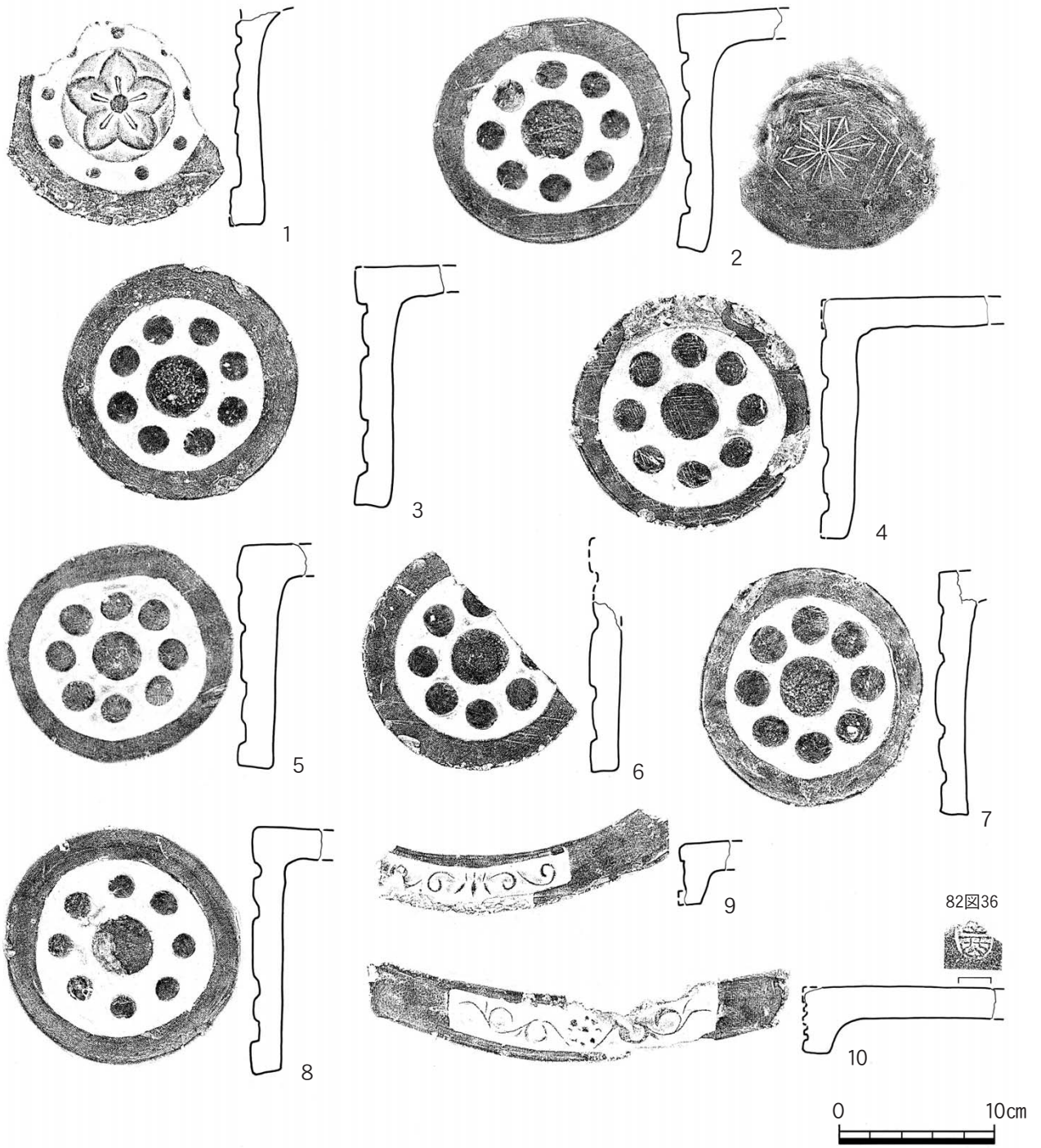
③瓦（第81図，第17表）

1～8は軒丸瓦である。1は中心円内に加藤家家紋の桔梗紋が配され、周囲に珠文9個が巡る形態である。桔梗紋は雄蕊に沈線が刻されている。2～8は九曜紋が刻される細川家家紋瓦である。文様の名称・分類は本書93・94頁に従う。2の瓦当裏面には細線により花文が描かれ、その後、粗くナデを施している。この花文は6弁ではあるが、剣先状の花弁であることから桔梗を意識した文様である可能性が高い。ちなみに初期の肥前磁器染付にも同様の6弁の桔梗文?の事例があり、弁数は間違っているものの意匠としての桔梗文と捉えて良いと考えられる。九曜紋の断面形（曜上面の形状）は、2～7は全ての曜が緩やかに膨らみ（b類）、8は、中心曜はほぼ平坦（c類）であるものの、周曜（周囲の8曜）は緩やかに膨らむ（b類）。3・5を除いて、周曜の範ズレが明らかである。4～8は瓦当面・丸瓦部凸面にキラコが認められる。

9・10は軒平瓦である。瓦当の接合はともに顎貼付け技法である。9の中心飾は簡略化した桐紋（豊臣家家紋）で、3本の茎は細く、花の表現は無い。中心飾のやや上位から巻きの強い唐草文が伸びており、下・上に反転し、各子葉は分離する。瓦当上部は面取りを施している。平瓦部凹面には凸型台痕とみられる板目が明瞭である。10は中心飾が九曜紋（細川家家紋）である。唐草文は下・上・下に反転し、各子葉の分かれ目には蕾の表現が認められる。平瓦部凹面には意匠化した「山西」銘が刻印されている（第82図36）。瓦当面にはキラコが認められる。

第17表 瓦観察表

報告No	整理No	出土位置	種類	調整	備考
81-1	53	I層	桔梗紋軒丸瓦	瓦当周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凹面コピキB、側縁は面取り後ナデ。	桔梗は雄蕊上に沈線。珠文9個。胎土暗灰色粒目立つ。
-2	47	I層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ。	九曜紋断面b、周曜範ズレ。瓦当裏面に細いヘラ描き花文。
-3	48	I層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕、部分的に指頭の擦過痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ。	九曜紋断面b。
-4	45	I層	九曜紋軒丸瓦	瓦当面に細い櫛状の擦痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ、凹面コピキB。	九曜紋断面b、周曜範ズレ。瓦当面～丸瓦部凸面に薄くキラコ確認。
-5	46	I層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ。	九曜紋断面b。瓦当面～丸瓦部凸面に薄くキラコ。
-6	51	I層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面b、周曜範ズレ。瓦当面キラコ。
-7	50	I層	九曜紋軒丸瓦	瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。	九曜紋断面b、周曜範ズレ。丸瓦部凸面キラコ。
-8	52	I層	九曜紋軒丸瓦	文様上面指頭痕。瓦当は周縁・側縁・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ。	九曜紋断面は中心曜c、周曜はb、周曜範ズレ。瓦当面～丸瓦部凸面キラコ。
-9	49	I層	桐紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。瓦当上面面取りケズリ後ナデ（～幅5mm）。平瓦部凹面板状痕（凸型台痕?）、凸面粗いナデ。	中心飾は簡略化した桐紋、唐草文は反転下・上（各子葉分離）。
-10	44	I層	九曜紋軒平瓦	瓦当文様区外～瓦当裏面ナデ。平瓦部凹面ナデ、凸面粗いナデ。	唐草文反転下・上・下。瓦当面キラコ。平瓦部に刻印（第82図36）。



第81図 瓦実測図 (1 / 4)

④瓦刻印（第82図，第18表）

観察表をもって記すこととする。

第18表 瓦刻印観察表

報告No.	整理No.	位置	種類	刻印面	刻印銘・文様	報告No.	整理No.	位置	種類	刻印面	刻印銘・文様
82-1	15	I層	目板棧瓦	平部凹面	元禄六／□山勘	82-21	24	I層	丸瓦	凸面	勘
-2	20	I層	丸瓦	凸面	元禄九／小山□太カ	-22	6	I層	丸瓦	凸面	五郎
-3	33	I層	丸瓦	凸面	元禄…／土山□右衛門	-23	34	I層	丸瓦	凸面	午四
-4	17	I層	丸瓦	凸面	土山五右衛門	-24	30	I層	丸瓦	凸面	午／四郎
-5	12	I層	平瓦(部)	凹面	土山□右衛門	-25	18	I層	丸瓦	凸面	四郎
-6	42	I層	平瓦(部)	凹面	巳伊兵衛	-26	10	I層	平瓦(部)	凹面	二郎
-7	38	I層	平瓦(部)	凹面	巳甚右衛門	-27	8	I層	丸瓦	凸面	午少
-8	40	I層	平瓦(部)	凹面	巳弥右衛門	-28	22	I層	丸瓦	凸面	午少
-9	11	I層	平瓦(部)	凹面	一右衛門	-29	28	I層	丸瓦	凸面	午少
-10	25	I層	丸瓦	凸面	九右衛門	-30	27	I層	丸瓦	凸面	少
-11	7	I層	丸瓦	凸面	五右衛門	-31	31	I層	丸瓦	凸面	半
-12	36	I層	平瓦(部)	凹面	少大夫	-32	29	I層	丸瓦	凸面	馬カ弥
-13	9	I層	平瓦(部)	凹面	甚四郎	-33	13	I層	平瓦(部)	凹面	弥
-14	32	I層	丸瓦	凸面	太右衛門	-34	37	I層	平瓦(部)	凹面	午／安
-15	43	I層	平瓦(部)	凹面	又七	-35	21	I層	丸瓦	凸面	(午)／安
-16	39	I層	平瓦(部)	凹面	安兵衛	-36	44	I層	軒平瓦	凹面	山西(二重丸内)
-17	26	I層	丸瓦	凸面	不明	-37	41	I層	平瓦(部)	凹面	九曜紋
-18	14	I層	板塀瓦	上面	永七(二重花形内)	-38	16	I層	丸瓦	凸面	丸文(輪違い文)
-19	5	I層	丸瓦	凸面	桂	-39	19	I層	丸瓦	凸面	丸に一つ引き文
-20	35	I層	平瓦(部)	凹面	土山／勘介	-40	23	I層	丸瓦	凸面	井桁文



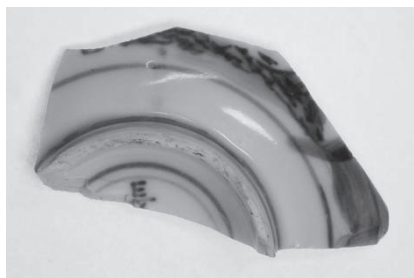
第82図 瓦刻印拓影 (1 / 2)



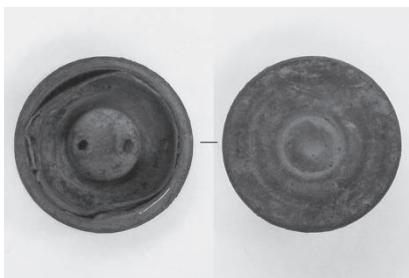
第81图2 (瓦当)



第81图2 (瓦当裏)



第80图1



第80图2



第80图3



第80图4



第81图1



第81图3



第81图5



第81图7



第81图8



第81图9



第81图9



第81图10

### (3) 保存修理工事

#### a. 工事概要

本工事に伴う発掘調査は工事契約後に着手し、東西棟の連結するほぼ中央付近で、西側は建物に付随する凝灰岩製の排水溝や溜め桝状の遺構及び建物礎石等を検出した。また、ほぼ中央部分の入隅部分では西側石垣が先に構築されたことが、櫓台東端の二様の石垣と併せて確認できている。

工事は検出された遺構の現状保存を前提として、遺構に影響を及ぼすことの無いように配慮して復元整備工事を実施した。

第19表 工事概要

工事種別		単位	数量	備考
施工延長		m	56.50	
石積工	空石積工	m <sup>3</sup>	95.90	雑石、控え60～80cm
	石垣解体工		32.80	
	補足石材	m <sup>3</sup>	63.10	安山岩、控え60～80cm

#### b. 工事実施

工事は設計図書及び添付の熊本市制定「公園工事仕様書」「安全管理仕様書」、熊本県土木部制定「土木工事共通仕様書」及び特記仕様書により実施した。

##### <特記仕様書>

1. 本工事は明治初期に解体撤去された石垣の復元整備工事である。特別史跡熊本城跡の重要な遺構の復元整備及び保存修理であることを十分認識した上で施工に当たり、工事に従事する石工はもちろん作業員に至るまで、文化財に対する意識徹底に努めること。
2. 工事着手に先立ち、既存石垣の各測点における現況勾配を詳細に記録し、復元における勾配決定の参考にすること。
3. 掘削（切り崩し）は既存石垣の上部より図面に従い実施するが、掘りすぎに注意するとともに、現況の裏栗石厚さの状況も併せて記録するものとする。
4. 掘削（切り崩し）に際して、石垣背面内部等より判明していない遺構（排水溝等）が検出された場合は、直ちに係員に連絡を取り指示に従うこと。この際記録のため調査を行うことがあるので考慮すること。
5. 工事箇所は下部に園路が隣接しているため、安全対策は十分に行い、特に築石の吊り降ろし、吊り込みの際は誘導員を配置するなど、安全管理には十分な対策を講じて事故防止に努めること。
6. 石積み工法は「算木積み」と「打ち込みはぎ」の併用によっておこない、現状の築石の配列等を十分参考にすること。
7. 石工は城郭石積み（熊本城跡）の石垣修理等に三年以上従事の経験を持つものを採用することとし、係員の承認を受けることとする。また、一般土木工事の石積工事の経験を有し、城郭石垣の修理・復元工事等に参加を希望するものがあれば積極的に採用すること。
8. 本工事は、石工の経験と古来工法の理解が重要な要素となるため、条件に適応しなくなり工事実施が困難となった場合は、係員と協議し承認を受けた後実施すること。
9. 本工事に採用する築石は金峰山系の安山岩とする。切り出しに際しては係員と協議し、承認を得て加工すること。加工方法についても同様とする。
10. 本工事の実施に当たっては、工事車両や資材の搬入が竹の丸広場園路などを経路としているため、観光客優先に心がけ、観光客へ危害を及ぼすことのないよう十分注意して通行すること。

11. 本工事箇所は、別途実施している「飯田丸五階櫓復元整備工事」の仮設覆屋の基礎が撤去された後の着手とするので、築石の確保を優先させるなど、考慮した工程計画とすること。

12. その他工事実施に際して、疑義が生じた場合は係員と協議の上その指示に従い実施すること。

#### <石垣復元整備工事>

##### ①準備工

- ・発掘調査により検出した排水溝等の遺構に配慮しながら、復元の遣り方設置を行った。
- ・遣り方設置に伴い、既存石垣との勾配等を検討した結果、一部調整のため解体して復築することが適当であると判断した。
- ・解体する範囲については石垣面の清掃及び縦横50cm間隔にて墨打ちを行い、石垣立面図を利用して解体範囲内の築石に番号を付した。復築の際混在することを避けるため、各面ごとに区分して番号を付した。

##### ②解体工

- ・解体に先立ち石垣上部の建物に伴う礎石遺構等に配慮しながら、人力及び小型のバックホーにより慎重に掘削をおこなった。
- ・解体は一石毎に行い、前面に付しておいた番号を確認しながら、その番号を築石胴部にペンキを用いて付した。また、吊り出しは築石にキズをつけないよう布製のものを採用して実施した。
- ・築石は一石毎に土砂等の清掃を行い、面及び控え長さの記録を行い整理した。なお、50個毎に写真撮影し整理した。
- ・裏込栗石はすべて再利用の対象としたことから、所定の場所に集積し、土砂との選別作業を行い、出来るだけ土砂等の付着にも注意を払って再利用に備えた。

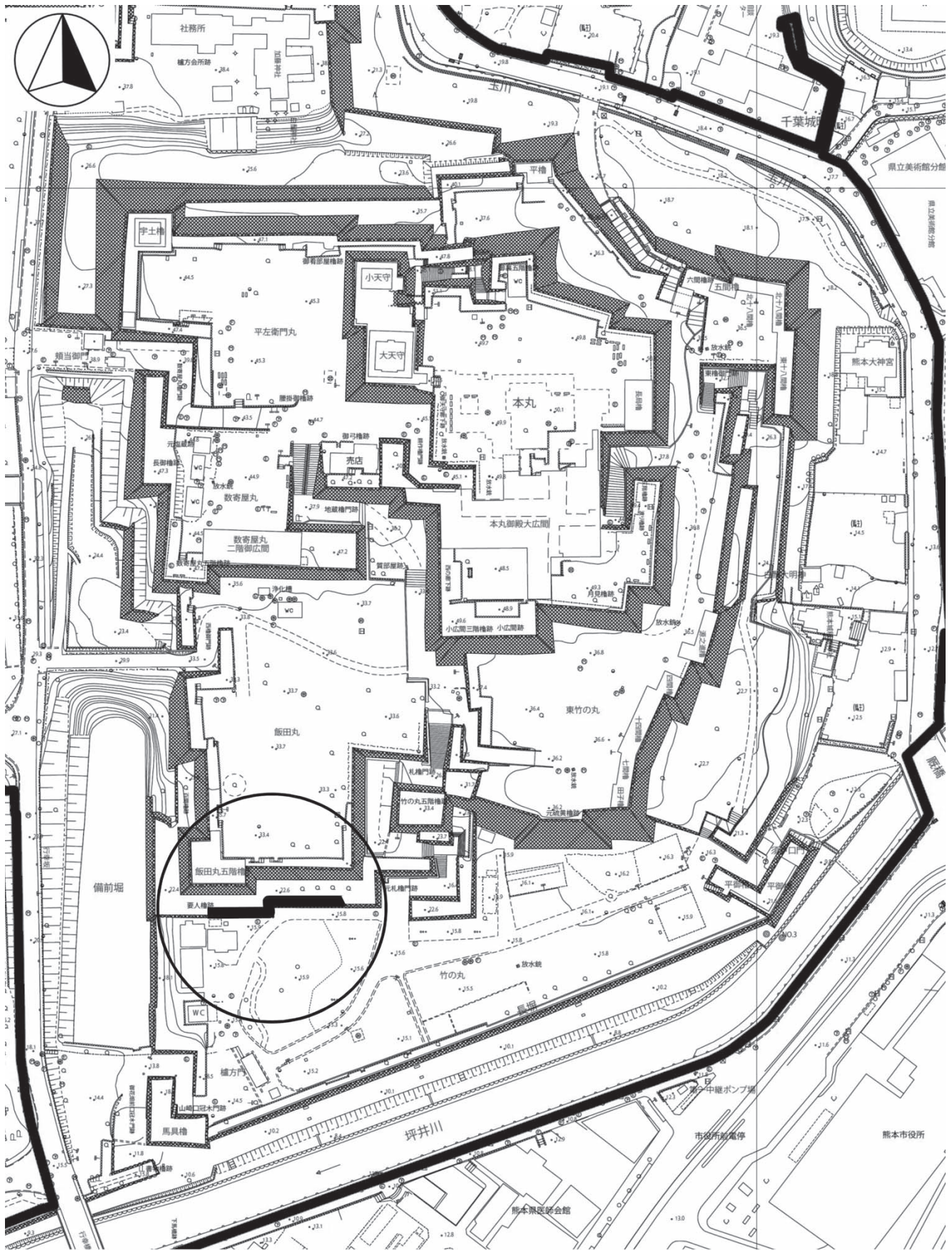
##### ③石積工（復元、修理）

- ・復元に採用する石材は請負業者が手配確保した、玉名郡天水町の「三の岳」西側中腹の仮集積場所において、石材の質及び硬度等を確認した。
- ・石材加工の方法及び規格、寸法については残存部分の築石に倣い加工した。なお、荒割は削岩機を利用し、築石面の部分に削岩機の痕跡が残らないように配慮して加工した。また、小割りする矢穴の幅等の寸法は現在使用している「矢」に合わせた割り寸法を採用した。
- ・復築に先立ち、工事担当者（監督員）の立会のもと、残存する下部の石垣等の勾配を参考に遣り方を設置した。
- ・復元の天端高さは復築個所の東、西側に残存している石垣に倣い決定した。
- ・復築は基本的に一段毎に行い、築石の配置は既存石垣の積み方を参考として実施した。
- ・胴込栗石はズレが起きないように慎重に詰め、裏込栗石は十分な締め固めを行った。
- ・当該箇所は石垣の撤去と併せて一部背面の栗石も撤去されていることから採取栗石も比較的少なく修理箇所と併せて40%を安山岩の割栗石で補充した。
- ・角石部分では二段毎に工事担当者（市監督員、現場代理人、石工）と立会いを行い、高さ、勾配等について相互に確認のうえ作業を継続した。

#### <工事設計変更>

当初設計では撤去された石垣部分のみを復元することで計画していたが、掘削完了後に復元の遣り方を設置し、石垣勾配等について既存部分との調整等を検討したところ、起点側天端無付近及び復元予定個所の下部（残存部分）に撤去後の経年による変位が生じており、この部分の解体修理が必要となった。また、終点側の一部に孕み等の顕著な個所が確認できた箇所、約7m、16.8㎡についても解体修理を実施した。以上のことから、解体修理を追加し、併せて工事期間も延長した。

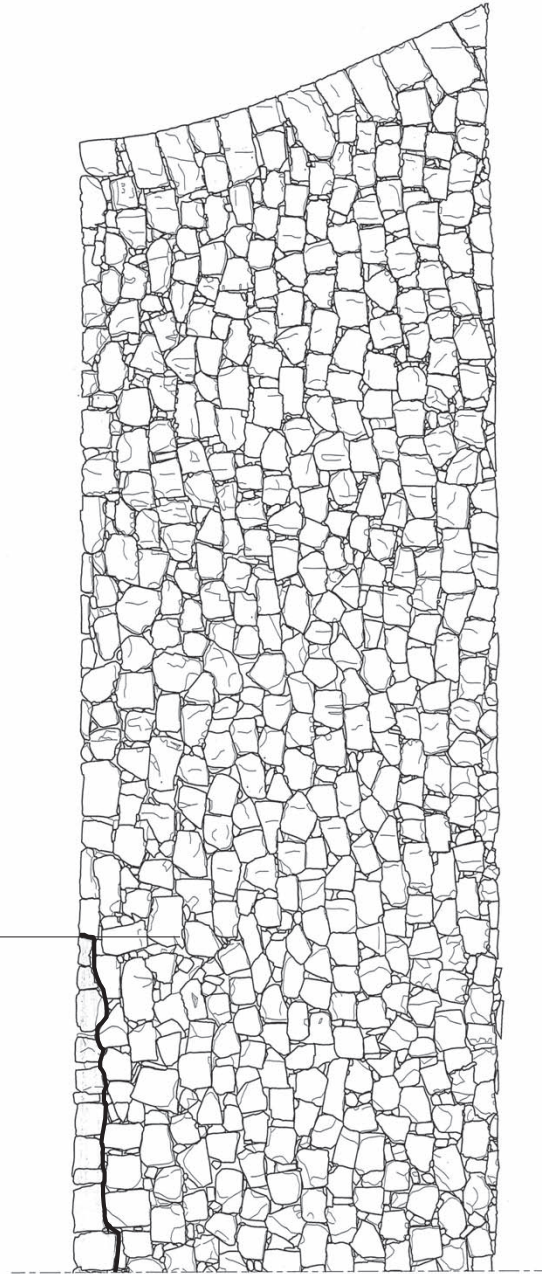




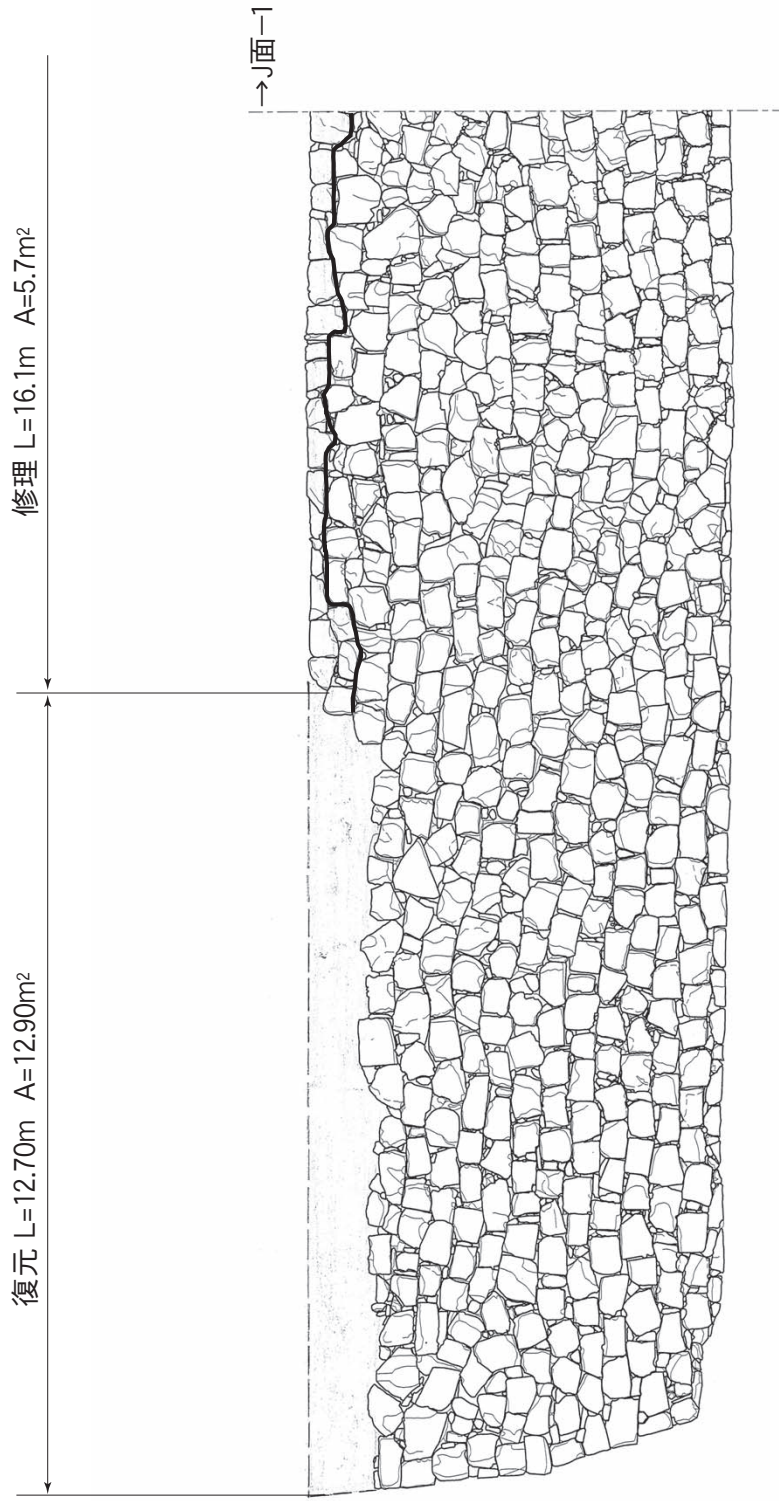
第83図 工事位置図



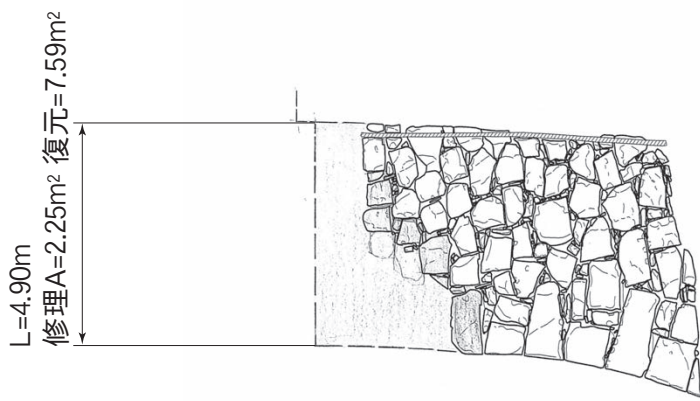
修理 L=16.1m A=5.7m<sup>2</sup>



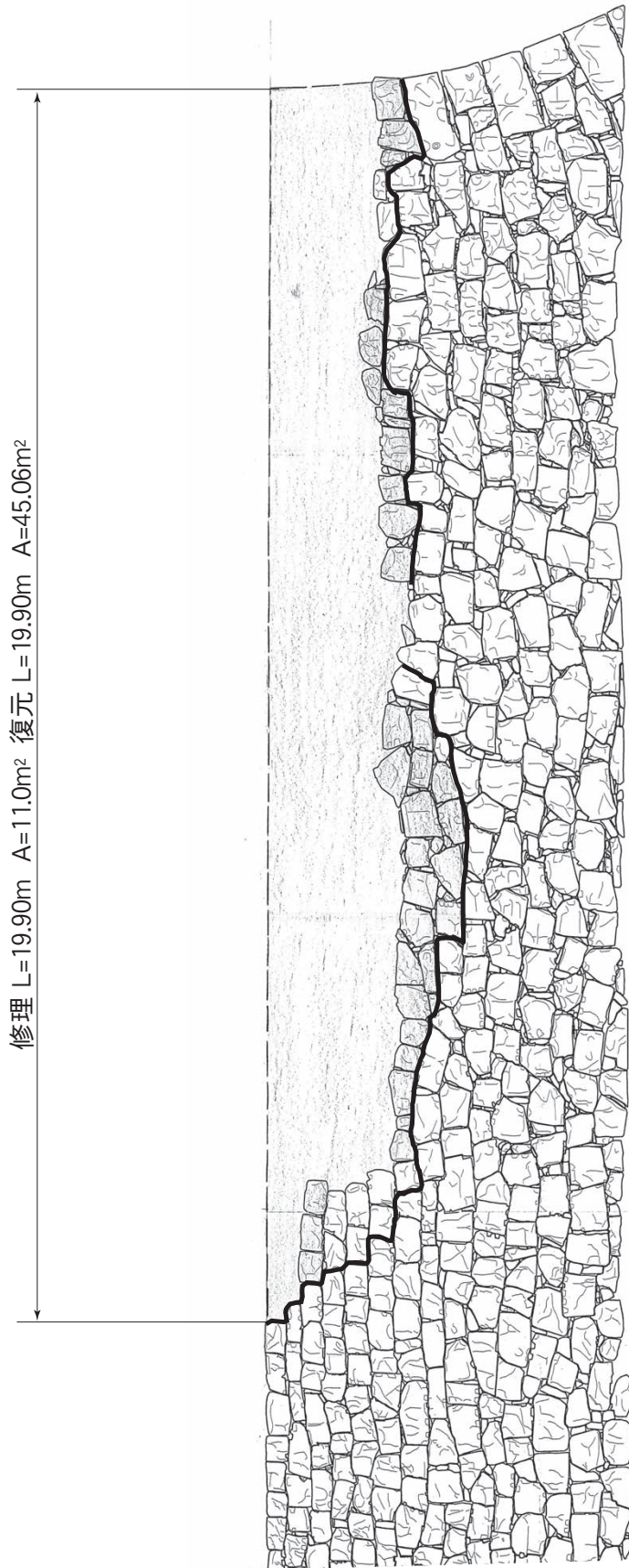
第85图 石垣立面图 (J面-1)



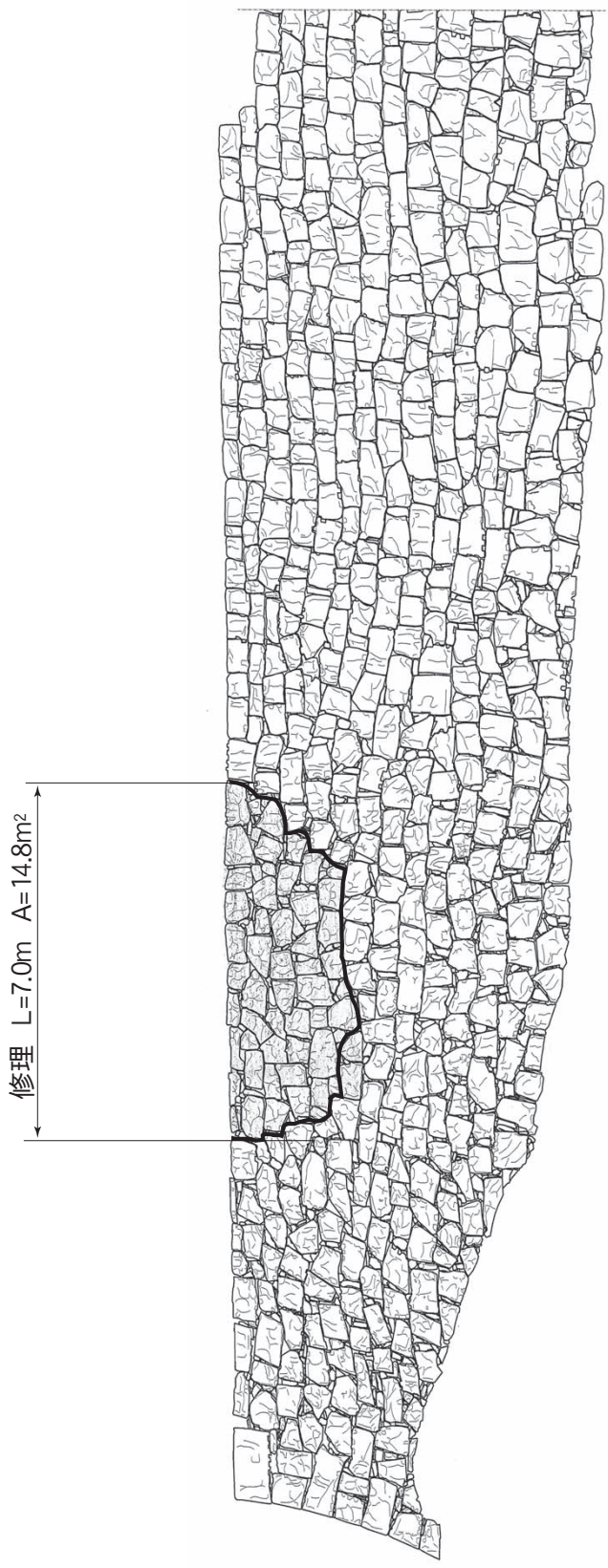
第86図 石垣立面図 (J面-2)



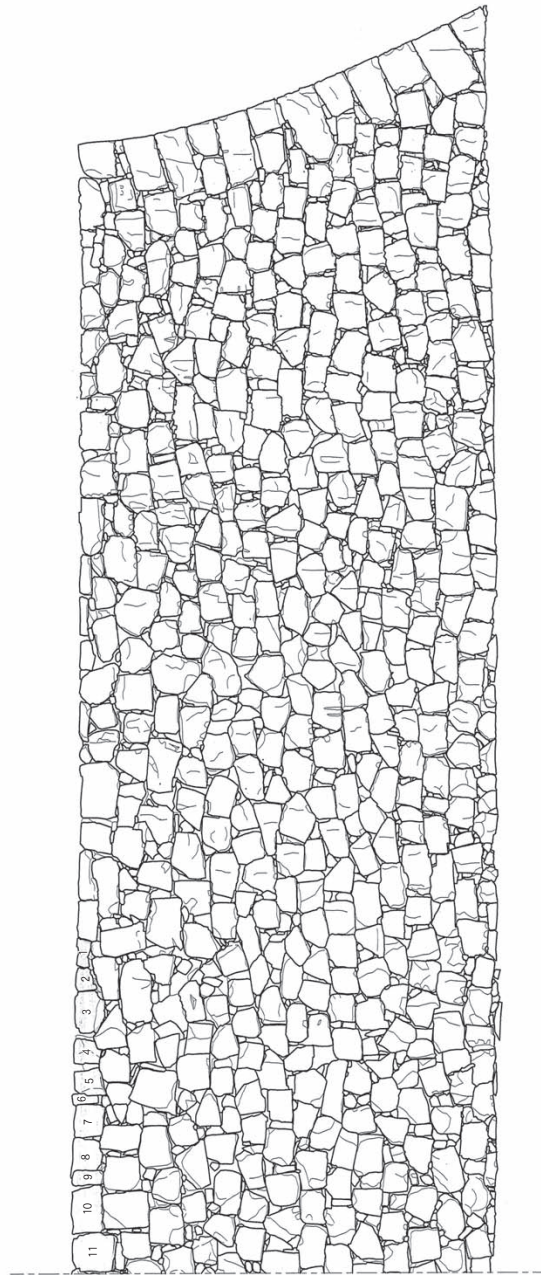
第87图 石垣立面图 (K面)



第88図 石垣立面図 (L面-1)

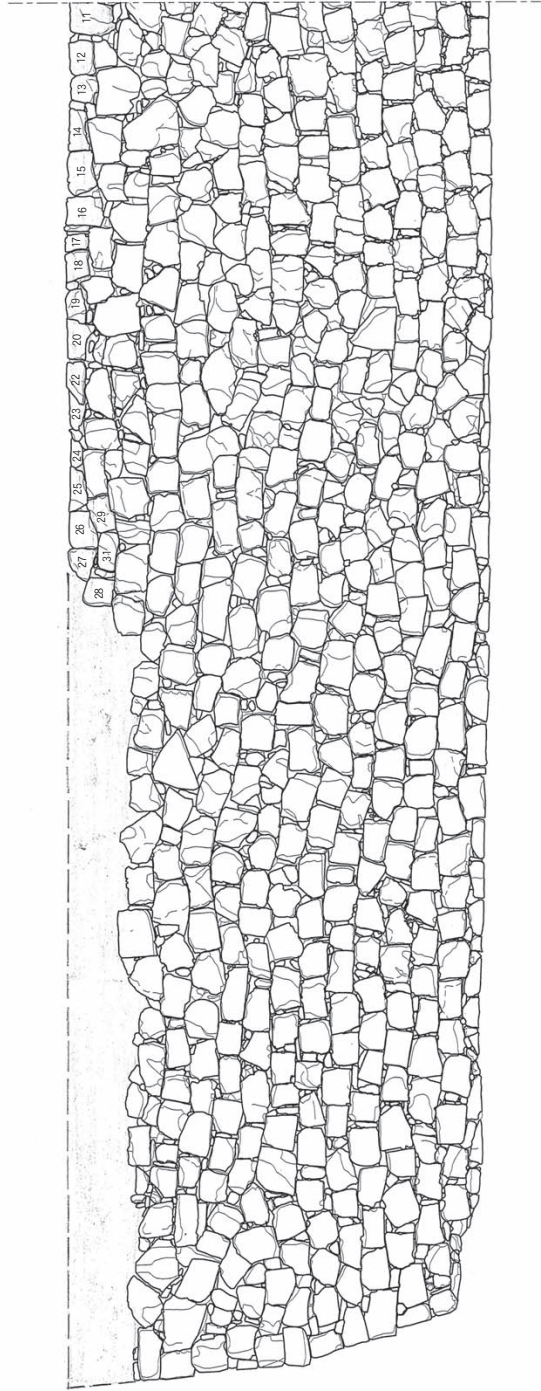


第89图 石垣立面图 (L面-2)

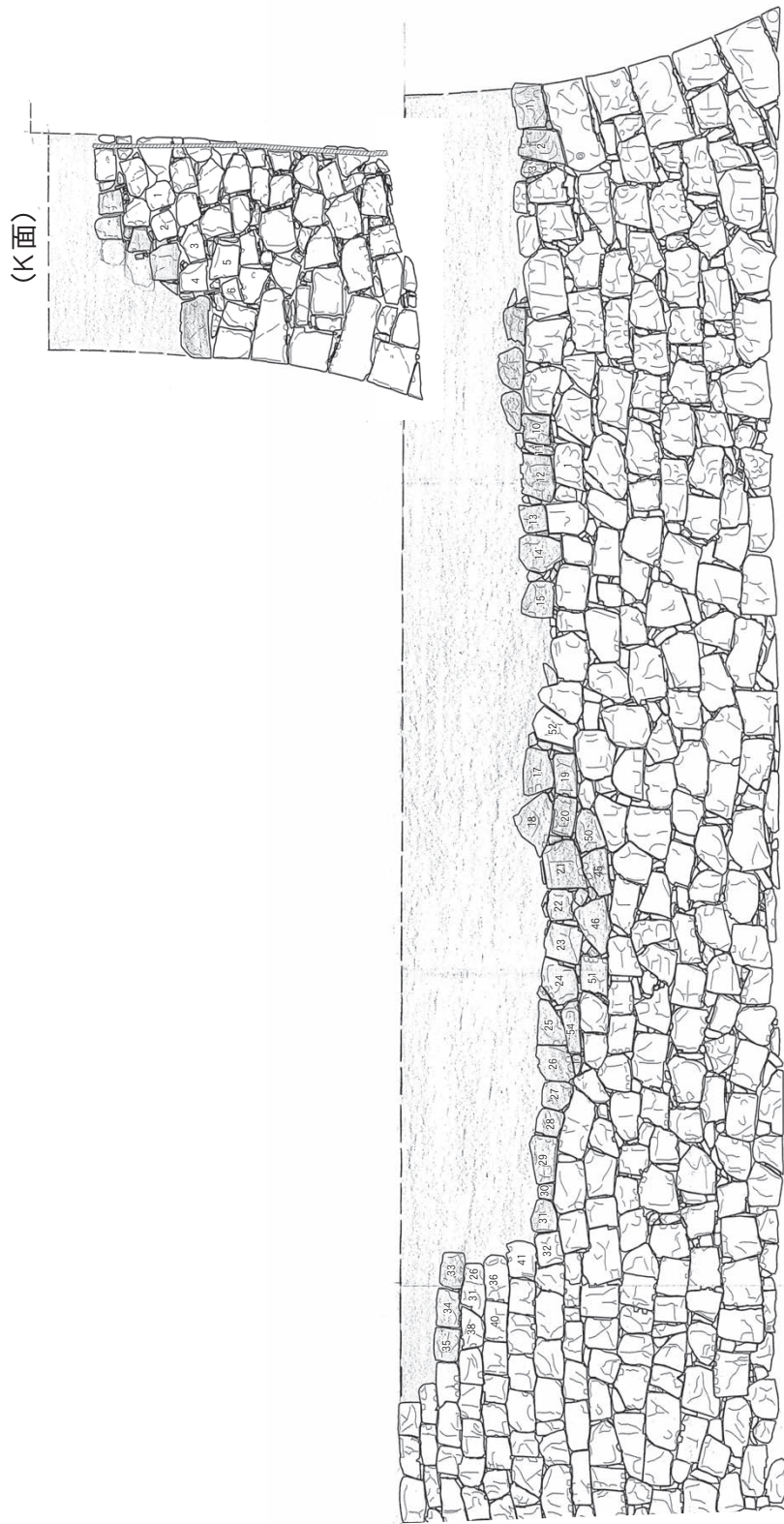


第90图 築石管理図（J面-1）

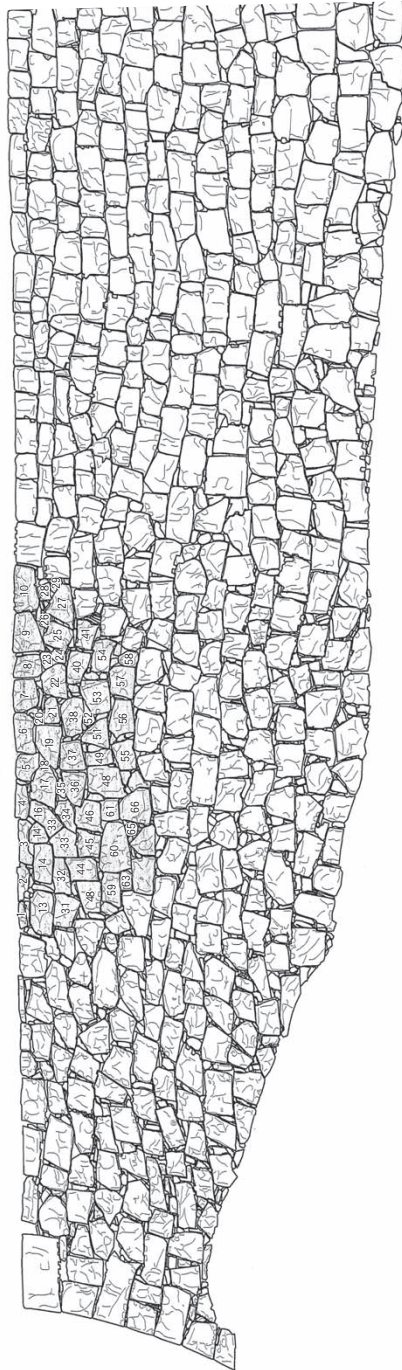




第91图 築石管理図 (J面-2)



第92図 築石管理図(K面・L面-1)



第93图 築石管理図(L面-2)



築石管理状況（L面－1）



築石管理状況（L面－2）



築石管理状況（L面－3）



築石管理状況（J面）



築石管理状況（K面）

第20表 築石管理表（J面－1）

J 面							
番号	項目	築石		形状・寸法			備考
		在石	新補石	a	b	c	
1		○		480	210	510	
2		○		400	330	430	
3		○		730	440	700	
4		○		450	410	730	
5		○		460	450	570	
6		○		170	380	300	
7		○		600	450	830	
8		○		550	460	550	
9		○		250	470	350	
10		○		820	490	570	
11		○		660	670	600	
12		○		620	680	600	
13		○		670	340	630	
14		○		490	340	350	
15		○		140	210	230	
16		○		700	250	520	
17		○		640	360	580	
18		○		470	500	640	
19		○		100	340	160	
20		○		740	300	400	
21		○		620	250	630	
22		○		720	360	480	
23		○		1070	240	500	
24		○		520	180	430	
25		○		680	240	580	
26		○		620	410	630	
27		○		440	350	310	
28		○		420	420	700	
29		○		780	300	570	
30		○		570	340	680	
31		○		580	250	750	
32		○		260	140	200	

第20表 築石管理表（J面－2）

J 面							
番号	項目	築石		形状・寸法			備考
		在石	新補石	a	b	c	
1			○	300	400	580	
2			○	650	420	600	
3			○	450	300	720	
4			○	740	430	620	
5			○	550	430	650	
6			○	390	460	650	
7			○	550	350	600	
8			○	540	400	600	
9			○	470	490	800	
10			○	490	430	620	
11			○	400	280	570	
12			○	320	260	610	
13			○	500	510	670	
14			○	620	460	630	
14A			○	250	250	500	

第20表 築石管理表（J面－2）

J 面							
番号	項目	築石		形状・寸法			備考
		在石	新補石	a	b	c	
15			○	720	400	610	
16			○	360	310	600	
17			○	530	420	850	
18			○	440	420	750	
19			○	740	440	640	
20			○	580	370	600	
21			○	620	400	600	
22			○	480	380	720	
23			○	480	350	820	
24			○	380	350	620	
25			○	440	400	800	
26			○	510	350	750	
27			○	230	280	530	
28			○	510	430	700	
29			○	770	400	630	
30			○	530	370	600	
31			○	350	350	640	
32			○	450	260	600	
33			○	380	180	620	
34			○	520	260	630	
35			○	580	250	620	
36			○	600	380	650	
37			○	420	250	600	
38			○	500	340	620	
39			○	500	450	650	
40			○	730	320	620	
40A			○	230	250	500	
41			○	500	240	650	
42			○	530	240	630	
43			○	460	420	550	
44			○	660	430	730	
45			○	730	420	600	
46			○	470	400	650	
47			○	450	170	680	
48			○	800	200	700	
49			○	520	230	600	
50			○	480	300	700	
51			○	670	320	600	
52			○	680	450	800	
53			○	170	480	400	
54			○	520	400	700	
55			○	760	300	820	
56			○	400	300	600	
57			○	630	470	670	
58			○	750	200	600	
59			○	520	260	930	
60			○	130	200	530	
61			○	570	240	730	
62			○	480	280	620	

第20表 築石管理表 (K面)

K 面							
番号	項目	築石		形状・寸法			備考
		在石	新補石	a	b	c	
1		○		450	460	850	
2		○		420	530	600	
3		○		450	430	830	
4		○		500	470	560	取替
			○	520	420	700	
5		○		530	600	700	取替
			○	560	550	700	
6		○		670	600	800	
1			○	-	-	-	
2			○	-	-	-	
3			○	620	460	680	
4			○	230	420	500	
5			○	-	-	-	
6			○	720	470	750	
7			○	820	330	650	
8			○	840	450	680	
9			○	220	220	450	
10			○	850	370	720	
11			○	490	450	700	
12			○	-	-	-	
12A			○	400	100	400	
13			○	620	400	700	
14			○	900	300	700	
14A			○	250	200	300	
15			○	440	350	650	
16			○	480	230	630	
16A			○	350	250	400	
17			○	460	220	600	
18			○	700	160	600	



第20表 築石管理表 (L面-1)

L 面							
番号	項目	築石		形状・寸法			備考
		在石	新補石	a	b	c	
1		○		500	400	700	
2		○		500	700	900	
3		○		280	480	600	
4		○		550	370	760	取替
			○	610	480	770	
5		○		640	350	600	取替
			○	640	490	700	
6		○		480	400	600	取替
			○	590	440	750	
7		○		570	460	550	取替
			○	490	470	700	
8		○		500	450	700	取替
			○	600	480	700	
9		○		360	400	800	取替
			○	480	400	700	
10		○		400	400	900	
11		○		130	420	200	
12		○		600	500	880	
13		○		370	370	560	
14		○		470	620	1200	
15		○		500	480	900	
16		○		180	140	450	
17		○		650	450	680	
18		○		900	600	750	
19		○		600	350	670	
20		○		530	350	600	
21		○		620	580	700	
22		○		450	410	950	
23		○		560	480	650	
24		○		700	600	1100	
25		○		550	480	830	
26		○		550	570	860	
27		○		480	480	750	
28		○		450	430	670	
29		○		800	420	850	
30		○		250	300	330	
31		○		550	420	700	
32		○		560	420	620	
33		○		600	400	700	
34		○		650	420	680	
35		○		570	430	700	
36		○		340	350	700	
37		○		470	440	700	
38		○		640	380	760	
39		○		760	430	500	
40		○		620	380	750	
41		○		610	530	700	
45		○		600	370	750	
46		○		640	520	900	
50		○		580	360	730	
51		○		530	440	650	
52		○		360	560	980	
53		○		260	140	180	
54		○		720	230	620	
55		○		310	130	330	

第20表 築石管理表 (L面-2)

L 面							
番号	項目	築石		形状・寸法			備考
		在石	新補石	a	b	c	
1			○	690	480	700	
2			○	580	500	880	
3			○	570	430	800	
4			○	630	570	700	
5			○	380	200	450	
6	角石		○	820	700	1300	K面-1
7			○	720	600	900	
8			○	540	560	700	
9			○	420	440	760	
10			○	580	530	700	
11			○	700	500	900	
12			○	610	450	900	
13			○	640	450	700	
14			○	690	420	800	
15			○	580	460	820	
16			○	200	410	650	
17			○	300	330	400	
18			○	220	250	500	
19			○	580	470	700	
20			○	680	400	680	
21			○	630	550	720	
22			○	340	520	650	
23			○	450	450	700	
24			○	840	620	820	
25			○	400	540	650	
26			○	600	500	700	
27			○	700	550	1130	
28			○	630	410	840	
29			○	690	510	700	
30			○	650	680	700	
31			○	540	560	710	
32			○	510	460	850	
33			○	550	400	730	
34			○	400	280	650	
35			○	580	500	700	
36			○	580	410	720	
37			○	550	420	700	
38			○	240	260	450	
39			○	560	490	810	
40			○	710	420	680	
41			○	610	480	700	
42			○	310	440	680	
43			○	600	500	700	
44			○	460	410	720	
45			○	780	500	700	
46			○	230	400	600	
47			○	740	620	700	
48			○	340	220	500	
49			○	460	450	680	
50			○	700	500	700	

第20表 築石管理表 (L面-3)

L 面							
番号	項目	築石		形状・寸法			備考
		在石	新補石	a	b	c	
51			○	630	470	950	
52			○	900	700	800	
53			○	820	420	670	
54			○	570	480	860	
55			○	620	470	730	
56			○	570	490	820	
57			○	680	540	760	
58			○	330	300	440	
59			○	610	500	860	
60			○	570	480	700	
61			○	180	300	400	
62			○	410	450	700	
63			○	690	430	720	
64			○	510	420	800	
65			○	670	410	680	
66			○	730	550	750	
67			○	340	600	700	
68角石			○	800	700	1330	K面-2
69			○	440	220	620	
69A			○	300	250	600	
70			○	570	510	720	
71			○	640	460	680	
72			○	470	500	650	
73			○	540	680	740	
74			○	650	670	950	
75			○	520	470	900	
76			○	450	340	620	
77			○	870	500	650	
78			○	650	390	700	
79			○	520	640	750	
80			○	640	480	650	
81			○	550	700	700	
81A			○	330	200	500	
82			○	710	560	730	
83			○	300	220	450	
84			○	620	380	700	
85			○	430	380	680	
86			○	520	570	650	
87			○	480	420	710	
88			○	750	470	700	
89			○	340	360	500	
90			○	620	550	700	
91			○	240	210	460	
92			○	340	320	660	
93			○	710	350	700	
94			○	870	610	750	
95			○	570	430	680	
96			○	780	440	720	
97			○	640	530	650	
98			○	740	550	740	

第20表 築石管理表 (L面-4)

L 面							
番号	項目	石		形状・寸法			備考
		在石	新補石	a	b	c	
99			○	500	520	680	
100			○	720	550	720	
101			○	640	520	650	
102			○	800	480	670	
103			○	480	370	730	
104			○	560	470	670	
105			○	680	550	720	
106			○	640	540	720	
107			○	230	230	400	
108			○	800	420	650	
109			○	730	330	730	
110			○	300	170	400	
111			○	520	430	700	
112			○	560	540	740	
113			○	510	440	680	
114			○	510	430	800	
115			○	670	400	780	
116			○	500	360	720	
117			○	650	420	660	
118角石			○	800	550	1280	K面-5
118A			○	570	200	650	
119			○	430	500	760	
120			○	590	380	810	
121			○	550	360	660	
122			○	450	260	650	
123			○	520	340	780	
124			○	600	400	730	
125			○	540	360	770	
126			○	630	250	650	
127			○	250	200	400	
128			○	230	220	450	
129			○	700	330	710	
130			○	550	260	700	
131			○	500	370	720	
132			○	720	370	850	
133			○	400	340	700	
134			○	600	320	800	
135			○	400	300	700	
136			○	700	260	710	
137			○	700	300	720	
138			○	620	350	800	
139			○	320	140	450	
140			○	540	350	710	
141			○	560	430	840	
142			○	700	360	900	
143			○	650	340	720	
144			○	620	300	650	
145			○	350	220	500	
145A			○	100	300	350	
146			○	750	430	700	

第20表 築石管理表 (L面-5)

L 面						
番号	項目	築石	形状・寸法			備考
	在石	新補石	a	b	c	
147		○	550	350	780	
147A		○	200	200	300	
148		○	370	210	650	
149		○	580	360	900	
150		○	630	370	800	
151		○	570	470	710	
152		○	520	440	700	
153		○	510	330	750	
154		○	620	300	800	
155		○	700	230	750	
155A		○	270	150	500	
156		○	600	440	800	
157		○	500	330	700	
158		○	500	380	700	
159		○	450	380	780	
160		○	620	400	760	
161角石		○	880	360	1280	K面-12
168		○				
169		○				
170		○				
171		○				
172		○				
173		○				
174		○				
175		○				
176		○				
177		○				
178		○				
179		○				
180		○				
181		○				
182		○				
183		○				
184		○				
185		○				
186		○				
187		○				
188		○				
189		○				
190		○				
191		○				
192		○				
193		○				
194		○				
195		○				
196		○				
197		○				
198		○				
199		○				
200		○				

第20表 築石管理表 (L面-6)

L 面							
番号	項目	築石	石	形状・寸法			備考
		在石	新補石	a	b	c	
201			○	500	400	700	
202			○	600			
203			○				
204			○				
205			○				
206			○				
207			○				
208			○				
209			○				
210			○				
211			○				
212			○				
213			○				
214			○				
215			○				
216			○				
217			○				
218			○				
219			○				
220			○				
221			○				
222			○				
223			○				
224			○				
225			○				
226			○				
227			○				
228			○				
229			○				
230			○				
231			○				
232			○				
233			○				
234			○				
235			○				
236			○				
237			○				
238			○				
239			○				
240			○				
241			○				
242			○				
243			○				
244			○				
245			○				
246			○				
247			○				
248			○				
249			○				
250			○				

第20表 築石管理表 (L面西側 - 1)

L 面 西側							
番号	項目	築 石		形状・寸法			備 考
		在 石	新補石	a	b	c	
1		○		630	160	700	
1A		○		400	220	450	
2		○		600	200	730	
3		○		650	150	480	
4		○		720	290	770	
5		○		500	390	660	
6		○		850	360	770	
7		○		610	500	700	
8		○		430	540	700	
9		○		780	530	530	
10		○		900	450	600	
12		○		870	520	860	
13		○		100	420	250	
14		○		790	480	800	
15		○		200	350	480	
16		○		720	430	830	
17		○		700	510	620	
18		○		140	300	350	
19		○		830	500	650	
20		○		400	100	240	
21		○		540	300	750	
22		○		660	460	800	
23		○		330	200	350	
24		○		250	280	270	
25		○		490	520	830	
26		○		250	180	350	
27		○		820	520	950	
28		○		320	240	300	
29		○		240	240	300	
31		○		670	460	770	
32		○		630	330	760	
33		○		630	400	760	
34		○		570	400	770	
35		○		460	120	270	
36		○		630	420	800	
37		○		570	500	600	
38		○		760	450	700	
39		○		150	200	250	
40		○		670	370	700	
41		○		570	350	700	
43		○		530	420	980	
44		○		450	530	600	
45		○		520	460	800	
46		○		630	420	750	
47		○		150	360	200	
48		○		650	640	700	
49		○		260	560	780	
50		○		140	330	420	
51		○		550	480	930	
52		○		300	260	200	

第20表 築石管理表（L面西側－2）

L 面 西側						
番号	築 石		形状・寸法			備 考
	在 石	新補石	a	b	c	
53	○		680	570	750	
54	○		650	350	700	
55	○		560	380	900	
56	○		680	480	700	
57	○		600	500	680	
58	○		290	350	400	
59	○		480	430	830	
60	○		1100	680	540	
61	○		370	340	520	
62	○		220	320	320	
63	○		380	250	530	
64	○		400	300	550	
65	○		220	280	250	
66	○		700	620	850	
65	○					
66	○					
67	○					
68	○					
69	○					
70	○					
71	○					
72	○					
73	○					
74	○					
75	○					
76	○					
77	○					
78	○					
79	○					
80	○					





J面全景



K面，L面東側



L面西側



全景、南面



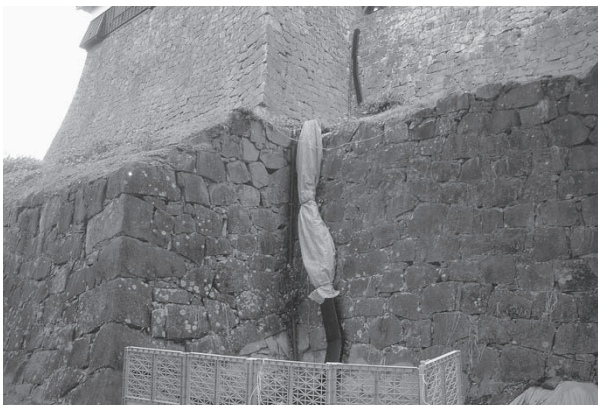
全景、東から



全景、西から



J面



K面



K L面



L面



L面西側



墨打ち状況L面西側



栗石採取状況L面



築石清掃状況L面



番号付けL面



築石清掃状況L面西側



解体状況L面



解体完了L面



解体完了K L面出隅部



解体完了 L 面



栗石検測 L 面西側



解体完了 遣り方設置



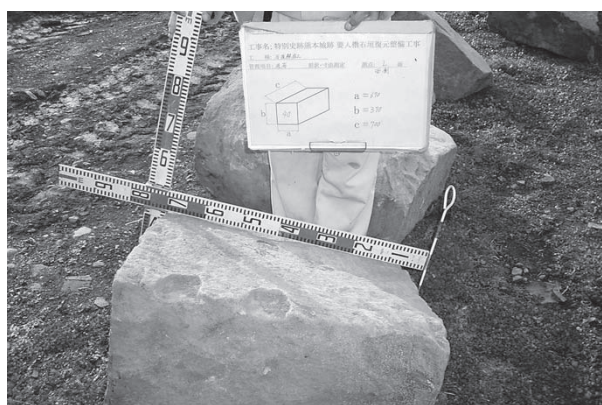
築石仮置き状況



築石選別状況



築石管理、検測



築石管理、検測



吸出し防止シート敷設 J 面



遺構養生 J 面



遣り方設置 L 面



鉛板敷き込み L 面



復築状況 L 面



復築状況 L 面



裏込栗石搬入状況



復築状況 L 面



補足石加工状況



角石仮据え状況 K L 面隅



K L 面 角石



復築状況 K 面天端



裏込栗石敷均し状況



詰石、間詰め状況



復築完了、全景



復築完了、J 面

熊本城調査研究センター報告書 第3集

## 熊本城跡発掘調査報告書 3

－石垣修理工事と工事に伴う調査－

第1分冊

2016年3月

発行 熊本市熊本城調査研究センター

〒860-0007 熊本市中央区古京町1-1

TEL (096) 355-2327

印刷 有限会社 あすなろ印刷

〒860-0821 熊本市中央区本山3-3-1

TEL 096-335-8880